
俺、ツインテールになります。19
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。19

水沢　夢

イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。19
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

プロローグ　ツインテールと、今の俺。 012
第一章　ツインテイルズの決断。 016
第二章　最終決戦、アルティメギル。 046
第三章　曝かれたツインテール。 082
第四章　絶望と、希望のツインテール。 130
第五章　全ての、ツインテールを愛する人たちへ。 172
第六章　それぞれの終局。 204
第七章　ツインテールの俺。 288
エピローグ　ツインテールあふれる世界へ。 327
グランドエピローグ　そして、ツインテールと俺たち。 342

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ



トゥアール
観束総二
津辺愛香
イースナ
神堂慧理那


俺たちのツインテールは！
未来だ!!

目次

プロローグ　ツインテールと、今の俺。

第一章　ツインテイルズの決断。

第二章　最終決戦、アルティメギル。

第三章　曝かれたツインテール。

第四章　絶望と、希望のツインテール。

第五章　全ての、ツインテールを愛する人たちへ。

第六章　それぞれの終局。

第七章　ツインテールの俺。

エピローグ　ツインテールあふれる世界へ。

グランドエピローグ　そして、ツインテールと俺たち。

グランドあとツインテールがき

俺、ツインテールになります。19

水沢夢
[イラスト]春日歩

人物紹介

観束総二
主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

津辺愛香
総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、
ネタにされると激しく怒る。

トゥアール
異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那
総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

イースナ
善沙闇子の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

桜川 尊
慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

観束未春
総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

18巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

ツインテイルズはついにアルティメギル基地へと突入。終の零星とブルーたちが、首領とレッドが決戦を迎えた。激闘の果てにツインテイルズは敗北し、さらに総二は首領に正体を知られてしまう。そして首領は、総二たちの世界への最終侵攻を宣言する——。

アルティメギル組織図



アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



終の零星（フォー・ヴァリス・ジョーカー）

隊長神：アポロギルディ
構成神：ポセイドンギルディ
ゼウスギルディ
ハデスギルディ

神の一剣最強の四体で、首領を守護するために結成された最終軍。



離反 首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍（しちょうぐん）



神の一剣（ゴー・ディア・ソード）

隊長：エンジェルギルディ
元隊長：アポロギルディ など
戦女神：ヴァルキリアギルディ

最強部隊。隊長エンジェルギルディをテイルホワイトが消滅させ、崩壊する。



死の二菱（ダー・イノ・ランヴァス）

隊長：ティラノギルディ
右牙の副将（ライトファング）：プテラギルディ
左牙の副将（レフトファング）：トリケラトップギルディ

強力な戦士を擁する処刑部隊。覚醒したテイルレッドの力により、壊滅した。



貴の三葉（ノー・ブル・クラブ）

隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。



美の四心（ビー・ティフル・ハート）

隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊

隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディ、スパロウギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。

- リヴァイアギルディ部隊 隊長：リヴァイアギルディ
- クラーケギルディ部隊 隊長：クラーケギルディ
- タイガギルディ部隊 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ

ツインテールと、今の俺。

　ツインテールが好きだ。

　その思いだけを胸に、今まで戦ってきた。

　世界が美しいのはツインテールがあるからだと、物心ついた時からずっと思ってきた俺が。

　空に輝いてる丸いのじゃなく、視界に映る髪型こそが太陽だと思っていた俺が。

　いつからか、その美しい世界を守るために戦っていた。

　いつしか、世界の人々から太陽のような存在だと讃たたえられていた。

　目まぐるしく変わりゆく日常に戸惑いながらも戦いを続けられたのは、確固たる理由があったことが大きいと思う。

　世界の平和を守るという漠然としたものではなく、自分の好きなものを守る。

　ツインテールを守るついでに、世界を守る。

　シンプルで強い目的が、俺を後押ししてくれた。

　ツインテールを守ることを、人任せにはできなかった。誰だれかが代わりにやってくれるだろうとは思わなかった。

　好きなものを好きなままでいられる世界がいい。

　俺の信条はそのまま、侵略に抵抗する目的意識へと繫つながったんだ。

　もちろん、たまに限界を感じることもあった。

　どうせ男の俺じゃツインテールになれないんだろうなって落ち込んだり、男がただ髪を伸ばしてもそれはツインテールと呼べるのか

と訝いぶかしんだり……。

　そんな狭きよう量りようだった俺のツインテール観は、皮肉にも日々の戦いによってゆとりのあるものへと育はぐくまれ、あらゆるツインテールを許容できるまでに成長した。

　そして、ツインテールの無限の可能性をあらためて知ることができた。

　自分自身のツインテールと対話をしたり。

　ツインテールを実体化させて、一緒に戦ったり。

　単に髪型としてだけではないツインテールを知ることで、もっともっとツインテールが愛いとしくなった。

　何より、多くのツインテールとの出会いがあった。

　俺でありながら俺とは別の姿をした、幼いツインテール。

　それは、俺自身のツインテールへの理想の体現と言われた。まずはそれが、全ての始まりだった。

　子供の頃ころからいつも俺のそばにいて、誰だれよりもツインテールの素晴らしさを教えてくれた、幼馴染おさななじみ。

　ツインテールに縛られた家柄に悲観しながらも、自分自身のツインテールを見つけて変わることができた先輩。

　別の好きなもの──眼鏡めがねとツインテールとの両立を果たした、自分らしく生きるアイドルにも、大きな影響を受けた。

　大人になってもツインテールを続ける、凜り々りしくかっこいい女性に、何度目を奪われたことだろう。

　ツインテールを持ったロボットは、誰よりも優しく頼もしかった。

　力を合わせることでツインテールに変われると示してくれた、異世界のお姫様もいた。

　ツインテールを創生した女神との出会いで、俺はツインテールの歴史の深さを知ることができた。

　なにより、ツインテールに人生を翻ほん弄ろうされながらもなおツインテールを愛し、喪失したツインテールを求めて一歩を踏み出した少女は……俺の人生の先生のようでさえあった。

　数え切れないほどの出会い。たくさんのツインテールと共に過ごす日々に刺激を受け、俺はあらためて思う。

　ツインテールを好きでよかった、って。

　だから俺は……俺たちは、今まで戦ってきた。

　そして、その戦いは──。

　俺は、観み束つか総そう二じ。

　人より少しツインテールが好きなだけの、ごく普通の高校生だ。

　けど、ツインテールが好きだっていうその気持ちだけで、人間は宇宙を守れるぐらい強くもなれるんだぜ。

　さて、ここまでツインテールツインテール連呼する俺の話に、付き合ってくれたんだ。

　一つだけ質問してもいいかな？

　君も──ツインテールが好きか？

第一章　ツインテイルズの決断。

異世界侵略組織──アルティメギル。

この世界に襲来してほどなく、その巨大組織は自分たちが持ちえる超科学力を余すことなく俺たちに見せつけてきた。

もっともわかりやすいものが、全世界一斉放送だ。

世界中の人間たちが、即座に侵略者の存在を認識した瞬間だった。

世界中の通信網や映像機器を掌握し、さらには世界中の空へ超巨大な立体スクリーンを生成するなどして、この星の人間たちに向けて宣戦布告を放映する。

その放送は、定期的に行われるようになっていく。

これから人々の心を奪うという宣言。侵略部隊着任の挨あい拶さつ。グダグダになったコント。

やつら異世界の怪人、エレメリアンの多様性そのままに多彩な全世界ジャック放送に、いつしか俺たちは、世界は慣れてしまっていた。

最近はまたか、と軽い気持ちで辟へき易えきさえしていたほどだ。

そうして、奴やつらの最初の侵略宣言放送から、およそ一年。

今俺たちが見上げている放映は、これまでとはその衝撃度も重みも桁けたが違うものだった。

アルティメギルの長おさたる首領自らが、世界へと向けて宣言を始めたのだ。

『この世界の人間たちよ。余はエレメリアンを統すべる、アルティメギル首領』

空に浮かぶスクリーンには、聖布ヴエールに覆おおわれた玉ぎよ

く座ざ越しの首領のシルエットが浮かんでいる。

　幾いく重えにもぶれた不気味な声が、恐るべき事実を告げた。

『たった今、ツインテイルズは余の居城へと乗り込み──そして敗北した』

　地球全土に向けられた宣言は……人々の絶望を煽あおるに十分なものだ。

『ゆえに余には、ツインテイルズの守護するこの世界の人間の心の輝き、その全てを我わがものとする権利がある』

　聖布ヴエール越しの首領のシルエットが大おお仰ぎように諸もろ手てを広げる。

　この世界へと、最後の宣戦布告をするために。

『これよりアルティメギルは、この世界への最終侵攻を開始する』

　奴らの最初の侵略宣言放送から、およそ一年。

　俺たちの戦いは最終局面を迎え、そして今、最大最後の試練を迎えようとしていた。

◇

　首領の力で強制的に転送された、どこかの草原。スクリーンが空から消えた後も、俺たちはしばらくその場に立ち尽くしていたと思う。

　だから、誰だれが最初に基地へ帰ろうと切り出し、どう移動して戻ったかさえも記憶が定かではない。

　気がついたら、俺たちは全員、基地のコンソールルームのテーブ

ルについていた。

　俺も、愛あい香かも、トゥアールも、慧え理り那なも、イースナもメガ・ネも、桜さくら川がわ先生も……基地で待ってくれていた母さんも、一言も発せずに黙り込んで。

　全員疲れ切っているが……特にメガ・ネは装そう甲こうがところどころひび割れ、内部回路が露出している部分まである。早急に修理が必要だろう。

　それだけの戦いを、今、俺たちは繰り広げてきたんだ。

　首領が放送で意い気き揚よう々ようと世界中に吹ふい聴ちょうしたとおり。

　俺たちツインテイルズは、エレメリアンたちとの長い戦いに終止符を打つべく、アルティメギル基地へと突入した。

　そこで繰り広げられたのは、まさしく総力戦だった。

　基地に残っていたエレメリアンたち全員と戦い、それが終わったらブルーたちがそれぞれ終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーと一対一で相対した。仲間たちに見送られた俺は一人、首領の間へと辿たどり着いた。

　俺は自分のツインテールの全てを懸け、首領に挑んだ。

　ツインテールを自ら捨て去りながらも、最強のツインテール属性を持つという異質を極めた存在。次元が違う戦闘力を誇る首領に、それでも俺は食らいついていった。

　しかし最後の最後で地力の差が決定打となり、俺は首領に敗北した。

　そして同じく終の零星フオー・ヴアリス・ジョーカーの戦士たちに追いつめられたブルーたちともども、元の世界へと強制送還されてしまった。

　そこへ間かん髪はつ容いれず、先ほどの放送だ。

　疲ひ弊へいしきった身体からだに鞭むちを打たれたようで、思考に靄がかかっている。

「……さて！」

　突然トゥアールが軽快に諸もろ手てを打ち、漫そぞろだった皆の意識は一斉に彼女へ向けられた。

「悩んでいても仕方ありません。今度はこちらの迎撃戦ターンとなったわけです。早速ですが、これからの作戦を立てましょう!!」

　努めて明るい声で皆を鼓こ舞ぶしていくトゥアールを見て、俺は申し訳なさでいっぱいになる。

　そうだ。首領の間からこの世界に送還された直後も、皆で励まし合っていたじゃないか。

　前向きになることが第一歩だ。誰だれかが落ち込めば他の全員で励まし、支ささえ合っていける。

　それが俺たちの強みなのだから。

「……そうだな……すまない。ちょっと凹へこみかけたけど、よく考えれば打撃を受けたのは前線基地を失ったあいつらの方だ」

　俺は一人立ち上がると、トゥアールに、そして皆に視線を移しながら話していった。

「手も足も出ずに負けたなら深刻に考えなくちゃいけないけど……俺、首領とかなりいい勝負をしたと思うからさ。次に戦う時は、きっと勝てる!!」

　少しやり過ぎかもしれないが、意い気き揚よう 々ようと宣言する俺の姿に、愛あい香かたちも緊張や不安が和らいだ様子だった。

「今回首領を倒しきれなかったのは、俺の責任だ。だから次は……絶対に倒してみせる!!」

　言葉を続けることで俺は、トゥアールたちだけじゃない、自分自身をも鼓こ舞ぶしている。

「そ、それは、私たちも同じ……。私たち四人が、それぞれ……終

の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーを撃破していれば、戦いは有利になったはず……」

「そうですわ！　そのつもりでわたくしたちは戦力を分散したのですから。むしろ、長い時間観み束つか君一人に首領と戦わせてしまって、大きな負担をかけてしまいました……」

　イースナと慧え理り那なが、揃そろって慰なぐさめの言葉をかけてくれる。

　気持ちを落ち着けて視野を広げると、みんなのツインテールがずいぶんと疲れていることがあらためてわかる。悔くやしいよな……俺たち全員、死力を尽くしたんだ。

　ふと愛香を見ると、腕組みをしながら天井を見上げ、何かを考えこんでいた。

「これからの作戦、か……。今回ばっかりは、覚悟を決めるしかないんじゃない？　あいつらが攻めて来たら戦う、それだけでしょ」

　愛香らしい意見だが、俺に異論はない。母さんやメガ・ネ含め、全員が頷うなずいている。

　やつらの基地へ突入する前はかなりの時間をかけて作戦を練ったが、今回の結論は非常にシンプルなものだった。

「もちろん、事前にできることはやっておきますけどね。例えば、世界中にツインテイルズの名で通達し、緊急時の避難経路とその伝達網をしっかりと確立すること。この世界はエレメリアンに対しての危機意識が低いですが、あの放送を見た後ではそれも変わるはずです」

　その上で、トゥアールはきちんと事前策を打ち立てていた。

「この先の戦いは、世界中で避難が必要になるほどのものになるのか？　やつらの基地にいた残党は、全部やっつけたんだろう？　あいつらが数に物を言わせてこの世界を攻めてくるなんて、もうできないんじゃないのか？」

　不安げに質問する桜さくら川がわ先生。その基地の残党を一番引き受けてくれたのが彼女だ、もっともな疑問だろう。

「ハデスギルディは幻術の分身能力を持っていますし、尊みことさんも戦ったポセイドンギルディは、巨大な円盤などを無数に操作して襲おそってきたのを憶えていますよね？　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの戦士は、一人で複数分の戦力になる術すべを備えています。もしかすると、まだ見せていないだけでアポロギルディとゼウスギルディにもそれはあるかも」

「あの四体が世界中にバラバラに出現するだけで、かなりの脅きよう威いになりますものね……。トゥアールさんの言うとおり、人々がすぐに避難できるような態勢を整えておくのは重要ですわ」

　トゥアールに慧え理り那なも言葉を続け、世界の人たちの避難準備の重要さを説く。それは桜さくら川がわ先生の不安を補強する形になってしまうが……やっておかなければならないことだ。

「トゥアールちゃん。その避難準備の連絡、私も手伝っていい？」

　小さく手を挙げる仕草をしながら、母さんがそんな提案をした。

「……？　はい、それはありがたいですが……ただ、世界各国の首脳や重鎮に通達しなければいけませんので、ツインテイルズとして連絡しなければ難しいと思いますが」

「あはは、まあ、ちょっとね。たぶん、手伝えると思うから」

　母さんは妙に言葉を濁しているが、トゥアールはさして追及することもなく、その厚意を受け取ることにしたようだ。

「そ、総そう二じさん……アルティメギルの首領と戦って……どうでしたか」

　イースナが、遠えん慮りよがちに聞いてきた。

「どうって……首領がか？」

「わ、私……首領と最後に会った時、怖くて……逃げることしかできなかったから……」

　イースナは、首領の恐ろしさを誰だれよりもわかっている。だから、基地突入を急ぐかどうか話し合った時も慎重派だった。

　首領に人生を翻ほん弄ろうされた彼女だからこそ、首領のことを

知っておきたいのだろう。

　いたずらに不安を煽あおりたくはないが、イースナが望むのなら、見たまま感じたままを伝えるしかないだろう。

「……とにかく、強かったよ。あんなに次元の違う戦闘力を見せつけられたのは初めてだ。俺が今まで戦ってきた、どんなやつよりも強かった……」

　最初に口をついて出る感想は、それ以外になかった。

「総ちゃんがそう言うなら、本当にとんでもなく強いやつなのねえ……首領って」

　しみじみとこぼす母さんに、頷うなずきを返す。

「……そして、俺が理解できないツインテールも初めてだった……」

　強い実感を伴った言葉を続ける。それは俺にとって、ある意味負けたことより悔くやしかった。

「みんなも見たと思うけど、首領はソーラと同じ顔をしていた。女神ソーラに憧あこがれて姿を似せたらしいが……そのくせあいつは、外見上のツインテールを完全に捨て去って、内に秘めたツインテールだけを高めていった」

　首領は……本当にただ、見た目が人間なだけの怪物だった。それが、唯ゆ乃のとの違いだ。

　肌でわかる超絶の強さよりも、理解のできない異質な在あり方の方が遥はるかに恐ろしかった。

「首領はツインテールを愛するあまり、ゼロのツインテールを完成させてしまったんだ」

　俺が言葉に熱を込めるにしたがって、愛あい香かたちの周囲に疑問符が浮かんでいくようだった。

「……いや、ツインテール捨て去ったって、それってツインテールじゃないでしょ」

　愛香がそう思うのも無理はない。だから、言語化するのが難しいことでもあるんだが……。

「ところがツインテールなんだ。俺は戦っていて、はっきりと感じた。目には見えない、あいつのツインテールを」

　俺が神妙な面おも持もちでそう告げると、愛香は白目になって黙ってしまった。

「その果てにあいつは、光速のツインテールを繰り出してきた。ツインテールに裏打ちされた強さだ……理解が難しくても、認めるしかない」

　認めたくはない……いや、認めてはいけない強さのはずだけれどな。

　思い出して悔くやしさが蘇よみがえり、俺は奥歯を強く嚙かみしめた。

「光速……光の速度ですの!?　そんな敵を相手に、観み束つか君はいったいどうやって戦ったんですの……？」

　少しわくわくしているのか、テーブルから身を乗り出して聞いてくる慧え理り那な。

「戦っているうちに、俺も何とか光速のツインテールを体得することができたんだ。先にスタミナ切れしちまったけどな……」

　それを聞いて、慧理那も、愛香たちもぽかんとしてしまった。

　トゥアールはこめかみを指で押さえ、考えこんでしまう。

「私はこれでもかなりの水準の科学者だと自負していますが、それでも自力で光速に到達する人を目まの当たりにすると、科学の限界を感じてしまいますね……」

「何言ってんだよ、テイルギアがなかったら俺が光速なんて出せるはずがないだろ？」

　トゥアールも謙けん遜そんが過ぎるぜ。自力じゃなく、テイルギアあってこそじゃないか。

　というかみんなは、何な故ぜ俺の話を聞いて呆あきれているのだろう。母さんだけは、けらけらと笑っているが。

　そもそも、光速という速度を人類が定義づけできている以上、いつかツインテールがそこに到達することは何の不思議もないと思うんだが……。

「……なんか、ほっとしたわ。そーじがいれば、首領が攻めて来ても何とかなりそう」

　愛香は苦笑して俺を見つめてくる。最終的にほっとしてくれたなら、それが一番だ。

「そうですね……次も、同じ布陣でいきましょう。首領を総そう二じ様が。私と愛香さん、慧理那さん、イースナとメガ・ネさんが終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの四体をそれぞれ担当です」

　トゥアールは、やつらが攻めて来た際の配分を言っていく。

「そして尊みことさんは初しよ手てで、結婚属性ブライドのゼウスギルディと戦う慧理那さんをサポートしてください。それで慧え理り那なさんが……あるいは、私たちの誰だれでもいいです、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーを撃破して、総そう二じ様の援護に向かう。これが一番確実です」

「うむ。誰か一人を選ぶなら、私はお嬢様を援護したい」

　ずっと慧理那の警護担当をしてきた桜さくら川がわ先生らしい希望だ。

　先生もまさか、警護すべき主人と肩を並べて戦うことになるとは思わなかっただろうな。

　話し合いも一段落した。場の雰囲気も落ち着いてきたようだ。

　ふと視線を向けると、愛あい香かが妙に落ち着かない様子で俺の方を見てきていた。

「あのねそーじ……いや、こんな時に言うのもどうかと思うんだけどさ……」

要領を得ない言葉を絞り出しながら、指をつつき合わせている。



「首領のことももちろん重要よ？　でも、その、何ていうか……基地に突入する前の日の夜にさ、もっと大事なことが……」

「っ……総二様……！　戦いのダメージが……！」

　愛香の言葉を遮さえぎるように立ち上がったトゥアールが、バレリーナめいてリズミカルによろめきながら、俺の席へとやってきた。

　その途中で、鱗うろこが剝はがれ落ちるような不自然さで服がボロボロと崩れ落ちていく。

　あっという間に下着姿になったトゥアールは、そのまま俺にもたれかかってきた。

「さすがはアポロギルディ……私のテイルギアを貫通して衣服にまでダメージを与えていたようです……あと二秒で下着も消えます……すみませんが、急いで私を自室のベッドへと運んでくださいませんか」

「わ、わかった」

　理屈はわからないが、ダメージを負っているならばすぐに休ませなくては。

　トゥアールを抱かかえようとした俺より先に、愛あい香かが素早く間に入る。

「丁てい寧ねいに運ぶ必要はないわ……こういう荷物は雑にブン投げればいいのよ!!」

「ぐああああああああああああああ運送業界の深刻な人手不足!!」

　自室に配達されることなく、コンソールルームの壁に無造作に置き配されてしまうトゥアール。

「ああ、ほんまに下着も消えてしもうた……お尻しり丸出しやでトゥアールはん」

　俺は視線を向けなかったが、どうやらメガ・ネがトゥアールに毛布か何かをかけに行ったらしい。

「一大決戦の後で……無修正のお尻を、たやすく見せびらかす……。さすがは、トゥアールさん……」

「見習うんじゃないわよ！」

　感心するイースナをぴしゃりと一喝する愛香。

「ああ、あの脱衣システムを……私も……」

　しかし、慧え理り那なも見習おうとしているフシがある。

　敗戦の直後でここまで士気を回復できれば、上等だろう。

　あとは、奴やつらとの再戦に備えるだけだ。

　愛香たちの反応を見るに、やはり首領のツインテールはかなり非常識らしい。曲がりなりにもそれについていけた俺以外、あいつとまともに戦うのは不可能だろう。

　トゥアールは担当する戦士を倒した者から俺の援護に向かう作戦で……とは言うものの、そもそも神のエレメリアンを一人で相手にするのだって、とんでもない無茶なんだ。

　全員で力を合わせて首領を倒す──援護を期待することは、考えない方がよさそうだ。

　愛香たちは、俺が首領を上回ることを期待している。

　俺がさらなる強さを発揮できなければ、この世界は首領たちに侵略されてしまう。

　俺が、首領に勝たなければいけないんだ。

　どうすれば首領に勝てる……？

　どうすればあれだけの力を出せる……!?

「…………」

　そう覚悟した時、俺は不安で全身を震ふるわせていた。小さく震える右手の平に視線を落とす。

　皆に見えないようテーブルの下に隠した右手は、手首にテイルブ

レスが可視化している。

（首領と、同じぐらいの力……）

　恐ろしい考えが脳裏をよぎり、俺は頭を振った。

　駄目だ。それだけはできない。やってはいけない。

　首領と同じように、ツインテールをゼロにすれば──などと……。

◇

　体育館から教室への道すがらの廊下で、制服のブレザーに花飾りをつけた生徒たちが談笑をしている。

　陽よう月げつ学園高等部は今日、本年度の卒業式を終えた。

　エスカレーター校の陽月学園は外部を受験する生徒がそこまで多くはなく、ほとんどがそのまま大学部へと進学する。

　だからか、卒業を迎えた三年生たちも友人との別れを惜しむというよりは、「春からまたよろしくお願いします」という挨あい拶さつをかわしているのがほとんどのようだった。

　まして一年生の俺たちにとっては、卒業の感慨はまだまだ遠い。

　式から帰ってきた教室では、クラスメイトたちがいつもどおりの雑談に花を咲かせていた。

「この前のナーステイルレッドたんがフィギュアになるってよ……三個予約しねーと」

「ソシャゲの方ではもう実装されてるけど、やっぱ現物も欲しいよなあ」

「ありがたいぜ……テイルレッドちゃん需要に対して本人がどんどん供給してくれるようになるなんて……」

いつもは気恥ずかしいテイルレッドの話も、今は聞いていてほっとしてしまう。いや、未いまだに慣れてはいないんだけどな、自分がグッズ化されたりゲームに出たりするのは。

あの首領の宣戦布告から数日。世界は意外なほどに落ち着いていた。

ニュースも侵攻の脅きよう威いについて触れたのはその日だけで、次の日からはあっさりいつものテイルレッドを愛めでるような内容に戻っていた。

首領の影響で世界がツインテール超常現象の数々に見舞われた時もパニックにはなっていなかったし、この世界の人たちがツインテイルズを信頼してくれているのはありがたいことだ。

俺と愛あい香か、トゥアールの三人はツインテール部部室に到着し、席について今日の卒業式のことなどを話す。しばらくして、慧え理り那なと桜さくら川がわ先生もやって来た。

「卒業式お疲れ様、慧理那」

式で立派に送辞を読み上げた、生徒会長の慧理那に労ねぎらいの言葉をかける。

「ありがとうございます、観み束つか君。実は、アルティメギル首領の侵攻が卒業式に重なったらどうしようと考えていましたので……無事に先輩方をお送りすることができて、ほっとしていますわ」

慧え理り那なの安あん堵どはもっともだ。俺たちはツインテイルズであると同時に、普通の高校生。大切な学校行事が戦いで台無しにされたら、やりきれないからな。

「当たり前だけど、この数日、一般兵が出で張ばってくることもないしね」

何気ない愛あい香かの言葉に、俺は自分でも何な故ぜかわからないほどギクリとしてしまった。

普段は数日と置かずにエレメリアンがやって来ていたが……も

う、それはない。

　そいつらは、俺たちが全て倒した。

　倒したんだ……。

「な、なんか……出てこなくなったらなったで、ちょっと寂しいもんだな」

　不謹慎かもしれないが、俺はついそんなことを口にしてしまっていた。

　愛香あたりには窘たしなめられるかとも思ったが、意外に理解を示してくれたようだ。

「わからなくもないけどね。いくら変態だって言ったって、散発的にやって来る連中はまだ理解の範はん疇ちゆうの変態だったし。首領とかは本当……わけわかんないから……」

　理解ができないものに、人は少なからず恐れを抱いだいてしまうものだ。

　世界の人たちがエレメリアンに恐怖していないのは、ツインテイルズの強さが強調されて報道されていることもあるが、やつらが人語を介してコミュニケーションが取れる存在だからだろう。

　だが俺は、首領のツインテールを理解できなかった。それは敗北よりも大きな楔くさびとなって、今も俺の胸で痛み続けている。

　慧理那も交えて卒業式の話をしていると、桜さくら川がわ先生が全員分のお茶を用意し始める。ありがたく一息ついてほっとしたところで、話題はアルティメギルのことに移った。

「世界はパニックに陥おちいらず、落ち着いているようですわ。皆さん、アルティメギルの勝利宣言を信じていらっしゃらないようでしたわ」

「……それもあるし。信じてるんでしょ、テイルレッドのこと」

　慧理那が世界の様子について語ると、愛香はしみじみとそう口に

した。

　地球に迫るテイル彗すい星せいを撃墜して以来、テイルブルーに対する世間の印象がかなり軟化したこともあり、ニュースも落ち着いて見られるようになったのかもしれない。

「ですが、首領までも数日間沈黙を守っているのは意外ですわね。あれだけ自信たっぷりに宣戦布告したのですから、すぐにでも攻めてくるものかと」

　俺も慧理那と同じことを思っていた。緊張状態を保っていたが、まさか数日経たっても何のアクションも無いとは。

「首領もそうですが、私たちもきっちり終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの全員にダメージを与えていますからね。それが回復するまで待ってから攻めてくるつもりなんでしょう」

　トゥアールはその理由を推測していたようだ。俺たちは、奴やつらの基地へ突入するまでに万全の状態になるよう努めた。奴らも同じことをしている、と。

　そんなトゥアールだが、今日はだいぶ疲れているように見受けられる。

「トゥアール、疲れてるみたいだけど……また寝不足じゃないよな？　エレメリアンが英気を養ってるってのに、俺たちが疲れていたら、本番で大変だぞ」

「ご心配なく、今回はちゃんと休息は取っています！　でも、今のうちにやれることは全てやっておきたいですから」

　そうは言うが、トゥアールは何かあるたびに睡すい眠みん時間を削って研究とかをしてきたからな。休息はいくら促うながしても多過ぎることはないだろう。

「やれること……って、前に言ってた、世界中の避難経路とかを強化するってやつ？」

「それもありますが……私のテイルブレスレボリューションが少しでも長持ちするよう、入念にメンテをしているんです」

　愛あい香かに尋ねられ、トゥアールは右腕に真白いブレスを可視

化させた。

「元々テイルホワイトには何度も変身できないことは、わかりきっていたことでした。むしろ、ここまでよく保ってくれたと思っています。おそらく、確実に変身できるのはあと一回だけ……そこから先は、もう運に任せるほかないと考えています」

　科学者のトゥアールが運に任せると言うのだから、テイルホワイトへの変身はもうかなり際どいところまできてしまっているのだろう。

　二回目は考えない方がいい。最後の戦いに出撃したら、一端変身解除するのもままならないってことか。

「こんにちイースナ……」

　部室の転送ロッカーが開き、中からイースナとメガ・ネが入って来た。

　イースナはアイドル服ではなくジャージ姿で、メガ・ネはいつものメガネドンの着ぐるみは着ていない。

「仕事は終わりか？　イースナ」

「これからです……けど、仕事はセーブ気味なので……大丈夫です」

　俺の問いに、イースナは苦笑しながらそう答えた。ともあれ、戦いはもうすぐ終わる……イースナも、いつもどおり仕事ができるようになるはずだ。

「トゥアールはん、ありがとうな、修理手伝ってくれて。おかげでピッカピカや」

　先の戦いで大きなダメージを受けたメガ・ネは、地下基地の工房でトゥアールとイースナの二人がかりで集中的に修理をしたということだ。

「いえいえ、修理はいつでもしますよ。ですが無理をしないでくださいね、メガ・ネさん」

穏やかに返したトゥアールの表情が、不意に引き締まる。

「インフィニティチェインはメガ・ネさんがブラックに合体する性質上、ギアを破損させるほどの力の強敵を相手にした場合、メガ・ネさんの生命いのちにダイレクトに関わるんですから」

メガ・ネは一瞬言葉を失っていたが、

「……うん、もちろんや！　ウチがいなきゃ、イースナちゃん、ぱんつも自分で洗濯でけへんもんな!!」

すぐに明るい声で頷うなずいた。どこか、無理をして元気を出しているように。

「せ、洗濯ぐらい、できる……」

むすっとするイースナを、メガ・ネが慰なぐさめている。

……二人に、いや、仲間たちに無理はさせられない。

俺が一番最初に首領を倒せばいいんだ。俺が──。

まただ。自分を鼓こ舞ぶした途端、悪お寒かんのような震ふるえが、俺の全身を襲おそう。

「きょ、今日、卒業式……だったんですね……」

イースナはいま学校には通っていないからか、学校行事に対する好奇心が特に強いように感じる。体育祭にこっそりやってきたり、学園祭に善いい沙すな闇あん子ことしてゲスト出演したり。

戦いが終わったら、彼女がアイドル活動を続けながら学校に通えるようにならないだろうか……。

「……あたしたちツインテイルズの卒業式は、まだ終わってないけどね」

嘆息しながらこぼす愛あい香か。本当なら、そちらの卒業式を先に終えておきたかったのだろう。

最近、ちょっとしんみりし過ぎている気がする。何か、明るい話題が欲しい。

「そういえば、式の後で卒業旅行のこと話してる先輩を見かけたんだけど……」

　俺は、気になっていたことをみんなに打ち明けることにした。

「戦いが終わったら、みんなでどっか旅行に行くか！」

　どんな反応をされるかと思ったが、みんな一斉にわあっと喜びの声を上げるのを聞いて、俺は一安心した。

「わあ、ええなあ。みんなで出かけるの、温泉以来やろか？」

　メガ・ネの言うように、旅行は神しん堂どう家のツインテール温泉に行って以来だ。

「いいじゃん、ツインテイルズの卒業旅行。今まではあいつらがいつ現れるかわかんないから、長期旅行なんてほとんどできなかったんだし」

「戦いの後の楽しみができましたわね！」

　愛香や慧え理り那なのツインテールがはしゃいでいるのを感じる。唐突な提案だったけど、やっぱ神妙な雰囲気で戦いに備えるってのは、俺たちらしくないからな。

　早速どこに行くかを和わ気き藹あい々あいと話す中で、一人だけ無言で俯うつむいている人がいた。桜さくら川がわ先生だ。

「何ですか、尊みことさん、浮かない顔をして。もちろん尊さんも旅行のメンバーに入っていますから、安心してください」

　トゥアールも気づいたらしく、声をかけた。桜さくら川がわ先生は仲間外れを嫌うので、きっとそんな取り越し苦労をしていると思ったのだろう。

「あ、うん……ありがとう。旅行はすごく楽しみだ。でも、戦いが終わる前には行けないんだよな……」

「当たり前でしょう、首領がいつやって来るか全くわからないんですから」

　トゥアールの言う通り、これはあくまで卒業旅行だ。夏休みにロ

エルとリルナの世界に行った時はアルティメギルが停戦宣言をしている時だったし、ツインテール温泉も死の二菱ダー・イノ・ランヴアスとの戦いに一段落ついた上で、かつ念のためエレメリアンの襲来には備えた上での旅行だった。

　さすがにこれから首領と終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーが攻めて来ようかという時に、ささっと旅行に行くなんてことはできない。

　桜川先生はそれを聞いて何やら悩んだ様子だったが、おもむろに俺の方へと歩いてくると、

「観み束つか……結婚しよう」

　いつもの謎なぞ加工をしたりしていない、折り目一つない真新しい婚こん姻いん届とどけを俺に渡してきた。

「突然どうしたんですか!?」

　俺は驚いて椅い子すごと後あと退ずさってしまった。いや、桜川先生が婚姻届を渡してくるのはいつものことすぎるんだけど。

　思わず受け取ってしまった婚姻届は、妻の欄に桜川先生の名前が記入済みだ。

「な、何でこの流れでそうなるの!?」

「また始まりましたね尊みことさん、卒業旅行と新婚旅行をごっちゃにしないでください！　もう少し気軽に男１と女複数で乱れる感じの旅行、それが私たちの卒業旅行なんです!!」

　愛あい香かやトゥアールたちが一斉に立ち上がり、桜川先生へと詰め寄っていく。

　しかし桜川先生はツインテールも体幹も揺らすことなく、真まっ直すぐに立ってただ俺を見つめている。

「私は本気だ。どうしようもないくらい、結婚したい」

　桜川先生の結婚観は、正式にアナザーテイルブルーになった時にいい意味でゆとりができた。それなのに、何な故ぜまた急に焦あせりだしてしまったのだろう。

「あの、桜川先生。俺──結婚とかそういうことは、まだ考えられないです……」

　だから、俺は前と同じようにそう言うことしかできない。

　プロポーズを断っているようで気が引けるんだが、桜川先生の真剣なツインテールを見ていれば、俺も真剣に返さないわけにはいかないからだ。

「いや、いいんだ。お前が結婚したい相手が他にいても……私は構わない。むしろ、お嬢様と結婚してもらわなければならないしな。それはそれとして、私と結婚して欲しいんだ……」

　そういうことではないんです、桜さくら川がわ先生。一応、俺は法的にまだ結婚できない年齢だし……。

「……すごい真ま面じ目めな雰囲気だけど、無茶苦茶言ってない？　桜川先生……」

「総そう二じ様がまだ結婚は考えられないって言っているじゃないですか、このテイル年とし増ま！　どうして男子高校生に重い決断を迫るんです⁉　一六歳の男の子なんてそういう責任とか一切取らずにただ快楽に溺おぼれたいだけの年とし頃ごろですよ！　むろん、一六歳のトゥアールちゃんもです‼」

「…………」

　トゥアールが語気を強めていると、イースナが彼女をじーっと見つめていた。

「何ですかイースナ、何か文句があるんですか」

「そ、そろそろ言った方が……タイミング的に、ここ逃のがしたらもう、次は無いと思う……ゼウスギルディにほぼバラされてたし……」

「なーにがタイミングですか、トゥアールちゃんに隠し事なんてありません‼」

さらには愛あい香かもトゥアールを睨にらみ付けた。

「何よ、まだ隠し事あんの？　あんたが無いっていっても信用しないわよ、三桁けた。胸の大きさであたしに嘘うそついてたこと、墓に入るまで恨み続けるから」

「なんでどっちかが墓に入るまで見守る前提なんですかこっちも重いですねえ!!」

愛香とトゥアールとイースナが何やら言い合いを始め、慧え理り那なはその三人と桜川先生を交互に見ながら、あわあわと動揺している。

「━━私には、結婚を急ぐ理由ができたんだ」

桜川先生がそう言うと、喧けん騒そうがピタリと止やんで皆の視線が集中した。

「この前の戦いな。私一人で殿しんがりに残っただろう。はっきり言って、お前たちが戦っていた相手に比べれば本当に大したことのない怪人が相手だったんだろうが……。その、心細くて……怖くてな……」

桜川先生はそう言って俺に一度視線を送り、申し訳なさそうに苦笑した。

「一番大人の私が、情けない話なんだが……恐ろしくて、これはちょっと死ぬかもしれないと思ってしまった。その時に実感したんだ、一番の願いを果たさないまま死ぬのは嫌だとな」

愛香やトゥアールが、はっとする。

桜川先生は、慧理那の警護担当で武術の達人だ。生身なら、愛香の次ぐらいに強い存在で、しかも大人。

けれどゼウスギルディと相対して怯おびえてしまったように、ツインテイルズとしての戦いに慣れているわけではないんだ。

ある程度は段階を踏んで強敵と戦ってきた俺たちと違って、本格的に戦い始めてからは大規模な戦いの連続だ。精神的にもついていけなくなっても無理はない。

「私は結婚したい。それも、できればお前と……次が本当に最後の戦いなら、これだけは言っておかなければならないと思った。それだけなんだ」

　今すぐ結婚したい。そして何より、結婚したいという思いを先延ばしにしたくない。

　最後の戦いを控えてセンチメンタルになっている桜さくら川がわ先生に、俺たちも共感していった。

「みんなも、心残りがあったらやっておくべきじゃないのか？」

　桜川先生に問われ、俺たちは全員で考えこむ。

　心残り。それは決して、もう最後だからと諦てい観かんしているわけではない。

　今やりたいことをやっておくことで、迷いの無い気持ちで戦いに臨のぞめる。

　桜川先生の言うことは、正しい。

「いいこと言いました尊みことさん……雰囲気作りもバッチリです！　この調子なら私が今すぐ全裸になっても総そう二じ様は十秒ぐらいシリアスをキープし続けるはず……そして『あれ、何かおかしいぞ』と思った時はもう手遅れ、トゥアールちゃんがガンガン腰振ってるという寸法です!!」

「ほんと元気ね……あたし今いつもみたくあんたぶっ飛ばす気力ないから、腰振れないように肋骨から下の骨全部砕くだけでセーブしとくわ……」

「やめてえええええええええええええ妖よう怪かいのヘビ人間みたくなるうううううううううううう!!」

　愛あい香かとトゥアールがじゃれ合っているのを見て、慧え理り那なもうん、と頷うなずいた。

「尊の言うとおりですわ！　皆さん、これからは首領が来るまで、やりたいことをやって思い切り楽しんで過ごしましょう!!」

　真ま面じ目めな生徒会長が真っ先にそう宣言するのがおかしく

て、俺は思わず笑ってしまった。

「じゃ、じゃあ、慧理那……前に言ってた、エロゲー、一緒にやろ……」

「あっ、そういえばまだイースナさんと一緒にえろげしてませんでしたわ!!」

　提案するが早いか、メガ・ネのお腹なかの異次元箱を開けてノートＰＣを取り出すイースナ。

「私、本当はバリバリの抜きゲ以外、エロゲーとは認めない派だけど……慧理那のために、ライトなものを選んだ……。みんなの前でやっても、大丈夫……」

　卒業式に部室でエロゲー……いいのかこれ。

　でも、慧理那とイースナは互いの頰ほおが触れそうになるぐらい身を寄せ合い、嬉うれしげにＰＣ画面を見ている。友情を感じると弱いぜ……。

　俺たちは心残りなんてないくらい、毎日を楽しんで過ごしてきたけれど。

　侵略の恐怖に怯おびえず平和に暮らす大切さを、俺たち自身が体現するのは大切なことだ。

◇

　その日の夜。俺は、自室でテイルレッドに変身し、少しばかりの特訓をしようとしていた。

　放課後の喧けん騒そうを思い出す。あの笑顔を、誰だれ一人として曇らせたくない。

　俺は──強くならなくちゃいけないんだ。

　フォースリヴォンに手を添え、静かに外す。ライザーチェインやフォーラーチェインになる時のような結び直しではない、単にツインテールを解ほどくだけの作業だ。

　俺たちツインテイルズは、ツインテールが解ければ、変身も解ける。

　首領が変身の強制解除能力を持つのは、おそらく「ツインテールではなくなった」とテイルギアに誤認させることで成しえるものなのではないだろうか。

　同じ強制解除でも、テイルギアそのものを研究尽くしたエンジェルギルディとは違う。

　ツインテールを普通に愛する者にとって、これ以上の冒ぼう瀆とくはない。

　しかしやつは、それでツインテール属性の極端へと至った。

　首領のツインテールゼロの強さを超えるには、せめて俺もその力の根源を識しろうとすることは必要なはずだ。やつは、変身前は俺もある意味ツインテールがゼロだと言ったのだから。

「うっ……!!」

　ツインテールを解いて数瞬。とてつもない目め眩まいに襲おそわれ、俺は咄とつ嗟さに髪を結び直してしまった。おそらく、変身が解除されるギリギリだったに違いない。

　気を失うまで息を止めていようと思っても、絶対に呼吸をしてしまうのと同じ理屈だ。

　敵に無理矢理解かれるならともかく、自分自身であえてツインテールを解いてそのままにするのは、今の俺にとっては自傷に等しい。

　人体の反射として、ツインテールを解き続けるのは無理だ。

「…………俺は、ツインテールをゼロにはできない……」

　わかりきったことを口にし、俺は項うな垂だれた。

首領がどれだけ普段の俺のツインテールがゼロだと嘯うそぶこうと、俺はこの世界で最強のツインテール属性を持った人間だ。今、この瞬間も、ツインテール愛が溢あふれている。

恒常的にツインテールを無にするなどもちろんあり得ないことだが──そう、たとえば形態チエイン変化カスタムのように、瞬間的にツインテールをゼロにすることで新しい力を得られればというアプローチだった。

しかし、俺には不可能なようだ。この特訓を続ければ、逆に俺自身のツインテール属性が取り返しのつかないことになってしまうかもしれない。

手の平で掬すくったツインテールに視線を落とすと、大切な仲間たちの笑顔が、そこへ吸い込まれていくようにフラッシュバックしていく。

俺は、ツインテールが何よりも大切だ。

けれどもし、世界から全てのツインテールが消えることと、自分一人のツインテールが消えることを天てん秤びんにかけなければいけないとしたら。

俺は……俺のツインテールは──。

第二章　最終決戦、アルティメギル。

気がついたら俺は、暗くら闇やみの中を歩いていた。

闇の中でも揺れているのがはっきりとわかるツインテール……どうやら俺は、テイルレッドに変身しているようだ。

出口を求めて歩く俺に、背後から声がかけられる。

「テイルレッド～……」

振り返った俺の目に飛び込んできたのは、闇から這はい出すように出てきた、傷だらけで歩いてくるエレメリアンだった。

名前は知らない。どこかで見たことはあるような気はするが……。

「よくも私たちの基地を……壊してくれたなー……」

「！」

その言葉にはっとして、俺は構えを取った。

このエレメリアン……もしかして、この前の基地で戦った中の生き残りか!?

「俺たちの帰る場所が、無くなってしまった……」

今度は右から声が聞こえ、視線を向ける。

それを皮切りに、左から、背後から……俺を取り囲むように、無数のエメレリアンが歩み寄ってきた。全員、俺たちがアルティメギル基地で倒したやつらだ。

「お前ら、生き返ってきたってのか!?」

これほどの数では、生き残っていたというより生き返ってきたと考える方が自然だ。

臨戦態勢の俺を余よ所そに、エレメリアンたちは囲みを作ってからは距離を保っていた。

「よくも俺たちの基地を……安らぎの場所を……」

　その恨み言を聞いて、俺はようやくこいつらが戦意ではなく憎しみをぶつけてきているのだと気づく。

「せっかくコンプしたテイルレッドたん食しよく玩がんフィギュアが全部壊されてしまった……」

「みんなで作ったテイルレッド同人誌が燃えてしまった……買い集めた同人誌もだ……!!」

「どこだ……俺のスマホはどこだ……『いつでもテイルレッドたん』で、最上位レアを完全コンプしたというのに……早くプレイしなければ、連続ログインが途絶えてしまう……」

　本人を目の前にして、自分たちの失くしたコレクションや私物についての恨み節だ。

　その根本は……俺がこいつらの基地を破壊したことが原因だが……。

「憎い……俺たちの帰る場所を奪った……生き甲が斐いを奪った……！」

「この侵略者め……!!」

　俺は闇やみの中で思わず一歩後あと退ずさった後、当然の反論をする。

「な、何言ってるんだよ！　俺たちの世界を侵略してきたのは、お前らだろう!!」

　違う……こいつらはエレメリアンじゃない！

　あいつらは変態だけど、潔いさぎよく気骨ある連中だった！
戦った相手に対して、こんな泣き言を言うようなことはしない!!

　……だけど……それは、俺が勝手に思っているだけだとしたら……？

「私たちは、まだ何もしていない……基地にいただけだ……」

「それなのにお前たちは、寄ってたかって基地に押し寄せ、俺たちの全てを破壊した……俺たち自身をも……」

　その言葉は、俺が見て見ぬふりをしていた事実を、痛烈に叩たたきつけてきた。

「っ……！　そ、それは……」

　何も言い返せない。そうだ。俺たちツインテイルズの戦いは、防衛戦だから……世界を守るための戦いだからこそ正当なものだった。

　いくら首領の招待だったとはいえ、こちらから基地に向かい、破壊した時点で……俺たちは侵略者なんだ。

　だがそれは、基地に突入する時点で覚悟していたことじゃないか。どうして今さら、こんなに後ろめたく思っているんだ……!?

「こうなったら、お前が食しよく玩がんの代わりに永遠に愛めでられるのだ……」

「これでいくらでもイラストが描ける……」

「本人という名のウルトラレアカード……」

　エレメリアンたちは手を伸ばし、じわじわと俺ににじり寄って来た。

「わ――――――――――――――っ!!」

　恐怖が、爪つま先さきから頭まで這はい上ってくる。

　俺は戦って蹴け散らすどころか、ツインテールを抱かかえてへたり込んでしまった。

『じ……』

　確かに俺はお前たちの安らぎの場所を奪った……けれどそれは、今までお前たちがさんざん人間にしてきたことじゃないか！

　仕方なかったんだ！　俺たちの世界を守るために、やらなくちゃいけないことだった!!

『ーじ……』

　エレメリアンの一体の手が、俺のツインテールに触れようとし

た、その瞬間。

「そーじっ!!」

「っ……あ、ああああああああああ……!!」

　俺は何かに引き寄せられるように、ベッドの上で跳ね起きていた。

「俺は、俺は、そんなつもりじゃ……侵略なんて……!!」

　混乱のままに激しくよじろうとした身体からだが、何かに縫ぬい止められる。

「──大丈夫。大丈夫だから」

　目の前に誰だれかいると認識するより先に、温ぬくもりが俺の身体を包んでいた。

　ツインテールを感じる。愛あい香かのツインテールだ。

「あたしがいるの、わかるでしょ。落ち着いて」

　愛香が、俺を抱き締めてくれていた。

「……愛香……」

　愛香は、パジャマのままだ。まさか、隣の家まで聞こえるほどうなされていたわけはないだろうが……俺を心配して来てくれたようだ。

　ベッドの目覚まし時計に目線をやると、午前三時。こんな時間に……。

　愛香がまるで子供をあやすように、俺を抱き締めたまま……その時計のデジタル文字は、どこまで進んだだろうか。

「そーじ。エレメリアンたちの基地を壊したの、後悔してるの？」

　愛香はようやく、俺の悪夢を察して核心を突いた。

「愛香は何でもお見通しか……」

「そうだよ。そーじのことなら何でもわかる」

　言ってすぐ、愛香はフフッと微ほほ笑えんだ。抱き締められたままの微笑は、耳元に息がかかってくすぐったい。

「嘘うそ。何でもはちょっと盛った」

「どうだろうな。愛香はいつも、俺の悩みなんて言い当てちまうからな……」

　強がっても仕方ないと悟り、俺は胸の内を晒さらすことにした。

「……ああ、少し後悔してる。いや、してたみたいだ。自分でも気づいてなかったけど……」

　今まで、あんな悪夢を見たことなんてなかった。

　俺は自分で思っている以上に、奴やつらの基地を破壊したという事実に心の折り合いをつけられていないのだろう。

「エレメリアンの基地ブッ潰つぶしたのは、あたしの希望なんだから。そーじはついてきてくれただけなのに、罪悪感なんて持つ必要ないでしょ」

　案の定、愛香はいつものように自分が悪者になって俺の罪の意識を減らそうとする。

「馬ば鹿か。そこまで全部お前に背負わせられるか」

「っていうかさ、エレメリアンたち、レッドを出迎えて喜んで歌まで歌ってたじゃない。悪い方に考え過ぎよ。……あいつらだって、全部受け容いれて戦いに臨のぞんだんだから」

　これ以上、愛香に心配はかけられない。

　強がり結構、強引に納得し続ければ、いずれ吹っ切れるだろう。

「夢見が悪くて少し弱気になったけど……大丈夫、俺もちゃんと自分で納得して戦ったから」

　抱ほう擁ようを解こうとする俺を、愛あい香かは一層強く抱き締

めてくる。

「駄目よ。しばらくこうしていて。じゃないと、あたしが安心できない」

　二人とも薄い寝間着とパジャマだ。温ぬくもりは今や熱となって、互いの身体からだを伝わり合う。

　壁時計のささやかな針音だけが、薄暗い部屋の中で響く。

　俺がどうすればいいかを思案していると、

「……でも、ちょっと眠くなっちゃった」

　耳元の愛香の声に、少し甘い物が交じった。

「ねえそーじ。このまま……寝ちゃっていい？」

　だらりと垂らしたままだった自分の腕が、自然に持ち上がっていく。

　愛香の背中に腕を回そうとした、その瞬間。

「うぉあっっっっっっぶね熟睡してたらなんか愛香さんが小こ癪しゃくにテクニカルなことしているんですけど!?」

　勢いよくドアが開け放たれ、トゥアールが部屋の中に転がり込んできた。

　薄手のネグリジェを着て、激しく息を切らせている。

「トゥアール!?　何よあんた、こういう時は気を利かせて待ってくれるんじゃないの!?」

「たった一度の善意にどんだけ甘える気ですか、もうあんなサービスは二度とありません!!」

　トゥアールに飛びかかられ、愛香は身を躱かわしざまベッドから下りる。

「いつもいつもいつもいつもいつも私の夜よ這ばいを邪魔してきた

くせに、どのツラ下げて自分はしれっと夜這ってるんですかこのクソ雑ざ魚こヒロインは!!」

「よ、夜這いじゃない！　あたしはそーじがうなされてたから、慰なぐさめようとしただけで……」

　そうして電気も点つけずに、俺の部屋の真ん中で二人は言い合いを始めてしまった。

「そういうのは殿方を慰められるだけの肉体からだを持った女だからこそ言えることです！　ただのまな板が夜中にベッドの横まで歩いてきて『どうしたの、元気ないね』とか言ってきたら心臓が止まってしまうでしょうが!!」

「言葉なんてかけなくても心臓は止められるわよ」

「トゥアールちゃんの心臓はちょっとここ一年でダメージ受けすぎなんでえマジ勘弁しぎゃあああああああああ!!」

　心臓ハートをブレイクさせるどころか、手刀で引きずり出さんばかりの勢いで攻撃する愛香。

「ごめんねそーじ……騒がしくしちゃって」

「愛香……俺は本当に大丈夫だから。早く寝た方いいぞ」

「だ、騙だまされないでください総そう二じ様……！　この万年ショートスリーパーがこのぐらいの時間に眠くなると思いますか!?　あれは全部計算、猪ちょ口こオざいな演技です!!」

「トゥアールはもう少し心臓大切にした方がいいぞ……」

　心臓を押さえながら何かを訴えかけてくるトゥアールだが、俺には彼女の身を案じることしかできない。

「……誰だれのせいで睡すい眠みん不足だと思ってんのよ！　ちょっとこっち来なさい!!」

「ぐおっ……何ですかこの力強いてっぽうは……ちょ、やめてください大横綱!!」

　トゥアールを張り手で部屋の外へと押し出していく愛あい香か。

その後自分も廊下に出て、きっちりとドアを閉めた。

　俺はベッドの上に座ったまま、そっと自分の首元に触れた。

　愛香の温ぬくもりが、まだ残っている。

　そして俺は、先ほどの自分の行動の意味がわからず、首から離した手の平を見つめた。

　愛香は、俺を励ましてくれていただけなのに。

　あの時俺は――愛香を抱きしめ返そうとしていた……。

◇

「よりきりっ!!」

　鳩尾みぞおちに最後の張り手を受け、意味不明な呻うめき声を上げるトゥアール。

　張り手だけで一階へ、さらに地下基地にまでトゥアールを追いつめた愛香は、コンソールルームに入ったことでようやくゆっくり話ができると気を抜いたようだった。

「あのね、ホント空気読んでよ！　そーじ、マジで悩んでるんだから!!」

「自分の肉欲を正当化するのに総そう二じ様をダシに使わないでください!!」

　未いまだに夜よ這ばいをしたと誤解しているトゥアールに頭を抱かかえる愛香だったが、真ま面じ目めな顔つきになって釘くぎを刺した。

「ツインテールの変な夢見ることはしょっちゅうあっても、そーじが悪夢にうなされるなんてよっぽどのことよ!?　それもこれも—」

　アルティメギル基地での戦いで、ブルーはレッドの様子がおかしいことに気づいていた。

　最初は妙な歓迎を受けたり、そこいらに自分のフィギュアやグッズが飾ってあることに参っていたのかと思っていたが、違ったのだ。

「……基地の突入、そーじは置いていくんだった……。あいつ、優しすぎるから……トラウマになっちゃってる……」

　レッドは……総二は、敵の「居場所」を破壊することに心を痛めているのだと。

　自分のように、割り切ることができない。侵略され続けた側として当然のことをしているというのに、それでもなお、倒すべき敵に感情移入してしまっているのだ。

「置いていくと言っても聞く方ではありませんし……何より、テイルレッドがいなければ私たちは首領に倒されて全滅していたでしょう」

　愛あい香かの憂うれいは、結果論でしかない。誰だれ一人欠けていても生還できなかった、生命いのちがあるだけ儲もうけものだった──先の基地突入は、そんな戦いだったのだ。

「それに総そう二じ様が悩まれているのは、何もエレメリアン基地を破壊したことだけではありません……御自分の責任の重さを感じられているのです。それが原因で、納得したはずのことまで不安として発露させてしまっているのでしょう」

「責任……って……」

「首領を倒すことができるのは、自分だけだということです」

　トゥアールも、愛香とは別の視点で総二を案じていた。

　総二は、敵のツインテール愛が強ければ強いほど、自分も負けじと愛を高め、爆発的な強さを発揮して強敵に勝利してきた。

　最初の強敵であるドラグギルディを始め、ツインテイルズが勝利し続けてこれたのはテイルレッドの秘めた未知数の強さが大きかった。

しかし総二は今、ツインテールの愛で自分を上回っているかもしれない相手に対し、その愛の何たるかをまるで理解できずに苦悩している。

負けてたまるかと爆発することができない。

まさに、テイルレッドにとって最強最悪の相手が最後に立ちふさがったというわけだ。

「そこまでわかってるなら、何か対策のしようが──」

「ありません」

愛香の言葉を、ぴしゃりと否定するトゥアール。

「私は首領が憎い。できることならばこの手で倒したい。ですが……私一人では首領を倒せないであろうことも、痛感しています」

愛香やトゥアールたちは、全身全霊を懸けて戦っても終の零星フォー・ヴアリス・ジヨーカーの神たちを倒すことができなかった。

それよりも遥はるか雲の上の存在である首領を相手にたった一人で渡り合ったレッドは、ツインテール属性のエレメリアンにとっては最大の戦力。

冷たいようだが、総二抜きで戦うということは絶対に考えられない。

「だから今すべきなのは、総二様を戦いから遠ざけることではありません。私たちが、彼の心の傷を慰なぐさめることです。愛香さんは間違っていません」

「トゥアール……」

トゥアールはテーブルに背をもたれ、胸を押し上げて強調するように腕を組んで、愛香を見み据すえた。

「……愛あい香かさん……何度か提案しましたが……もうね……もう、妥協しましょう」

「何をよ」

　その仕草にイラッとしながら、愛香は吐はき捨てるように聞き返す。

「順番ですよ順番。夜よ這ばいの順番。愛香さんの覚悟はよーくわかりましたから。私たち二人の願いを今夜、成就させましょう」

「はあっ!?」

　しおらしい態度でそう提案してくるトゥアールに、愛香は思わず声を上うわ擦ずらせた。

「尊みことさんが言っていたでしょう。決戦の前に心残りなことを果たしておくべきだと。慧え理り那なさんやイースナはもう少しかわゆい願いを言うかもしれませんが、私たち二人の願いは同じ……！　初夜！　肉体関係！　違いますかっ!?」

「勝手にあたしを同類にしてんじゃないわよ!!」

「──私はっ！」

「！」

　反論しようとしたが、トゥアールの語調に気け圧おされる愛香。

「私は、愛香さんを親友だと思っています！　もう、そこを誤ご魔ま化かしたりしません！　愛香さんは、そう思ってはくれていないんですか……!?」

　愛香は頬ほおを赤く染め、静かに俯うつむいた。

「そ、そんなことない。あたしも……トゥアールのこと、親友だって思ってる……言わせないでよ!!」

「いやーやっぱクソ雑ざ魚こチョロインですね」

　もじもじしていた愛香が顔を上げると、トゥアールは凜り々りしい顔つきに戻った。

「それじゃあ……私にだけは本当のことを言ってください！　愛香さん、さっき、そのつもりだったんでしょう!?　この前キスだけで終わったし、もう少し前に進みたいって思ったんでしょう!?」

　愛香は、よく見てようやくわかるかどうかの小さな頷うなずきで、その言葉を肯定した。

　親友への、精一杯の誠意だった。

　それを見たトゥアールも、満足げに頷く。

「いやでもっ……やっぱりおかしいって‼」

「おかしくありません！」

　トゥアールは愛香の迷いを見て取ってか、言葉を続けさせずに捲まくし立てていく。

「……私たち、今度は本当に死ぬかもしれません。いえ、生き残れたとしても、ツインテール属性を奪われるかも……。愛香さんがツインテールで総そう二じ様に愛してもらえるのは、これが最後のチャンスかもしれないんですよ」

「□□□□□□」

　そう言われては、愛あい香かも黙るしかない。むしろ、覚悟が決まってしまう。

「愛香さん、ずっと言ってきましたが、私の望みは総そう二じ様の最初の女になることだけです。それは一年前、この家で宣言した時からずっと変わらない……それが、私の心残りです。それを残したまま、最後の戦いはできません」

　様々な感情が去来しているのだろう、愛香は黙ってトゥアールの言葉を聞いていた。

　笑顔で認めるわけにはいかない、けれどわかってしまう。親友と好きな少年との間で揺れ動く心は、自然と愛香のツインテールをも揺らしていた。

「一分でも早く、私が総二様の初めての相手になれれば、それでいいです。後は何も望みません。その代わり、回数は愛香さんの方が多くていいですから……」

　愛香が俯うつむいたまま微動だにしないので、トゥアールは何の情緒もなくパパッとネグリジェを脱ぎ捨てた。

「いよーっし、愛香さんが心変わりする前に速すみやかに全裸になってーっと」

　さらに躊躇ためらいなくパンツも勢いよく放り、当たり前のように全裸となって髪を掻かき上げた。

「まだ三月ですが、これから初体験かと思うと全裸でも全然寒くないですね」

「空調効いた基地の中で何言ってんのよあんた……」

　ようやく口を開いた愛香だが、その声はひどく弱々しかった。

「っしゃ、じゃあちょーっと一分ぐらいここで待っててくださいね！」

　スキップしてコンソールルームの出入り口に向かったトゥアールだったが、あまりにも平和なのでつい後ろを振り返ってしまった。

　愛香は俯いたまま立ち尽くし、自分を止めようと殺人技を繰り出してくる気配はない。

「……え、と、止めないんですか？」

　悲しきかな、条件反射。

　あまりにも愛香から破滅級の攻撃を受け続けたせいで、トゥアールは自分がエロいことをしようとしている時に邪魔が入らなければ、即座に警戒するように進化してしまっていた。

「……トゥアールがそーじの初めての相手になるのはヤだけど……あんたがそこだけは譲らないってんなら、仕方ないでしょ」

　か細い声で言い終えると、愛香は顔を真まっ赤かにしてしまった。

　これから起きるであろうことを、精密に脳内で描写してしまっているようだ。

「えっ……じ、じゃあ、愛香さんも覚悟決めちゃってる感じで……本気で、その、今晩……」

　頬ほおをひくつかせてしどろもどろになるトゥアール。

「…………」

　愛香は何も言わず、きゅっと唇くちびるを噛かんだ。それが、言葉よりも雄弁な答えだった。

「あ、そうですか。あー、ふーん……いよいよ、愛香さんも……なるほど……」

　愛香はそっとトゥアールの方へ目線をやった。

　全裸でおいっちにおいっちにと準備運動を始めたため、トゥアールの胸や尻しりがいちいち強調されて愛あい香かの目に飛び込んでくる。

「うーっし、ツインテイルズの卒業旅行の前に、今日は処女と童貞の卒業旅行ってわけですね！　ぐあっはっはっ!!」

　続けてトゥアールは、わざとらしく大声で笑って軽くシャドーボクシングを始める。

　全裸なので、胸がボクサーの叩たたいたパンチングボールのようにバルンバルン揺れている。

「……あんたやっぱ、土壇場でビビってんじゃないっ!!」

　それを見てイラッときた愛香は、出入り口まで詰め寄ると、トゥアールの肩を摑つかんで制止した。全裸がいちいち視界に入ってくる。

「ビビビビビビビビってませーんー！　はーちょっくらセックスしてこーようっと!!」

　そうして宣言したわりには、やはりドアの直前で足を止めて固まるトゥアール。

　愛香はにやけ顔になると、大おお仰ぎように溜ため息いきをついた。

「すぐ脱いだり下品なこと言ったりするくせに、真っ当に恋したり男女関係が進展しそうになるとビビるんだから……可か愛わいいも

んよね」

「は――――――――――ぁ!?　あ、は――――――――――っ!?」

　ひどく緊張していた様子の愛香だったが、トゥアールの様子を見て緊張がほぐれたようだ。

「……じゃ、いいわ、あたしがそーじの部屋に行くから。あたしは全裸でシャドーとかしなくても心の準備はできてるし」

「こ、こんな設定画とか存在しなさそうなモブ女に見下されるなんて……！　私を本気にさせましたね愛香さん、いいでしょう腹決まりました下腹部の方もキまりました!!」

　トゥアール（全裸）の関節をキめながら、愛香は思い出に頬ほおを緩める。

　入学式の日。喫茶店で総そう二じに迫るトゥアールを止めようとして、全てが始まったのだ――。

　そんなじゃれ合いを続けて結局、総二の部屋に辿たどり着く前に夜が明けてしまった。

　ツインテイルズのメンバーにあって、ずっといがみ合い続けていながらも、誰だれよりもお互いを理解し、信頼し続けてきた二人、愛香とトゥアール。

　心残りを果たしたとは言えないが……少なくとも、二人の思いは同じだった。

　傷心の総二を慰なぐさめるなどと言わず、全てを終わらせて憂うれいなく思いを遂げる。

　このどうしようもなく不器用な自分の親友と一緒に、戦いを終わらせるのだ。

◇

　陽よう月げつ学園高等部の卒業式の、翌日の夜。

　神しん堂どう家の離れの茶室で、慧え理り那なは母の慧え夢むと向かい合って座っていた。

　今日は慧理那も、母に合わせて着物を着ている。

　ツインテール道を代々伝えてきた名家である神しん堂どう家の茶室らしく、床の間に掛けられた掛け軸には力強く「ツインテール」と書かれており、二人が正座をしている座布ぶ団とんも、金糸でツインテールが刺繍されている。

　そして二人がいただく茶は、「ツインテール」と名付けられた、知る人ぞ知る名茶が使用されている。まさに、ツインテール茶会だ。

　また神堂家の茶道は、その厳げん粛しゆくな家柄とは裏腹、砕けた作法であることで有名だった。

　茶を点たてる手順も、いただく所作も好きにしてよい。

　ただ一つ、ツインテールであること。それが作法だ。

　慧え理り那なと慧え夢む、正座をして畳の上に載せられたツインテールには一分の乱れもなく、華美な着物の方が添え物であるかのように、それぞれの髪は輝いている。

　まるで母から娘への卒業試験を行っているような、厳おごそかな空気が流れていた。

「……もうすぐ、最後の戦いが始まります」

　慧理那がそう告げると、慧夢は優雅な所作で碗の茶を一口。

　そして、厳しくも優しい目で娘を見つめた。

「……そうですか。ツインテイルズの戦いが、終わるのですね──」

　安あん堵どのこもった言葉。娘がこれ以上危険な戦いをせずに済むとほっとしている母親に、しかし、慧理那は不安を重ねねばならなかった。

「ですが、その戦いは世界中を巻き込む規模になってしまうかもしれません。世界の人々や、建物、自然に……どれほどの迷惑がかかるか」

　慧理那は、自分が基地に突入した時の戦いの凄すさまじさを思いだしていた。今度は、この世界がそうなってしまう。

　これまで、奇跡的に世界には大規模な被害がないまま戦いが続いてきたが、さすがに今回ばかりはそうもいかないだろう。

「慧理那。勇者としての心構えは大切なことですが……神堂家のツインテールに、過ぎた謙けん遜そんは要いりません」

　しかし慧夢は、語気を強めて娘の不安を窘たしなめた。

「謙遜、とは……？」

　臆おく病びようならばまだわかるが、謙遜をしているという意味がわからず、慧理那は聞き返した。

「元より世界を侵略しようとしている怪人と、あなたたちは戦ってきた。狙ねらいが世界ならば、世界が巻き込まれるのは当然です。侵略戦争の渦中にありながら何も被害が無かった今までがむしろ、ツインテイルズの骨折りに大人たちが甘えていただけのこと」

　自分が思っていたのと同じことを母が考えていたと知り、慧理那ははっとする。

「だからあなたたちは、気にせず自分の身体からだを第一に考えるのです。どれだけ建物を破壊されようが、大人が危険な目に遭おうが……それは二の次。あなたたち若い生命いのちが残ることこそが、一番大切なことなのです」

「お母様……」

「これまでツインテイルズに甘えていた分、世界も責任を取るべきでしょう。特に慧え理り那な、あなたは銃や大砲をたくさん背負った鎧よろいを着て戦っているようですが」

「はい……そういう特性のテイルギアですので」

「ならば、周囲を気にせず思い切り撃ちなさい。自分が無事でいる

ために」

　世界そのものが、これまでの甘えのツケを払うだけなのだと。

　人生を重ねた大人は、そう諭さとしていた。

「きっとわたくしのご主人様も、婿むこ殿にそのように伝えることでしょう。親とはそういうものなのですわ」

　総そう二じも似たような心配をしていたことを、慧理那は知っている。

　彼の母もそうして伝え聞かせるだろうと確信を持って言える自分の母が、慧理那はとても頼もしく感じた。

「死中に活ありと言いますが……神しん堂どう家の教えは違います。死ではなく━━生。生中にツインテールあり。それこそが、戦いのみならずこれからのあなたの人生の標しるべとなりましょう」

　昔戦ったエレメリアンが、よく脱ぐテイルイエローを見て死中に活の戦法を取っているのだと勘違いしていたことがあった。ふとそのことを思い出し、小さく笑みを浮かべる慧理那。

「━━その言葉、神堂の奥義として胸に刻みますわ。ありがとうございます、お母様」

　そして口を凛り々りしく引き結び、慧理那は母への感謝を伝えた。

「よろしい！」

　袖そで口から取り出した扇子を勢いよく広げ、天晴あつぱれを形に表す慧え夢む。

「ところで慧理那。戦いが終わるというのなら、早速その先のことを考えねばなりませんね」

「その先、ですの？」

　戸惑う慧理那に、慧夢は扇子で口くち許もとを隠しながら神妙に語る。

「婿殿とのことですわ。ツインテイルズの活動に一区切りつくのでしたら、いよいよ結婚のことを考える時です」

「あっ……！」

　藪やぶ蛇へびだったかもしれない。確かに慧理那は縁談の話が出た時、大切なやるべきことがあるからと母を説得し、ツインテイルズを続けていた。

　その大切なことがもうすぐ終わると、自分から口にしてしまったのだ。

「もちろん母も、すぐに夫婦めおとになれなどと堅いことは言いません。ただ、本腰を入れて交際をすべきだと思うのです」

　かつては縁談の話が上がっては尊みことが妨害工作をするなどしてお流れになってきたが、今や慧夢は慧理那と総二との結婚を信じて疑わない。

　もっとも、まずは男女交際を、と言われて慧え理り那なはとりあえずほっとしたのだが──

「どうもあなたたちは、戦いが忙しすぎて年相応の営みが淡泊な様子。平日は五回、土日は一〇回、祝日は二〇回いたすべきと、伝えてきましたわよね？　戦いが終わった記念に一日で三〇回も……ええ、あなたたちの若さならば大丈夫」

「あの、よくわかりませんがかなり増えていますわ……」

　慧え夢むの提示する男女交際は、過程らしき過程がフッ飛ばされている上に、難易度が高かった。回数のノルマが、聞くたびに増えていっている。

「そしてそれはもちろん、尊みことも一緒です。あの子も鍛きたえていて体力がありますから、年齢差があるとはいっても慧理那と同等の回数で問題ないはず」

　慧夢の声が優しくなる。正式にアナザーテイルブルーに変身する時に一ひと悶もん着ちゃくあったことで、慧夢と慧理那、尊はあらためて家族としての絆きずなを深めた。

　ならば尊も平等に愛して欲しい、それが母たる慧夢の清らかな願

いだった。

「……回数はよくわかりませんが、わたくしは尊を連れて一緒に結婚することに何の異論もありませんわ。むしろ、その方が嬉うれしいです」

　慧理那はよくわかっていないが、それは総そう二じの負担をさらに倍にするという過酷な宣言でもあった。

「よく言いました、慧理那。夜よ這ばいとその先の作法は、母が指南いたしますわ。まず慧理那と尊は、母の手本をしっかり最後まで見──」

　聞いたことのある言葉に反応し、言葉を遮さえぎる慧理那。

「お母様。よばいでしたら、トゥアールさんに教えてもらいましたわ！」

「なんと……よい友人を持ちましたね、慧理那」

　慧夢はトゥアールのことを今でも十分に認めているが、慧理那から話を聞いたり、自分で見るごとに印象がよくなっていっているようだ。

「何十年という人生の中で、一生の付き合いになる友人など、何人持てることでしょう。ですが、夜這いの仕方を教えてくれる同性……女にとって、これ程素晴らしい友人が他にいましょうか。きっとトゥアールさんも、あなたにとって生涯の友人となるはずですわ」

「はい!!」

　慧理那は嬉しそうに頷うなずいた。話は半分程度しか理解できなくても、トゥアールが一生の友達の一人だと言ってもらえるのは喜ばしい。

　そうしてしばらく母と語り合い、慧理那は尊の言うところの心残りについて考えを馳はせた。

　自分は最後に、何をしたいのだろう──。

◇

　地下基地でトゥアールと言い争いをしているうちに、夜が明けてしまっていた。

　そこからは仮眠程度にしか寝ることができず、愛あい香かは家の道場へと足を運んでいた。

　昨夜ゆうべ極限までムラムラ……ではなかったもやもやした分を、ひたすら身体からだを動かすことで発散しなければいけない。

　胴着に着替え、準備運動をした後は、祖父から教わった水みず影かげ流柔術の型をゆっくりと繰り出していく。板を素足で擦する音が、小気味よく響いていった。

　総そう二じが、悩んでいる。強くなろうと足あ掻がいているのがわかる。

　自分は総二や首領のような、超常的な領域でツインテールを高めるという理屈はわからないが、せめて決戦を前に、疲労が溜まらない程度にトレーニングはしておこうと思ったのだ。

　頬ほおの火ほ照てりが収まらない。

　普段弱さを見せようとしない総二が、自分に心細さを吐と露ろしてくれた。

　その瞬間、言葉にできない嬉うれしさと、愛いとしさを感じた。あのまま総二を離したくなかった。

　足を止め、息を整えると、自分の身体をそっと抱き締める愛香。あの時の総二の温ぬくもりを、身体が覚えている。

　やはり総二は、トゥアールのように胸の大きな女の子に抱き締められる方が嬉しいだろう。

　それでも、自分がどれだけ総二を好きか、大切に思っているかをこめて、抱き締めたつもりだった。

　あの時トゥアールが邪魔をしなければ……。少なくとも愛香は、

そのつもりだった。

「っとに、トゥアールは……!!」

　再び足を動かし、拳こぶしを宙に突き出しながら、悪友の名前を口にする。

「てか、トゥアール置いてもっかいそーじの部屋行けばよかっただけだし……結局あたしもまだビビってるんだよね……」

　弱さを見せてくれた総二は愛おしい。

　しかし、弱っているところにつけ込んで身体を求めることは、愛香にはできなかった。そこまで割り切ることはできなかった。

　そんなフェアプレー精神に則のつとっていては、そのうち後悔しそうだが。

　トレーニングを終えた愛香は道場から家に入った後、シャワーを浴びる前に飲み物を取りにキッチンに立ち寄った。

「あら、愛香。道場に行ってたの？　朝は、最近だと珍しいじゃない」

　すると、リビングのソファーに座っていた姉の恋れん香かが声をかけてきた。

　姉は大学生になっても早起きで、だいたいこの時間はリビングにいるか、総二の家の喫茶店に立ち寄ったりしている。

「……うん。何となく、身体動かしたくなっちゃって」

「見て見て愛あい香か、テイルブルーのことやってる」

　恋れん香かは、テレビのニュースを指差してはしゃいでいた。

　やってると言っても、画面に映っているのは人相が悪い時の映像だ。

　それで嬉うれしそうなのだから、恋香はよほどテイルブルーのことを気に入ったのだろう。

「お姉ちゃん、テイルブルーのことけっこう気にしてたんだね」

「言ったでしょ、前に助けてもらったからって」

　テイルブルーは、迫り来るツインテール超常現象の巨大隕いん石せきを、口から光線を発射して撃墜した。その様を一般人に目撃され、愛香はこれでいよいよブルーへの世界中の人々の扱いも怪獣どころではなくなるだろうと観念した。

　そんな矢先、その場に居合わせた恋香が、ブルーに感謝の言葉を送ってきた。

　姉が怖い物見たさ程度の興味ではなく、本当にテイルブルーに興味を持って、しかも応援しているふうだったのは、愛香にとって意外なことだった。

「テイルブルーへの報道だって、おふざけ半分だと思うわよ？」

「いや絶対本気で脅きよう威いに感じてる方が多いでしょ……」

　無邪気に微ほほ笑えむ姉を見て、愛香は表情を険しくした。

　最後の戦いの前の、心残り。

　もちろん、総そう二じとのこともある。しかし愛香は、少し前から気にしていたことがあった。

　総二は、母である未み春はる。慧え理り那なは、やはり母の慧え夢む。

　それぞれ肉親に、正体を知っている人がいる。

　自分は……それが、誰だれもいない。

　両親が海外赴任しているため、一緒に暮らしているのは、姉の恋香だけ。

　もし、次の戦いでツインテール属性を奪われ、全てが終わってしまうとしたら。

「お姉ちゃん……」

　あっさりとテイルレッドの特集に移行してしまったニュース画面

から目を離し、恋香が振り返る。

「……そのテイルブルーが近くにいたら、どうする？」

「？　どういうこと？」

　次の戦いで全てが終わってしまうとしたら……その前にどうしても、守り通したこの秘密を、姉にだけは知っておいて欲しかった。

「……お姉ちゃん……。あたし、テイルブルーなの」

　すっかり汗が乾いた胴着姿で、愛香は意を決してそう告げた。

　その告白によって何が変わるか。もしかしたらトゥアールに怒られるかもしれないし、悪い方にことが進んでしまうかもしれないが……どうしても、言っておきたかった。

「知ってたわ」

「信じられないのも無理はないと思う。テイルブルーって、世間じゃ凶暴な怪獣扱いだし、あたしとは全然似ても似つかな…………………え？」

「だから、姉さん知ってたわ。愛あい香かがテイルブルーだって」

　あまりにも自然にそう返されたため、愛香はしばらくの間、その意味を呑のみ込めなかった。

「えええっ!?」

　大きくタイムラグを挟んだ後、思いきり絶叫する愛香。

「いや嘘うそでしょ！　あ、もしかして冗談だと思ってる!?　そうじゃなくて──」

恋れん香かは小さく首を振ると、優しい声で語り始めた。

「姉さんね、ある日突然、何な故ぜかテイルブルーが愛香に似ているなーって思うようになったの。そしたら、テイルブルーを見る度たびに、愛香が重なって見えるようになっちゃって」

テイルギアの認識攪乱装置イマジンチヤフが機能しなくなる際の現象だ。これを知っているということは、恋香の言っていることは嘘ではない。

「いつから!?」

「えーっと。姉さんが、ヘアバンドが好きだっていう怪物に襲おそわれたあたりかな？」

「トリケラトップギルディと戦ってたあたり……！　思ったよりもだいっぶ前だし……!!」

頭を抱かかえる愛香。数か月も前の戦いの時だ。恋香がテイルブルーを不思議そうに見るので、正体がバレないよう尊みことに代打で変身してもらうようになった。恋香はそれ以降何も言わなかったので、ちゃんと誤ご魔ま化かせていたのだとしか思わなかった。

まさか恋香がそこからずっと知らないふりをして、今までどおり二人で暮らしてきたとは。

「もう！　認識攪乱装置イマジンチヤフって肝心なトコでやらかしてばっかじゃない!!」

　愛香は姉に、それが自分の着ているテイルギアに備わっている、正体を隠すための機能であることを説明した。

　それを聞いた恋香はくすりと笑い、

「バレてもいい人にだけバレるって、とっても優しい装置だと思うわ。作った人の優しさがこめられているのね」

「…………何かその『作った人』にも心当たりがありそうに聞こえるけど……。まあいいや」

　姉の底知れ無さに驚きつつも、諦あきらめの境地に入る愛香。

「でもどうして今、教えてくれたの？　秘密にしなきゃいけないんだろうと思ったから、姉さん聞かなかったのに」

　愛香は胴着のまま、ソファーに腰を下ろした。

「……もうすぐ、最後の戦いがあるの。無事に済むかわからないぐらい、大きな戦い。だからあたし、姉さんにだけは話しておきたくて」

「姉さんより先に、総そうくんに言えばいいのに。総くんには、もう言った？」

　意味ありげな笑顔だ。やはり、姉は全て知っていてこんなことを言っているのではないだろうか。

　嘆息する愛あい香かに、恋れん香かは心からの感謝を伝える。

「……ありがとう愛香、ちゃんと教えてくれて。姉さん、テイルブルーを応援してるわね」

「うん、応援して。絶対勝つから」

　姉妹はそれからしばらくの間、色々なことを語り合った。

　もちろん総そう二じたちの正体には触れず、テイルブルーのことについてばかりだが……ここぞとばかりにテイルブルーをプレゼンする愛香に、恋香はとても嬉うれしそうに話を聞いたり、質問を返したりしていた。

決戦に向けて愛香もまた、憂うれいが晴れて万端の態勢が整ったのだった。

◇

何人なんぴとの来訪も拒こばむ、神秘の空間。

マルチバース・キューブと呼ばれる、多次元宇宙を凝縮した底無しの迷宮。

魔界にも喩たとえられるその場所の最奥に存在する──アルティメギル首領の間。

そこはテイルレッドとの死闘で見るも無惨に崩壊してから、徐々に再生を果たしていた。

床には、チェスピースやタロットカードなどが転がっている。

聖布ヴエールで覆おおわれた玉ぎよく座ざを離れた首領は、少女の姿を隠さずその空間の中心に立っていた。

血のように赤い聖装ドレスをまとった少女の前には、四体のエレメリアンが控えている。

アポロギルディ、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ、ハデスギルディ。

最後の最後まで首領のそばに残った忠臣にして、最強最後の部隊、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー。

首領と終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーは、戦いの傷を癒しながら、侵攻の時を待っている。

前線基地はツインテイルズに破壊された。後は宣戦布告のとおり、この場から総二たちの世界へと目掛けて出陣するだけだ。

「ねー首領様。その包帯、何？」

「あ、聞いちゃうんだ……」

　見た目そのままに無む垢くな質問をぶつけるアポロギルディに続き、組織一のチャラ男のポセイドンギルディは小声でげんなりする。

　その質問を待っていたかのように、首領はやたらこれ見よがしに宙を遊ばせていた右腕を胸の前で構えた。まとったドレスよりもさらに色濃い血の赤に染まった包帯を、右腕の指先から肩下まで巻いている。

「……無論、テイルレッドとの戦いで負った手傷を手当てしたまでのこと」

　不敵な笑みとともにそう断じる首領だが、包帯は手当ての意味を為なさないほど乱雑に巻かれている。妙に古めかしく、よく見ると所々に呪文のようなものが書いてあるが、おそらくその模様に意味はない。

　しかも巻き端はしをしっかりと固定していないせいで、包帯がパタパタとなびいている始末だ。どこから風が吹いているかは謎なぞだが、やたらとなびいている。

「いや首領様、右腕なんて怪け我がしてなかったじゃん」

「口を慎つつしめ、アポロギルディ。あのテイルレッドとの頂上決戦――我われらには見抜けぬほどの手傷を負われていても不思議ではない」

　慇いん懃ぎん無ぶ礼れいにツッコむアポロギルディを、ハデスギルディが窘たしなめる。

「フッ……そう逸はやるな、アポロギルディよ。あと少しで余の右腕の傷も癒いえる」

　首領は軽く五指を曲げて構えた右腕を、胸の前から決して動かそうとしない。

　飽きるほど見たというのに、いつまでもその血塗られた包帯に彩いろどられた右腕がアポロギルディたちの視界に入ってくる。

「だが……この呪布を外す時。ついに〝封印〟が解かれてしまうやもしれぬ、な――」

「傷を手当てして巻いたのに、何の封印を……？」

　ゼウスギルディが控え目に困惑する。同僚に態度が悪い彼女も、首領には遠えん慮りよがちだ。

　もちろん、つい最近何を封印したかは、おそらく首領本人すらも与あずかり知しるところではない。

「そういうお前たちも、先の戦いの手傷はそろそろ癒えたか」

「どっすかねー、テイルブルーめちゃんこブン殴なぐってきたから」

　首領に問われるや、頭の後ろで腕を組んでとぼけてみせるポセイドンギルディ。

　口調とは裏腹、彼の五体にはすでに闘気が充じゅう溢いつしていた。

　戦いを面倒がるポセイドンギルディらしからぬその態度に、首領も再戦への意気を感じ取ったようだった。

　瞬間。首領の間の床に転がっていたものの中からタロットカードが唸うなりを上げて飛び交い、続けてチェスの駒が上下左右に飛んで荒ぶる。

　ついでにトランプカード、将棋や囲碁の駒までもが乱れ飛び、それぞれぶつかり合い、占い道具と遊具とで大空中異種各闘技戦が繰り広げられ始めた。

「……何やってんの、首領」

「フッ……わからぬか、余ではない。侵攻部隊の運命を占ってきた道具の数々が、猛たけっておる……この先の決まりきった結末にまだ抗あらがおうとしているのだ、ツインテイルズはな」

　アポロギルディは首領の仕し業わざと断定して質問するが、首領はあくまで自然に起こった現象だと断じて憚はばからない。

　軌道が安定してきたのか、タロットカードの上にチェスのキングのピースが乗って灯籠流しのようにすいーっと空中を流れていたり、将棋と囲碁の駒が連結してトランプと並走していたりと、渾こ

ん沌とん極まる宙を見つめる首領の瞳ひとみは、どこか優しげで、そして寂しそうだった。

「よろしいのですね、首領様。この侵攻を最後に、また我われらはいずこかへと散り散りになりましょう。こうして四体集まることは、おそらく──」

　ハデスギルディが慇いん懃ぎんに念を押す。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーは、首領を守護する側近神。これほどの強敵を前にしなければ集結する理由はなく、ツインテイルズを倒した後は以前のようにバラバラに行動するだけだ。

　何よりツインテイルズとの決着は、首領にとっての方が重要なものだ。

「惜しむ気持ちも少なからずある。やつらを倒せば、あれ以上に楽しめる戦士など、もう二度と現れはしないであろうからな……」

　ハデスギルディの気持ちを汲んだのか、一応は惜しんでみせるが──

「だが、その戦いの記憶を終生の慰なぐさめとするのも、また一興」

　アルティメギル首領の決意はもう、決まっていた。

　二度と現れないであろう好敵手。テイルレッドとの戦いは永遠に記憶に刻まれ、この先の悠ゆう久きゆうの退屈を慰めてくれることだろう。

　ならばその最高の戦いを、早く記憶したい。それが、首領の決断だった。

「テイルレッドの世界への侵攻──これを余は、最終侵攻作戦オペレーシヨン・女神の堕ちる日フオーリンゴツデスと名付けた。以後、この場の全員で共有するがよい」

　首領は赤い包帯を巻いた右腕を突き出し、配下の四神へと最終作戦名を通達した。

　包帯がパッタパタと妙になびいている。

「うっわあ……」

「口を慎つつしめ、アポロギルディ……！」

　クッソ嫌そうに声のトーンを落とすアポロギルディを、やはりハデスギルディが注意する。

「いや、アポロギルディは『うっわぁ』としか言っておらんであろう。感激してるかもしれんだろう。お前がそう思うておるからそう感じるのではないか、ん？」

　ゼウスギルディから鋭いツッコミを受けたハデスギルディは、わざとらしく咳せき払いをして話題を変えた。

「ところで、首領様。お望みのものが程よく集まりました。──決意されましたなれば、頃ころ合いかと」

　ハデスギルディが告げると、首領は静かに頷うなずく。

　そして、最後に残った四体の部下へと、厳おごそかに宣言した。

「──では、始めるとするか」

第三章　曝かれたツインテール。

　朝、登校前の待ち合わせにトゥアールが準備で少し遅れるとのことだったので、俺は喫茶店に足を運んだ。

　やはり、店内は今朝も早くから多くの客で盛況だ。個人経営のいち喫茶店に、年齢職種どころか、国も人種も違う客層が集まっている。

　そんな中、外国の人……何かニュースで見たことのあるような雰囲気の人が、カウンター内の母さんに話しかけていた。

「マスター・未み春はる。例の件、承知しました。後は全て、こちらに任せてください」

　流りゅう暢ちような日本語だ。また何かのごっこの一環なのかと思いきや、

「よろしくお願いします。必ず必要になることだと思いますので」

　母さんは何もキャラを作っていないような真ま面じ目めさで、頭を軽く下げていた。

　母さんに話しかけた外国人の周りには、サングラスをした屈強な見た目のスーツの男性が二人立っている。

　本当、どこかで見た気がするんだけど……とにかく、それなりの有名人なのだろう。

　石油王っぽい常連さんといい、そんな人たちが当たり前のようにこの店に来るのが、今でも不思議だった。

◇

　その日の放課後、ツインテール部部室。

　仕事帰りでアイドル衣装のイースナが、部室に入ってくるが早いか俺の膝ひざの上にちょこんと座ってきた。そして胸元に頭を擦す

り寄せてくる。

　その仕草はまるで、小動物のようだ。

　何な故ぜかイライラした様子の愛あい香か、トゥアール。それと慧え理り那なに桜さくら川がわ先生、イースナと一緒にやってきたメガ・ネが、今部室の中にいる。

「えっと……どうしたイースナ？」

「なーなー総そう二じー」

　俺が尋ねると、イースナは上目遣いで猫ねこ撫なで声を出してきた。

「総二様の太ふと股ももをさわさわするんじゃありません太股を!!」

　トゥアールに注意されてもどこ吹く風、イースナは続けた。

「わらわ、総そう二じにお願いがあるのじゃ～」

「総二様の乳首をつつくんじゃありません乳首を!!」

　トゥアールは何な故ぜそうも部位を強調する……。

「実はなー？　来月なー？　ニューアルバム発売記念のなー？　ライブがあるんじゃけどなー？」

「イライラしますね、とっとと結論を言いなさい！　ライブが何なんですか!!」

「うむ。そのライブに、テイルレッドに出て欲しいのじゃ」

「そうです、最初からそうやって簡潔に……なんですってぇっ!?」

「トゥアール、ノリツッコミが一昔前のヤツなのじゃ……」

　ここまで無言で俺たちを睨にらんでいた愛あい香かだが、イースナの目的を知った途端、机に身を乗り出してきた。

「あんたさては、人気が落ち目だからテイルレッドを客寄せパンダに使う気ね！」

「落ちてないわ！　何故お前は何かといえば善いい沙すな闇あん子こを落ち目にしたがるのじゃ!!」

　そういやイースナが何かイベント企画する度たびに、まずそれを疑うよな、愛香……。

「だいたい貧乳は、隕いん石せきブチ壊して地球を救ってまで、未いまだに世間の人気がツインテイルズの中でブッチ切りの最下位のくせに、よくそんなこと言えるのう!!」

「ブッチ切りじゃないでしょ、レッドとシルバー以外みんなトントンよトントン!!」

　そこは譲れないのか……。

　でもイースナも、ブルーの世間での評判が好転していることはちゃんと認めているんだな。

「テイルレッドが、イースナさんのらいぶでお歌を歌うのですか？」

　慧え理り那ながツインテールを弾ませながら聞いてくる。

「さすがにそこまで求めはせんぞ、総二は歌が苦手じゃと前に言っておったしな。ゲストとして来て、一緒に踊ってくれればいいのじゃ」

　苦手というか、俺、カラオケとかほとんど行かないからなあ。人前で歌うということが想像できない。

「いいじゃろー？　以前、陽よう月げつ学園高等部の学園祭にゲスト参加してやったではないか、そのお返しということで、な？」

「あれは慧理那さんが気を利かせて、学園祭に興味を持っていたあなたを呼んであげただけでしょう！　恩に着せるなんて厚かましい!!」

　トゥアールがイースナを俺から引き剝はがそうとするが、さすがに善沙闇子の姿の時は変身している状態の力をそのまま使えるため、生身のトゥアールではビクともしない。

「お願い聞いてくれたらちゅーしてあげるぞ？　今、前払いで」

唇くちびるを尖とがらせ、俺の顔に近づけてくるイースナ。

トゥアールは自分の手の平をイースナの唇の前へと挟み入れ、頬ほおをひくつかせながら提案した。

「……イースナ、それじゃあライブのゲストは私にしなさい、出てあげますから。私こう見えて、めちゃくちゃ歌が得意なんです」

「何じゃトゥアール、わらわとちゅーしたいのか⁉」

「違います！　……そうだ、愛あい香かさんも確か歌は得意でしたよね？　トゥアールちゃん作曲の名歌『貧乳人生』の生披露の時ですよ！」

「いや無理、だって、変身してライブに出るんでしょ⁉」

愛香は手を振って拒否した。テイルブルーの姿でステージに立つのは、さすがに無理なようだ。あと、一度聞いたきりだがあの哀しい演歌を本人が歌うのはもっと無理だろう。

「本当は前にテイルイエローも一緒にやろうと慧え理り那なを誘ったのじゃが、遠えん慮りよされたからのう。慧理那だって歌は上う手まかったのじゃ」

「わたくし、特撮番組の主題歌なら得意ですが……」

謙けん遜そんして肩を竦すくめる慧理那。色々な習い事をしていた慧理那なら歌唱力もありそうだが、テイルイエローに変身して参加することがネックに思える。

何かの弾みで「アイドル衣装が邪魔ですわ」、と暴走したら最後だからな……。

「何より、な」

イースナは俺の顔を見上げ、神妙な面おも持もちで語り始めた。

「……わらわも心残りを果たしたくなった。そう言ったら考えてくれるであろう？　総そう二じ」

「心残りって……テイルレッドがライブに出ることがか？」

俺が聞き返すと、イースナはこくりと頷うなずく。

「ほら、去年のクリスマスライブ……会場がエレメリアンに襲撃されたやろ？」

イースナを援護するように、メガ・ネが説明する。

「ああ、あの時はネオアルティメギルとの戦いの真っ最中だったな……」

戦いで会場が壊れてしまったが、温かいファンに助けられて、イースナが涙ながらにライブを続けたのを覚えている。

「そん時にスタッフのみんなが本当に頑張ってくれたし、お客さんにも助けられた。だからイースナちゃん、いつか恩返しにサプライズを用意したいって思ってたんや。な？　このとおりや、総二くん」

お願いするように手を合わせてくるメガ・ネ。

愛香やトゥアールも、それを見て毒気を抜かれたように苦笑した。

「メガ・ネがそこまで言うんじゃ仕方ないわね……。来月ね、そーじのスケジュール空あけとくから」

「貧乳お前、スルーしかねん自然さで総二のマネージャーやっとらんか？」

マネージャーなどと言われた愛香は、イースナにきっちりと釘くぎを刺す。

「気をつけなさいよ。もし知り合いだって世間に知れたら、あんたアイドル活動どころじゃなくなるわよ。テイルレッドの情報求めてマスコミが殺到するだろうから」

「わかっておる、テイルレッドが偶然通りがかったということにしてもらうわ」

そこは、イースナもちゃんと考えていたようだ。

「……わかった。偶然通りかかったってことでいいなら、顔見せす

るよ」

　同意はしたものの、俺には少しの気がかりがある。

「けど……戦いの前に果たしておきたい心残りってのが、来月にやるライブのことでいいのか？　もっとこう、今すぐできることの方がいいと思うんだけど……」

　俺はそう思ったのだが、イースナの見解は違った。

「うむ、だって今約束しておけば、今嬉うれしいではないか！」

　その無邪気な笑顔に、はっとさせられる。

「だからわらわは、必ず戦いに勝つぞ。来月のライブが楽しみじゃからな！」

　俺は……いや、愛あい香かたちもだろう、いい意味で、言葉を失った。

「……イースナ……お前はすごいな」

　微ほほ笑えんでそう言ったのは、心残りを果たそうとみんなに提案した、桜さくら川がわ先生だ。

　イースナの言葉を聞いて何かを決心したように、慧え理り那ながしっかりと頷うなずいていた。

「あの……観み束つか君、わたくしも一つ、お願いをしてよろしいでしょうか」

　そして、おずおずと小さく手を挙げながらそう言った。

「いいけど、何だ？」

「今ここで、テイルレッドに変身していただけませんか？」

「それは構わないけど……」

　断る理由は無いので、俺はすんなりとテイルレッドに変身した。どうせ戦いがなくても何となくテイルレッドに変身してツインテールを見るのは、日常茶飯事だからな。

「尊みこと、お願いしますわ」

「かしこまりました、お嬢様」

　慧理那の指示で、桜川先生は何やら大がかりな機材を準備し始めた。部室の端はしに寄せていたようで、持ち込んできていたことに今まで気づかなかった。

「レフ板……!?　と、カメラと……バックのスクリーンと……」

　俺は、用意されていく機材を見てそれぞれを確認していく。七五三の記念写真なんかを撮るような、フォトスタジオのセットの様相を呈ていしている。

「その……心残りを果たす、ということについて、色々考えていたのですが……」

　真っ白なスクリーンのセットの真ん中に立って、慧理那は悪戯いたずらっぽく笑った。

「わたくしまだ、テイルレッドと写真を撮っていないことに気づきましたの」

　俺を誘いざなうように、そっと手を伸ばしてくる慧理那。俺はその手を取り、二人でセットの真ん中に並んだ。

「えっ……写真？　テイルレッドと？」

　俺が疑問に思って問いかけると、慧え理り那なはどういうことをしたいのかを説明する。

「ヒーローショーで、ヒーローと一緒に写真を撮ったりする時間があるのですが……」

「ああ、それは想像できるけど……そうじゃなくて。今は慧理那だってヒーローだ……同じツインテイルズなんだぞ？」

　俺たちの正体を知る前の慧理那なら、そういった写真にも価値を見み出いだすのだろう。

　けれど今さら、あらたまって撮るようなものではないのでは。

「それでも、テイルレッドはわたくしの永遠のヒーローですわ」

　身長差がほとんどないヒーロー。テイルレッドと握手をし、まずはそこで一枚、桜さくら川がわ先生が写真を撮る。

「だからわたくしが……神しん堂どう慧理那が、テイルレッドと一緒に写真を撮っておきたいのです」

　フラッシュの眩まばゆさに目を閉じることもなく、慧理那は笑顔で俺を見つめてきた。

「……わかった。じゃあ、好きなだけ撮ってくれ!!」

　腹を括くくった俺は、リクエストに応こたえながら色んなポーズを取り、慧理那と一緒に写真を撮った。

　剣を構えたり、別の形態に変化してみたり。

　一番最初のテイルレッドのファンへの、遅ればせながらのファンサービスだった。

　そう自覚してみれば、この写真撮影は俺にとっても心残りの一つを果たしたと言えるのかもしれない。

　イースナやメガ・ネも、長机のそばから嬉うれしそうにこちらを見ている。

　慧理那。戦いが終わったら、今度はみんなで一緒にたくさん写真を撮ろうな。

　一方、同じく長机に座ってこちらを見ている愛あい香かとトゥアールは、どこか複雑そうな表情をしている。

「どうしたっていうんですか、イースナも慧理那さんも……そ、それが心残り……!?　もう少し粘膜寄りの願いがもっとこう、あるでしょう!!」

「ねんまく……？」

　俺の隣で慧理那が、不思議そうに首を傾かしげた。

　愛香がトゥアールの頭をスパンとはたき、部室の隅へと引きずっ

ていく。

「うわあああん、やばいですよ愛香さん、ちびっこ組の心残りが想像していたより遥はるかにピュアです！　私たちなんて昨日きのう、夜通しセックスセックスと侃かん々かん諤がく々がくとしていたのに……!!」

「あたしは口にしてない！　あんたが一人で騒いでたんでしょ三桁けた揺らして!!」

「でも、なんか悔くやしくないですか!?　ここは慧理那さんとイースナも、今日中に総そう二じ様の下半身にしか興味がない性モンスターに洗脳してしまいましょう！　絶対ポテンシャルはあるはずなんです!!」

「その前にあたしがあんたを真人間に矯正してやるわ!!」

「ぐあああああああああああああああああああこの場で一番性欲強いくせに正義面する女!!」

　最後のトゥアールの叫び以外は小声でよく聞こえなかったが、愛あい香かたちも何か心残りを果たそうと話し合っているのだろうか？

「え、慧え理り那なさん……どうせレッドたんの撮影会をするなら、衣装チェンジにも挑戦してみませんか？　これはツインテール好きには見えない衣装なのですが——」

　息も絶え絶えのトゥアールは、そこでさらに愛香の追撃を受け、天井に埋まる。

「そーじ……あんた、テイルレッドになって一般人に愛あい嬌きょう振りまくのクセになってきてるみたいだから、気をつけてよね」

　愛香は最近、このことについてだいぶ警戒しているように感じる。もちろん、俺も気をつけてはいるが……。

　天井から脱出したトゥアールは、なおも愛香に食い下がる。

「愛香さんは毎度毎度あれも駄目、これも駄目と！　小こ姑じゆうとが板につきすぎです！　いいじゃないですかレッドちゃんがサービスしても！　テイルブルーが世間に振りまく愛嬌も胸もない分、レッドたんが孤軍奮闘してるんですよ!!」

「――あんたの乳は振り甲が斐いがありそうでいいわね……!!」

「ぐぎゃあああああああああああ乳脂肪が遠心分離するうううううううううううう!!」

　愛香がトゥアールを泡立て器にして空気を掻かき混ぜ始めたので、俺は慧理那との写真撮影を続行することにした。

　テイルレッドは今でも、自分にとってのヒーロー。

　ゼウスギルディとの戦いに赴く前にも、慧理那は俺にそう言った。

　その期待がとても嬉うれしく……そして今は、少しだけ辛つらかった。

◇

　俺の家に併設された喫茶店、アドレシェンツァの奥。

　そこには、ツインテイルズ地下基地へのエレベーターの入り口が設置されている。

　深夜の〇時前、ふと目を覚ました俺は、何となく基地へ降りようと思ったが……直前で思い直し、逆に喫茶店内の方へと向かった。

　日中の賑にぎ々にぎしさが嘘うそのように、静まり返った店内。

　思えばこの店も、ツインテイルズが活動をし始めてから何な故ぜかお客が増え始め、今や常連客が店員を兼ねているのではないかと

いうカオスな営業形態になってしまっている。

　けれどそこにいるお客さんたちは皆、楽しそうだ。

　属性力エレメーラという心の輝きを狙ねらう怪人が襲来し、それを守るために戦う戦士が現れた。

　それを契機に、自分の趣味嗜し好こうを大事にしようとする風潮がなんとなしに広まり……そして、ツインテールの素晴らしさが世界中に伝わった。

　言ってしまえばこの喫茶店は、今の世界の縮図なんだ。

　侵略などに負けず、毎日を笑って過ごせる世界がいい。

　そう願って、俺たちツインテイルズは戦い続けてきた。

　あと少しなんだ。あと少しで、その願いは完かん遂すいされる。

　だけど、俺は……。

　薄暗い店内に急に電気が点つき、俺は驚いて振り返った。

「……総そうちゃん？」

　母さんが、家への廊下に続いている出入り口に立っていた。

　まだパジャマに着替えていないので、起きて何か作業でもしていたようだ。

「なんだ、お客さんが誰だれか残ってるのかと思った。どうしたの、忘れ物？」

　俺は適当に誤ご魔ま化かそうとしたが、何故か言葉が出てこなかった。

　意図しない静寂に包まれる店内。

　努めて陽気な声で静けさを破ったのは、母さんだった。

「もしかして、また戦いのことを考えてたの？　もう、すっかりヒーローさんね、総ちゃんったら」

　意地を張っても仕方がない。俺は素直に頷うなずきを返した。

「俺の心のツインテールに感じているんだ。首領は、間違いなくもうすぐやって来る。最後の戦いが……もうすぐ始まる。母さんも聞いたよな、多分……世界中を巻き込むような規模の戦いになるって」

　母さんはそばまで歩いてくると、優しく俺の肩に触れた。

「そっか。緊張して、眠れなかったのね。……ココアでも淹いれようか？」

　微ほほ笑えみながらも、心配そうに俺を見てくる。

　そうだ。俺の母さんは、初めてテイルレッドに変身した日から、ずっとこうして俺たちを見守ってくれていた。

　時に異世界に一緒に行ったり、時にトゥアールに代わってオペレートを担当してくれたり。

　何度も的確なアドバイスをして、俺たちを助けてくれた。

　ひょうきんな態度を取っていることの方が多いけれど、強く、優しく、俺たちを支ささえてくれているのは……いつだって、母さんだった。

「緊張……じゃ、ないかもしれない」

　だから俺は、心が追いつめられている時に母さんに優しくされて、気持ちが緩んでしまったようだ。

「怖いんだ」

　駄目だ。言うな。母さんに心配をかけてしまう。口を閉じ—

「———俺……多分、首領には勝てない」

　言ってしまった。

心の片隅にあり、懸命に封じ込めていた本心。口にせず強がり続けていれば、勝てるという虚勢の方が現実になると思っていたのに。

母さんは少し驚いたように息を呑のんだが、すぐに、口くち許もとに笑みを戻した。

「相手はラスボスだもの、そうして不安になって当たり前よ。でもそれって、逆転のフラグじゃない？」

「違う……創作の話じゃない！　これは現実なんだ！　現実のツインテールなんだ!!」

慰なぐさめの言葉を遮さえぎり、俺は語気を強めた。

「今までの敵とは違う。どうすればあいつに勝てるか、全然わからないんだ。あいつのゼロのツインテールの強さを理解しようとしたけど、それも無理だった……!!」

愛あい香かたちには決して言えなかったこと。

この数日の不安が、津波のように押し寄せてくる。

「別に首領の真ま似ねをする必要はないじゃない。総そうちゃんには総ちゃんのツインテールの愛し方がある。それを貫いていけば、総ちゃんのまま、首領より強くなれるでしょう？」

「それは……！　もう、やったんだ……一度戦って、あいつのツインテール愛に及ばなかった！　次で勝たなきゃいけない……もう撤退はできないんだ！　だから俺は……」

自分の言葉が、要領を得なくなっていくのを感じる。

「だって俺は、絶対に負けられなくて、今でも慧え理り那なのヒーローで……世界中のツインテールが俺の肩に掛かってて……イースナはライブに俺をゲストに呼びたいって……首領は、とてつもなく強い……」

ついに自分でも何を言っているのかわからなくなり、俺は崩れ落ちるようにしてカウンターの席に座った。

「こんな俺で、ごめん。頼りなくてごめん。ツインテール馬ば鹿か

の俺の取り柄えなんて、世界を守れることくらいしかないのに」

「ごめんは、母さんよ。普段、悪の女幹部の格好とかしたりしてるのに……実際に悪の親玉が出てきたら、何もアドバイスなんてできない」

　母さんは俺の隣の席に座ると、少し考えこみ、言葉が見つかったかのように微ほほ笑えんだ。

「こういう時、なんて言えばいいかわからないけど……ただね。自分の息子が、こんなに大人な考えをするようになったんだな、って……。ちょっと感動しちゃった」

「大人って……俺は、弱音を吐いているんだぞ⁉」

「そうよ、総そうちゃん。大人ってね、弱音を吐きたいものなの。子供よりも、ずっと」

　厳しさを含ませた声こわ音ねで、母さんはそう断じる。

「でも、口にするのは我慢するの。大人だから。我慢して我慢して……どうにもできなくなった時に誰だれかに言っちゃう、それが大人。総ちゃんはね、大人になったのよ」

　俺は力無くかぶりを振った。

　わからない。いや、たとえ大人がそうだとしても……今の俺に、それは許されない。

　母さんは頑かたくなな俺を見て苦笑のままに嘆息を落とし、昔話を始めた。



「母さんも、お父さんもね……もう、本っ当にどうしようもない中二病で、総ちゃんが生まれた時も、それこそ悪の組織ごっこしながらはしゃいだものよ。日曜大工で大きな玉ぎよく座ざを作って、総ちゃんをそこに座らせようとしたり……市販の紙おむつを自分たちで改造して、呪文を刻んだ黒い見た目にしてはかせたり……コスパ悪くてすぐ生産ギブアップしたけど……」

　何をしてんだよ父さんも……。

「ただそんな私たちもね、たまに素すに戻って、『こんな私たちがちゃんと子育てできるのかな』って、不安になることもあったの。学生結婚で、若かったしね。『こんな私たちが育てた子供が、ちゃんとした大人になってくれるかな……』って、ちょっと凹へこんだりもしたのよ」

　母さんは自分の青春時代を語ることは多いが、これは初めて聞いたかもしれない。

　神も魔も超越してまた神に戻るような変ちくりんな肩書きを背負った父さんとの、輝かしい思い出。その中にあった少しだけ苦労した子育て話に、俺はむしろ安心のようなものを感じていた。

「そうして、総そうちゃんはすくすく育って……いつからか、ツインテール、ツインテールばっかり言うようになって」

「や、やっぱ心配かけたよな……」

　話題がそこに及んで、俺はギクリとしてしまう。

　母さんの気持ちになって考えれば、息子がツインテールに夢中になってさぞかし心配だっただろう。

　しかし、今度は母さんがかぶりを振る番だった。

「とんでもないわ。むしろ……嬉うれしかった」

　母さんは、俯うつむいたまま震ふるえていた。

　俺が思わず立ち上がって、様子を見ようと覗のぞき込むと──母さんもまた、おもむろに立ち上がった。

　そして、俺をそっと抱き締めてきた。

「こんな総ちゃんに育ってくれて、ありがとう。好きなものを好きって言えて、その好きを大切にできる……真まっ直すぐな子供に育ってくれて、ありがとう」

　突然の感謝の言葉に、胸が熱くなる。感謝なんて俺が母さんに何度しても、し足りないぐらいなのに。

「本当なら、もう戦わないでって言いたい……けど母さんは戦ってとも、戦わないでとも言えないわ。だって、そんな大切な決断を後押ししてしまったら……総ちゃん、きっとどっちを選んでも後悔する」

　俺に震えを伝わせながら、母さんは悲壮な思いを吐と露ろした。

　そのとおりだ。この決断は、人任せにはできない。たとえ自分の親だろうと、背中を押してもらうわけにはいかない。

　それを、あえて言ってもらえることが……どれだけありがたいことか。

「ただね、総ちゃん。母さんは、総ちゃんが何をしても、どんな決断をしても……一番最後まで、総ちゃんを信じ続けるわ」

「最後まで……」

　俺が繰り返すと、母さんは俺を抱き締めたまま頷うなずいた。

「これは愛あい香かちゃんやトゥアールちゃんにも譲れない、私の役目。だって私は、お腹なかを痛めて総そうちゃんを産んだ、お母さんなんだから」

「……母さん……!!」

　万感が溢あふれ、俺は母さんを抱き締め返していた。

「世界を守るヒーローなことは関係ない。こんな優しい子に育ってくれただけで、あなたは私の自慢の息子よ」

　いつも明るくて、何歳になっても自分の好きなことに邁まい進しんする、若々しい母さん。

　俺が負けたら、母さんはそんな『自分だけの好き』を失ってしまう。

　俺の父さんの思い出もろともに。

　俺はまたアルティメギル首領と戦うのが怖い。

　あいつに負けてしまうことが怖い。

　だけど……後悔のないように戦おう、と。それだけは、強い決意となって心に刻まれた。

◇

　三年生が卒業し、春休みを待つばかりの雰囲気となった校舎の中で、ツインテール部の部室の空気はいつもどおりのものだった。

　俺と愛香、トゥアールと慧え理り那なが長机に座り、桜さくら川がわ先生が慧理那の後ろに控えている。

「イースナは……仕事が終わってから、すぐに合流するそうです」

　トゥアールが、トゥアルフォンの画面を見て俺たちにそう教えてくれた。イースナからメールが来ていたのだろう。

　桜川先生の淹いれてくれたお茶を飲みながら思案していると、隣に座る愛香が不思議そうにこちらを覗のぞき込んできた。

「……そーじ、何かちょっと落ち着いた？」

　俺の心境の変化を見て取ったようだ。

「焦じらされすぎてちょっと緊張もほぐれたかもな。もう、あいつらがいつ来たって大丈夫さ」

　正直、心が晴れ晴れとしたとは言い難がたい。

　それでも俺は、恐怖心は全部吐き出したつもりだ。

「会長も、何か嬉うれしそう」

　愛香に尋ねられ、慧理那は朗ほがらかな笑顔で頷うなずいた。

「わたくし……最近何だか、夢の中にいるようですわ」

　そして、思いを抱き締めるように、胸の前で手を重ねる。

「ずっと、思い返していたんですの。観み束つか君と出会って、津つ辺べさんたちとお友達になって……ツインテイルズになって……脱いだり、色々ありましたけど……」

　脱いでから大分端折はしよったな……。そこにかなりのヒストリーがあったと思うんだが。

「ツインテイルズになれて、本当によかったですわ」

「……慧え理り那なさんも、覚悟は決まっている、ということですね」

　トゥアールの言葉に、しっかりと頷うなずき返す慧理那。

　慧理那が今、この瞬間を夢のようだと言うのなら。

　俺はその夢を守るために戦う。たとえ、どんな恐怖が待ち受けていても。

　みんなが明日も、笑顔でツインテールを結べるように……。

「そういえば、まだみんなに言ってなかったんだけど。実は、お姉ちゃんがね──」

　しかし、覚悟が決まったと語り合う俺たちの、その覚悟を試される時が来たのは、本当に唐突だった。愛あい香かの言葉は、思わぬ声によって遮さえぎられた。

『エレメリアン、出現しました』

電子妖精・とぅあるんが長机の上に浮かび、エレメリアンの出現を告げたのだ。

久しぶりの出現だ。

そして彼女が次にエレメリアンの出現を告げる時……それは、最後の戦いの始まりを意味していた。

部室内に、にわかに緊張が走る。

『アポロギルディ、ポセイドンギルディ、ゼウスギルディ、ハデスギルディと、未確認反応が一体です』

続けて、出現したエレメリアンの名称を読み上げていく。予想どおりだとはいえ……正直、並べて読まれたくはない顔ぶれだった。

未確認の反応は、データベースに登録できていない首領のものだろう。

「っ……！」

手持ちの端末で詳細を調べていたトゥアールが、顔を青ざめさせた。

「─出現したのは、陽よう月げつ学園高等部……ここです…………」

今度こそ、状況を即座には把は握あくできず、俺や愛香たちは固まってしまった。

「えっ……。──え？」

愛香は思わず聞き返そうとしたが、トゥアールの顔つきからそれが冗談の類たぐいではないと悟ったのだろう。

外からの覗のぞき見を防ぐために擬装処理を施ほどこされた窓に、それでも視線を馳はせてしまう。

「わたくしたちの学校に、エレメリアンが現れたというんです

の!?」

　慧え理り那なの声はむしろ、困惑の段階を超えて怒りの感情までこもり始めていた。

　世界を守る戦士ではなく、この学校の代表として。状況を問う声に、熱が宿る。

「正確には、校舎から少し離れ、校庭の直ちよく上じよう……！　いずれにしても、偶然この場所に現れたとは思えませんね……」

　トゥアールの補足を受け、一刻の猶ゆう予よもないことを悟る。

「……みんな、変身しよう……!!」

　俺が赤いテイルブレスを構えると、愛あい香か、慧理那も次々とブレスを可視化させていく。

　皆で士気を高め合うことすらできず、俺たちは慌あわただしく変身していった。

　レッド、ブルー、イエロー。部室の中を、三色の光が続々と包み込んでいく。

「あっ……私もか、私もだよな」

　最後まで動揺していた桜さくら川がわ先生も、慌ててアナザーブルーに変身する。

　一拍遅れて、水色の光も周囲に放たれた。

　しっかりと準備をし、突入の時間を決め、そして全員で覚悟を決めて。心身ともに充実させて変身したアルティメギル基地突入の時とは、逆になってしまった。

「っ……」

　特に、これが最後の変身になるかもしれないトゥアールにとっては、心の準備をする間もなく敵が間近に現れたことは無念だろう。

　可視化させたテイルブレスレボリューションを、険しい顔で見つめていたが──

「……テイルオンッ!!」

　視線を切って腕を構えると、幾いく許ばくの未練も見せぬ凛り々りしさで変身機構起動略語スタートアツプワードを叫んだ。

　普段は部室で奴やつらの出現を察知しても、まず転送ロッカーで基地に戻り、そこで変身して出撃していた。部室でみんな変身するというのは、かなり珍しいことだ。

「みんな……卒業旅行、思いっきり豪華なのにしようぜ!!」

　せめてもの抵抗に、俺は努めて明るくそう言った。少しでもいい、今から始まる過酷な戦いの活力源となるように。

　ブルー、イエロー、ホワイト、アナザーブルーが笑顔で頷うなずく。長机の上に浮かんでいるとぅあるんも、俺たちを見送るかのように手を振った。

「廊下……今は誰だれもいません！　ダッシュです、皆さん!!」

　部室のドアをちょっとだけ開き、生徒がいないか廊下をチラ見したホワイトが、俺たちを手招きする。

　これまで様々なハイテクに頼って出撃してきたが、最後は目視、そして自分の足で出撃か。

　味なもんじゃねえか……いくぜ!!

　変身した姿で部室棟を速すみやかに駆け抜けた俺たちは、校舎を出てすぐ、空高く跳躍。

　屋上に着地すると、生徒たちのざわめきが目と耳に届いてきた。

　部室棟の廊下に誰だれもいないはずだ。かなりの数の生徒が校庭に出て、空を指差したり、雑談をしていた。校庭で部活中だったユニフォーム姿の生徒たちも、大勢いる。

　彼らが注目している校庭の真上に浮かんでいるエレメリアンたちを、俺たちも視認した。

　小さな身体からだに、大銀河を照らす極星の炎を宿した戦士。終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの隊長、太陽神・アポロギルディ。

　ナンパ好きでチャラついた態度とは裏腹、特殊能力を極めに極めた超絶の業師、海神・ポセイドンギルディ。

　果てしなき雷を自在に操る様は、まさに神代からの来訪者。アルティメギル最大火力を豪語する雷神・ゼウスギルディ。

　イースナの師にして、あらゆる幻術と幻覚を駆使して冥めい府ふを現世に展開する冥界神・ハデスギルディ。

　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの四体が揃そろい踏みし、ある者は腕組みをし、ある者は腰に手をやりながら、不敵な笑みを浮かべて宙空に立っている。

　そして奴やつらが護まもるようにその背後に浮かんでいるのは──

「……玉ぎよく座ざごと来やがった……!!」

　忘れたくても忘れられない神秘の結晶を前に、俺は思わず独りごちた。

　聖布ヴエールに覆おおわれた、首領の玉座だ。その小さな玉座こそが移動戦艦だと謳うたわんばかりに、強烈な存在感を放って上空に浮遊している。

　その奥にうっすら陰って見える首領のシルエットは、すでに俺たちのことを認識し、こちらへと視線を向けているかのようだった。

　俺とブルー、イエロー、アナザーブルー、ホワイトの五人は、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの面々と視線を交こう錯さくさせる。

　マンモス校である陽よう月げつ学園は敷地面積が相当広く、校庭もそれに比例して大きい。

　並の幹部エレメリアン相手ならむしろ十分に戦える広さだが、相手があの面々ではそれでもまるで心こころ許もとない。せめて、裏

山に誘導するべきだろう。

「変身前に、校内放送で全校の皆さんに避難を促うながしておけばよかったですわ……!!」

　生徒会長としての責任感から、イエローが悔やんでいる。

「お───い、そこにいる人たちー！　早く逃げてくれー!!」

　俺は屋上のフェンスから身を乗り出して、校庭の生徒たちに大声で避難を呼びかける。

「テイルレッドたんだー！」

「レッドちゃんが私たちの学校に来てくれたー!!」

「写真！　写真撮らせてー!!」

　生徒たちは手を振ってきたり、スマホのカメラを向けてきたりと、いつもの戦闘中のギャラリーと同じ通常営業だ。

　まずいな、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちがこれ見よがしに空に浮かんだままで何もしてこないからか、生徒たちがあまり危機感を持ってくれない。

「みんなーっ！」

　ブラックの騎乗した戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネが、空の彼方かなたから飛来する。

　屋上に到着したところで、ブラックは戦闘機形態メガネウインガーから軽やかに飛び降り、メガ・ネも空中で人型に変形して着地した。

「これはいったい、何事じゃ!?」

　トゥアールからの連絡を受け、ブラックたちは急ぎ駆けつけてくれたようだ。

「見てのとおり……最終決戦開始です。覚悟を決めてください、ブラック!!」

　当然のことなのだが、やはりブラックも、その事実を受け止めよ

うとしても少し混乱してしまうようだ。

「いや、最終決戦ってもっとこう、『死ぬなよ、みんな……』みたいな感じで盛り上げてから始まるものではないのか!?」

　俺たちの横に並び、情緒の不在を訴えるブラック。

「仕事帰りに着替える間もなく変身して急行するなんて、なんやえらい忙せわしないなぁ……」

　メガ・ネはお腹なかの異次元箱からメガネドンの着ぐるみのヒレが少し出ているのに気づき、仕舞い直した。かなり慌あわててきたのは想像に難かたくない。

「勿もつ体たいつけて悠ゆう々ゆうと進軍してくるかと思えば、何じゃ、この慌ただしさは！　というか貴様ら、何な故ぜこんな場所に現れおった!!」

　空に浮かぶ終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー目掛け、勢いよく指を突きつけるブラック。それを皮切りに、沈黙を守っていた両陣営は言葉を交わし始める。

「首領様の、たってのご希望でね」

　背後から声が聞こえ、俺たちは一斉に振り返る。声の主は、ハデスギルディだった。

　ハデスギルディだけではない。屋上の真ん中に、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの四体が揃そろって並んでいた。空を振り仰ぐと、首領の玉ぎよく座ざしかない。こいつら、いつの間に……。

「突然の来訪、失礼するよ──観み束つか総そう二じ君」

　ハデスギルディの紳士的な声での挨あい拶さつに、俺はぞっとした。

「……今、なんて言った……」

　聞き間違いであって欲しいと願い聞き返す俺に、ハデスギルディは続けた。

「テイルレッド……そして、観束総二君。君は、素顔を私たちに晒さらしてしまった。ならば、君の本当の名前や、生活圏を特定することは造作もないことだよ」

　これを言うために、わざわざ俺たちの近くまで寄って来やがったのか。校庭の生徒たちに聞こえないように。それで気を遣ったつもりか……!!

「ここ、お前の学校なんだろー？　案外、他のツインテイルズもここの生徒だったりして！」

　おどけるように言ってみせるアポロギルディだが、言葉の奥に確信を秘め隠しているようにも感じた。こいつは見かけの幼さに反して、恐ろしいまでの切れ者だからだ。

「特定は造作もなかろうが、その生活圏を狙ねらって進軍するのは容易ではないはずじゃ……貴様たちに神としての誇りがあるのならな。墜ちるところまで墜ちたな、エセ神どもが!!」

　ブラックはハデスギルディへと、敵意剝むき出しで抗議をする。

「うわ、怒られちった……ムード作ったつもりだぜ、俺たち？」

　悪びれることなく、いつもの陽気な声でおどけてみせるポセイドンギルディ。

「あんたのムード作りってサイアクね」

　ブルーのこの言葉にはさすがに堪こたえたのか、力無く頭を垂れていた。

　たった一度素顔を晒さらしただけで、俺の個人情報は丸裸にされたってのか。

　いや、そのぐらいならこの世界の警察や諜ちよう報ほう機関だってできることだろうが、ブラックの言うとおり……ツインテールの戦士の〝日常〟を人質にしてまで侵攻を優位にしようだなんて、エレメリアンがやることとは思えない。

　まして功を焦あせる一般兵士ならともかく、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの神たちがだ。

　━━首領の命令か……!?

「こんなドッキリが目玉だとしたら、あなたたちって侵攻側のセンスないですね。わざわざ首領の間までへの宮殿を構えて私たちを待ち構えていた時の方が、まだマシでしたよ」

　ホワイトは大おお仰ぎように嘆息しながら、奴やつらを挑発する。

「それじゃそろそろ、戦い始めませんか？　突然来訪してくださった以上、もちろん私たちのお持てなしも受けてくださるんですよね？」

　さらにホワイトは、俺たちに目配せしながらそう言った。

　首領は空で玉ぎよく座ざに座ったままだし、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちは余裕を見せているように思える。

　やつらが臨戦態勢に入る前なら、こっちのペースに持ち込めるかもしれない。

「オッケー、こいつらはあたしたちに任せて!!」

　眼前の終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーとの戦いを引き受けると宣言し、平手に拳こぶしを打ちつけるブルー。

　そうだ。俺は首領と戦い、倒すことだけを考えろ。

　母さんと話したことを思い出せ。勝てるかわからないじゃなく、勝てると信じるんだ!!

　俺たちはフォースリヴォンや神眼鏡ゴツドめがねに触れ、次々と武装を手にしていく。

　しかし、ハデスギルディは制止を促うながすように平手を向けてきた。

「安心したまえ、私たちはまだ戦うつもりはない。君たちにはこれからゆっくりと、ブラックが言うところの『進軍』とやらを見届けてもらうからね」

「何じゃと!?」

　訝いぶかしむブラックを余よ所そに、四体は再び首領の鎮座する空へと舞い戻った。

　聖布ヴエールとそれを囲む終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの四体。

　その背後の空間に、次々と極彩色の穴が穿うがたれていった。

　転送ゲートだ。エレメリアンが出撃や退却に使うゲートが、奴やつらの周囲に出現し始めた。

　だがその数は、尋常のものではなかった。

　転送ゲートは一体一体が潜くぐるものなのだから、せいぜいが二～三メートル。

　たったそれしきの大きさの円が密集して、こうして屋上から見渡す限りの全てを塗り込めていっている──今、俺たちの前には一体、どれほどの数のゲートがあるというのだ。

　その穴の中から、続々とエレメリアンが姿を現してゆく。

「援軍、じゃと……!?」

　ブラックはその暴力的な数を前に放心したのか、乾いた音を響かせてダークネスグレイブを屋上の床に落としてしまった。

「何……だ、あの数は……」

　現実感を簒さん奪だつする光景を前に、俺は思わず呟つぶやいた。

「馬ば鹿かな、これほどの大戦力を……いくら何でも早すぎる！　それとも、わらわたちがアルティメギル基地に突入する前から保険をかけていたというのか、臆おく病びよう者どもめ!!」

　ブラックが、全員の心中を代弁するように叫ぶ。

「何を言う？　エレメリアンに、限界数はないのだぞ。無数の異世界があり、その人間の数だけエレメリアンも生まれるのだからな……！」

　ゼウスギルディが、俺たちを脅すように言い放つ。

　俺たちだって、エレメリアンがまだまだ他の異世界に無数にいるということは知っている。

　だから、奴らが援軍を呼ぶ可能性を考えなかったわけじゃない。

　しかし第一に、他の世界から別の部隊がやって来るには、それなりの時間がかかる。

　そして第二に……そもそも、この世界を侵略する前線基地は、もうない。

　マーカーの役割を果たす基地がなければ、尚のこと援軍の到着は遅れる。

　これはイースナが言っていたので間違いない。

　俺たちは終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの力が全世界規模で発揮される可能性について懸念はしていたが、無数のエレメリアンが現れる可能性は、考慮していなかった……。

「──余だ」

　男とも女とも取れる、何重にもぶれた声。

「──余が手ずから、兵をこの世界へと誘いざなった」

　聖布ヴエール越しの、首領の声だった。

「ツインテイルズよ。お前たちは今まで、どれだけのエレメリアンを倒してきた？　数千……数万。数千万には届くまい」

　不気味な声こわ音ねが、俺たちに問いかけてくる。

　わかりきったことだ。ヴァルキリアギルディの手で復活したエレメリアンたちや、ガイアギルディが生み出したホロウエレメリアンを加えてさえ、数千万なんて到達するはずがない。

「だが余が指示を出せば、今すぐこの世界の人口と同じ数だけのエレメリアンを呼び寄せることも容た易やすい。数十億のエレメリアン……お前たちが何百度力尽きても、なお足りまいよ」

そのあまりに途方も無いスケールに、アルティメギルにいたことのあるブラックでさえもが、言葉を失っていた。

「とりあえずは数万。手早く呼べる数だけをここに集めた。物足りなければ、いくらでも余に申すがよい」

手早く……数万だと⁉

「し、尺度が違いすぎますわ……」

イエローも、数に圧倒されている。

俺はかつての戦いでホロウエレメリアンを約数千体と認識したが、その時でさえ、気が遠くなったのを覚えている。今回はその時と比べて、文字通り桁けたが違う。

そうして俺たちが動揺している間に、ゲートから出てきたエレメリアンたちは個々に整列を始めた。大半が校庭に揃そろっているが、飛ひ翔しよう能力を持ったエレメリアンも多く、かなりの数が空で待機している。

しかし、悪夢はそれだけでは終わらなかった。

「……こ、これは……」

ホワイトが、手にした端末に目を落として愕がく然ぜんとしている。

「どうしたのじゃ、ホワイト！　目の前のやつらの数がわかったのか⁉」

ホワイトの様子がただ事ではないので、ブラックが急せかすように尋ねる。

「――世界各地に、ここと同じ規模で大量のゲートが出現しています」

震ふるえる声で報告された内容は、俺たちの思考を停止させるに十分な衝撃だった。

目の前に出現した、数えるのを諦あきらめるほどの戦力。数万を集めたと言われ、俺たちはその全てがここにやって来たのだと勘違

いしていたが……違ったのだ。

　全世界同時多発出現、合わせて数万体のエレメリアン。

　こいつらは、俺たちを倒してから世界を侵攻するつもりなど毛頭なかった。すでに、進軍は開始されていたのだ──。

「この街にも、どんどんエレメリアンが広がり始めておる！　一刻の猶ゆう予よもないぞ!!」

　ホワイトだけに任せず、自分の神眼鏡ゴツドめがねでも状況を分析し始めたブラックが、さらに切迫した状況を伝える。目の前のゲートから現れた連中は、学校を出て街へも向かっている……!?

「どうする？　お前ら、また一人ずつ僕たちと戦うつもりだったんだろー？　その水色のねーちゃんが、一人で世界旅行して兵隊数万体相手にするのかー？」

　アポロギルディは、早く戦いを始めたくてうずうずしているようだ。先ほどまでの重い首領の言葉とは真逆に、声が弾んでいる。

　指名を受けたアナザーブルーは、音を立てて息を呑のんだ。

「……き、きつそうだが、雑ざ魚こは私が全部引き受けよう。あれだろ、基地の転送ゲートとやらを使って、世界中どこにでもすぐに移動できるんだろう。なら世界は──」

「いやさすがにそれは無理！　あたしたちも世界中に散って、先に雑魚を……」

　ブルーたちが混乱する中、ホワイトは一人、冷静な判断を下した。

「…………世界は、後回しです」

「ホワイト！」

　ブルーが批ひ難なんを声に含ませるが、ホワイトは説き伏せるように語気を強めた。

「この数日で、世界中の避難経路は強化してあります！　それにもし属性力エレメーラを奪われても、やつらが撤退する前にリングを

破壊すれば、属性力エレメーラは人々に元に戻るんです！　首領や終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーを先に倒せば、指揮系統が崩壊して容易に一般兵を掃そう討とうできるはずです……だから!!」

　冷静で……ある意味、冷徹な判断。それは、伝えるホワイトが一番つらいはずだ。

　皆が押し黙ったその時、俺は一体のエレメリアンが、校庭に避難してきたツインテールの女の子へと近づいていくのを目にした。

「ッ……やめろーっ!!」

　俺はブレイザーブレイドを引っさげて屋上から落下。着地ざまにエレメリアンを斬きりつけて爆散させ、女の子を背にかばった。

　どこを向いてもエレメリアンがいるような状況だが、せめて離れているようにその女の子に伝え、大人たちの方へと向かわせる。

「……だから皆さん！　いきましょう!!」

　ホワイトが叫びながら屋上から飛び降り、ブルーたちも続々と降下してくる。

　期せずして、俺の行動が開戦の合図となった。

　無数のエレメリアンたちが次々に目を発光させ、こちらを見み据すえてくる。

「首領様のご命令ではるばるやってきたが……なるほど恐ろしく可か愛わいい。これが伝説のツインテールとして名高きテイルレッドか」

「なんだその高い高いをしてもらうために特化した魅惑のフォルムは……私に任せなさい」

　猛もう禽きんのような見た目をしたエレメリアンと、大だい蛇じやのような見た目のエレメリアン……その二体を皮切りに、続々とエレメリアンたちがにじり寄ってくる。

　気持ち悪いし、なんか勝手に伝説にされてるけど、こいつらの注意が俺に向いてくれればありがたい。

「そうだ、俺がテイルレッドだ！」

　俺はツインテールを誇示するように勇み立ち、エレメリアンたちへと名乗り出た。

「やるぞ、みんな――――――っ!!」

　俺が叫ぶと同時に、周囲には足音と雄お叫たけびが綯ない交まぜになった轟ごう音おんが響きわたる。

　校庭へ避難してきた人たちに被害が及ばないよう、できるだけ自分たちに引きつけて倒す。

　俺たちとエレメリアンとの攻撃で、校庭にけたたましい爆発音が木霊こだまし始めた。

　高等部入学時、俺は中等部とは桁けた違いに広い校舎や校庭にただただ圧倒されたが……その校庭が今は、あまりにも小さく、頼りなく感じる。

　何より、俺たちの学校が戦場になってしまったことが、悔くやしくてたまらない。

　そのやりきれなさを叩たたきつけるように、俺は炎の刃やいばを一いつ閃せんした。

「……こいつら……」

　ブレイドから感じる手て応ごたえにはっとし、俺はか細い希望をさらに強くする。

「こいつら、基地にいた奴やつらよりも全然弱い！」

　ブルーも俺と同じことを考えていたようで、より具体的に叫んでいた。

　当然か。残存軍の奴らは、何だかんだいって色々鍛きたえてたみたいだったしな。

「でしたら、実質数千体ぐらいに見積もってもいいですわよね！」

「よっし気張るのじゃみんな、高みの見物をしておるあの三流神ど

もを、こちらへ引きずり下ろすぞ!!」

　後に控える強敵たちのために力を温存しなければいけないという焦しよう燥そうに駆られながらも、俺たちは群がる一般兵たちを懸命に倒し続けた。

　合戦さながらに、エレメリアンたちの雄叫びが校庭に木霊し続ける。

　周囲の人たちの歓声も大きくなっていく。

「ブルー、イエロー！」

　俺は三つ編み属性トライブライドの属性玉エレメーラオーブを発動し、ブルーとイエローに合図した。

　眼前に群がるエレメリアンたち目掛け、フュージョニックバスターを三人で構える。

「フュージョニックバスター！　ファイヤ――――――ッ!!」

　イエローが叫ぶと同時に、俺はグリップのトリガーを引いた。

　思考で軌道や効果をコントロールできる特性を活いかし、放たれた三色の螺ら旋せん波光の軌道を操作。周囲の人たちに被害が及ばないよう、的確にエレメリアンだけへと叩き込んでいった。

「あれ、そういえば見たことないツインテイルズがいる……？」

　一般人たちがホワイトに気づき始めた。アナザーブルーのことも、知らない人は多いだろう。

「そう！　私は新たなるツインテイルズ、テイルホワイト！　エレメリアンの数は多いですがこの超強い美少女がいる限り、物の数ではありません！　安心してください!!」

　ホワイトは周りのエレメリアンたちを蹴け散らしながら自分をアピールし、

「あとこっちの人はアナザーテイルブルーといいます！　テイルブルーの親しん戚せきです!!」

「いや違うだろいずれみつ……テイルレッドと家族になるんだぞ私は」

　そしてアナザーブルーのことも、手早く紹介する。さすがだ。

　周りの人たちが、ホワイトに頼もしさを感じたのか、表情に安あん堵どが浮かんでいく。

「新しいツインテイルズっていうけど、何かあの人、どこかで見たような……しかも何度も……」

　中には、何かを疑問に思っている人もいるようだが……。

　人前に何度も姿を晒さらした仮面ツインテールと、ノリが同じだからな……さすがに同一人物だとまではわからないだろうけど。

　ホワイトは実力を以もつて自己紹介をするように、華麗に飛ひ翔しようしながらエレメリアンを爆散させていく。アナザーブルーも同様だ。

　そうして戦いが激しさを増していく陽よう月げつ学園高等部の校庭に、さらに人が集まり出した。

　すでに下校していたと思おぼしき陽月学園の学生だけでなく、スーツを着たサラリーマンふうの人や、女性、子供までいる。

「駄目だ来るなっ、危険だーっ！　この数のエレメリアンが見えないのかっ!?」

　俺は大声で避難を促うながす。その集まってきた学生の一人が、こちらに顔を向ける。かなり走ってきたのか、息が切れ、額ひたいに汗が滲にじんでいるのが見えた。

「ま、街のどこに行ってもエレメリアンがいるんだ！　レッドちゃん!!」

「っ!!」

　返ってきた不安げな叫びを聞き、俺ははっとした。

　逃げ場がないくらい、街中にもすでにエレメリアンが散らばっているっていうのか……！

　そうなれば、学校の校庭などは一番わかりやすい避難所だ。どこにも逃げ場が無いのなら、自然と開けた場所に集まってしまう。

「……だったらせめて、ここがちゃんと避難場所として機能するように……!!」

　まずは目の前のツインテールを、目の前の平和を守るために。

　俺たちは、立ちはだかるエレメリアンに手にした武装をぶつけていく。

　そうして、いったいどれだけの数の敵を倒しただろう。

　エレメリアンたちの攻撃の手が、急に止やんだ。

　先ほどブラックが宣言したとおり、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーと首領の玉ぎよく座ざが、校庭へと静かに降下してきたからだ。想定以上に兵を減らされて、ようやく自分たちの手で戦う決意をしたのか。

　周囲のエレメリアンたちは、恭うやうやしく傅かしずき始めた。

「控えたまえ、この世界全ての人間たちよ。今ここに、全知全能たるアルティメギル首領様が光臨あそばれた」

　ハデスギルディが高らかに宣言すると同時、空高く巨大なスクリーンが次々と浮かび上がり始めた。今このタイミングでそんなことをする意図は一つ……世界中に、これからの戦いを中継する気だ。

　玉ぎよく座ざの聖布ヴエールがひとりでに捲めくり上がり、中から一人の少女が静かに歩み出る。

「何だ、あれ!?」

　俺たちの戦いを見て湧わいていた人々が、その姿を見た瞬間困惑の色を浮かべ始めた。

「今、あれがアルティメギルの首領、って言ったよな……。首領って、親分のことだろ？」

「いや、人間にしか見えないんだけど……怪人たちの責任者が!?」

　先ほどのハデスギルディの口上を聞いていれば、人々がそう戸惑うのも当然のことだ。

「……ソ、ソーラちゃんに似てない……？」

　そう言ったのは、やはり陽よう月げつ学園の制服を着た学生だ。

　みんな戸惑っているな……当然か。

「ていうか、大きくなったレッドちゃん……？」

「さてはまたツインテイルズに化けて悪さする気か、あの怪人たち！」

　意外な反応だった。もっと驚いたり、ショックを受けたりすると思っていたのだが。

　もちろんこれは、俺たちにとっては追い風だ。

　何の憂うれいもなく、衆目の前で首領と決戦を繰り広げることができる!!

「さあ、決着をつけるぞ、首領！」

　ブレイザーブレイドを突きつけると、首領は鼻を鳴らして嗤わらった。

「――何を息巻く、テイルレッドよ。余とお前の決着はすでについている」

「何……それじゃあお前、何しに俺たちの前に現れたってんだ!!」

「すでに伝えていよう。余は、お前たちの世界を侵略すると」

　首領は掲げた手に光を棒状に凝縮させ、最大の武装・フューネラルケインを手にした。

「だから、この場所へと来た。余が手ずから人間をここまで追いつめるなど、初めての経験。とうの昔に捨て去った原始の〝侵略〟を思い出させるほど、お前たちは素晴らしき戦士であった。これよりこのアルティメギル首領が、テイルレッドを完かん璧ぺきに侵略せしめる」

　ここまで入念に追い込んでおいて、原始的だと……？

「この世界を、だけじゃなくて……俺を侵略……!?　どういうことだ!!」

「言ったはずだぞ、テイルレッド。余はお前が欲しいと」

　首領の大胆不敵な宣言に、一般人が反応する。

「あいつ今、テイルレッドたんが欲しいとか言ったぞ！」

「そうだ。余はテイルレッドが欲しい」

　冷厳に言い放つ首領に、文句を言おうとしていた一般人がへたり込む。

「テイルレッドよ。お前との戦い以来、ずっと考えていた。お前は余のものとなることを拒こばんだ。その不屈のツインテール……どうすれば余のものになるのかと」

　いったい、何をするつもりだ。

　思考を乱した俺の繰り出すブレイザーブレイドは、緩慢に突き出されたフューネラルケインによって易やす々やすと受け止められた。すかさず俺は左腕にツインテイルブレスを出現させ、剣を手にしたまま両腕を交差させて構えた。

「ツインテイルオンッ!!」

　アルティメットチェインの姿を目にした周囲の人々が沸き立つ。

　周囲のエレメリアンたちは、アポロギルディたちの指示でブルーたちと戦闘を再開する。

　首領が自分で戦い始めたら、周りのやつらは手出ししないってわけか。むしろ好機だ。

「やはりな……。以前よりも精彩を欠いたツインテールだ。余との力の差を痛感していながら、勝てぬと知りながら、懸命に自分を奮ふるい立たせたというわけか……可か愛わいいものだ」

　まだテイルクロスすらまとっていない首領に、攻撃を易々と捌さ

ばかれる。まるでやつの言葉が正しいかのように、俺と首領との力の差が、どんどん開いていくのを感じる。

「……ああ、お前の強さはわかってるさ……だけど！　絶対に、この世界のツインテールを奪わせはしない！　俺のツインテールに代えてでも!!」

　もし俺が力及ばず、首領を倒せないのなら。世界を守れないのなら。

　俺のツインテールそのものを爆発させて──首領を倒す。

　俺はすでに、そう決意していた。

　自分の……テイルレッドのツインテールを失うのは嫌だ。だけどそれ以上に、愛あい香かたちのツインテールを失うのは、もっと嫌だ。世界中のツインテールへの愛が消えるのは嫌だ！

　自分のツインテールか、その他全てのツインテールか。どちらかが必ず犠牲にならなければいけないのなら……俺は、自分のツインテールを犠牲にする!!

　造作もなく受け止められる渾こん身しんの剣が、たやすくいなされる必死の攻撃が……その結末へ、着々と俺を後押ししていく。

「……愚かな決意をしたな、テイルレッド。だが、ちょうどいい」

　俺の決意を一笑に伏し、首領は初めて攻勢に出た。

「──お前のツインテールに代えて世界が守れるか……これから証明されるのだからな」

　首領はフューネラルケインを空へと持ち上げ、俺目掛けて振り下ろした。その先端から発射された黒い光球が俺の眼前で弾はじけ、円柱型の結界となって俺を拘束バインドする。

「っ……くそっ……！」

　俺は脱出しようともがくが、とてつもない圧力だった。拘束どころか、気を抜いたら一瞬で身体からだもツインテールもバラバラにされてしまいそうだ。

　フューネラルケインも、テイルギアの武器を模して造ったものだ。やはり、オーラピラーまで使えるということか……それとも、同じような能力を元々有していたのか。

「堕おちた女神は、何に変わるのか。それを余に示して魅みせよ、テイルレッド」

　その絶望を体現したかのような冷たい声こわ音ねに、俺は思わず身体を震ふるわせた。

「さあ、この世界に生きる全ての人間たちよ、しかと目に焼き付けよ」

　フューネラルケインの先端が、俺の眼前に向けられる。

　そうだ……首領には、あの能力があった。

　光が、あの悪夢の光が、俺の身体からだを包み込んでいく。

「！　やめて――――――――――――っ!!」

　一番最初に気づいたのは、ホワイトだった。

　背中に届いた絶叫が、ガラス越しに響いているようにくぐもって聞こえる。

　テイルギアの変身は、瞬まばたきをも超えた一瞬だ。

　しかし俺は今、その逆回しを、まるでスローモーションのように知覚していた。

　ツインテールが解ほどける。

　幼い少女の身体から、男の身体へと戻っていく。

　同じ学校の生徒が。校庭へ避難してきた人たちが。

　首領たちの手で地球全土に中継がなされ、世界中の人々が見守る前で。

　テイルレッドは――ただの男子高校生の姿へと変わり果てた。

　崩れ落ちる俺に視線を投げながら、首領は勝利を確信した笑みを

浮かべる。

「貴様たちの女神、テイルレッド――その正体は、男だ」

キャラクター名鑑 047

アポロギルディ



DATA

身長：137㎝

体重：99㎏

属性力：幼女属性（リトルガール）
短髪属性（ショートヘアー）

終の零星の隊長。元神の一剣の隊長でもある。子供のような見た目のエレメリアンで、言動も純真無垢。やたらとち○ちんと口にしたがるのは、かつて下ネタが苦手で仲間と語り合えなかった過去の反動。無邪気な一方で非常に思慮深く、わずかな隙から相手の秘密に迫ることも。戦闘の状況に応じて子供の形態と大人の形態を使い分ける。首領の我が侭に呆れることが多いが、その首領からはもっとも頼りにされている。

第四章

絶望と、希望のツインテール。

　全世界に中継されている戦い。世界中の人たちが見守る中で、俺は変身を解かれて元の姿に戻った。

　エレメリアンたちとの戦いが始まってから、何を置いてもまず守り通してきた秘密を、白日の元に晒さらされてしまったのだ。

　あまりにも唐突過ぎて、自分が置かれた状況に現実感が湧わかない。白昼夢の中にいるような虚うつろな感覚で、身体からだが凍えていく。

　世界中の人間に、テイルレッドの正体が男だと知られること。

　それは、単にエレメリアンの一体や二体に正体がバレることとは、まるで重みが違う。

　世界の人々の心の輝きを守るという、ツインテイルズの存在意義そのものに関わることだからだ。

　少し顔を動かすだけで、周囲にいる人たちの困惑の表情が目に飛び込んでくる。誰だれ一人として、その場を一歩も動かずにただ俺を見ている。

　姿が違いすぎて、にわかには受け容いれられないはずだ。

　あるいは人々のその眼まな差ざしは、侵略者である怪人たちへ向けるものよりもなお恐怖と軽けい蔑べつを含んだものなのかも知れない。

「フフフフ……ハハハハハ……！」

　地面にへたり込んだまま放心していた俺は、首領の大たい笑しょうにはっと我われに返った。

「世界中に戦いを映し出した甲か斐いがあったというものだ。感じるぞ……この世界の人間たちの心を。まずは困惑……そしてそれは今まさに、絶望へと変わろうとしている……!!」

　首領の言葉は、振り下ろされた鎚つちのように俺の頭を激しく打った。

やっぱり……みんな、みんな絶望しているっていうのか。

「感情などとうに消え去ったと思っていたが……まだ、これほどの愉悦を感じることができたとは……!!」

前に俺と戦った時はあれほど飄ひよう々ひようとしていた首領が、感情を露あらわにしている。

やつの喜びはそのまま、世界に拡ひろがっていく絶望の深さを如によ実じつに俺に伝えてきた。

「テイルレッドちゃんが……男……？」

とうとう、誰かの声が聞こえた。困惑に震ふるえ、絞り出すような小さな声が。

俺の視界は次第に明滅し、薄れていく。

代わりに、世界中の視線が自分に集中しているのを感じる。

けれどその声はおそらく、世界の人々全ての思いの代表だったのだろう。

そして、曝あばかれた事実に戦慄わななないているのは人間たちだけではなかった。

終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの後ろに控えていたエレメリアンの何体かが、驚きよう愕がくの表情で後あと退ずさり、身体からだを震ふるわせる。

「テ、テイルレッドが男……」

「音に聞いたその可か愛わいさを、一目見ようとやってきた……実際に可愛かった……だが……」

「そのテイルレッドが、お、おおと、おと──ぐわあああああああああ!!」

震えていた何体かのエレメリアンたちは、次々に爆散してしまった。

「……ふーむ、無理もない。一般兵には刺激が強すぎたか……」

　間近で仲間が爆発しても一いつ顧こだにせず、ゼウスギルディが理由を推察して呟つぶやく。

　俺の正体を見たショックで爆発してしまったというのか。それほどの衝撃なんだ、テイルレッドが男だったというのは。

「レッドちゃん……」

「レッドたんが……」

「俺たちのテイルレッドちゃんが……」

　ようやく口を開き始めた人々も、一様に困惑を言葉にするだけだ。

　そんな周囲の様子を見たブルーは、首領に向かって捲まくし立てる。

「首領っ！　あんた……こんな晒さらしものじみたことして喜ぶような小者だったの!?　エンジェルギルディみたいな悪党と、やってること一緒じゃない!!」

「無礼者……！」

　ハデスギルディが進み出ようとするが、首領が軽く手を掲げて制止する。

「テイルブルーよ、お前にはわからぬであろう」

　首領は、エンジェルギルディと同じという烙らく印いんを押されながらも、涼しい顔で笑みを浮かべていた。

「余がアルティメギルという組織を作って幾いく星せい霜そう……この世界ほど、ツインテールの戦士を愛し信奉した世界はなかった。その育ちに育った愛が今、儚はかなく消え去ろうとしている──それはまさに、星がその一生を終える瞬間を見るかのような感動だ」

　天高く大おお仰ぎょうに手を衝つき出した首領は、空を握り締める。全てを手に入れたことを誇示するように。

「これで余はお前を手に入れたぞ、テイルレッド」

俺が、テイルレッドが世界に芽吹かせた愛を、全て消し去る。

世界のツインテールそのものを、ゼロにする。

それがアルティメギル首領の辿たどり着いた、侵略という名の答え……。

「お待ちなさい！」

歯は噛がみするブルーの隣に立つホワイトが、続けて首領に食い下がる。

「ツインテールの戦士に不信感を持っても、一度育った属性力エレメーラは消えない！　あなたの部下のティラノギルディが、ドヤ顔でそう言っていました！　みんな今は少し戸惑っているだけです、世界からツインテール属性は失われません!!」

トゥアールはティラノギルディに、属性力エレメーラの真実を語られたと言っていた。

一度人々の心に育った属性力エレメーラは、仮にその何か好きなものを毛嫌いするようになったとしても完全に消滅することはない。

それは、トゥアールの復ふく讐しゆう心そのものを揺るがせる重大な秘密だった。

末端の兵士は知らない事実のようだったが、アルティメギル首領ともあろうものが知らないはずはない。

「無論、属性力エレメーラは消えはなしない。この戦いの後、悠ゆう々ゆうとそれを回収させてもらう」

ハデスギルディは紳士然とした口調で、ホワイトの抗弁に淡々と返答する。

「首領様が仰おつしやっているのは、もっとシンプルなことだ。属性力エレメーラは消えなくても、人々はツインテールを憎む。ツインテールに絶望する。テイルレッドの正体を知ったことによってね」

そう、話は単純なことなんだ。

　すでに〝資源〟として人間の身体からだに生成された属性力エレメーラは消えなくても……人々が持っているツインテールへの愛、少しずつ芽吹いていた愛、これから育っていくであろう愛……その全てが消え去る。

　爆弾の落ちた荒れ地に、二度と花が芽吹くことがないように。

　この世界では、もう二度と、ツインテールへの愛が生まれることはない。

　消える。

　世界から、ツインテールの愛が消える。

　何とかしないと。こんなの、あんまりだ。

　今まで俺たちがやってきたことは……全て、無駄になってしまう。

　俺が正体を知られた──たったそれだけのせいで、俺以外のみんなの頑張りさえもが水泡に帰してしまう。

　どうする。考えろ観み束つか総そう二じ。どうやってこの局面を覆くつがえす。

　どうする一度隠れる再変身する撤退して回復するツインテールトゥアールに発明品で誤ご魔ま化かしてもらうツインテールイースナの着替え能力を使ってもらうツインテールツインテールちゃんと考えテール……ツインテール……ツインテール、ツインテール

「あ、ああ、あ……」

　駄目だ、考えが……混乱して、頭がぐちゃぐちゃになって、何も考えられない……!!

　感じるんだ。みんなの視線を。俺に向けられた目を。

　奇異の視線ならいい。笑われてもいい、変な奴やつだと思われてもいい。

　それは、テイルレッドが愛めでられている時でも同じだったのだから。

　けれど……「俺たちが好きなツインテールは、こんな嘘うそつきに広められたものだったのか」って失望されるのだけは……耐えられない!!

　そうだ、俺は嘘つきだ……ずっとわかってたことじゃないか……!!

「立つのじゃ！　総そう二じ!!」

　ブラックが俺の肩を摑つかみ、立ち上がるよう促うながす。

「とにかく今は、首領を倒すことじゃ！　テイルレッドの正体など、後からどうとでも誤ご魔ま化かせる！　わらわたちがそうしてやる!!」

　ブラックは厳しく俺を睨にらみ付けて叱しつ咤たする。

「……そ、そうです！　すべては怪人たちの仕し業わざ、男に見えたのは幻覚能力によるものだったとか何とか、いくらでもやりようはあります……だから!!」

　ホワイトは俺を安心させようとしてか、即座に具体策を出してまで励ましてくる。

　彼女たちの言うとおり、まだ誤魔化し通せる可能性はある。それより首領を倒さなければ、この世界が滅ぼされてしまうんだ。

　落ち着け……息を整えて、早く再変身するんだ。今は、戦うことだけを考えなきゃ駄目だ!!

　俺はブラックとホワイトに頷うなずきを返すと、よろめきながら立ち上がり、右腕を構えた。

「レッドちゃんって……本当は、ツインテールじゃなかったのか……」

　誰だれかの言葉が、耳元で囁ささやかれたかのように深く、大きく響いた。

　それは俺の視界を白く染め上げる。身体からだも、血も、自分の全ての色が消えていく感覚に襲おそわれながら──俺は、震ふるえる声で叫んだ。

「……テイルオン!!」

　ホワイトは安心したように俺から視線を切る。直後、もう一度確かめるように振り返る。

　そして、変わらず男の姿のままの俺を見て、何かを悟ったようにはっとする。

「変身、できない……」

　俺は、震える右手を他人事のように見つめながら呟つぶやいた。

　長い間、一心同体だったテイルブレスが、自分の身体の延長のように感じない。

　そこでさらに、急速に身体の力が抜けていく。膝ひざから崩れ落ち、地面に両手をつく。

「……そんな……！」

　イエローが悲痛な面おも持もちで俺を見つめる。

　どうしてだ。同じ変身できなかった時でも、ティラノギルディとの戦いでは自分のツインテール属性を奪われたという理由があった。

　今は違う。ただ変身を解除させられただけで、依然として俺の中に力は残っているのに。

「…………存外脆もろかったな。この苦境に立たされた時、貴様がどう逆襲してくるか、それも楽しみにしていたのだが……」

　首領は少しつまらなげにそう吐はき捨てると、俺を見み据すえた。

　茶番はやめろと。自分でも理由はわかっているだろう、と、その冷めた目が語っている。

　まさか……慧え理り那なが何度か、テイルイエローに変身できなくなってしまった時と同じに。

　俺の、心が──

「心が折れたか、観み束つか総そう二じよ」

◇

　首領のその言葉が、とどめだった。認めたくない事実を、いやが応おうにも認めさせられた。

　奮ふるい立たせようとしても、心が凍えていくのがわかる。

　──俺は、ツインテールじゃない。

「俺は、嘘うそつきだ……世界中のみんなに、嘘をついていた……」

　地面にへたり込んだまま、立ち上がることができなかった。

　まるで神経が断たれてしまったかのように、両脚に全く力が入らない。

「フッ……」

　首領は玉ぎよく座ざに座り直し、妖よう艶えんに脚を組む。

　そうか、俺は見せ物か。お前にとって……俺の絶望は、最高のエンターテイメントだとでもいうのか。

「顔……！　少しでも隠さなきゃ……!!」

　そう言いながら素早く俺をかばい前に出るブルー。続いてイエローが、ブラックとメガ・ネが、アナザーブルーとホワイトが、俺を取り囲むようにしてそばに立った。

　周囲の視線から、俺を護まもるように。

「あんたたち、なんで……何でそんな目で見るのよ！　レッドが、今までどれだけ苦しい思いをしながら、この世界を守ってきたと思ってんの!?」

　ブルーが批ひ難なんの言葉を放っても、周囲の人たちは反応できずに黙り込むままだった。

　彼らは悪くない。

　むしろ、のべつ幕なし罵ば声せいを浴びせてこないだけ、まだ気遣われているのではないかと感じるほどだ。

　右に、左に、後ろにも……牽けん制せいするように周りに睨にらみを利かせるブルー。

　最後に、満足げにこちらを眺めている首領を歯は噛がみしながら睥へい睨げいする。

「何よこの陰気くさい雰囲気……あたしの報道よりひどい！　指差して笑われるなら、まだ笑い話で済むけど……こんな、こんなの……!!」

　ブルーは世間に怪物扱いされていたが、最近イメージが改善してきたのとは関係なく、最初から強さに対する敬意のようなものはずっと払われていた。

　何な故ぜなら、彼女は嘘うそをついていないからだ。

嘘――それは、信頼を破壊する最大のファクター。

俺を見ている人たちのこの視線は、俺への、テイルレッドへの失望が顕あらわれたものなんだ。

「……ああ、そう……！　だったら……だったらっ!!」

右手首のテイルブレスを摑つかむブルー。

ぎゅっと目を閉じ、何かを覚悟するように震ふるえて。

「……ブルー……？」

俺は一瞬困惑し、そしてすぐにブルーが何をしようとしているのかに気づき、叫んだ。

「よせ――――――――っ!!」

伸ばした俺の手が届くこともなく、目の前でブルーが光に包まれていく。

そして、青い光が弾はじけた時。

そこには装そう甲こうに身を包んだ戦士ではなく、普通の女の子が立っていた。

「っ…………。な、なんてことを……」

いたたまれなくなり、俺は肩を震わせて項うな垂だれた。

「テイルブルーはあたしよ！　こいつの幼馴染おさななじみで！　同じ高校に通ってる女子高生……それが、世界中で恐れられてきた怪物の正体!!」

俺を指し示した手の平を、愛あい香かは胸に添えて自分をアピールする。

「テイルブルー……」

「普通の女の子だ……」

ざわめき出す周囲。

「……津つ辺べさん……!?」

「テイルブルーが、同じ学校の生徒……」

当然、一番身近にいた陽よう月げつ学園の生徒たちの驚きは、輪をかけて大きいものだった。

目論もくろ見み通り奇異の視線を分散させたのだろうが……俺は、俺は愛香にはこんなことになってほしくなかったのに！

「クッ……ハハハ……」

堪こらえきれないように笑い声を上げる首領。そばに控えていたポセイドンギルディが、愛あい香かのことを憐あわれむような目で見る。

「あーあ、やっちった……そりゃちょっと考え足りねえんじゃねーの」

「あんたに言われる筋合いはないっ！　あたしは真剣よ!!」

ポセイドンギルディに言い返しながらも、愛香はなお周りの人たちへと訴え続ける。

「みんな、テイルブルーが怖かったんでしょ!?　悪魔だとか怪物だとか思ってたんでしょ!?　それに比べれば、テイルレッドの正体が男だったぐらい、何でもないじゃない!!」

愛香が期待するような反応は、決して返ってこない。

今は……ただの戦いじゃない。世界が総攻撃を受けている真っ最中なんだ。

このとんでもない数のエレメリアンを目まの当たりにして、楽観的になっている人なんていない。自分たちの住んでいる場所が滅ぼされるかどうかの瀬戸際だ。

そんな時に何よりも信じていたものに裏切られたのだから、人々の失望は大きくて当然なんだ……。

みるみる気勢を削そがれていく愛香を見かね、イエローが進み出る。

「観み東つか君と津つ辺べさんだけに、つらい役目を背負わせはしませんわっ!!」

　抱き締めるように胸に添えた手の、テイルブレスを握り締めながら。

　まさか君まで……駄目だ、慧え理り那な!!

　イエローは僅わずかな逡しゅん巡じゅんのあと、えいっと気合いを入れて変身解除してしまった。

「……わたくしはこの学校の生徒会長、神しん堂どう慧理那です!!」

　そうして光の中から現れたのは、テイルイエローの背丈とは似ても似つかない、子供のように小さな女の子だ。

「テイルレッドに比べて、イエローは未熟な戦士……何より、行動を皆さんによく思われていなかったのも知っています！　だから、責めるならばわたくしを責めてください!!」

　慧理那は全校集会でスピーチをしている時のような凜り々りしい声で、周りへと訴える。

「会長っ!?」

「神堂さんが、テイルイエローだったなんて……」

　当然、陽よう月げつ学園の生徒たちが真っ先に反応するが、

「背が全然違う……やっぱり、ツインテイルズは元の人とは全く違う姿に変われるんだ……」

　とある大人が、諦あきらめるようにしてそう呟つぶやいた。

　それを聞き、慧理那ははっと気がついてしまった。

「っ……！　ち、違います！　テイルレッドは違うのです!!」

　ブルーと違い変身して容姿が激変するイエローは、図らずもツインテイルズが変身によって見た目が全く変わるものになることを自分の手で証明してしまった。

　自分の行動を悔いる慧理那だが……俺なんかのために、心を痛めることはないんだ。

　そんな親友の姿を見て、いてもたってもいられなくなったのだろう。

「――ええい、ついでじゃ！　わらわの正体も見せてくれる!!」

　とうとう、ブラックまでもが覚悟を決めてしまった。

　メガ・ネが、そばでいたたまれなさそうに俯うつむいている。

　やめるんだイースナ。アイドル活動が……できなくなる……!!

　俺の無力な制止など届くはずもなく。ブラックは神眼鏡ゴツドめがねのブリッジを指で押し上げた。

「っ……じゃ、じゃーん……。テイルブラックの正体はー、世界一のアイドル、善いい沙すな闇あん子こちゃんでした～……」

　変身解除して現れたのは、善沙闇子。仕事中にそのまま変身して駆けつけたので、彼女の象徴ともいえる黒いアイドル服を着ている。

　イースナは強がっているのか、足が震ふるえていた。

　彼女は正体の知名度が、俺たちとは違いすぎる。

　激しいざわめきが、周囲に巻き起こった。

「闇子ちゃん……!?　テイルブラックが、闇子ちゃん!?」

「あの、いつもマッチョを出して笑ってる変な人が……」

　その声を聞いて、悲しそうに唇くちびるを噛かむイースナ。

　テイルブラックは雰囲気がストーカーじみているのもあるが、幻術で筋肉マッチョを召喚して戦う戦法を世間にことさら怖がられており、そのイメージが定着してしまっている。

　そんなテイルブラックの正体が、世界一有名なアイドルの善沙闇子だった。衝撃も大きいだろう。

　心細そうに肩を震わせていたイースナだったが、すぐに笑顔になり、俺を励ましてきた。

「総そう二じ、わらわがアイドル活動を続けていられるのは、お前のおかげじゃ。お前に助けられたから、わらわは今でも歌を世界に届けていられる！　お前を見限るような世界でアイドルを続けるつもりなどないぞ!!」

　仲間みんなが、俺を励ましてくれる。

　けれどその優しさは、折れた俺の心をさらに砕いていくように感じられた。

　俺が正体を隠し通せなかったせいで、俺だけではない、仲間たちまでもが世間から白はく眼がん視しされてしまう。

「もう、みんな馬ば鹿かですね……勝手に早まったことを……！　正体を晒さらさない方が、この先の総二様の生活を私たちで守ることができたのに!!」

　トゥアールはそう言いながらも、仲間たちの決断を讃たたえるように穏やかに微ほほ笑えんでいた。

「お嬢様……この尊みことがお護まもりします……!!」

　ホワイトとアナザーブルーも揃そろって変身を解除し、トゥアールと桜さくら川がわ先生の姿に戻ってしまった。

　しかし、周りからの反応がほとんどない。同じ学校の生徒が「あ、トゥアールさんだ」「桜さくら川がわ先生だ」とぼそりと口にしたぐらいだ。

「えっ……そもそも誰だれ？　みたいなリアクション……」

「うむ、私のもそんな感じだ……。私たち二人は、変身した姿をほとんど世間に認知されてなかったからな……」

　こんな時でも、トゥアールと桜川先生は肩を落としていた。

　変身制限回数のあるホワイトは、そもそも一般人の前で戦ったことがほぼない。

　アナザーブルーはちょくちょく姿を見せているとはいえ、それでも世界的に知られるまでには至っていない。

　しかしだからこそ、これからなんの色眼鏡めがねもなく英雄として讃たたえられるはずだったんだ。

「さあ、これでツインテイルズ全員の正体を晒さらしてやったわ！　レッド一人の正体なんて、どうでもよくなったでしょ!?」

　握った拳こぶしを空に薙なぎながら、吠ほえ立つ愛あい香か。

　空のスクリーンを見上げたのは、世界に向けての言葉だからだろう。

「さも、自分たちの意志で変身を解除していったように振る舞っているが……すでに限界なのは承知しているよ」

「は……!?　ど、どういう意味よ!?」

　愛香に向かって、ハデスギルディが柔らかに声をかける。

「君たちにはもう、変身を維持する心の強さはない。彼に呼応して、君たちも心が折れてしまったのを……私たちははっきりと感じ取っているのだ」

「っ……!!」

　悔くやしげな表情でハデスギルディを睨にらみ付ける愛香。

　……つまり……愛香たちももう、俺と同じく再変身できないっていうのか……？

　俺が、みんなの心をも折ってしまったっていうのか!?

「えー、つまんないの。せっかく最後の戦いを楽しみにやって来たのに、ツインテイルズがガン首揃そろえて戦闘放棄～？　その上、みんなで慰なぐさめ合いなんてさ～……もう、興きよう醒ざめだよー」

　アポロギルディは、ことさらに煽あおるような口調で言ってくる。

だが、その言葉に俺たちの誰一人として反応しないのを見るや、ふん、と鼻を鳴らした。

もうどれだけ蔑さげすまれても、食ってかかっていけるだけの気力が残っている者は誰もいない。

「もはや貴様たちなど、余が手を下すまでもない。どこぞの一兵卒の手でツインテール属性を奪われ、灰色の世界で生涯を終えるがよい」

完全に俺たちへの興味を失った首領は、部下のエレメリアンたちに指示を下した。

おそらく普段なら全く苦戦しないであろう、威圧感のない普通のエレメリアン。それが、属性力エレメーラ奪取のリングを手にしている。

「そのリングは、名を宇宙の紐ストリングセオリアと呼ぶ。お前たちの属性力エレメーラ、宇宙の輪りん廻ねに還かえすがよい」

首領が呼ぶところの宇宙の紐ストリングセオリアとやらをそれぞれ手にした、六体のエレメリアンが俺たちへと歩み寄ってきた。

「……何が輪廻よ……あんたらのご飯にするだけのくせに、大おお袈げ裟さな……」

そう悔くやしげに言い捨てる愛あい香かの前にも、エレメリアンが近寄っていく。

六体……俺と愛香、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、桜さくら川がわ先生の分か。

以前イースナが、メガ・ネに属性力エレメーラ奪取のリングは効果がなかったと言っていたから、彼女を除いた六人全員。わざわざ、人数分の処刑人を用意したってわけだ。

これで、俺たちは終わりか。

戦って負けるのではなく、自分から戦いを放棄して終わる。

俺たちのツインテールが、こんな形で最後を迎えるなんて──

「……残念だ。正体を知らぬままなら、お前は私たちの憧あこがれの女神でいられた──」

　俺の前に立ったエレメリアンが、まず最初にリングを振りかぶった。

　その自分勝手な言い分は……しかし、今、世界中の人たちが思っていることなのだろう。

　ずっと世界を騙だまして戦い続けることが、どだい無理だったんだ。

　もう、疲れた。俺は静かに目を閉じ、最後の瞬間を受け容いれようとした。

　瞬間。鮮烈なツインテールの気配が、俺のこめかみに稲妻のように奔はしる。

　馬ば鹿かな。心折れた今の俺が、ツインテールの気配を感じるなんて──

「ツインテールビ────────────────────ムッ!!」

　そんな戸惑いを追い抜いて空の彼方かなたから飛来した桃色の光線が、エレメリアンを直撃。

「ぬおわあああああああああ!?」

　手にしたリングごと、エレメリアンは爆散してしまった。

　光線はそのまま横に振られ、他のリングを構えているエレメリアンも次々と捉えていく。

　愛香たちの前にいたエレメリアンまで、あっという間に倒されてしまった。

「……この、声は……!!」

　懐なつかしい声に、色を失い始めていた俺の視界にほんの少しの光彩が戻る。

　虹にじの星を散らし、光の雫しずくを振りまき、桃色の光に包まれながら。

　一人の少女が、俺やや愛香たちの前に華麗に着地した。

「魔法少女、ロロリー参上っ‼」

　アイドルのように三本指を眼前にかざし、決めポーズを取ったツインテールの女の子は──

「────ロロリー……‼」

　俺たちが異世界で初めて出で逢あった、ツインテイルズ以外のツインテールの戦士の名を、俺は熱に浮かされたように呆ぼう然ぜんと口にしていた。

　異世界の姉妹姫・ロエルとリルナが合体して誕生する、ツインテール魔法少女の名を。

「大丈夫？　お兄ちゃんっ！　なんか、とんでもない時に来ちゃったみたい……‼」

　地面に崩れ落ちたままの俺を案じ、ロロリーが駆け寄ってくる。

「なるほど……貴様らも一応、伏ふく兵へいは備えていたというわけか」

　ゼウスギルディが感心したように呟つぶやいた。とんでもない、一番驚いているのは俺たちだ。

「わあ、僕好みの幼女が来た……！　何だい、ツインテイルズの切り札かな⁉」

　アポロギルディが、ギラついた目でロロリーを注視する。

「何か来て早々、エレメリアンがいやらしい目で見てくる⁉」

　自身の身体からだを掻かき抱いだくようにして後あと退ずさるロロリー。

「おー、ちっこいけどけっこー可か愛わいいじゃん？　俺様のハーレムに加えてあげてもいいかな」

「殺すぞポセイドンギルディ」

　ロロリーをにやけ顔で眺めていたポセイドンギルディを、アポロギルディが豹ひよう変へんしたような冷たい声で脅す。

「怖こっえぇよ何そのドスの効いた声!?」

　慧え理り那なは、目を丸くしてロロリーに尋ねる。

「ロロリーさん、どうしてここに!?」

「へへー。ロロリーだって、何もしてなかったわけじゃないんだよ。お兄ちゃんには、夢通信でちょくちょく報告してたけど……」

　ロロリーは自慢げに胸を張った。

「自分の力だけで、異世界に行けるようになる特訓をしてたんだー！　ロエルたちの得意な夢通信を発展させて、意識だけじゃなくて身体も一緒に世界を越えるの!!」

　俺に夢通信で進しん捗ちよく報告をしていた『特訓』っていうのは、単身での異世界移動のことだったのか。いつの間にかロエルとリルナが、そんなすごいことができるようになっていたなんて。

「最近、夢通信でお兄ちゃんと全然繋つながらなくなったから。この能力の報告も兼ねて、えーい行っちゃえ！　って思ったんだ～。そしたら、世界中がエレメリアンで埋まってたの……」

　ロエルたちは、旅行感覚で俺たちの世界に遊びに来てくれた。

　そこがまさか今まさに、彼女たちの世界が貴の三葉ノー・ブル・クラブの総攻撃を受けた時を上回る大規模軍を擁した決戦の真っ只ただ中なかだとは、思いもしなかっただろう。

「……簡単に言ってはいるが、自力での異世界移動は相当に高レベルな能力だよ。君たち、アルティメギルの情報では全くノーマーク

だったが……なかなかやるようだね」

　ハデスギルディが、興味深げにロロリーを眺めている。

「おのれ可か愛わいらしいやつ！　まずはお前のツインテールからもらい受ける!!」

　エレメリアンたちが、続々とロロリーにかかっていく。

　俺たちのツインテール属性を奪えという、首領直じき々じきの命令を邪魔した相手だ。ロロリーが狙ねらい撃ちにされてしまう！

「やーだよっ！　ロロリーのツインテールは、もうお兄ちゃんのものなんだもーんっ!!」

　ロロリーはエレメリアンたち目掛け、先端がツインテールの形をした魔法のスティックを突き出した。

　スティックのツインテール……ではなく、ロロリー自身の桃色のツインテールが光り輝く。

「ツインテールウィップッ!!」

　ツインテールは彼女たちの小さな身体からだの五倍とも十倍とも、あるいは地の最果てまでも届くと錯さつ覚かくするほどに伸び、意思を持ったようにしなってエレメリアンたちに向かってゆく。

「ぐわあああああああああああステッキで攻撃するのではないのかあああああああああ!!」

　突き出したステッキに注意を払っていたエレメリアンたちは、突然伸びてきた本物のツインテールに対処できず、続々と被弾。そこかしこで、爆華を咲かせていった。

　ロロリーは強くなっている……前に俺たちが会った時より、確実に……。

「これでロロリーもツインテイルズだよ！　〝テイルピンク〟って名乗っていいよねっ!!」

　やめてくれ……そんな、抱き締めたくなるぐらい嬉うれしいこと

を言わないでくれ……！

　全てが終わってしまった今、君の笑顔は残酷すぎる……!!

　玉ぎよく座ざに座ったままロロリーの奮戦を見守っていた首領は、ひどく楽しげに笑った。

「よい、余が認めよう、テイルピンクよ。その名を冠した以上、お前もこれより先はこの大戦力による攻撃の対象となるが――覚悟はよいな」

　首領が手を挙げると、背後から次々とエレメリアンたちが進行してきた。

「わっ、さっきよりずっと多い……！　……よ、よーし、がんばるぞ～!!」

　その大軍勢を前に、ロロリーが自分を奮ふるい立たせるように拳こぶしをきゅっと握る。

「無茶だ、ロロリー！」

　俺が制止しても、ツインテールの魔法少女は足を止めない。

　彼女たちは、一般兵相手に対等以上に戦えるぐらい成長した。それは十分すごいことだけど……この大軍と、何より首領と終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちでは、相手が悪すぎる。

「お兄ちゃんから夢の中でずっと聞いてた今までのお話しの方が、全然無茶だったよ！」

　伸ばしたツインテールを振るいながら、ロロリーが言い返してくる。

　俺は夢通信で、絵本を読んで聞かせるように、ロエルとリルナに自分の世界での戦いを語ってきた。その戦いの集大成、よりによってもっとも過酷な地獄の只ただ中なか。

　語ってきた絵本の物語の中に、ロロリーたちは飛び込んできてしまった―。

「っ……テイルオン……！」

　ロロリーを援護しようとしてか、咄とつ嗟さに愛あい香かが変身しようとするが、ブレスが反応しない。

「……あたしも、変身できない……ほんとに……」

　続けて、慧え理り那な、イースナ、桜さくら川がわ先生も同じように変身を試していくが、やはり同じくブレスや神眼鏡ゴツドめがねが反応せずに困惑していた。

　トゥアールは……無念そうにブレスを見つめている。彼女は元々、あと一度しか変身できないかもしれないと言っていたのだ……。

「変身できないだけではありません、身体からだが思うように動きませんわ……これは一体……」

　変身を試した慧理那たちも俺と同じように、貧血を起こしたように崩れ落ちていく。おそらく、急速に力が弱まってしまった反動が身体に起こっているのだろう。

　イースナの神眼鏡ゴツドめがねの停止を受けてか、メガ・ネまでもが休止状態スリープモードに強制移行してしまった。

　ハデスギルディの言うとおり、俺たちは心の輝きを失ってしまった。

　煌きらめきを振りまきながら戦うロロリーと比べて、何と対照的なことか。

「ねえっ、周りで見ているみんなっ！　応援が足りないよっ！」

　ロロリーは自分たちの世界で、アイドルのように振る舞っていた。彼女はその時と同じように、俺の世界の一般人たちに語りかける。

「あなたたちのヒーローのテイルレッドが今、ピンチなんだよ！　どうして声を届けてあげないのっ⁉」

　彼女が望むような反応は、彼女が自分の世界で受けていたような声援は……今、この戦場では返ってこない。

「ツインテールトルネ――――――――――――ドッ‼」

　ロロリーのツインテールから生み出された竜巻に呑のみ込まれ、数体のエレメリアンが一気に爆散する。

「はぁ、はぁ……」

　そしてその爆発の後ろから、弾丸が装そう塡てんされるような無機質さでエレメリアンが出現。

　ロロリーは、息を荒らげながら乾いた笑いを浮かべた。

　エレメリアンたちは手の平から一斉に光線を放ち、ロロリーに命中させる。

「わぁ───っ!!」

「ロロリ──────────ッ!!」

　俺の叫びに、愛香やトゥアールたちも続けて呼びかける。

　木の葉のように力無く舞い上がったロロリーの小さな身体は、痛々しく地面に投げ出された。そして桃色の光に包まれると……ロエルとリルナ、二人の姉妹姫の姿に戻ってしまった。

「いたた……」

「うう……」

　ロエルとリルナが、苦く悶もんの声を上げる。

　左右それぞれサイドポニーの結び位置が逆なだけな、瓜うり二ふたつの愛らしい双子姉妹。

　この娘たちは、お姫様なんだ。本当はこうして綺き麗れいなドレスをまとって、平和な日々を過ごすはずなのに……!!

「フッ……どうも計測がうまくいかないと思ったが、なるほど合体戦士だったとは。黒いリボンの娘は……お姉さんかな？　そちらの変態値は五万二〇〇〇。白いリボンの方、おそらく妹さんだろうね……その子の変態値は、八万九〇〇〇。どちらも、伸びしろのあるいい変態だ」

「いいじゃんいいじゃん、幼女が二倍ですごくお得だ！　なるほど

妹ちゃんの方がやや変態なんだね!!」

「な、何言ってるんだこいつら……!?　ボクは変態じゃないぞっ!!」

　穏やかに話しかけてくる死神の風ふう貌ぼうのエレメリアンと、ギラついた目で自分を見てくる小さなエレメリアンを前にビクッとしつつも、リルナは懸命に言い返す。

「謙けん遜そんしなくていいよ、リルナちゃんはむっつりさんだから……。ロエルもえっちなこととか考えるけど、リルナちゃんには全然敵かなわないし……」

　痛むのか、肩を押さえながら、ロエルが妹を賞賛する。

　ハデスギルディがいくら彼女たちを評価しようと、それでエレメリアンたちがひるむわけではない。

　むしろ力尽きたのを好機とみて、さっきまで以上の数がロエルとリルナに近づいていく。

「ッ……ロエル、リルナ……！　駄目だ、逃げろっ!!」

　リルナは逃げるどころか俺を守るように立ち上がり、エレメリアンたちに相対した。

「逃げろって……もう来ちゃったんだからさ……！　今のこの世界のどこに、安全な場所があるっていうのさ……!!」

「自分たちの世界に帰るんだ……！　俺はもう……君たちを守れない……!!」

「だったら、今度はロエルたちがお兄ちゃんを守る番でしょ！　お兄ちゃんが回復するまでぐらいなら、頑張れるよ!!」

　回復なんて、できない。俺たちは、戦いのダメージが大きくて変身できないんじゃない。

　もう、心が折れてしまったんだ……。

　リルナは、未いまだ戸惑った目でこちらを見ている周囲の人たちに視線を送ると、

「ボクたちの世界の人たちはさ、ロロリーがピンチになったら、いつだって応援してくれたよ……キミたちはどうして、今まで世界を守ってくれた総そう二じを応援してあげないんだ!!」

　訴えかけるように叫んだ。

「それは、テイルレッドが男だったからよ。人間たちの羨せん望ぼうを欺あざむき、裏切った……かける言葉などあるはずがない」

　ゼウスギルディが当然だとばかりに言い捨てるが、小さな姉妹は一歩も退かない。

「裏切りって何！　ヒーローって、いちいち自分のことぜーんぶ自己紹介してから、世界を守らなくちゃ駄目なの!?」

「テイルレッドが男か女か、そんなことが何だっていうのさ……！　大事なのは、テイルレッドが……総そう二じが今までずっと、みんなのために戦ってくれたってことじゃないのか!!」

「お兄ちゃんはね！　みんなに褒ほめられたくて戦ってた、目立ちたがり屋さんのロエルとは違うんだもん！　本当のヒーローだもん!!」

　ロエルとリルナは、懸命に訴えかけていく。

「…………」

　その勢いに、少し感心したように頷うなずくゼウスギルディ。

　しかし……彼女の言葉に耳を傾けながらも、周りの人たちの困惑は、変わらない。

「そうさ……何の関係もないボクたちの世界を、総二は命懸けで守ってくれたんだっ!!」

　ついに、目め許もとに涙まで湛たたえながら、リルナは声を震ふるわせる。

「もうこの世界を捨てて、ボクたちの世界に来なよ！　キミは……ボクと姉様のお婿むこさんだろ!!」

　宣言するように叫び、俺の方に振り返るリルナ。ロエルも続いて

振り返り、

「なんて、誘ってみちゃっても……どうせお兄ちゃんは……」

「……キミは……この世界を守っちゃうんだろ？」

　二人で、気丈に微ほほ笑えんだ。

　その気迫に一瞬躊躇ためらうように足を止めていたエレメリアンたちだったが、再び歩を進め、姉妹の前にやって来た。

「……見事な幼女たちだ。その凄すさまじくプリティな奮戦……我われら、しかと見届けた！」

　そのうちの一体がさらに近寄り、姉妹を賞賛する。特に体格の大きなエレメリアンだったこともあり、影が姉妹の身体からだを覆おおい包む。

　姉妹は震える手を取り合い、エレメリアンを見上げた。

「ロエル！　リルナーッ!!」

　俺は思わず立ち上がろうとしたが、足が自分のものではないようにピクリとも動かず、無様に倒れ込んだ。

「ボクと姉様が信じたのは、テイルレッドじゃない！　総二、お前だ!!」

「だからロエルたちは……！　最後までここを動かないんだからっ!!」

　姉妹は繋つないだ手と反対の腕を広げ、俺や愛あい香かたちを守るようにエレメリアンの前に立ちはだかる。

　その小さな身体に、属性力エレメーラを簒さん奪だつする魔のリングが振り下ろされる。

　もう、奇跡は起こらない──。

「───よく言ったぜ、ポニーテールのお姫さん。あとは、俺様に任せな!!」

　リルナの目め許もとに浮かんでいた珠たまが弾はじけ、熱波が駆ける。

　エレメリアンが手にしていたリングは、砕かれるどころかバターも同然に溶解した。

　視界を覆おおい尽くすような巨大な火炎が渦うず巻き、空と地を駆け巡る。

　過あやまたずにエレメリアンだけを直撃し、炎上させていくその炎も……やはり、既視感を伴うものだった。

　何より今しがた聞こえた――快こころよいまでに不敵な声も。

「「「ぬぐわあああああああああああああああ!!」」」

　周りにいた数百体ものエレメリアンが、為なす術すべも無く爆散していく。

　無傷のまま立っているのは、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーと首領だけだった。

　炎の向こうに、シルエットが浮かぶ。

　鳳ほう凰おうの尾のように揺らめくポニーテールが、大胆不敵に歩みを進める。

　やがて近づいたシルエットが炎を肩で破るのを見て、俺は思わず目を見開いた。

　陽よう月げつ学園高等部の女子制服を身にまとった、ポニーテールの少女。

　結いわ翼ばね唯ゆ乃のが、俺たちの前に颯さつ爽そうと現れたのだ。

「……ゆ、の……生きてたのか……」

「おいおい総そう二じ、勝手に殺してくれんなよ！　俺様、死んだなんて言った覚えはねえぜ？　そう勘違いして、吹ふい聴ちようし

てるやつはいたかもしれねえがな!!」

　確かに……唯乃が死んだというのは、エンジェルギルディが勝手に言っていただけだ。

　俺たちは、唯乃が生きているって信じていたはずなのに。いざ目の前に現れると、戸惑いの方が大きくなってしまう。

「ゆのゆの……あれ、ゆのゆのじゃない!?」

　陽月学園の生徒たちが唯乃に気づき、ざわめき始める。

　体験編入で一躍校内の有名人になった女の子が……自分たちと同じ制服を着た女の子が、大剣一本引っさげて戦場に現れたのだ。

「おうっ！　ゆのゆのだぜーっ!!」

　唯乃は周りで見守る生徒たちにサービスのように手を振り返すと、前を向いて目つきを豹ひよう変へんさせた。

「おおらあああああああああああああああ!!」

　手にしたフェニックスラッシューターを銃型に変形させると、空へと向けて連射。

　一発一発が必殺技級の破壊力を持つ火炎弾がエレメリアンたちに向かって飛んでいき、そのことごとくを爆発させていった。

「……不死鳥……！　何な故ぜ、貴様が──」

　首領が、幾いく許ばくかの動揺を言葉ににじませる。

　唯ゆ乃のは不敵な笑みを浮かべ、再び剣状態に変形させたフェニックスラッシューターの切っ先を、首領へと突きつける。

「俺様のポニーテールは……不滅だ!!」

　たなびくポニーテールとともに放たれた言葉に、首領は驚嘆を喜色に変えていく。

「てめえが驚くところなんざ初めて見たぜ、首領さんよぉ。案外、俺様が生きてて嬉うれしいんじゃねえのか？」

「フッ……確かに」

　首領は玉ぎよく座ざの上で脚を組み替え、余裕を見せるように肘ひじ掛けに置いた腕に頭を預けた。

「だが何な故ぜだ。貴様には死ではない、完全な無を与えた……。いかな不滅でも、無よりの再誕は叶かなわぬはず」

「へっ、当ててみなよ。もっとも、おめえさんが正解することは永久にないだろうがな!!」

　唯乃は首領を痛烈に皮肉ると、踵きびすを返してロエルたちへと歩み寄った。

「それに、こんなちびっ子たちが総そう二じに会いたい一心で世界を超えてきたんだぜ。無だか何だか知らねえが、しゃらくせえ超次元の一つや二つ、俺様がブチ破れねえでどうするよ!!」

　頭を撫なでようと伸ばされた唯乃の手を、さっとかわすロエル。

　彼女たちの王家には、初めて髪の毛に触れた異性と結婚するというしきたりがある。初めて触れたのは俺だし、そもそも唯乃は女だ。ロエルが唯乃の手を拒こばんだのは、別の理由だろう。

「あなた……フェニックスギルディなの？　どうしてロエルたちを助けたの？」

　神妙な表情で問いかけるロエル。似ても似つかぬ姿だが、先ほどの唯乃の口上を聞いて、彼女がフェニックスギルディと同一人物だと確信したのだろう。

　ツインテールを悪とし、ポニーテールを広めることで正義を為なせると信じていたフェニックスギルディは、ロエルたちの世界でもその正義を為すべく活動していた。

　その浅からぬ因いん縁ねんが、ロエルたちに唯乃へと警戒心を抱いだかせるのだ。

「ま、警戒されんのも仕方ねえが……あんたたちと同じさ。俺様は、総二のおかげで変わったんでね!!」

　リルナはドレスの埃ほこりを払うと、気丈な目で唯乃を見ながら

言った。

「ふ、ふん……あんなやつら、ボクたちが余裕で倒せたのに……横取りして!!」

「へへっ、そりゃお互い様だ！　手土産みやげの用意でもたもたしてる間に、颯さつ爽そうと駆けつける正義のヒーロー役をお前さんたちに取られちまったぜ!!」

「手土産？」

　ハデスギルディが訝いぶかしむように聞き返し、はっとして何かを探るように上空を見上げる。

「……世界に配置したエレメリアンの数が……減っている……!?」

「てめえらが各地に配置したエレメリアンどもだよ。俺様の率いる大部隊が、そいつらを引き受けてくれてらあ!!」

　自慢げに空を指差す唯ゆ乃の。

　それはつまり、この世界全てを指し示す仕草だった。

「馬ば鹿かな、君は一匹狼おおかみだったはず……部隊を持っているはずがない」

　ハデスギルディが、当然の疑問を投げかける。唯乃は今度はサムズアップで自分を示した。

「ミラージュリヴァイブ……その世界で倒されたエレメリアンの魂たましいの残ざん滓しを炎の戦士に変えて戦わせる、俺様の能力だ。その炎の戦士が、俺様の部隊ってわけさ!!」

　ミラージュリヴァイブ。それはロロリーの世界でこいつが繰り出した、脅きよう威いの能力だ。

　今、世界中で……その魂の炎が戦いを繰り広げているっていうのか!?

「なるほど、確かに君にはそんな力があったね……しかし、解せない。この世界のエレメリアンはそのほとんどが一度、ヴァルキリアギルディが無毛で勇ましき者エインヘリアルとして復活させた。こ

れ以上復活させることはできぬはずだ」

　ハデスギルディの言うとおりだ。フェニックスギルディの能力を取り込み自分の能力と合体させたヴァルキリアギルディの手によって、俺たちがこの世界で倒したエレメリアンは、完全復活した。

　そして……その戦いの果てに、今度こそ完全に消えていった。

　ヴァルキリアギルディは、神の一剣ゴー・デイア・ソードの戦士は復活できないと言っていた。今唯乃が蘇よみがえらせられるのは、俺たちがその大戦の後に戦った一般エレメリアンぐらいしかいないはずだ。

「そもそも俺様だって、ホントはもうこの能力を使うことはねえって思ってたさ。何よりドラグギルディたちも、力の残滓だけとはいえ二度とそんな戦いは望まねえだろう」

　知ち己きの戦士たちに敬意を払うように、天を振り仰ぐ唯乃。

「ここは、数にものを言わせてイキってるてめえらに、ちょいと自爆してもらおうかと思ってね!!」

　そして、してやったりの顔で言い返すと、ハデスギルディへと指を突きつけた。

「俺様が来て早々にブッ倒したやつらをソッコーで蘇らせて、戦ってもらってんだよ!!」

　そういう、ことだったのか……。たった一人で、数万の部隊に比ひ肩けんしようとするなんて。

　俺も、トゥアールたちも、唯乃の桁けた違いなスケールに圧倒される。

「さあ見な、今ここで俺様が倒したやつらもミラージュリヴァイブで炎になって、その辺に配置された奴やつらを止めるために散っていったぜ！　リサイクルってやつだ!!」

　唯乃の言うとおり、この場でロロリーや唯乃、俺たちに倒されたエレメリアンが炎の形を取り、一斉に校庭を飛び出していった。おそらく、街中へと向かったのだろう。

ポセイドンギルディが唯乃を冷やかすようにヒュー、と口笛を鳴らす。

「そんな出で鱈たら目めな戦法を……貴様の力がもつまい」

しかしゼウスギルディは声を苛いら立だたせ、その作戦は長持ちしないであろうと指摘した。

「ああ、実はめっっっっっちゃ疲れてってるぜ。ミラージュリヴァイブはすぐに消えるだろうけどな……まー時間稼ぎくらいにはなんだろ!!」

まったく強がることもなく、素直に認める唯ゆ乃の。

「見事。さすがに余を愉たのしませてくれるな、不死鳥よ。だが、それも無意味なことだ。余はすでに、テイルレッドを、この世界を手にした。全ては遅かったのだ」

玉ぎょく座ざに座る首領は、唯乃を讃たたえつつも……冷ややかに言い放った。

「あ？　手に入れただぁ？」

唯乃は訝いぶかしむと、放心してただ状況を見守っているだけの俺たちを、あらためて目にした。

「ほおう……なるほどね、総そう二じの正体が世界中にバレちまったってわけかい。で、仲間はそれに付き合ったと。熱いねえ」

そして、剣の切っ先を地面に突き立てながら、ニヤリと笑う。

「熱い？　君には見えないのか、彼らが完全に心折れたのが」

ハデスギルディが不満げに指摘するが、

「――――ああ、見えねえぜ。総二のツインテールがちょいと一息ついているのなら、見えてるけどな!!」

唯乃は俺の不ふ甲が斐いなさを咎とがめることもなく、自信たっぷりにそう言い放った。

「総二は口だけじゃねえ、行動で示してきたからな。こいつがいな

けりゃ、とうの昔にこの世界は滅ぼされっちまってんだ」

　安い慰なぐさめでこんなことを言っているのではない、と。唯乃の熱い瞳ひとみが、俺に檄げきを飛ばす。

「それにな、俺様の役目は戦いで総二を助けることだ。総二を起たち上がらせることじゃねえ」

　唯乃はそう言ってギャラリーを一いち瞥べつすると、胸を張って思い切り息を吸い込んだ。

「この世界の端はしから端まで、全ての人間たちだ！　おめーら、耳かっぽじってよく聞きやがれええええええええええええっ!!」

　唯乃は、まるで本気で全世界に届けようと意気込むかのような大声を、空高く響かせた。

「おめーらエレメリアンにビビってんのか……それに周りの目が気になんのか!?　言いたいこと我慢してんだろ！　けどなあ、どうせツインテイルズが負けたらこの世界は終わりだっ！　だったら恥もクソもねえ、最後に言いたいこと言って派手に終わったらどうだい!?」

　唯乃が首領の周囲のエレメリアンたちをまとめて全部片づけたことで、校庭にいるギャラリーたちの姿が今まで以上によく見える。

　しかもまだまだ街から避難してきているようで、数が増えている。

「おっ……やべえな、俺様の炎がだいぶ減ってきてらあ」

　そこで唯乃は不意に、空を見上げた。ミラージュリヴァイブの炎で造られた戦士たちの状況を感知できるのか、焦あせりの色を浮かべている。

「あとはてめえ次第だ、総二！　俺様はちょいっとまた世界一周して、薪まきをくべてくらあ!!」

　唯ゆ乃のは制服の上から炎の翼を背に出現させ、一気に跳躍。

　世界に散らばったエレメリアンたちを撃滅すべく、炎の尾を引いて飛ひ翔しようしていった。

「首領様。フェニックスギルディの生み出した炎は、確かに世界中のエレメリアンたちと相討ちしています。すぐにやつも合流いたしましょう……かなりの数が減らされるかと」

　やはりリアルタイムで進軍した戦士たちの状況を把は握あくできるのか、ハデスギルディが首領にそう報告する。

「不死鳥の面めん目もく躍やく如じよか……よもや不滅をも超越してなお立ちはだかってこようとは。十二分に評価しておったつもりだったが、まさかここまで余を驚かせるとはな」

　首領は唯乃を存分に賞賛し、その反動もあってか、先ほどよりも一層蔑さげすむような目を俺に送ってきた。

「だからこそ、憐あわれよ。奴やつがどれだけ吠ほえ立てようと、もはやテイルレッドのツインテールは二度と輝くことはない。もっとも……見せ物が長引けば長引くほど、余は楽しめるのだがな」

　そのとおりだ……駆けつけてくれたロロリーや唯乃には悪いが……俺はもう、戦えない。

　ツインテールへの愛が失われていくこの世界を、救うことはできない。

「たとえば、こうだ」

　首領は、突然手の平を空に突き出した。

　何をするのかと思えば、手の平から光弾を放ち、俺たちの頭上を飛び越えていった。

　光弾はグラウンドの先、陽よう月げつ学園高等部の校舎に直撃。

　三階の一部が爆発し、どこかの教室がむき出しになった。

　降り注ぐ瓦が礫れきから視線を切り、俺は目の前の首領に向かって叫んだ。

「やめろ、首領──っ!!」

「フッ……観み束つか総そう二じよ、今一度あの者たちを見よ。お前が守ろうとした者たちは、ただ怯おびえるばかり。余へ憎しみを

向ける者はおらぬ」

　周囲の人間たちへゆっくりと視線を移ろわせ、首領は大おお仰ぎょうに鼻を鳴らした。

「こうして自分たちの世界が侵略されても、誰だれも戦う者はいない。都つ合ごうよく戦ってくれる女神を祭り上げておきながら、その女神が堕おちた時、奮ふるい立つことなくただ失意に満ちていく」

　人間を煽あおっているのではない。批ひ難なんしているかのようだった。

　たった一つの学校の、一つの教室への破壊。それは、世界の侵略への縮図。

　俺も愛あい香かも、トゥアールも慧え理り那なも、イースナも、メガ・ネも、桜さくら川がわ先生も……ロエルやリルナまでも、何も言い返せずにいた。

「首領様の仰おつしやるとおり。それは何も今、この世界だけのことではない。全ての世界がそうだ。テイルホワイト、世界をわたる復ふく讐しゆう者を名乗っていた君ならば、よく知っていることだろう」

　ハデスギルディが、首領の言葉を補足するように重ねる。トゥアールは唇くちびるを嚙かみしめる。

「人間がどれだけつまらぬ存在か、余は見続けてきた。ゆえにこの先の結末もわかりきっている。人間は……素晴らしい心の輝きを持ちながら、それを護まもることの貴とうとさを知らぬ。財産、国家、そして自分の生命いのち……。はっきりと目に見えるもの、価値の定まったものしか、人間は護れぬ」

　首領は轟ごう然ぜんと言い放つ。

　それは、失意と呼ぶにはあまりにも強大な意志力で。

　自身の不安、恐怖、絶望……その全てを乗り越え頂いただきに至った、一人の超越者の信念だった。

「ゆえに余は、自身のツインテールをゼロとした。そして、目に見

えぬものでも最強の属性力エレメーラになり得ると、自ら証明した。何人なんぴとも余を、余の侵攻を拒絶する資格はない」

「……違う、お前は間違ってる……!!」

　俺の反論が、虚むなしく響く。

　首領の持論は、詭き弁べんだ。強い力に……自分たち侵略者に力で立ち向かわなければ生きる資格がないなんて、強くなければ愛を持つことを許さないなんて、強者のエゴだ。

　やつは思いどおりにならない俺のツインテールを、力で奪った。

　強いツインテールしか認めないのは、強いツインテールを持つ者の傲ごう慢まんでしかない……！

「そんなのは、愛じゃない……属性こころじゃない……！」

　俺は拳こぶしを握り締め、唇くちびるから血が伝うほど奥歯を噛かみしめる。

『レッドちゃんって……本当は、ツインテールじゃなかったのか……』

　しかし、身体からだ中じゅうの血が全て流れ出ていくかのように、振り絞った力は霧む散さんしていく。

　愛あい香かたちも、自由にならない自分の身体に歯は噛がみしている。

　畜生……どうして俺は、立てないんだ！　変身できないんだ!!

　このまま人間は、首領に屈くつ伏ぷくするしかないのか。全ては終わってしまったのか！

　ロロリーや唯ゆ乃のたちまでもが、この世界を守るために戦ってくれたのに!!

「では、お前たち人間の思う愛は、なんだ。心はなんだ。先ほど不

死鳥が吠ほえておったであろう、怯おびえずに言いたいことを言えと。誰だれでもよい、余に語り聞かせてみせよ!!」

　俺のか細い反論を微み塵じんと砕こうと、首領が喝破する。

　やつは、そんなことができる人間がいないことを、誰よりもよくわかっているはずなのに。

　周囲の人間たちも一様に黙り込み、諦てい観かんに支配されていたその場所に。

「じゃあ……まずはボクが、言いたいことを言うヨ!!」

　その時。一人の人間の声が、響きわたった。

第五章

全ての、ツインテールを愛する人たちへ。

　唯ゆ乃のは、この学校の一帯を取り囲んでいた一般兵を残らず蹴け散らしてくれた。

　おかげで校庭へ避難してきて戦いを見ていた人たちが、一時の安全を得られた。

　その人々の囲いを割って──とんでもない人物が、進み出てきた。

「あれは……！　ハリウッド俳優のデック・ニールソンだ！」

　誰だれかがそう叫んだ。

　デック・ニールソン。ツインテイルズの映画が米国で制作されるというニュースで知った世界的名優と、何の因果か俺はこの日本で出会った。そして、彼の前で戦った。

　注目は受け慣れているであろう、世界的俳優。

　しかしその出で立ちは、まだ世界が知らないものだった。

「どうだい？　映画で使う衣装をそのまま着てきたんだ」

　デック・ニールソンは、映画で使用されたというテイルブルーのスーツをまとい、本物のツインテイルズの前にやって来たのだ。

　ウィッグではなく自分の髪を肩下まで伸ばし、ツインテールに結んで。

　デックさん……なんて、素晴らしいツインテールなんだ。

　そしてそのスーツ姿に、人々は感嘆の溜ため息いきを漏もらす。

「普通にかっこいいじゃない……」

　映画の初報で自分を男性俳優が演じると知った時はひどく怒っていた愛あい香かだったが……実際にその役者本人を目まの当たりにして、その完成度に啞あ然ぜんとしている。

　本家の露出度の高いスーツとは違い、その面影をしっかりと残しつつも、まさにアメコミヒーローのようなメカニカルでマッシブなアレンジをされた、テイルブルーのスーツ。

　それが、デックさんのまとっているスーツだ。

「君がテイルブルーの正体……そうか、あの時のキュートな女の子だったんだネ！」

　人を褒ほめることに照れのないデックさんらしく、愛香にストレートな褒め言葉を贈る。

　愛香はどう反応していいかわからず、少し動揺しているようだった。愛香は知らないが、俺たちは夏コミでデックさんと会っている。愛香にとっても、彼は恩人だ。

　世界で一番最初にテイルブルーを褒めてくれた一般人が、デックさんだったのだから。

「やつは、ツインテイルズか……？」

「ただのコスプレだろー？　属性力エレメーラも普通だし」

　ゼウスギルディ、アポロギルディが、幾いく許ばくかの興味を持ったように口にしていく。

「……しかし、変態値二一〇〇……普通の人間にしては見上げたものだね」

　ハデスギルディに至っては、またぞろ即座に変態値を計測。

　怪人たちに品評されても全く動じることなく、デックさんは愛あい香かへの言葉を続けた。

「僕がどんなに頑張って演技しても、そのキュートさは再現できそうにないね。でも、テイルブルーのかっこよさは、フィルムに込めた。僕の魂たましいを懸けてネ」

「あのニーちゃん……」

　ポセイドンギルディが、ニヤリと口角を上げる。あいつもテイルブルーの見た目だけでなく、生き様も評価しているフシがあったが……同じようにブルーをかっこいいと語る人間に、リスペクトを抱いだいているかのようだった。

「僕は──ソウジに出で逢あって、ソウジに憧あこがれて、この役を

完成させることができた。みんなはこの僕を見て、嫌だと思うかい？」

　デックさんはスーツを、そしてツインテールをよく見えるような立ち姿で、民衆へと振り返った。

「僕は、テイルレッドの正体が男だって知っていた！　テイルレッドの変身を目の前で見た初めての一般人だ！　ソウジがそう教えてくれた……それが、僕の誇りだ!!」

　そして、俺との思い出を語り聞かせる。

「あれ以来、ツインテイルズのニュースを観るのがすごく楽しくなったヨ。つらいことがあっても、苦しくても、テイルレッドの頑張ってる姿を見るだけで、僕も頑張らなくちゃ、って思う。だって、その正体を……一生懸命戦ってる男の子のことを、僕は知ってるから!!」

　デックさんが言い終えたところで、彼の背中からひょっこりと姿を現した女の子がいた。

「お兄ちゃーん！」

　デックさんと一緒に、俺がツインテール属性を奪われた時に立ち上がるきっかけをくれた女の子。あすかちゃんだ。

　もしかしたらデックさんは、日本で知り合いになったあすかちゃんに声をかけてここまでやって来たのかもしれない。

「あすか、全然心配してないよ！　そんな怪人たち、大好きなお兄ちゃんがやっつけてくれるって信じてるもん！」

「は？　お兄ちゃん、ロエルたちより小ちっちゃい子にも手出してたの……？」

　背中に怖おぞ気けが走って振り返ると、ロエルはきらきらした笑顔で俺を見ていた。一瞬で表情を変化させたように感じたが、気のせいだろう……。

「みんな、知らないでしょう！　お兄ちゃん、変身できなくってもあすかを怪人たちから守ってくれたんだよ！　いっぱいいっぱい血が出たのに、立ち向かっていったもん！　お兄ちゃんは、変身でき

なくっても強いんだから!!」

　デックさんが、あすかちゃんを片腕でひょいっと抱き上げる。そして、あらためて俺たちにウインクをしてきた。

　その力強さは、誰だれが見てもヒーローの姿だった。

「……素晴らしい声援だったが……少年を立ち上がらせることはできなかったようだね。もういいだろう」

　ハデスギルディが、デックさんたちの言葉を打ち切るように言い放った。

　これ以上、首領にこの光景を見せまいとしているかのように。

「はいはいはーいっ！」

　しかし、また別の方向からも、見知った声が聞こえてきた。俺はそちらに視線を向ける。

　ウェイビーにパーマをかけたツインテールの女性。慧え理り那なの先輩、牧もく須す豊と美み得えさんだ。

「ちなみに私が、テイルイエローの変身を目の前で見て、前から正体を知ってた唯一の一般人の牧須豊美得でーっす！　こーんなただのオタクがあのデック・ニールソンと同じ立場なんて、すごくね!?　うひひ」

「牧須先輩……」

　やつれた声で反応する慧理那。

「神しん堂どうさん、正体が知られるのも構わずに私のこと助けてくれたもんね！　だいじょぶだいじょぶ、ちゃんとテイルイエローの良さわかってる人間は、いっぱいいるよ!!」

　そして慧理那に声をかけるのは、先輩だけではなかった。

「――慧理那！　母の教えを思い出しなさい！　このような苦境にこそ、むしろ嬉うれしくなるのが神堂のツインテールの神しん髄ずい―」

「やべえええええええええええええそーじきゅんがテイルレッドだったあああああああ!!」

「クケ――――――ッ!!」

「ああああ駄目、さすがに人前ではメイド服破っちゃ駄目!!」

　扇子を広げながらいいことを言っている理事長の言葉にかぶせ、慧理那のメイドさんたちが大声ではしゃいでいる。

　この戦いの放送を見て、俺たちの知り合いが続々と駆けつけてきてくれているのか……。

「いや全然可か愛わいいからありでしょ!?　こんなに可愛い男の子が可愛い女の子になってんのに何が不満だって!?　あ、私たち神堂家のメイドです!!」

「総そう二じ君、いじめられたらおねーさんたちがいーっぱい慰なぐさめてあげるから、おいでー!!」

「あとお嬢様がテイルイエローだと知ってびっくりしてます、一応!!」

「メイド長がなんかえーっと……いつの間にか増えてたツインテイルズだったことにびっくりしてます、一応!!」

　メイドさんたちは、慧理那だけではなく桜さくら川がわ先生の正体も同時に知り、驚いている。

　またさらに別の方向……今度は俺たちの後ろから、おっとりとした声が聞こえてきた。

「バレたならもういいわよね。おーい愛あい香かー、姉さんよーっ」

　恋れん香かさんも、愛あい香かを励ましに来てくれた。以前からブルーの正体を知っているようだが、もしかすると愛香が出撃前に言おうとしていたのは、このことだったのか。

「とりあえず、今この半径一キロにいる人間で愛香のこと馬ば鹿かにする人がいたら、姉さんがブチ殺すから、安心して♡」

　そして、思わず聞き間違いかと思うような物騒な言葉を、いつもの朗ほがらかな微ほほ笑えみとともに口にした。

「な、何だこのちょっと闇やみを抱かかえている感じのシスコンぽいお姉さんは!?」

　そのギャップに、恋香さんの周りの人も驚いているようだ。

「どうもー、観み束つか総そう二じの母でーす」

　さらには、いつもの女幹部コスプレをした母さんまでも。

「何ッ、テイルレッドの母だと!?　ならば何な故ぜ、悪の女幹部のような出で立ちをしているのだ!?」

　大おお仰ぎょうに驚くゼウスギルディ。彼女は結婚属性ブライドだからか、さっきから理事長や俺の母さんといった、明らかに既婚者な人の言葉に特に反応していた。

「ほう……見事な仕立てだ。さすがはテイルレッドの生みの親と言ったところか」

　さらに首領が、思いのほか大仰に母さんの格好を褒ほめ称たたえている。

「おいおい、どんどん応援団が出てくるなあ」

　苦笑して肩を竦すくめるアポロギルディ。

　少しずつ。少しずつ、周囲の空気が変わり始めている。

　そしてその空気を、ハデスギルディは鋭敏に感じ取ったようだった。

「君たちは勘違いをしている。何故今、ツインテイルズが絶望しているかをわかっていない」

　だからだろうか。そんな周囲の人々の声援を、ハデスギルディが無慈悲に切って捨てる。

「親族、深く関わった者……それらがツインテイルズに声をかけるのは当然のこと。そうではない……首領様は、世界の人間全てに仰

おつしやられたのだ」

　その言葉にはっとなり、デックさんたちは表情を険しくする。

　ハデスギルディは、問い質ただすようにぐるりを見渡しながら、学生の一団に目を留とめた。

　俺のクラスメイトが、たまたまそこに固まって立っているのが見える。

「彼らと交流のない人間が、今の彼らを応援することはない。そして、ツインテイルズの広めたツインテールを変わらず愛することはない。この世界の破滅はもう……止められない」

　消沈しかけた空気を、また一つの声が切り裂いた。

「くっそおおおおお、もう我慢できねえ、言うっ!!」

　偶然声をかけた学生が急に声を荒らげたので、ハデスギルディは今一度俺のクラスメイトたちへと目を向けた。

「観束ああああああああああああああああっ！　聞いてくれ————っ!!」

　それは明らかに、最後に言いたいことを言って恥をかいてみろ、という唯ゆ乃のの檄げきに触発されての叫びだった。

　クラスの男子は、腹を据すえるように何度か深呼吸をすると、

「俺たち……レッドたんの正体がお前だって、けっこう前から気づいてたんだ!!」

　おそらくは今日……俺がもっとも驚いたであろう事実を、空高く響かせた。

「知ってたんだよ……観み束つかがテイルレッドだって!!」

　俺だけではない。

　愛あい香かも、慧え理り那なも……トゥアールも。陽よう月げつ学園高等部に通うツインテイルズは全員、その告白に言葉を失った。

「おいこら、観束ぁ！　見み損そこなうんじゃねーぜ！」

「見損なう、って……」

　俺が聞き返すと、クラスの男子たちは互いを見合い、ニヤッと笑った。

「正体が男だって知ったぐらいで、俺たちがレッドちゃんのことを嫌いになるって思ってることがだよ！　何、勝手に落ち込んでんだっ!!」

「正体が男だろうが、テイルレッドたんが超可か愛わいいことに何の変わりもねーだろうが!!」

「中の人は気にしない、がファンの心意気だぜ!!」

「そこの親玉さんは、そーいうのわっかんねーかなあ!?」

　男子たちは競うようにがなり立て、最後には首領たちへも向けられる。

「ふむ、ついにただの人間までもが余に啖たん呵かを切るか……面白い」

「……全知全能の首領様に、畏おそれ多いことを……」

　人間が首領に意見したことを見み逃のがせず、ハデスギルディが前に進み出ようとする。

「待て」

　首領は一喝でハデスギルディの歩みを制止した。

「最後まで言わせろ。余が聞きたいのだ」

　そして一世一代の見せ物を少しでも長く愉たのしもうと、笑みを深めた。

　その凍えるような眼まな差ざしに貫かれ、男子たちは足を震ふる

わせる。

　しかし気合いを入れるように平手で腿ももを叩たたき、言葉を続けた。

「言っちゃなんだけど、俺たち観束の親族でもねーし、交流もないぜ！　一年間一緒のクラスにいるのに、一度も遊びに行ったこととかねえし!!」

「だけど今、別にツインテールを嫌いになってなんかいねえ！　打ち明けられたわけじゃなく、自然にレッドちゃんの正体に気づいた俺たちでもな!!」

　クラスのみんなが、俺の正体を知ってた……？

　まさか、そんな――いや。

『でもよお、急に髪が青くなって、レッドちゃんのツインテールは大丈夫だったのかな？』

『レッドたんには頑張ってほしいけど……無理だけはしないで欲しいぜ』

『まったくだ。お前もそう思うだろ、観み束つか』

『俺たちは、テイルレッドたんに戦いをして欲しいんじゃねーぜ。いつも笑顔で、ツインテールを見せてほしいんだよ』

　いつの頃ころからだろう。俺が落ち込んだ時……何かに迷った時。

　必ずと言っていいほど、クラスのみんなが、テイルレッドを励ますように雑談しているのを聞いた。

　普段はテイルレッドのフィギュアを買ったとか、ゲームがどこま

で進んだとか、そういうことばかり話しているのに……俺が弱っている時に限って。

　それを聞いて気持ちが楽になったことが、何度あったことか。

　お前たちはいつも……俺をさりげなく励ましてくれていたんだな……。

　胸が熱くなる。凍えきったはずの、心が。

　男子たちの横に、クラスの女子たちも競うように並ぶ。彼女たちは、愛あい香かに声をかけた。

「愛香ー、ちょっと何おとなしくなっちゃってんの！　らしくないよ！」

「チャンスでしょチャンス、ここでその怪人ブン殴なぐっちゃえば、ほら、ね!?」

「愛香がテイルブルーだって気づけなかったのは悔くやしいけど、私たちが愛香を応援するのは変わらないし!!」

　女子たちはちらりと俺の方を見ながら、チャンスがどうとか口にしている。

　よくわからないがそれも、愛香にとっての励ましの言葉なのだろう。

　同じ学校の生徒たちが奮起しているのを見たからだろうか。

　次に言葉が聞こえてきたのは、先ほど首領が破壊した校舎、教室の中からだった。

「校舎が壊されたって何だー！　観束君、安心したまえ！　校舎の修復は、このＤＩＹ研究会が引き受けた!!」

「そうだ、津つ辺べさんとトゥアールさんの喧けん嘩かで壊れた校舎を直し続けて早一年！　俺たちだって成長してるんだぜ!!」

「何というかね、津辺君たちの正体を知っても驚かないという

か……ああやっぱり、という感じですっきりしたよ！　だって、校舎の壊し方が人間技ではなかったからね!!」

　ＤＩＹ研究会……いつも愛あい香かとトゥアールのじゃれ合いを見守っていた人たち。その中には、卒業した三年生の姿もあった。彼らは十分に安全装備を身につけ、修復作業を始めている。

　彼らは彼らにできることを、たとえ小さくとも精一杯やるのだと。声を上げて宣言しているのだ。

「違うんです、変身の影響とか大して関係なく、素すでそのアホみたいな破壊力出してるんですこの蛮族は……」

　ぼそりと呟つぶやくトゥアール。

　ＤＩＹ研究会の応援を見たクラスの男子たちは、ここまで来たらとばかりに、難易度の高すぎることを一層大きな声で叫ぶ。

「その、何つーか……正体が男だって知ってもっとファンになったって言うか……！　むしろ、何かもっと興奮したぜ!!」

　何て恥ずかしいこと言ってんだよ……！

「どうだ観み束つか！　これで俺たち全員、世界中に恥をさらしてやったぜ!!」

「お前と同じにな！」

　クラスの男子たちはそう言って気恥ずかしそうに指で鼻を掻かいたり、おどけてみせたりする。

「馬ば鹿かか、お前ら！　その場のノリでこんなこと……今この場所は、世界中に中継されてんだ！　世界の人たちの記憶に……記録に！　永遠に残るんだぞ……!!」

　俺はいたたまれなくなり、声を震ふるわせた。

　あいつらの顔を、真まっ直すぐに見ることができない。

「上等じゃないか」

　また一つ、聞いたことのある声。それは俺たちの前方、母さんの

立つ場所からだった。

　ＳＰらしき二人に両隣を固められた、金髪の男性がゆっくりと進み出てくる。

　その周りに、続々と見知った人たちが集まってきた。

　黒スーツとサングラスで全身を固めた人。髭ひげのダンディなおじさん。年中トレンチコートの人。ロマンスグレーの紳士。自分を魔法少女だと言い張るＯＬさん。まだまだたくさんいる。

　あの人たちは、母さんの喫茶店の、常連客だ……。

「私がやってきた未来では……君は絶望していなかった。あとはわかるね？」

　時間移動をしている設定のお客さんも、意味ありげに笑っている。

　そしてもう一度、金髪の男性が流りゆう暢ちような日本語で語りかける。

「総そう二じ君、私たちも君の正体には気づいていた。もちろん、未春さんマスターに聞いたわけではないよ？　その上で、やっぱりテイルレッドは可か愛わいいなあと思っていた」

　今度は彼の声がはっきりと聞こえたからか、ギャラリーが絶句する。

　人々の視線が、その人に一気に集中していった。

「えっ、大統領がいる!?」

　そう言われて俺も、ようやく彼が誰だれなのかを悟った。

　店ではサングラスをしたりしていたが、いつも、どこかで見たことがあると思った。まさかアメリカの大統領がたまに俺ん家に来てたなんて、どんな無茶苦茶なスケジュールで来日してたんだよ……。

　大統領の隣には、テイルレッドを護まもるためのロボットを開発しているとか言ってた……アメリカのモダエル国防長官もいる。

「プレジデント……！」

　デックさんは気さくに呼びかけて大統領の近くへ歩いていくと、二人は無言で頷うなずき合った。

「私たちは歴史に名を残す者になれるかはわからないが……世界を救った英雄と一緒に恥をかいたなんて、何の取り柄えも無い私たちには過ぎた箔になるよ!!」

「ダカラ、オイルフィールドアゲマス」

　大統領に続き、いつもの人が、いつもの口上を重ねた。

「あの人、あれだ……何だっけ、中東の国の……そこの王子様だ」

　またギャラリーがその素性に気づき、驚いている。どうやらあの人も、俺が知らないだけでとんでもない地位の人だったらしい。

　一国の指導者たちが……歴史に名を残せないかもしれないなどと嘯うそぶきつつ、俺に声援を送っている。

　母さんがあの喫茶店で語らった自分だけの「大好き」は、小さな街から、国中へ……そして、たくさんの国へと繋つながっていったんだ。

　大統領はさらに前に進み出ると、諸もろ手てを広げて語気を強める。

「こういう、胸を張って人には言えないような〝好き〟がどんなに素晴らしいものか……総そう二じ君、君が私たちに教えてくれたんじゃないか！　生まれも、性別も年齢も、人種も、今の立場も関係ない！　世界の人間たちが笑顔になったのは、テイルレッドの容姿が可か愛わいいからだけではない！　いつもツインテールが好きだと叫ぶ、その真まっ直すぐさが眩まぶしいからだ!!」

　それはまるで──世界全てに届けるような、熱に溢あふれた演説だった。

「だから私は世界中の指導者と会談し、この日のために備えていた!!」

　大統領が手を挙げると、アルティメギルの造り上げた無慈悲なス

クリーンを突き破るように、いくつもの飛行船が陽よう月げつ学園高等部の校庭の上空に現れた。

「実は、未み春はるさんに頼まれたことがあってね。それが──これだ！」

　飛行船の側面に備え付けられた巨大モニターに、次々と映像が映り始める。

　どこかの国の人たちが、それぞれ大勢集まっている……おそらく各国から中継されているだろう映像だ。

　俺でもわかる街並……ニューヨークの摩天楼の只ただ中なかで、老いも若きも陽気に声を上げている。英語があまりわからない俺でも、ツインテールといっているのは聞き取れた。

　アジア。ヨーロッパ。同じように、様々な国の人たちが声高らかにツインテールを叫ぶ。

　ターバンを巻き、全身を白い衣服で包んだ人たちも、厳おごそかに祈りを捧げている。

『闇あん子こちゃ───ん』

　モニターの一つには、どこかのドームの前に集合した善いい沙すな闇子のファンたちが、様々な色のサイリウムを振っている。

　そこには──テイルレッドの、赤もあった。

「……！　あやつら……!!」

　イースナが、嬉うれしそうにそのモニターを見上げた。

　彼女には、自分の正体を知る一般人の身内はいない。しかし、ブラックの正体を知ってもなお我われらがアイドルに声援を──と奮ふるい立った法はつ被ぴ姿の人たちが、待ってましたとばかりに湧わいている。

　善沙闇子のライブが戦いで台無しになった時、イースナを勇気づけてくれた人たちだ。

「むうう……この世界の人間たちは、余の想像をも上回る変態たち

だとでもいうのか？」

　さしもの首領も、この騒ぎに僅わずかばかりの困惑を示す。

　それを見た母さんは、先ほど首領に賞賛された女幹部衣装のマントを翻ひるがえした。

「私はお店のお客さんに……世界中の偉い人たちにお願いをした。あなたたちエレメリアンが、いつもの世界同時放送を使ってよからぬことをするんじゃないかと思ったから。その時にただ、世界の人たちの声を届けて欲しいと伝えただけ」

　勇ましく言い放つ母さん。人間と同じように飛行船のモニターを見上げている首領や終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーに、一歩も退かない胆力を全身から発散させながら。

「自分に嘘うそをついてまで、世界を守るためにツインテールを好きだと言ってくれ、ってお願いじゃないのよ。今あそこに映っている人たちも、さっきまでは戸惑っていたもの」

　そして母さんは飛行船のスクリーン、世界の人たちを仰ぐ。

「自分一人だけでは、自分の『好き』を言うのが怖い。そうね首領さん、人間って弱い生き物よ。けど、総そうちゃんをずっと見てきたクラスメイトたち、ただの高校生の言葉が……世界に、勇気を振り絞るきっかけを与えた」

　母さんはそう言って、優しい目で俺のクラスメイトたちを見つめる。

「どんなにちっぽけでも、人それぞれの強さがある……それが人間の愛。心よ」

「………………」

　首領は初めて返す言葉を見つけられず、母さんをじっと見み据すえた。

「観み束つか！　お前が世界一ツインテールを好きだから、レッドたんは世界一可か愛わいいんだろ⁉」

再び、俺のクラスメイトたちが叫ぶ。

未いまだ地面にへたり込んでいる俺に。腹の底から、思いを伝えるように。

「お前がつらくて……しんどくて、戦いをやめたいんなら、仕方ねえよ！　俺たち、何も言えねえ!!」

「けど、自分のやってきたことが世界中に否定されると思って挫くじけちまうなんて、お前らしくねえだろ！　……そんなの嫌だ!!」

「悲しくても苦しくても、ツインテールツインテール言ってるのが、観み束つかじゃないか!!」

身体からだが……俺の身体が、震ふるえる。

みんなの声を聞いて溢あふれるこの思いは、何だ。自分の身体がわからない……今、俺の身体を渦うず巻いている感情が制御しきれない。

「俺たちはみんな、テイルレッドちゃんが大好きだ！　そして、テイルレッドちゃんが教えてくれたツインテールも大好きなんだ!!」

その感情が、クラスメイトたちの声によって形を持っていく。

ゆっくりと迫せり上がってくる。

「だから負けるな、観束！　お前のツインテール馬ば鹿かは、絶対そんな怪人よりすげえよ!!」

クラスメイトたちの声が、周りの人たちの声に重なる。

デックさんの声も。あすかちゃんも、牧もく須す先輩も、メイドさんたちも、俺たちみんなの家族も……。

飛行船のモニターに映る、世界中の人たちも。

人々の声はやがて一つの大きな叫びに変わっていく。

「俺たちの！」「僕たちの！」「私たちの好きな……」

そして、最後に聞こえたのは──

「ツインテールを……守って!!」

「□□□□□□!!」

　雫しずくが。

　温かな雫が、頬ほおを滑り落ちていくのがわかった。

「あ……」

　咄とつ嗟さに開いた手の平が、新たな雫を受け止める。

　泣いているのか、俺──。

　手の平に、止とめ処どなく零こぼれ落ちていく雫。

　その熱さは……最後に背中を合わせた好敵手の、別れの間際の言葉を思い起こさせた。

『お前が涙すべき時はただ一度。最後の最後……必ず将しようとして涙せし時がやって来るであろう。別離わかれの寂しさではない……ツインテールへの喜びでこそ涙せよ』

　そうだな、ドラグギルディ……。お前の言った通りだった。

　別れの辛つらさで泣くなんて、ツインテールらしくない。

　悔くやしさや悲しさで泣くなんて、もっと違う。

　涙が流れるのは、今だったんだ。

　ただ胸を張って、ツインテールが大好きだと言える。

　自分と同じようにツインテールを大好きな人たちが、応援してくれている。

　それが嬉うれしくて、涙が止まらない……！

　全ての力が、消えてなくなったと思っていたのに。

　自分の両足が、力強く大地を踏みしめているのがわかる。

　もう二度と、変身できないって思っていたのに。

　握り締めた右拳こぶしのテイルブレスが、熱く輝いているのがわかる。

「□□□□」

　いつしか起たち上がっていた俺は──決然と、首領を見み据すえていた。

「観み束つか総そう二じよ……」

　一瞬放心したように開かれた首領の口が、狂気の笑みに象かたどられていく。

「……お兄ちゃん……！」

　そばにいたロエルが、俺を支ささえようと歩み寄る。しかし彼女は、伸ばした手を止めた。

　俺はもう、一人で立てる。いや、立たなくちゃいけないんだ。

　そしてちょうどその時、空の彼方かなたから炎の帯が降り注いできた。

　炎が弾はじけ、中から唯ゆ乃のが姿を現す。

「……へへっ、やっぱりな。いい感じの空気じゃねーか。だから俺様は、この世界のやつらを気に入ってんだよ!!」

　弾んだ声とは裏腹、唯乃は、かなり疲ひ弊へいしている様子だった。

　誇張なく、世界中の敵を一人で相手にしてきたのだろう。

　だがその爽さわやかな笑みの中に、俺は固い信頼を見た。

「……心配かけて、本当にごめん。俺はもう、大丈夫だ……みんなは──」

　俺が振り返ると……仲間たちも、笑顔で立ち上がっていた。

「そーじっ！」

　愛あい香か。

「総二様！」

　トゥアール。

「観み束つか君……！」

　慧え理り那な。

「総そう二じ！」

　イースナ。

「……観束！」

　桜さくら川がわ先生。

「総二くんっ……！」

　メガ・ネ。

「お兄ちゃん！」

　ロエル。

「総二っ……」

　リルナ。

「総二!!」

　唯ゆ乃の。

　感じる。感じることができるよ。みんなの思いを……ツインテールを……。

「余は、少しでもこの時間ときを永く過ごしたいから構わぬ。だがほんの僅わずかな声援を受けて再起して、それでどうなる。この場にいる人間の言葉が、世界の総意だと思っておるのか」

　首領はついに玉ぎょく座ざから立ち上がると、俺たちの方へと一歩歩み出た。

「余は人間の本質を、お前たちよりも遥はるか永ながらく、この目に焼き付けてきた。その希望がどれだけ脆もろく不確かなものか……全異世界の誰だれよりも理解している」

　長い戦いの人生、その果てに得た真実を、俺たちへと痛烈にぶつけながら。

「立ち上がり、戦っても無意味だ、観束総二よ。この戦いを生き残ろうと、もはや世界はお前のツインテールを今までどおり見はしない。今までどおり、ツインテールを愛しはしない」

　そんな首領の嘆きにも似た主張を前に、俺もまた自分の信念を言葉に託す。

「俺だって、そこまで楽観的じゃない。わかっているさ……これでツインテールを嫌いになってしまう人も、たくさんいるだろう」

　俺はそもそも、世界中全ての人間にツインテール好きになって欲しいなんて烏お滸こがましいことは、思ってない。だから、何もかも都つ合ごうよくなんて考えない。

「けれど逆に……今も好きな人、これから好きになるだろう人たちもいる！　その数が多いとか少ないとか、関係ない！　こんなにもツインテールを好きな人たちが、俺に助けを求めてくれた！　それだけで十分だ!!」

　俺は……あまりにも慣れ過ぎていた。世界中の人がツインテールを知っていて、ツインテールを好きだと言ってくれる、この状況

を。そして、忘れかけていた。

　──そもそもツインテールは……そんなにメジャーじゃなかったってことを。

　元々、大好きなツインテールに対してさえ、僅わずかの諦あきらめや妥協もあった俺が、少しずつ、ツインテールの可能性を信じる尊とうとさを知った。

「思い出したんだ……テイルレッドを見て世界の人たちがツインテールを知ってくれた、あの日の喜びを！　少しずつツインテールが好きな人が増えていくのを肌で感じていた、あの日々の嬉うれしさを!!」

　その嬉しさが、自分に何より力を与えてくれていたことを……。

　もう、迷わない。

　自分のツインテールを犠牲にしようなんて、二度と考えるものか。

　俺も最後まで、自分の大好きなツインテールを信じる!!

「みんな──いくぞ!!」

　俺の言葉に、仲間たちから短く力強い応答が一斉に返ってくる。

　そして俺は涙を拭ぬぐい去り……世界の人たちに伝わるよう、空を見上げた。

「俺を見て……テイルレッドに失望してしまった人は多いと思う……そこにいる怪人たちの言うとおり、きっとまだ、納得がいかない人もたくさんいると思う……」

　この世界の、全ての人たちへも、最後に本心を伝えたかったから。

「でも俺は、元々世界を守るって意気込んで戦いを始めたわけじゃなかった。ただ、目の前でツインテールが奪われていくことが悲しくて、それを止めたくて、戦い始めた……」

　いつしか、飛行船のモニターに映る人たちも、周りにいる人たち

も、水を打ったように静まり返り、俺の言葉に耳を傾けている。

「俺はみんなの思うような英雄じゃない。女神でもない。だけどみんなの願いは、きっと叶かなえられる。だって俺も━━同じ思いで、今日まで戦ってきたから」

　託された願いは、確かに受け取った。けど、気負う必要はない。

「大好きなツインテールを守って、戦ってきたから!!」

　これからいつもと同じように、ツインテールを守るついでに世界を守るのだから。

　俺が赤いテイルブレスを構えると同時。

　仲間たちも、次々に変身デバイスを構える。

　ロエルとリルナは、互いの手を合わせた。

「だからこの世界の人たち……どうか見届けてください」

　全ての、ツインテールを愛する人たちへ。

　俺は━━魂たましいを込めて、宣言した。

「俺、ツインテールになります!!」


テイル
オン!!



　歓声が空を震ふるわせ、俺のツインテールを揺らす。

　周囲の人々が、家族が、友達が。

　モニターの中の、世界中の人々が。

　俺たちのツインテールを祝福し、歓喜している。

　地球そのものが呼応しているような、心地ここちよい激震。

　まるで世界のそのものが、風になびくツインテールのように揺れているのがわかる。

　テイルレッド。観み束つか総そう二じ。

　テイルブルー。津つ辺べ愛あい香か。

　テイルイエロー。神しん堂どう慧え理り那な。

　テイルブラック。イースナ。

　テイルシルバー。メガ・ネプチューン＝Ｍｋ．Ⅱ。

　テイルピンク。ロエルとリルナ。

　テイルフェニックス。結いわ翼ばね唯ゆ乃の。

　アナザーテイルブルー。桜さくら川がわ尊みこと。

　テイルホワイト。トゥアール。

　九人のツインテイルズはそれぞれの色に輝いた光を立ち昇らせ、立ち込めていた瘴しよう気きを霧む散さんさせる。

　並んだ九人から一歩前に進み出た俺は、眼前のアルティメギル首領へと指を突きつけた。

「よく聞け、首領！　終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー！

絶対に、お前たちアルティメギルの好きにはさせない!!」

　割れんばかりの声援の中、悪の首しゅ魁かいにぶつける言葉。

　それは俺たち全員が胸に秘め、守り続けてきた信念──。

「この世界の平和とツインテールは、俺たちツインテイルズが守る!!」

第六章　それぞれの終局。

「……起たち上がったか……ツインテイルズ……」

　首領の背後の玉ぎよく座ざが消える。

　これより先、再び座して見るものは何もない。ただ戦うだけだと構えたのだろう。

「それが、君たちの決断か……」

　ハデスギルディは、観念して嘆息する。

「ふん、さて……ただの強がりやもしれぬがな」

「そのぐらい粘ってくんねーと、オトし甲が斐いねーしな？」

　ゼウスギルディとポセイドンギルディが、未いまだどこか侮あなどった声で挑発してくる。

「……やっぱ最高だよ、お前ら！」

　これまでどこか不機嫌そうだったアポロギルディも、揃そろい立った俺たちの姿にいつもの天てん真しん爛らん漫まんな笑顔を浮かべる。

　俺はフォースリヴォンを叩たたいてブレイザーブレイドを握ると、仲間たちへと檄げきを飛ばす。

「俺たちツインテイルズの力……見せてやろうぜ!!」

　思い思いに応おうを叫び、俺たち九人は走り出した。

　背中に聞こえる歓声も心地ここちよく、それぞれの武装を手にして散開する。

　周囲のエレメリアンに、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーに、首領に、戦術など関係なく向かっていく。

　誰だれが相手などこだわる必要はない。まずはとにかく、敵の数を減らしていく!!

「テイルレッドちゃーん、がんばれー!!」

　あすかちゃんを始めとする応援に笑顔で返し、俺はツインテールを舞わせて飛ぶ。

「おおおりゃあああああああああああっ!!」

　歓声をまとって気合い十分なブルーも、それまでの鬱うつ憤ぷんを晴らすかのように突進。

　鎧がい袖しゆう一いつ触しよく、華麗な槍やりの冴さえでエレメリアンたちを打ち倒していった。

「怖っ！　これがテイルレッドの可か愛わいさ伝説と双そう璧へきを成す、貧乳神話のテイルブルー!!」

「小ちっさ……待て待て待てその貧乳で迫ってくるな、可か哀わい想そうすぎて戦意を失うわ!!」

　ブルーはそんなエレメリアンたちの反応に一瞬だけニッコリと微ほほ笑えむと、

「…………貧乳貧乳うるせえええええええええええええええええええええええええええええ!!」

　久々に目をどぎつい逆三角にし、視界に映る全てが赤に染まるほど血走らせて突撃。

　ウェイブランスを放り投げ、素手で周囲の全エレメリアンをブン殴なぐり始めた。

「すみませぬ首領様！　我われらおうち帰るぎゃあああああああああああああああ!!」

　ブルーのあまりの迫力に、首領に逆らってまでいずこかに帰宅しようとするエレメリアンたちも、まとめて空の彼方かなたに打ち上げられて大爆発を巻き起こしていく。

　まさに、俺たちの逆襲開始を告げる、打ち上げ花火だ。

　周囲にいるほとんどの人が暴走したブルーを見なかったことにしているが、デックさんと恋れん香かさんは笑顔で応援している。

「邪魔ですわ！　もはや装甲ふくが邪魔でしかありませんわ

――――――――――っ!!」

　イエローはイエローで、タガが外れたかのように武装を惜しみなく全開放、装そう甲こうをポンポンと脱ぎ散らかしていく。

　やはり応援しているご家族の皆さん以外、バツが悪そうに視線を逸そらしている。

　しかし、その目の遣り所に困った皆さんが視線を向けた別の場所では―

「よっしゃー行くのじゃおっさんよ！　みんな、わらわたちを見て喜んでおるぞ!!」

　ブラックが、幻影のおっさんを実体化させてエレメリアンにかからせていた。

　応援している人たちが白目になりつつあるが、まあ、これがツインテイルズだからな……。

「おーい、トゥアールさんよ！」

　シュタッと挙手した体勢のままエレメリアンに体当たりをし、テイルフェニックスがホワイトに陽気に声をかけた。

「なれたんだな、ツインテールに!!」

「……ええ。なりました！」

「じゃあ、もう手放さないようにしねえとな」

「……当然です。そのためにも、こいつらを残らず倒します!!」

　ホワイトとフェニックスは背中合わせで、同時に眼前のエレメリアンを蹴けり飛ばした。

「ツインテールビーム！　ビームビームビーム……いっぱいビーム!!」

　ロロリー改めテイルピンクも、元気よく叫んでツインテールからビームを乱射している。

「気合い十分ですわね！　すごいビームですわ!!」

　その横でイエローも、全身の武装を次々に発射していた。

「テイルブルーのお姉ちゃんがロロリーの世界で口から光線吐いてるのを見て、ビームの出し方を研究したの！」

　嬉うれしそうに答えるピンク。

　つい最近、またブルーがその光線を吐いて隕いん石せき撃墜したって知ったら驚くだろうな……。

　エレメリアンが少しずつ減ってきたと思ったところで、そういえば今日聞いていなかったあの声が周囲に響き始めた。

「モケー」

「モケモケモケー」

　戦闘員アルテイロイドが、転送ゲートを通って大量に現れる。エレメリアン自体が大量にいるので最初は必要とされていなかったのかもしれないが、ここにきて一気に投入されたようだ。

「戦闘員アルテイロイドも大盤振る舞いか……!!」

「っ……と、モケーもいっぱい来た……やばい、これ以上増えたら……」

　俺と、ようやく暴走が収まってきたブルーは気が逸はやるが、それ以上に戦闘員アルテイロイドが機敏な動きで周囲の人たちの方へと向かっていった。

「モケー!?」

　驚いたようなニュアンスの戦闘員アルテイロイドたちの声が聞こえる。奴やつらの横合いから、同じく黒い塊かたまりが津波のように押し寄せてきたのだ。呑のみ込まれていく戦闘員アルテイロイド。

　その光景に、俺は見覚えがあった。野生のツインテールを引っさげて現れたのは──

「あれは……ロロリーたちの世界の、ツインテールのゴリラだ!!」

「あの子たちも来たがってたから、頑張ってロロリーの世界から連れてきたのー!!」

　驚く俺に、離れた場所で戦うピンクが教えてくれる。

　遠足のようにゴリラの群れを率いて、次元を越えるロロリー。想像すると、すごい図だな。

「やるじゃん、ロロリー!!」

　手近なエレメリアンの足首を摑つかみ、ウェイブランス代わりに振り回して戦闘員アルテイロイドをモケモケとふっ飛ばしているブルーが、ロロリーに感心していた。涼しい顔で何やっているんだ……。

　ゴリラたちはそんなブルーの蛮勇を見て、ウホォ……と感動の溜ため息いきをこぼす。

「お、お前、俺たちの、ボス」

　少しだけ人語のわかる白いボスゴリラが、ブルーの前で恭きよう順じゆんの姿勢を取っていた。

「勝手に新しいボスゴリラに祭り上げてんじゃないわよ――――――――っ!!」

　叫ぶブルーだが、迷っている時間はないと判断したようだ。

「あーもう、じゃあ、あんたらはあの黒いのをやっつけて！　みんなを……守ってあげて!!」

　ボスとなったブルーの指示によって、ツインテールのゴリラは速すみやかに散開していく。

　属性力エレメーラを戦闘技術に転化する術すべがなければ、どれだけ腕力が強かろうと戦闘員アルテイロイド一体さえ倒すこともできない。しかし彼らには、原始の心でツインテールを結んだ愛があり、そして何より腕力がある。だから、人々が逃げる間に戦闘員アルテイロイドを足止めするぐらいならばできる。

　異世界の霊長類の超膂りよ力りよくをフル動員し、ゴリラたちは人間に群がる戦闘員アルテイロイドを押し返していった。

「はあああああっ！」

　アナザーブルーが、超重武器・ウェイブメイスを振り回し、ゴリラたちが押し返した戦闘員アルテイロイドを爆砕しながら突き進んでいく。

　その歩みを止めたのは、空からの攻撃だった。翼を有したエレメリアンが数体、空からアナザーブルーを狙ねらっている。そこへ、戦闘機形態メガネウインガーに変形したシルバーが援護に飛来。

「アナザーブルーはん、乗って！」

「よしっ!!」

　アナザーブルーは迷わず乗り込むと、空のエレメリアン目掛けて飛ひ翔しようした。

「ストライキングウェイブ────!!」

　戦闘機形態メガネウインガーに騎乗したまま必殺技を繰り出し、空中にいるエレメリアンを撃破。さらに急降下し、地面スレスレを飛んでエレメリアンと戦闘員アルテイロイドをまとめて吹き飛ばしていく。

　四方八方から爆発音が響き始めた戦場で、俺は首領目掛けて走った。

「来るか、テイルレッド。ならば余も、再びもてなしの正装をまとわねばなるまい……」

　首領がフューネラルケインを構えた。

　俺は奴やつがテイルオンと口にするのを阻はばむべく、ブレイザーブレイドで斬きりかかる。

　その言葉は──二度とお前には口にさせない。

　首領は俺の意思を察したのか小さく一笑すると、ブレイドを受け止めたフューネラルケインを発光させる。無言のままに、全身に宇宙色の装衣・テイルクロスを装着した。

「おっ、何だ首領さんよ、ツインテイルズの真ま似ねしてお着替え

かい!?」

　進路上のエレメリアンを斬り裂さき、蹴けり飛ばし、テイルフェニックスがこちらへと駆け寄ってくる。

「貴様にはまだ見せていなかったな、不死鳥。これが余の戦闘装衣、テイルクロスだ」

「へへん、俺様のテイルギア・ＴＹＰＥ　Ｐの方が、ずっとかっこいいぜ!!」

　俺とフェニックスは呼吸を合わせてブレイザーブレイドとフォースフェニックスラッシューター、二つの剣を交互に浴びせ、首領を後退させていく。

「レッドッ!!」

「ああ!!」

「「合体必殺！　フェニックスブレイザ――――ッ!!」」

　同時に振るった剣から、炎がほとばしる。巨大な鳳ほう凰おうを象かたどった斬ざん撃げきが、首領へと飛翔。

「むうっ……!!」

　フューネラルケインをかざしてガードしながらも、首領は一歩後あと退ずさった。

「いよし、今度はピッタリ揃そろった！」

　快かい哉さいを叫ぶフェニックス。以前はいきなりで俺が技名を言えなかったが、二度目からはざっとこんなもんだ。

　ハイタッチしてきたテイルフェニックスに、俺は改めて感謝を伝える。

「来てくれてありがとう。本当に助かった、テイルフェニックス！」

「勘違いすんなよ、レッド。いくら仲間になったからって、俺様とお前のライバル関係は変わらねえ。首領をブッ倒したら、後でゆっくりタイマンしようぜ!!」

「……ああ!!」

　お前との勝負なら、もういくらでも喜んで受けてやるよ。

　そのためにも今日、こいつらとの戦いを完全に終わらせる!!

「テイルレッド────────────ッ!!」

「アポロギルディ！」

　俺と首領との間に割り入るように、アポロギルディが急襲してきた。

　首領を護まもることを建前に、俺と戦おうとして乱入してきたように感じる。

　アポロギルディが手にした短剣と、ブレイザーブレイドを交こう錯さくさせる。

　折を見て炎の剣を振り下ろし、俺とアポロギルディを引き離すフェニックス。

「ポニーテールは世界を繋つなぐ架け橋！　太陽の戦士、テイルフェニックス見参!!」

　そうしていつもの口上で勇ましく名乗り上げる。

　一つ違うのは、それを聞いた民衆が湧わいていることだ。

　俺との勝負に水を差され、アポロギルディが鼻白む。

「長い髪がなければ架け橋も作れないのかい？　短髪属性ショートヘアーも極めた僕が、身の程を教えてあげるよ!!」

「おう、よろしく頼むぜ！　へへッ、俺様も自分の身の程ってやつがどのぐらいか、計り知れないもんでね!!」

「ああ、存分にね──イレギュラーレングス!!」

　アポロギルディは爆発的に身長を伸ばし、高速形態に変身。

　テイルフェニックスとぶつかり合いながら、空高く飛ひ翔しようしていった。

「さー、デートといくか、テイルレッド！」

「ポセイドンギルディ……！」

　再び首領を目指そうとしていた俺に、次にかかってきたのは、ポセイドンギルディだ。

　俺の攻撃を易やす々やすと捌さばきながら、じりじりと距離を詰めてくる。

「お待ちください！　テイルレッドは、わたくしとデートの予約をしております!!」

　しかしイエローに銃撃を受け、ポセイドンギルディはその場を離れた。

「マジ？　ダブルブッキングしちった……」

　今し方ナンパしてきたポセイドンギルディはともかく、イエローとデートの約束をしていただろうか……と一瞬考えた俺の前に、戦闘員アルテイロイドやエレメリアンが殺到し、進路を阻はばまれる。

「首領ッ!!」

　俺の代わりに首領の眼前に身を躍らせたのは、ホワイトだった。

「私は世界をわたり、そしてこの世界を護る美少女──テイルホワイト!!」

　復ふく讐しゅう者と名乗り続けた日々と決別した彼女は今、その復讐の根源である相手と対たい峙じする。

「私と、テイルブラックの故郷から心の輝きを奪った組織……アルティメギル！　その長おさを倒す日をずっと待っていました!!」

「構わぬ。貴様が夢見た日が今、ここに在あるのだ。手合わせを許そう」

　槍やりの形態・スピアアームドに変形させたシャイニングアームドを装着し、青色のレイヤーをツインテールに換装するホワイト。

「誰だれが夢にまで見たと言いました、気持ち悪い！　自惚うぬぼれないでください!!」

　上長下短に穂先を伸ばした槍で、首領に突き込むホワイト。首領は右手の掌しよう圧あつでもって、あっさりとその一撃を受け止める。

「わらわもいるぞ────っ!!」

　叫びながら、ブラックも参戦。首領目掛けて大おお鎌がまを振り下ろした。それもまた同じように、左手で触れもせずに受け止められる。

「やっと余に手て向むかいをするか、ダークグラスパーよ。あの時の、余に怯おびえ震ふるえていたお前とはまるで違う……眼鏡めがねの奥の瞳ひとみが輝いておる」

「おうよ、あの時わらわはまだ、ツインテイルズではなかったからな！　そりゃあ、お目々も濁ろうて……!!」

　挑発にも臆おくすることなく、ブラックは笑う。

　そしてホワイトとともに、続けざまに攻撃を放っていく。

「痛快じゃな、首領！　属性力エレメーラで戦う者たちならば、誰もが一度は我われこそはと変態を目指したはず。ましてやアルティメギル首領の貴様なら、一度は変態の頂点へと到達したであろう!!」

　そしてブラックは過去の怯えと決別するように、叫びに熱を込めた。

「まだ震えが残っているのか？　言葉を違たがえておるぞ……余は、今なおもって頂点である」

「いいや！　貴様は確かに、先ほどの人間たちの言葉に気け圧おさ

れた！　貴様の変態っぷりなど、この世界の何でもない普通の人間たちにすら及ばぬのじゃ!!」

「っ……戯され言ごとを」

　ほんの僅わずか。瞬まばたきで見み逃のがすであろう、首領の一瞬の動揺。

　その間に、ホワイトとブラックは互いの武装を完全解放ブレイクレリーズしていた。

「ダークネスバニッシャ――――――――ッ!!」

「スペリオルエクスプロード――――――――ッ!!」

　黒と白の光は競い合うように絡み、首領へと直撃した。

「くうっ……う……ふ、はははははは……！　そう思うならば存分に力振るうがよい！　どちらがより変態か、この戦いの結果が語ること!!」

　仄ほのかによろめきながらも、首領は悦を溶けさせた声で煽あおり立てる。

　そこへ、死風をまとった黒衣が横から割って入った。

「それ以上、首領様への狼藉は許さん……！」

　乱入したハデスギルディは、黒き波動を振りまいて首領からホワイトとブラックを引き剥はがす。ホワイトはハデスギルディと小競り合いをしながら、首領から離れていく。

　ブラックは別のエレメリアンに押し寄せられ、その殲せん滅めつに追われて場所を移していく。

　目まぐるしく対戦相手が移り変わる、まさに乱戦だった。

◇

　ブラックはエレメリアンを斬きり伏せながら、テイルレッドが次々と対戦相手を変えつつ首領に向かっていくのを目にした。

　そうして場所を移動していくうちに、ブラックはテイルフェニックスのそばに辿たどり着いていた。

「おい焼き鳥。何な故ぜ帰って来られたのか、手短に聞かせよ。気になって仕方がないのじゃ」

　ブラックはフェニックスと背中合わせになって戦いを続けながら、疑問をぶつけた。

「まあぶっちゃけ、首領の言うとおり自分自身が無になるわけだからな、再生もクソもねえ。俺様もさすがに無理だって諦あきらめたし、本当はあのまま意識も消えて全部終わりだったんだろうが……」

　テイルフェニックスはエレメリアンを斬り裂さきながら、感傷に浸ひたる間もなく答える。

「死後の世界ってやつか？　そこでスワンギルディが見えた……って言ったら、信じるか？」

「何……？　ええい、ちょっと邪魔じゃ!!」

　話の腰を折って向かってくるエレメリアンをダークネスウィップで打ち据すえながら、ブラックは先を促うながす。

「というか、まずペガサスギルディが来たと思ったんだよ。ビビったぜ」

　フェニックスギルディは語る。テイルエクスティションで無の存在になった自分の前に、ペガサスギルディが姿を現した。いよいよ天国に招待されたのかと思ったが、なんとスワンギルディの声で話しかけてきた、と。

『フェニックスギルディ殿。私は、ツインテイルズに最後の戦いを挑み……そして、敗れました。悔いのない戦いでした』

『そっか。まあ、後悔がねえのは何よりだ……。俺様は、どうか

な……』

『もしフェニックスギルディ殿に後悔があるのでしたら、私の残した光を辿たどってツインテイルズたちのいる世界を目指してください。あなたなら、きっとそれが叶かなうはず──』

　そしてスワンギルディが目の前から消えた後、光のトンネルが見えた気がした。そこに入り、永い永い道を歩いた後、総そう二じたちの世界に辿り着いていた。

　唯ゆ乃のは知らないが、その地点はスワンギルディがテイルレッドに敗れた場所だった。

「そうか、スワンギルディがな……」

　戦いの最中だ。スワンギルディと交わしたという会話を掻かい摘つまみ、断片的に聞いただけだが、それでもブラックは感慨深げだった。

「奴やつは最後に、次元を越える能力に目覚めていた。消滅する間際、いずこかの超次元を彷徨さまよっていたお前に接触するのも、不可能ではないかもしれない」

「まー、そういう難しい理屈はどうでもいいや」

「……そうじゃな。スワンギルディがお前をここに導いた……シンプルにそう考える方が、わらわも嬉うれしい」

　ブラックも賛同し、フェニックスの背を自分の背で勢いよく押して離れた。

「一番目はもはや不動のものじゃが……お前をわらわの二番目の親友にしてやる。もう、どこへも行くでないぞ」

「奇遇だな。俺様も一番目の親友が永久欠番なもんでね。今なら二番目の親友にしてやるぜ」

　慧え理り那なとペガサスギルディ、それぞれ親友はいるが、その次の友にしてやるという提案。

「ちなみに総そう二じは、わらわの彼氏じゃからな」

「あ？　俺様も総二に好きだって言ったけど、それって恋人じゃねーのか？」

　そして、もう一つの一番までもが同じだ。

　二人は笑い合うと、挟み撃ちをするように迫ってきたエレメリアンを同時に撃破した。

「ではな、テイルフェニックス！　この戦いを生きて、また会おう!!」

　飛び去っていくブラックを見送ると、フェニックスはフォースフェニックスラッシューターを肩に担かつぎ、伊だ達てな笑いを浮かべる。

「なーんか、ちょっと見ねえうちに逞たくましくなっちまって……嬉しいねえ！　お前ともいずれセカンドマッチだ、ブラック!!」

　心気充実、猛たけりに猛るテイルフェニックスは、景気づけにとてつもない大技を披露することにした。

「さあいくぜ！　俺様の完全解放ブレイクレリーズッ!!」

　テイルギアＴＹＰＥ―Ｐの背に雄おゝおしく広がっていた翼から、大小無数の羽根パーツが勢いよく分離。その羽根は全方位に拡散するように飛び立つと、さながら一色の虹にじ――薄赤い光のアーチを空にいくつも描き、空を越えて世界中様々な国々へと飛ひ翔しようしていった。

　そしてその灼しやく熱ねつのアーチは世界各国に散らばる数千体ものエレメリアンの元へと飛来。次々と、炎のオーラピラーで捕縛していく。

　彼らはまさか自分を捉えた戦士が、数百キロ離れた島国にいるな

ど予想だにしないだろう。

　侵略者のみを灼やき包む、地上の太陽風コロナ。救世主が怪人に手た向むける最終審判ドゥームズデイ。

　テイルフェニックスが天高く掲げたフェニックスラッシューターの刀身の銃口が開き、炎の凝縮された巨大な刃やいばが形成される。

「超！　バ━━ニングフォ━━━ス！　フィニ━━━━━━━━━━━━━ッシュ!!」

　彼女らしい雑な強化名を冠した必殺技を叫びながら、炎の巨大剣を指揮棒タクトのように振り下ろすと同時。

　世界中で、エレメリアンが一斉に大爆発を巻き起こしていった。

◇

　俺たちに歓声を送ってくれていた人たちも、エレメリアンたちの数が減ったお陰でもっと安全な場所へと避難を始めていた。それでも終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーたちと全力で戦うには、俺たちが奴やつらを連れてここからもっと引き離さないといけないな……。

　ホワイトはポセイドンギルディをいなしながら、俺とブルーのそばへ報告にやって来た。

「テイルフェニックス、また無茶苦茶な技をぶっ放しましたね……！　ざっとの観測ですが、あの一撃で世界中の残存兵力の二割は潰つぶしたようです」

「嘘うそでしょあいつ……」

　ちょっと意味がわからないレベルで豪快な技をぶちかましたフェニックスに、ブルーが呆あきれ顔になる。

「で、テイルフェニックスは？」

　姿が見えないようなので、俺はホワイトにフェニックスの行方ゆくえを尋ねた。

「彼女はそのまま、世界中に残っているエレメリアンの掃そう討とうに向かいましたが……一人では限界があります！　もう少し、こちらも戦力を裂さかなければなりません!!」

「……飛ぶの得意だから、あたしが行く……!?」

　すかさず名乗り出るブルーだが、

「それなら任せて！　ロロリー、テレポートできるから、どこでも行けるよ!!」

　ピンクがやってきて、その役目を買って出た。

「テレポート……!?」

　怪け訝げんな表情になるブルー。

「異世界を超えるのに比べたら、短距離のテレポートなんて簡単に覚えられたよ！　えっ何、愛あい香かお姉ちゃんもトゥアールお姉ちゃんも、テレポートできないの？　それでお兄ちゃん守るとか言っちゃうんだ？」

「ぐぬっ……！」

「幼女にマウント取られるの最高に気持ちいいですね」

　顔をしかめるブルーと、顔を弛緩させるホワイト。

　微ほほ笑えましいやり取りだ……戦いが終わったら、もっとゆっくり見られるだろう。

「君が来てくれなければ、俺たちは全滅してた。本当にありがとう……テイルピンク!!」

　俺があらためてコードネームで呼ぶと、ピンクは嬉うれしそうに頷うなずいた。

「うん！　この世界、ロロリーの世界よりかなり広いみたいだから、大変だけど……頑張る!!」

「無理はしないでくれ。でも、任せたぞ!!」

　ピンクは小さな極彩色のゲートを目の前に展開をさせると、両足でぴょん、と飛び跳ねて中に入っていった。本当にテレポートできるようになったのか。すごいぞ……!!

　振り返ると、背後でイエローとメガ・ネが首領と戦っている。

　俺は二人を援護すべく、そちらに向かった。

◇

　順調に戦いを進めていたレッドたちだが、ここに来て敵もさらに増援を迎えた。

「おーい、僕の古い知り合いがようやく到着したから、紹介するよ~」

　アポロギルディが嬉うれしそうに声を張ると同時、一ひと際きわ大きな揺れが周囲に響いた。

　陽よう月げつ学園高等部の裏山に超巨大な極彩色のゲートが出現し、その中から目を疑うような大きさのエレメリアンが姿を現す。

「あれは……組織最大のエレメリアン、アトラスギルディ！」

　その存在を知っていたらしく、ブラックが絶句する。歯は噛がみしたまま高々と跳躍して校舎の屋上に着地すると、その威容を見み据すえた。

　まるで担かつぐようにして肩に大きな球体型のパーツを備えた、超巨大戦士。

　巨大化したユグドラシルギルディよりも大きい。一七〇メートルはありそうだ。

　続いてホワイトも、屋上へと飛んできた。

「あれは何です、ブラック……あなたは知っているんですか？」

「ただ一人で一部隊を名乗っていた、規格外の戦士。こやつが歩くだけで世界が滅びるとまで言わしめた、伝説級のエレメリアン……実在しておったのか!!」

　文字通りのアルティメギル最大戦士を前に、ブラックはあらためて戦せん慄りつする。

〈アポロギルディたんに呼ばれてきたけど……小さい、何もかも小さいぞ～……〉

　くぐもった声が、すさまじい音量で周囲に木霊こだまし始める。

〈俺は背の高い女性が好きだった。気がつけば、俺自身も大きくなっていた……こんなに〉

　悲壮な身の上を語るアトラスギルディ。あまりにも大きなサイズゆえか、裏山から校舎の屋上まで数キロは離れているだろうに、当たり前のように声が届く。

〈背の高い女はいないか……俺ほどでなくてもいい、五メートルぐらいあればいい……〉

「無茶苦茶言ってますね」

　ホワイトはげんなりする。とりあえず数万という大おお雑ざつ把ぱな兵の招集をした首領だが、あの一体だけで一〇〇〇体分のエレメリアンの戦力はありそうだ。

「どうする……わらわたちもどうにかして、レッドのように武装を巨大化させるか」

　ブラックが頭を悩ませる。

　これまでに何体か現れた超巨大エレメリアンを真っ向勝負で倒してきたのは、レッドだけだ。その他はイエローとブラックが、ヴァルキリアギルディの戦略に気が進まないからかあまりやる気のなかった復活ユグドラシルギルディを押し止とどめた程度。

　山ほども大きい超巨大エレメリアンと戦う手段は、他のツインテイルズにはない。

　考え倦あぐねるホワイトとブラックの背後から、哀愁溢あふれる

声が聞こえてきた。

「ついに、この時が来たのね……！」

「うおっ、総そう二じの母殿!?　いつの間に!?」

　腕組みをして立っている未み春はるを見て驚き、軽く飛び上がるブラック。

「テイルホワイト！　あのマシンを発進させるのよ!!」

「……！　了解です、未春将軍!!」

　悪の女幹部の衣に身を包んだ未春に指示され、ホワイトは阿あ吽うんの呼吸で頷うなずく。

　ホワイトはアトラスギルディを見み据すえると、顔の前にかざしたテイルブレスレボリューションに向かって叫んだ。

「――――トゥアールマシン！　全機発進ッ!!」

　進撃を開始しようとしたアトラスギルディが、何かの気配を感じ取って振り返る。

　空の彼方かなたから、三つの巨大な光が迫ってくる。

「おー！　すっげー、何だあれ!?」

　そして、避難し校舎から離れていた人たちも、それを目撃した。

　巨大な光が形の違う三台の乗り物だと気づいた時、眼下の人々は歓声を上げた。

　赤い戦闘機。黄色いドリル戦車。青い……何か、箱っぽいの。

「……おい見ろ、なんか青いマシンだけやたらと見た目が手抜きっていうか、真っ平らっていうか……」

「いや多分あれ、色的にテイルブルーのマシンだから……」

「そんな悲しい物語がこの世にあっていいのか!?」

　ギャラリーたちが事情を悟り、歓声の中にも哀愁が漂う。

「とうっ!!」

　ホワイトは勢いをつけて跳躍すると、飛んでいる赤い戦闘機のキャノピーが開き、その中の座席へと飛び込んだ。

『ブラック！　こんなこともあろうかと作っていた、あの歌をお願いします!!』

「おお……まさか披露する時が来るとは!!」

　ブラックもまた阿吽の呼吸でホワイトの要請を理解し、校舎の屋上でマイクを取った。

　戦闘の只ただ中なかだからこそ、自分の歌で、全ての戦士たちに勇気を与える。

「世界の人間たちよ、声援感謝じゃ！　そなたたちの熱いコールへのアンサー、テイルブラック・善いい沙すな闇あん子この幻の新曲を聴くがよい!!」

双房(そうほう)合体だ！　トゥアールオー!!

作詞・作曲　トゥアール
歌　善沙闇子(いいすなあんこ)

世界を超え　時空を超え　やって来た
キュートで強い　鋼(はがね)の守護神

スカイトゥアール！　速き翼
ランドトゥアール！　走るドリル
アクアトゥアール！　平たい箱

三つのマシンが一つになる
今こそツインテールを結ぶ時

起(た)ち上がれ　トゥアールオー
熱く高鳴る巨乳(エンジン)　そこは柔らかい
大きさは宇宙一さ

双房合体　トゥアールオー
貧乳は搭乗拒否　身の程を知れ
絶対に動かせないぜ

戦えトゥアールオー!!

三機のトゥアールマシンが螺ら旋せんを描いて飛ひ翔しようする。

何な故ぜ戦車が飛翔しているのだろうという疑問を余よ所そに、ブラックの歌に合わせてトゥアールマシンが変形していく。

冷蔵庫じみた青い箱が左右に分割し、折り畳たたまれていた爪つま先さきのパーツが出現。その脚パーツが二つに折り畳まれた赤い戦闘機に合体し、内部シャフトでがっちりとロックする。

戦闘機の上には、二基のドリルを中心に縦長に割れて胸と腕を形成した戦車が合体し、やはりシャフトで入念に固定する。蒸気が噴き出す。

ドリルが引っ込んで手のパーツが迫り出し、力強く拳こぶしを握る。同じ仕草を、左右一度ずつ。

そして完成させた腕を胸の上でクロスさせ、勢いよく振り広げると、頭部パーツがリフトアップした。

正円の目、逆正三角の口。絵文字のような顔は、デフォルメされたトゥアール──。

『双房合体ッ！　トゥアールオ──────────────ッ!!』

声勇ましく合体完了を告げるホワイト。

顔文字笑顔の巨大トゥアールは、腕を雄お々おしく構えてファイティングポーズを取った。

「あんなにかっこいい合体したのに、完成したのはトゥアールさんの顔だあああああああああ」

巨大メカの合体にわくわくしていたギャラリーが目まの当たりにしたのは、悪い夢でも見ているかのような奇き々き怪かい々かいなスーパーロボットだった。特にトゥアールを知る陽よう月げつ学園の生徒たちは、一ひと際きわ反応に困っている。

『トゥアールオー！　ＧＯ□□□□□ッ!!』

　トゥアールオーのコックピットから、外部に向けてトゥアールの声が拡声される。

〈うおおおおおおー、すごい大きな女性だ……!!〉

　顔だけトゥアールの巨大ロボットは、よりによってアトラスギルディの趣味嗜し好こうに直撃してしまっている。

　嬉き々きとして突進してくるアトラスギルディを、トゥアールオーは容よう赦しゃのない前蹴げりで転倒させた。緩慢な悲鳴を上げ、山に深々と沈み込むアトラスギルディ。

『トゥアールオーはツインテイルズの誰だれかが搭乗することにより、短時間ですがテイルギアと同じ攻防スペックを発揮できるのです!!』

　ツインテールパーツを作れないという理由で、トゥアールオーの最終調整を躊躇ためらっていたトゥアール。しかしそのトゥアールオーには今、翼めいたツインテールパーツがしっかりと装着されている。

「ついにトゥアールオーの出陣ですわ――――――――っ!!」

　離れた場所でそれを目撃したイエローが、目を輝かせる。彼女は、地下基地の格納庫でトゥアールマシンを見せてもらった時から、この日がくることを楽しみにしていた。

　今度はイエローと戦っていたアポロギルディが、アトラスギルディを振り返って叫ぶ。

「ツインテイルズならともかく、あんなただ大きいだけの機械人形にアトラスギルディが負けると思っているのかい!!」

『そちらこそ、勘違いをしているようですね！』

　その声がしっかり聞こえていたのか、トゥアールオーの中からホワイトが反論する。

『トゥアールオーの開発コードは、ＡＡＳＦ……アンチ・アイカ・システム・ファイナル！　あらゆるアンチアイカシリーズの試作の

果てに、暴力を滅ぼすには同じだけの暴力をぶつけるという、実に科学的なコンセプトの元誕生した……！　鋼はがねの女王です!!』

　科学者の少女が持てる叡えい智ちを結集して導き出したのは、蛮族には蛮族をぶつければいい、という極めて科学的な結論だった。

『あの地球一の蛮族を倒すために造ったロボットが、エレメリアンごときに負けるはずがないでしょう!!』

　そうしてトゥアールオーは拳こぶしを振るい、蹴りを繰り出す。

〈ぐおおおおおおおおおおお何だこのロボットは、強い!!〉

　笑顔の巨大ロボットが凄すさまじい力で巨大怪獣に殴なぐりかかるという、恐ろしい光景が展開されている。

　絵文字顔はともかく、その雄おゝおしい戦いぶりは、まさに守護神。

　人々は、トゥアールオーへと声援を送った。

◇

「すごいぜ、ホワイト……!!」

　完成したトゥアールオー。その超巨大ツインテールに、俺の胸はときめく。

　いつまでも見ていたいくらいだが……そうはいかない。

　俺はついに首領の元へと辿たどり着き、再び対たい峙じしたのだから。

　首領も興味深げにトゥアールオーを見上げていた。

「──いちいち、なかなかどうしていい感性を持った女だ……。あの機甲の巨人、美しい」

　首領……お前は、自分が認めたものは素直に賞賛する度量がある

のに。

　どうして、人間の心だけは信じられなかった──!!

「さあ、そろそろ始めるか……テイルレッド。余とお前の終局を」

「望むところだ!!」

　俺はついに完成したトゥアールオーに、また一つ、勇気をもらった。

　アルティメギル首領の影を恐れ、怯おびえていた日々に、決別を果たす。

　もはやこの先は、首領との一騎討ちに専念するだけだ。

◇

　操そう縦じゆう桿かんを豪快に倒し、トゥアールオーを駆るホワイト。

　アトラスギルディと互角以上の勝負を繰り広げていく中、トゥアールオーが眼下の戦いの音を拾った。

『うわあああっ！』

　コックピットのモニターに表示されたサブウインドウに、アナザーブルーが映し出される。

　彼女が戦っているのは、アポロギルディだ。さすがにあの組み合わせはまずい。

　周りには、彼女の援護に向かえる戦士がいないようだ。

「アナザーブルー！　私がアポロギルディと戦います、こちらの操縦を代わってください!!」

　外部スピーカーを通し、ホワイトはアナザーブルーへと言葉を伝える。

『し、しかし私はロボットの操縦などできんぞ!?』

「大丈夫です！　コックピットには雰囲気付けに計器とか操縦桿とかスイッチとかいっぱい付いてますが、ぶっちゃけほとんどリンクしたテイルブレスで操縦しますので、頭の中で考えているとおりに動きます！　となると、武術を修めているあなたならむしろ有利です！」

　ホワイトの説明どおり、トゥアールオーの操縦にテクニックは必要ない。

　さっきから操そう縦じゆう桿かんをガチャガチャ動かしているのは、完全にトゥアールの趣味だった。

『ええい、わかったやってみよう!!』

　胸の位置にあるコックピットから円筒状の光が伸び、アポロギルディと抗戦しているアナザーブルーを包む。光はアナザーブルーを、トゥアールオーのコックピットへと導いた。

　早速ホワイトと代わって操縦を始めたアナザーブルーだが、戸惑っていたのも一瞬。

『うおっ……案外楽しいな、ようし、いくぞ───っ!!』

　思いどおりに動く巨大ロボにやる気を漲みなぎらせた。

　一方、アナザーブルーと入れ替わりでアポロギルディに摑つかみかかったホワイトは、そのまま飛ひ翔しようし彼女を離れた高層ビルの屋上まで引き離した。

「……これが最後の戦いです、アポロギルディ!!」

　ホワイトがそう宣言したのと同時。

　ブルーとポセイドンギルディが。

　イエローとゼウスギルディが。

　ブラックとハデスギルディが。

　奇くしくもそれぞれ因いん縁ねん深い相手と、最後の邂かい逅こ

うを果たしていた。

◇

　闇やみと黒。師と弟子。

　幾度となくぶつかった二人の宿命の戦いが今、終局を迎えようとしていた。

　戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネに騎乗し高速で放たれるブラックの攻撃を、ハデスギルディは浮遊して幽鬼のように揺らめきながら躱かわしていく。

　そうしてブラック、ハデスギルディ、メガ・ネの三人は、大歓声の轟とどろく街中から郊外にある薄暗い廃工場へと戦いの場を移していた。

　メガ・ネが十本指のバルカン砲を放つが、ハデスギルディの周囲に揺らめく瘴しよう気きのような波動に弾はじかれてしまう。

「セラフィックインフィニット!!」

　続けてブラックの神眼鏡ゴツドめがねから放たれた∞型の光輪が集束し、筋肉ムキムキのマッチョのおっさんたちが次々と実体化。ハデスギルディに襲おそいかかっていく。

　正体を明かした際、一般人から「マッチョ出す人」と認識されていることをあらためて確認してしまったというのに、ブラックに躊ちゆう躇ちよは見られない。それが、彼女の強さだ。

　ハデスギルディは、その地獄の針山のように棘とげ張った腕を突き出して、妄想を練り込む。

「おっさんは私には通用しない──はあっ!!」

　ハデスギルディが具現化したのは、たくさんの幼女。ワンピースを着た子、元気よく短パン半袖そでの女の子……色とりどりの小さな女の子が、笑顔でおっさんを見る。

　その身長、ピッタリ一〇〇センチ。

　以前、アポロギルディにせがまれて具現化した妄想だった。

　女の子たちの愛らしい幼よう気きにあてられ、具現化したマッチョのおっさんたちが吹き飛んでいく。

「ちっ……相変わらずホラー顔のわりに可か愛わいい幻術を使いよる!!」

「そういう君は何な故ぜ、女の子を形成しない。躊ちゆう躇ちよ無く特攻させるために、あえておっさんを具現化しているのかな？」

「貴様らエレメリアンが嫌がる幻影が、いつの間にか形を持ってしまっただけじゃ!!」

　ハデスギルディの妄想幼女も消えてゆくが、彼が周囲に放つおびおただしい黒の波動は大きさを増していくばかりだ。

　黒の波動はかつて戦ったハデスギルディの前身・デスギルディの形を取り、ブラックとメガ・ネに向かってくる。

「デスギルディか……テイルギアＴＹＰＥ　Ｘがなければ、敵ではない!!」

　ブラックはダークネスグレイブでデスギルディを斬きり散らしていく。変身デバイスを持っていないことを差し引いても、かつて戦った時よりも戦闘力が低い。

「その件については、私からも謝ろう。マーメイドギルディはどうしようもない戦士だった。相応の報むくいを受けて果てたものと思っているが……私が彼女を嫌いきれなかったのは、彼女にも確固たる目標があったからだ」

「目標て……？」

　同じく、爆走機形態メガネストライカーでの体当たりでデスギルディを倒したメガ・ネが、ハデスギルディに聞き返す。

「彼女は、『エレメリアンが子供を残す方法』を模索していた。それが冗談や嘘うそでないことを理解していたからこそ……私は彼女に興味を持ったのだ」

　ブラックはデスギルディ最後の一体を斬り伏せ、大きく息をついた。

「一三歳になったばかりの女子に、子孫云々を説かれてものう」

「確かにその通りだ。しかしエレメリアンが次代へと繫つながっていくには、どうすればよいのか……。私もまた、そのことを真剣に考えていた。悠ゆう久きゅうの時を生き、お退屈あそばしている首領様が、不ふ憫びんだったからだ」

　何度戦っても、ハデスギルディの行動原理は首領だ。その忠義の深さは、終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーでも異質なものと言える。

「呆あきれた忠臣じゃな、首領が子作りできる方法を考えていたということか？　……ま、まさか……お前と首領でか……!?」

「ぶ、無礼な!!」

　さすがにそのように茶化されては、ハデスギルディといえども怒りを露あらわにする。

「でもまあ、わらわも総そう二じとそういうことするじゃろうし、考えておいて損はないか。若いから、他の仲間ほど焦あせってはおらんがな」

「そ、そうか……そういうことを……あの少年と……」

　ハデスギルディはブラックをチラッと見て、視線を逸そらしてもじもじとし、またちょっとだけこっちを見てくる。

「なにを照れとるんじゃキモいわ――――――――――っ!!」

　ダークネスグレイブで頭を殴打され、よろめくハデスギルディ。

「想像力豊かな擬人化属性パーソニフイの私のイマジネーションをかき立てるようなことを言っておきながらこの仕打ち⁉」

　ハデスギルディへのツッコミから大おお鎌がまでの連撃に繋つなげるブラック。

「メガ・ネ！　インフィニットコンバインじゃ‼」

「了解や‼」

　グレイブを撃ちつけるたび、ブラックの腕に、脚に、胸に……力強く、白銀の装そう甲こうが加積されていく。

　インフィニティチェインに合体完了したブラックとシルバーは、高速移動でハデスギルディを翻ほん弄ろうしながら、超重武器・メビウスクラッシャーを放っていく。

「では、こういう幻覚はどうかな？」

　ハデスギルディは迫り来る攻撃を捌さばきながら、周囲に人間大の黒い波動を練り込んだ。

「……！」

　息を呑のむブラック。

　デスギルディに続いて実体化したのは、レッド、ブルー、イエローの三人だった。

　さすがは最強の幻術使い、ブルーの胸をちょっと盛るといった手加減は一切ない。

　非情なリアルに徹している。

　先ほどの幼女とは違い、三体は表情を一切変えずに武器を構え、ブラックに襲おそいかかる。

「馬ば鹿かめ、わらわは元々この三人を相手に一人でやり合っていたのじゃぞ‼」

　それに当然ながら、幻覚は本人よりも遥はるかに弱い。ブラックは実体化したレッドたちを圧倒するが、その隙すきにハデスギル

ディは掌てのひらから黒い光弾を放ち、ブラックへと命中させた。

「ぐっ!?」

　ブラックがその攻撃に怯ひるんだ瞬間。

　グランドブレイザー、エグゼキュートウェイブ、ヴォルティックジャッジメント──三つの必殺技が、ブラックへと同時に叩たたき込まれる。

「うわあああああああああああああああっ!!」

　さすがのブラックもその三連撃にはひとたまりもない。大きく吹き飛ばされ、地面を転がる。

「……降伏したまえ。眼鏡めがねとツインテールを放棄し、普通の女の子として生きるのだ」

　慈悲を見せるハデスギルディ。

「何をヌケヌケと……！　わらわは属性力エレメーラを奪われた世界を見てきた……心の輝きを奪われ、普通に生きることなどできるものか!!」

　しかしその慈悲は、ブラックの闘志にさらに火を点つける。

「テイルレッドは、降伏の証あかしにツインテールを切り落とそうとしたわらわを、叱しかった……総そう二じは何度も何度もわらわを叱って、大切なことを教えて

くれた……!!」

〈イースナちゃんを初めて真剣に怒ってくれたのが、レッドちゃんやったな……〉

　ブラックの胸に頭部が装着されたメガ・ネも、しみじみと思い出す。

　次の瞬間、ブラックは裂れつ帛ぱくの叫びとともに鎌かまを一いつ閃せんしていた。

「そんなテイルレッドの姿にッ────化けるなあああああああああ!!」

　テイルレッドが真っ二つに斬きり裂さかれ、元の黒い波動に戻って霧む散さんする。

「！　躊ちゆう躇ちよ無く斬り伏せるとは……！」

「わらわは元々こうして、レッドたちとは刃やいばを交えながら変わっていったのじゃ……それに本物のテイルレッドが、この程度で倒されるはずがなかろう!!」

　ツインテールもろとも斬り裂く横薙なぎの刃。テイルレッドが、こんな攻撃をあっさりと受けるはずがない。

　そのままブルー、イエローも躊躇無く斬り裂き、ブラックはハデスギルディへと疾しつ駆くした。

「強くなったね、ブラック……。もはや私も、慈悲はかけない!!」

　ハデスギルディは、全身を取り巻いている無数の鎖を伸ばし、射出。

　夥おびただしい瘴しよう気きをまとい、意思を持ったように襲おそいかかる冥めい府ふの鎖が、ブラックの身体からだを打ち据すえていった。

「ぐあっ……く、ううううううう……!!」

　ブラックの神眼鏡ゴツドめがねの、左のレンズにヒビが入っている。

　そしてそのダメージは、メガ・ネの合体したグラスギア全体に及んでいく。

「そろそろ終わりにしよう、テイルブラック」

　ハデスギルディは全身の鎖を腕に束ね、血のように赤黒い巨大な一本の針しん剣けんを形成する。

　それを見て、ブラックの胸に装着されたメガ・ネが口を開いた。

〈もう、身体中泥んこまみれや。イースナちゃん。この戦いが終わったら……ちゃんと一人でお風ふ呂ろ入って……ぱんつも洗濯もせなあかんよ〉

「…………。ええい、戦いの最中にまで口うるさいことを……おかんか、貴様」

　悪態をつきながら、ブラックは目め許もとに涙を湛たたえた。

　その唐突な小言が、ハデスギルディに悟られぬように作戦を━覚悟を伝えるためのものだと察したからだ。

　同じことがこの決戦の前に話題に出た時、トゥアールが何を危き惧ぐしていたか。

　それこそが、ブラックに残された最後の戦法だった。

「よし……！　行くぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　黒と銀、二枚の翼を広げ、ブラックが飛ひ翔しようする。

「君の全身全霊の一撃……！　受けて立とう!!」

　ハデスギルディは腕の巨大な針へ、黒い波動を蓄積していった。

『━メガ・ネ、すまん……わらわに生命いのちを預けてくれ!!』

〈〈大丈夫や。ウチがイースナちゃんを必ず護まもりきる。せやから、信じて……思いっきりやったってな!!〉〉

　言葉にしないそれぞれの思いが、互いの心に響き合う。

　母を鎧よろいとしてまとう強化を果たしたブラックにとって、一つだけ許されぬ戦法があった。

　それが、捨て身の特攻。

　自身へのダメージを省かえりみぬ乾けん坤こん一いっ擲てきは、すなわち装そう甲こうと化したメガ・ネに取り返しのつかない破壊をもたらすことになってしまう。トゥアールが指摘していたことだった。

　しかし親娘おやこは今、互いに覚悟を決めている。

　揺るぎなき信頼で一体となった力は、冥界の神の放つ渾こん身しんの波動をまともに受け……それでもなお揺るがず、突進をやめない。

　ついに、ブラックを巻き込んで黒き波動は大爆発を巻き起こした。

　衝撃は廃工場の天井を突き破り、雲の上にまで立ち昇っていく。

　銀色の装甲が、無惨に砕けて舞い上がる。

　そして爆煙を突き破り……ブラックが特攻してきた。

「……装甲を囮おとりに捨てて突っ込んでくることは……読めていた!!」

　そんな親娘の悲壮な覚悟、決死の攻撃さえ──妄想の神は、読み切っていた。

　宙に舞い散る装甲の破片を見ても、ハデスギルディに油断はなかった。完かん璧ぺきに迎え撃つ体勢で、すでに腕を振りかぶっている。

「さらば──我わが愛弟子……!!」

　手にした巨大な針の剣で、ブラックを斬きりつけるハデスギルディ。

　武器を通して伝わる確かな手て応ごたえが、彼の胸に哀しみの痛みを刻む──はずだった。

「……!?」

　手応えが、ない。

「――ああ、さらばじゃ……我が師よ!!」

　そして、勇ましい声が爆炎を突き抜けて聞こえてきた。

「幻術……!!」

　自分が斬きり裂さいたのは、ブラックが放った幻影だった。

　虚を衝つかれたハデスギルディが、目を見開いた先。

　砕けて舞い散るメガ・ネの装そう甲こうをその身に浴びながら、本物のブラックが急迫していた。

　全身の装甲を砕かれ、合体を維持しているのは手にした大おお鎌がま・ダークネスグレイブメビウスのみ。

「インフィニット！　ラッシュバニッシャ――――――ッ!!」

　自分自身の身体からだもろとも矢に変えての特攻。黒き矢が、冥めい界かいの神を貫いた。

「うぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっっ!!」

　ハデスギルディの長ちよう軀くに次々と光のヒビが入っていき……そして、末端で爆発していった。

　自慢の巨大な二本角の一本が砕けた時、ハデスギルディはついに地面へ倒れ込んだ。

　ブラックは全ての力を使い果たし、変身を解除する。

　煌きらびやかなアイドル服はそこかしこがボロボロに破れ、フリルのついたカチューシャは壊れて地面に落ちてしまった。

「まさか君が、幻術で私を欺あざむくとは……。二段構えの作戦、恐れ入った……」

　師であり、幻術・幻覚能力で遥はるかに上回るハデスギルディに

対し、普通は自分の命運を懸けた一撃に幻術を仕込もうとは考えない。看かん破ぱされ、失敗する可能性の方が大きいからだ。

「組織一の妄想好きのお前じゃ。わらわたちが最後にどんな攻撃をするか、予測している可能性が高いと思ってな。だからわらわは最後に、自分の意志で作戦にもう一手を重ねた」

　しかしイースナは、自分でその決断をした。だからこそ、ハデスギルディの予想さえ超えて、最後の一撃を届かせたのだ。

「弟子に超えてもらう……それも、次の世代に自分の生きた証あかしを繋つなぐことができたと言えるのかもしれないね……」

　ハデスギルディは、心から満足した穏やかな声で言った。

「さあ、行くのだ。私は冥めい府ふへと還かえる……君は、仲間の元へ帰りたまえ、イースナ」

　イースナは無言で頷うなずくと、ハデスギルディに背を向けた。

　師を超え、イースナは全ての過去を振り払った。後はただ、前だけを見み据すえて進む。

　地面に転がっていた銀色の部品を拾い上げるイースナ。

「やったな……イースナ、ちゃん……」

　メガ・ネはいつか首領に破壊された時のように、頭部だけになってしまっていた。それでも粉々になった他の部位に比べれば、核の搭載された頭部が原型を残しているのは幸いだった。

「不便じゃろうが、少しだけ待ってくれ。後で修理をする……」

　メガ・ネの頭を抱かかえたまま、イースナは廃工場を出る。

　どこにあるのかもわからない、寂れた場所だ。

　工場から出て少し離れた所で、疲れ果てたイースナはへたり込み、そこに置かれていた古びたドラム缶に背を預けた。

　やるべきことを果たして緊張の糸が切れたのか、メガ・ネと雑談をし始める。

「来月はテイルレッドをゲストに迎えて、ライブじゃ。楽しみじゃな、メガ・ネ」

「うん。総そう二じ君、引き受けてくれてよかったなあ」

「セトリも悩ましいな。どの曲の時にステージにレッドを呼ぶか……重要じゃぞ」

「めっちゃ盛り上がる曲の前がええね……」

　メガ・ネの眼鏡めがね型のバイザーに、ノイズのように線が走る。

　そしてイースナは、アイドル服を維持する力すら消え失うせ、ジャージ姿に戻った。

「そういえば、ようやく私たちも……テイルオンって、言えたね。すごく、嬉うれしかった……メガ・ネも、言えたし……」

「せやなあ……。……あのな、イースナちゃん。ウチら……ずっと、一緒やで」

　メガ・ネのバイザーの輝きが──静かに消えていった。

「もちろん、だよ。それより、メガ・ネ……明日の──」

　そしてイースナの声も続くことなく、途中で途切れた。

　両腕でメガ・ネの頭部を抱き締めていたイースナだが、その左腕が静かに垂れ下がった。

　眠るように目を閉じ……レンズにヒビの入った神眼鏡ゴッドめがねが、乾いた音を立てて地面に落ちる。

　とても、穏やかな顔だった。

　憧あこがれたツインテールの絶望を見て、戦いを決意した少女。

　闇やみに身を堕おとしてまで戦い、その果てに光を手にして戦い続けた……泣き虫の女の子。

　彼女は今ようやく──戦いから解放されたのだ。

◇

　地球全土を股またにかけた乱戦は、最終局面へと突入した。

　テイルイエローは銃撃と砲撃を、ゼウスギルディは大小様々な大きさの雷を放ちながら、互いの全力を出せる場所まで移動していった。

　二人が牽けん制せいをし合いながら辿たどり着いたのは、巨大な岩に囲まれた採石場。すでにあちこちで爆炎が立ち昇っている。

　イエローは全武装を展開し、完全脱衣形態フルブラストモードの一斉発射でゼウスギルディを捉える。

「しょせん、人間の造った雷などこの程度のもの！　リラクゼーションにちょうどいいわ!!」

　雷を伴った実弾や砲撃を防御もせずに浴びながら、ゼウスギルディはゆっくりと前進。陽電子砲を正面から受け止めて全身に浴びながら、意にも介さずイエローへ向かって突き進む。

　ついに手の届く距離までイエローに接近すると、前面へ展開された陽電子砲を一基抱きかかえ、イエローの背中からもぎ取るようにして砕いてしまった。

「きゃあああっ！」

　発射されたままの状態で破壊された陽電子砲のエネルギーが行き場を失って背中で暴発し、イエローが悲鳴を上げる。

「くううっ……！」

　慌あわてて武装を脱衣パージするイエロー。地面に落ちた装そう甲こうが、次々に爆発していく。

　薄着となったイエローを傲ごう然ぜんと見下ろすゼウスギルディ。

「おとなしく、他の仲間にワシを押しつけておけばよかったものを。これだけの多様な武装を搭載した貴様は、世界中に散らばったエレメリアンを撃滅してゆく方が合っていよう」

　もぎ取った陽電子砲を放り投げながら、ゼウスギルディはこの最終決戦におけるミスキャストを指摘した。

「あなたの仰おつしやるとおり。元々イエローのテイルギアは、味方の後方支援のために作られたもの……いつも勝手に突っ込んでその特性を活いかし切れないのは、わたくしの自じ業ごう自じ得とくですわ」

　威圧的な音を響かせて岩場に叩たたきつけられる武装の残ざん骸がいを目にしながらも、イエローは決して臆おくさない。

「ですがその特性を超えてギアを最強の火力に高めたのは、わたくしの意思！　支援ではなく、仲間と肩を並べて前線で戦うために！　あなたのような強敵を、わたくし一人の力で止めるために!!」

　イエローは手にした首輪を凜り々りしく装着し、さらなる武装をその身に着せる。

「絶対服従首輪アブソリユートリング!!」

　残る力全てを最強形態アブソリュートチェインに託し、惜しみなく全武装を発射していくイエロー。

「先ほど他の誰だれかに任せればよかっただろうと仰っていましたが……わたくしは、あなたと戦う資格があります」

「何な故ぜだ。胸の大きさ順か？　白いやつの方が大きかろう、あの逆サバ三桁けたの」

　その暴露でトゥアールが今かなり愛あい香かに恨まれていることなど知しる由よしも無く、ゼウスギルディは小馬ば鹿かにするように鼻を鳴らした。

　爆撃音が全てをかき消す地獄の只ただ中なかで、二人は互いの声をはっきりと認識し合っていた。

「わたくし……結婚いたしますから!!」

　宣言しながら、イエローはヴォルティックブラスターフォートレスを連射。

　雷をバリアーのように自分の周囲に旋回させて攻撃を弾はじきながら、ゼウスギルディは吃きつ驚きようした。

「――結婚ンン!?　それはまことかマジか!!」

　あまりの驚きにうっかりバリアーを消してしまい、何発か被弾してしまう。

「これまでは、何となくでした……観み束つか君となら、結婚してもいいと……。けれどこれからは、違います！　絶対に結婚しますわ！　そう、決意いたしました!!」

「むうう……なんという勇ましく強固な結婚願望……！　全国の婚活女子たちの希望となるつもりか、テイルイエロー!!」

　ゼウスギルディは手しゆ杖じようを振り下ろし、地面を這はう雷を発射。イエローは脚から感電して苦しむが、ツインテールをアース線にして雷を逃がした。イエローの左右で爆発する雷。

「何な故ぜ、そこまでの決意をするに至った……！　貴様、ワシと出で逢あった頃ころはそれほど結婚願望を持っていなかったはず!!」

「そうかもしれません……観み束つか君はわたくしにとって、本当に非の打ち所のないヒーローで……強くてかっこよくて、ツインテール愛も大きい……わたくしなどが彼を愛する資格があるのかと、不安になることの方が多かったですわ」

「……何じゃとぉ!?」

　愛に資格を求める惰だ弱じやくさに、ゼウスギルディが顔をしかめる。もちろん、反論をされる前にイエローはその先を続けた。

「けれど、先ほど観束君が泣いているのを見て、思ったのです。彼も、無理をしているだけで本当は心に脆もろさを抱かかえた、繊せん細さいな方なのだと。だからわたくしは、彼を支ささえたい……!!」

　イエローは肩のバルカン砲を至近距離で炸さく裂れつさせなが

ら、自身の願望も炸裂させる。

「彼がわたくしを、女性としてどう思ってくださっているのかはわかりません。けれど今は、家のしきたりやお母様との約束とは関係なく、わたくしの意志で彼と結婚したいと強く思ったのです!!」

「なるほど……然しかり。互いの強さ、弱さ全てを補い支え合うことが、結婚生活！　相手の弱さを識しることこそが、婚活だというわけか!!」

　ゼウスギルディは長髪状のパーツとマントをともに翻ひるがえしながら、華麗に空へと跳躍。

　イエローと距離を取って着地し、ふう、と溜ため息いきをついた。

「ええいっ……楽しい！　もっと早く教えろ！　お前ともっと結婚トークをしたかったわ!!」

　そして休む間も与えず──杖つえをイエローへと突き出した。

「……こうして、後戻りのできぬ戦いになる前にな!!」

　イエローの武装を見て学習したのか、ゼウスギルディは雷に様々なバリエーションを持たせて発射してくる。散弾のように弾はじける雷や、追尾してくる雷までもが放たれた。

　イエローは背中の二門の巨砲を前面に展開。ホールドグリップを側面から屹きつ立りつさせて逆手で摑つかむと、恒常発射させたレーザーを巨大な剣のように振り回した。

　雷を斬きり裂さき、誘爆させ、ゼウスギルディにたたらを踏ませる。

「こんなに嬉うれしいことがあるか……結婚属性ブライドのワシが！　今まさに結婚を決意した女と戦うことができるなど……!!」

　ゼウスギルディのヴェールの奥の双そう眸ぼうは、歓喜に震ふるえていた。

「お前は自身を奮ふるい立たせるべく決意表明をしたつもりやもしれぬが、それはワシを喜ばせて強化させてしまったようなものだ

ぞ!!」

「ご心配なく……わたくしも、彼への愛でパワーアップしていますわ!!」

「よく言ったっ！　テイルイエロ―――――――――――ッ!!」

　ゼウスギルディが杖つえを天に衝つき上げると、空から巨大な雷が無数に降り注いでくる。

　無数の雷が意思を持ったようにイエローへと殺到する。

　それは、天を引き裂さく数あま多たの竜の首を思わせた。

　イエローはあえて雷渦うず巻く空に跳躍し、ツインテールを空間そのものに突き刺してロック。

「絶対脱衣形態アブソリュートブラストモード――!!」

　砲撃圧力に耐えながら武装を全発射し、雷を迎げい撃げき。ゼウスギルディへと撃ち込んでいった。

　軌道をそらされただけですぐにまた襲おそいかかってくる雷に身体からだを打たれ、イエローのアブソリュートチェインのギアが砕け始めた。しかし、イエローも負けてはいない。

　後先を考えぬ全力の砲撃は、イエローの宣言どおりこれまでにない破壊力を備え、ゼウスギルディの身体の神こう々ごうしき装飾が爆裂していく。

　そして周囲は、二人の攻撃の余波で崩れ去っていった。

　この採石場は戦いの後、役目を失うかもしれない。

　大岩が破砕される。それでも足りずに岩を弾はじき上げ、石の一つになってもくまなく砕く。絶え間なく炸さく裂れつする雷と爆撃が、ただ石や岩があるだけの場所を、それ以上の無に変えていく。

　もはや採掘する石が、一つ残らず消え去ろうとしていた。

　永えい劫ごうにも思える我慢比べの後、ゼウスギルディが僅わずかばかり撃ち負けて身体をよろめかせる。

「完全解放ブレイクレリーズッ!!」

　イエローは一瞬の勝機を逃のがさず、脱衣パージした装そう甲こうを超合身巨大砲スーパーユナイトウエポンへと合体させて跳躍。

　必殺のコズミックジャッジメントで、一直線にゼウスギルディへと蹴けり込んでいった。

「……やられるものか！　未婚のままでやられるものか――――――っ!!」

　しかしゼウスギルディは、結婚属性ブライドの神の執念を燃やし、咆ほう哮こう。

　雷をまとわせた杖を前面に突き出し、イエローのキックを受け止めた。

「うううううううう……!!」

　イエローが、さらに蹴り足を踏み込む。

「ぬうううううううう……!!」

　ゼウスギルディは、なおも力を込めて、それを食い止める。

　そしてついに、ゼウスギルディは渾こん身しんの力で杖を払い、イエローを空高く弾き飛ばした。

　後は、為なす術すべ無く宙を舞うイエローに雷を放てば、全てが終わる。

「終わりだ!!」

　勝利を確信し叫ぶゼウスギルディは、はっと目を見開いた。

　空高く弾はじき飛ばされて向かうその先に――イエローの切り札があった。

　砲塔が一門砕かれた、傷だらけの合身巨大砲ユナイトウエポンが。

「……強化前の装そう甲こう……！　消えずに残っていただと……!?」

　ゼウスギルディが驚きよう愕がくする。

　先ほど背中の主砲をもぎ取った時に脱衣パージした通常形態の装甲を、イエローは気づかれないように合体させて空に配置していたのだ。

「これがわたくしの━最後のキック……!!」

　イエローがまとったコズミックジャッジメントのエネルギーは、まだ彼女の身体からだを取り巻いている。残った主砲の前へと、イエローは身を躍らせた。

　合身巨大砲ユナイトウエポンから発射されたエネルギーをまとい、再びイエローはゼウスギルディに向かって飛ひ翔しようした。

　イエローを発射した瞬間、二乗した反動に耐えきれず、合身巨大砲ユナイトウエポンは爆発する。

　必殺技としてのキックを愛し、これまでに様々な技を開発してきた蹴けり技の名手、イエロー。彼女が最後に放つそれはもはや、鮮やかに華々しき飛び蹴りではない。

　渾こん身しんの力を託した、身体ごとぶつかっていく肉弾だった。

「コズミック━━ダブルジャッジメントォォォ━━━━━━ッ!!」

　イエローは両足の蹴しゆう撃げきで、ゼウスギルディへと突っ込む。

「ぐぅおあああああああああああああああああああ!!」

　ゼウスギルディはその蹴りをまともに受け、全身を爆発させながら吹き飛んだ。

　天に轟とどろく雷を支配する主神は、たった一人の人間の信念の一撃で敗北を喫したのだ。

　全身を焼け焦がし、煙を上げながら倒れ伏すゼウスギルディ。

　イエローも技を放った後に着地すらできず、力無く地面を転がった。

「ブーケは、もっと淑しとやかに投げぬか……。やんちゃな花嫁だ……先が思いやられる……」

　軽口を叩たたくゼウスギルディの前で、イエローは慧え理り那なの姿に変身解除した。

「……やんちゃ……。子供の頃ころ、お付きのメイドたちによく言われましたわ。最近は、そんなこともなかったのですが……」

「まあ、ワシも人のことは言えぬか……今日は本当に、暴れ尽くした……」

　ゼウスギルディはマリッジブルーと称される戦意低下状態に陥おちいることなく、十全の力で戦うことができた。それは本人が言ったとおり、結婚を決意した女性を相手にしたからだろう。

　彼女は最後に、完全燃焼することができたのだ。

「……ゆけ。花婿むこの最後の戦いを見守ってやれ」

「……ですがあなたにも、逢あいたい男性ひとが……」

「ワシはこのとおりだ、もう逢えるわけがなかろう……。それにあの馬ば鹿かはどうせ今も、誰だれ彼構わず女に声をかけておるわ……」

　言葉が途切れ、静寂の中を一陣の風が吹いた。

「必ず結婚しろよ。幸せになれ」

「はい。それでは……ゼウスギルディ」

　ゼウスギルディの最期を見ずに踵きびすを返したのは、戦士としての矜きよう恃じ。

　誇り高き神は消えゆく様を晒さらすのを嫌うであろうという、慧え理り那なの思いやりだった。

　痛めた右足を引きずりながら、慧理那は荒れ地を少しずつ歩いていく。採石場の敷地を出たあたりで、わけもなく嗚咽おえつがこみ上げ、肩を震ふるわせた。

　おもちゃを手にし、豪邸を駆け回った幼少の頃ころ。やんちゃなお嬢様だと呆あきれられたあの日から、ヒーローへの憧あこがれは変わらなかった。

　戦士となってからも、そばにいる本物のヒーローを追いかけてきた。

　ほんの少し自信を持っては、すぐに落ち込む。その繰り返しだった……。

　テイルイエローになりたての、己の弱さに涙した頃の自分にこう言ったとして、果たして信じてくれるだろうか。

　あなたはいずれ、世界の命運を懸けた戦いで、最強の神の一人を倒せるまでになるのだと。

「わたくし、わたくし……やりましたわ……」

　懸命に歩を進めていた慧理那は、視線の先に、幼い女の子が立っているのを見た。

　そのツインテールの女の子は、ヒーローの変身アイテムのおもちゃを持っている。

　女の子は慧理那が近づくと、笑顔でおもちゃを手渡してきた。

　慧理那は頷うなずき、おもちゃを受け取る。そして慧理那の身体からだは、静かに崩れ落ちていった。

「けれどわたくし、お婿むこさんを、見守る……こと……」

　砂交じりの風が吹き荒すさぶ荒野に倒れた慧理那は、満足げな微ほほ笑えみを湛たたえていた。

◇

　爆煙くすぶり、ところどころ道路が破壊された街中を、人の波が整然と流れていく。

「サア、早く逃げて!!」

　デック・ニールソンの先導で、エレメリアンの手を逃のがれた一般人たちが速すみやかに避難しているのだ。

　テイルギアに似せたマッシブなスーツに身を包んでいても、デックが行っているのは一般人の避難誘導だ。

　しかしそれも、立派な戦いだ。おかげで総そう二じたちが、心おきなく戦えるようになる。

　何より役者である彼が戦うのは、このあと。スクリーンの中でなのだから。

「……頑張れ……ソウジ！」

　首領との戦いを繰り広げながら空の彼方かなたに飛び去っていったテイルレッドを思い、デックはエールを送った。

　そして未み春はるは一人、地下基地へと戻っていた。

「唯ゆ乃のちゃん！　次は南東二〇キロの方角！　二〇体ぐらい固まってるわ！」

『オッケー！　その調子で頼むぜマスター!!』

「ロロリーちゃん、その地点からちょうど北に五〇キロよ、お願い!!」

『は～い、お兄ちゃんのお母さん♡』

　彼女はテイルフェニックスやテイルピンクたちに最短距離での世界中に散らばったエレメリアンたちを補捉できるよう、必死にオペレートしていた。

　ロロリーたちの異世界を訪れた時は移動戦艦スタートゥアールに残ったため、テイルピンク──ロロリーとは面識がない未春。戦闘のオペレートがファーストコンタクトとは何とも風ふ情ぜいがないが、その分、後でしっかり仲良くなろうと決めていた。

変身できないただの人間でありながら、未春はずっとこの基地でツインテイルズの戦いを見守ってきた。

そして基地の機能を覚え、トゥアールの代わりにコンソールを操作できるようになり、こうして一人でオペレートをこなせるようにまでなった。

当初はエレメリアンを示す赤い光点が重なりすぎて、もはやペンキをぶちまけた様相を呈ていしていた。

だがそれは無造作に消しゴムをかけるように、どんどん数を減らしていく。

異世界からの救援者。死を超越してやって来た救世主。

彼女たちを加えツインテイルズ全ての戦いを見守りながら、未春は祈るように呟つぶやく。

「無事に帰ってきて、みんな……」

どれだけ仕事をこなそうと、未春が考える一番大切な仕事が、この先に待っている。

彼女は今日も笑顔で、基地に帰還したみんなを迎え入れるのだ。

◇

マクシーム宙そら果はて。総そう二じたちの地元にあるコンベンションセンター。

そしてここは総二が初めて変身した場所であり、また、総二が変身できなくなりながらも戦った、因いん縁ねん深い場所だ。

まるで何かに導かれるようにその場所に辿たどり着いたブルーは、ポセイドンギルディと最後の戦いを繰り広げていた。

広大な駐車場には、かなりの数の車が駐車されている。

すでに何台か破損しているのは、この場所にもエレメリアンが現

れ、人々が避難していったであろうことをありありと伝えている。

　ポセイドンギルディは三みつ叉またの槍やりを繰り出し、ブルーもウェイブランスを突き出す。

「諦あきらめが悪いねえお前らも！　首領様に勝てるはずねーだろうに……あの人実力だけはホントマジヤベーから」

「あんたがあたしたちをナンパする成功率よりは、分の悪い賭かけじゃないわ!!」

「おっ、言うねぇ～!!」

　点と点である穂先が過あやまたず突き合う神業めいた槍術は、次第にその速度を上げていく。

　膂りよ力りよくで押しきられたブルーは距離を取ると、素早く胸パッド型の強化アイテムを手の平に出現させた。

「エターナルパッド！」

　アンダースーツの隙すき間まからスロットインされた進化装備エヴォルブアームズが、ブルーの全身を蒼そう光こうで包む。

　エターナルチェインに強化したブルーが見たのは、空中に浮かぶ無数の車だった。

　ポセイドンギルディの得意技、物質操作。

　駐車場に止まっていた乗用車は、持ちえる質量を生いけ贄にえに神の弾丸へと役目を変える。

　次々と飛来してくる車を、ブルーは脚力強化、跳躍力強化などの属性玉エレメーラオーブを瞬間発動して回避していく。続々と地面に落下し、ひしゃげていく車たち。

　さらに一直線に飛んできた車はウェイブランスエクシードで斬きり裂さき、両断された車を目め眩くらましにポセイドンギルディの視界から消え、学校水着属性スクールスイムの能力で地面に潜水。そのままアスファルトの中を泳ぎ、ポセイドンギルディの間近で浮上。槍を振りかぶる。

　ところがその頃ころにはすでに、ポセイドンギルディの眼前には大型トラックが盾たてのように浮遊していた。それをブルーが斬り裂いている間に、ポセイドンギルディは距離を取る。

　全ては一瞬の攻防。破壊されたことすら忘れたように静寂を保っていた周囲の車の残ざん骸がいは、ようやく思い出したかのように連鎖して爆発し始めた。

　今度は属性玉多重変換機構エレメアデイツシヨンを瞬間発動し、ウェイブランスを伸縮させて攻撃する。次々に属性玉エレメーラオーブを発動するブルーに対し、ポセイドンギルディも特殊能力で応戦していく。

「フェニックスギルディ子こちゃんはなーんか、世界中のエレメリアン相手にするってドヤってて可か愛わいかったけど、すぐ疲れちまったみてーだな」

　唯ゆ乃ののことは認めつつも、その体力の無さを指摘するポセイドンギルディ。唯乃がやっていることはむしろとんでもない偉業のはずだ。

「俺なら、この星にある乗り物全部動かしたってへバらねーよ？」

　しかしポセイドンギルディは、それを上回ると豪語して憚はばからない。乗り物を使用した砲撃の装弾数は無制限であると、誇らしげに胸を張る。

「あたしはそれを全部ブッた斬ってもへバるつもりはないわ!!」

　無論、ブルーも負けじと言い返す。

　その挑戦受けたとばかりに、ポセイドンギルディは周囲に何かもっと使えるものがないかを探し始めた。

　そしてその視線が止まったのは、マクシーム宙そら果はての本館展示棟だった。

「……誰だれもいねーみたいだな」

　中に人間が残っていないのを確認し、ポセイドンギルディはこれまでにない膨大な出力でエレルギーを放った。

建物のドアや、窓を外して弾丸にしようなどという意図ではない。そんな次元ではない。

巨大な建物そのものが、徐々に宙へと浮き上がり始めていた。

「マクシーム宙果を……持ち上げた!?」

ブルーが驚きよう愕がくする。大地が波打つほどの震動を拡散させながら、本館丸々一棟が数十メートルの高さまで持ち上がる。

「はははははははははは！　どうよ!?　いっちょう、これもブッた斬ぎって見せてくれよ!!」

先ほどのように少し地面に潜って回避できるレベルではない。真っ向から迎え撃たなければ、押し潰つぶされる。

「エクストリームウェイブ……ッ!!」

本来の発動方法である投とう擲てきではなく、槍やりに全エネルギーを集中させた斬ざん撃げきで、床面積八〇〇〇平方メートルに及ぼうかという質量弾を迎え撃つ。

ポセイドンギルディの力によって光のコーティングが施ほどこされ、本来の超重量に相当な硬度と速度まで付加されたマクシーム宙果を、ブルーは渾こん身しんの力で斬りつけた。

そのあまりの衝撃に、肩が外れそうになる。腕が砕けそうになる。全身がバラバラになりそうになる。

気を失いかけながらブルーは、両腕が使い物にならなくなったら、ツインテールで槍を握って斬るか──などと本気で考えを巡らせた。

（……あたし……なに馬ば鹿かなこと考えてるんだろ───!!）

そのあまりの可お笑かしさに、ブルーの意識が明瞭になる。

ついにはその常識外の巨大攻撃を一刀両断に斬り抜いた後、ブルーの背後に真っ二つに割れたマクシーム宙果が落下する。轟ごう音おんと激震を撒まき散らしながら、瓦が礫れきの火山弾となって周囲に飛散した。

　ブルーは深く呼気を落とすと、一足飛びでポセイドンギルディに急迫。

　反撃の狼煙のろしとばかりに、目にも止まらぬ槍の連撃を繰り出していく。

「っ……。あはは……あははははは!!」

　そして何より……ブルーは笑っていた。

「……お、お前……！　大丈夫か……!?」

　笑いながら攻撃を仕掛けてくるブルーを見て、「やり過ぎたか」と顔を青ざめさせるポセイドンギルディ。

　しかしブルーの目には、はっきりと意志の光が灯ともっている。それも、これまでにないほど強い輝きが。

「ずっと呆あきれてた……好きな人も、友達も、敵の怪物も、みんなみんな、変態で馬ば鹿かばっかりだって……」

　ポセイドンギルディが繰り出す槍やりの三みつ叉またの穂先に自身の槍の三叉を噛かませ、地面に撃ち下ろす。アスファルトに突き刺さった三叉の穂先の上からさらに念入りに踏みつけ、ブルーは撃ち込む拳けん足そくに全霊を注いだ。

「でも今……悪くない気分だわ」

　本心を吐と露ろしながら、ブルーの攻撃はどんどん速度を増していく。攻防を一体とする円の動きで、ポセイドンギルディを翻ほん弄ろう。

　腕を、脚を繰り出し、全身に搭載されたブレードもろとも叩たたきつけていった。

「ぐっ……何が悪くないってっ!?」

　ポセイドンギルディが零距離から衝撃波を炸さく裂れつさせると、ブルーは車に跳ね飛ばされたかのように上体を仰のけ反ぞらせた。しかし両足を踏みしめてこらえ、吹き飛ばない。

　頭の上で両手を組み、しなやかな撥ば条ねで上体を戻しざま、ポ

セイドンギルディの鼻先に両りよう拳けんを叩きつけた。

「おぐっ……！　顔、顔はタンマ……!!」

　両者はよろめきながら同時にたたらを踏む。ポセイドンギルディは、大おお袈げ裟さなほど顔のダメージに反応している。

「あたしもみんなと同じツインテール馬鹿だったんだなって、はっきりわかったから!!」

　そしてブルーは、晴れやかな笑顔で心の内を明かした。

「……ツインテールって、いいわね!!」

「何それ、めっちゃ新しいナンパじゃね!?　昂たかぶるわー!!」

　ポセイドンギルディは、彼女のわけのわからない宣言を笑い飛ばすことなく、むしろ彼なりの最大の賛辞を送った。

　決戦の只ただ中なかで迷いを振り払った、一人の少女の眩まぶしさに当てられたかのように。

　これはブルーにとって、正真正銘の最終決戦。目の前の敵さえ撃破すれば、あとは仲間を信じて倒れてしまっても構わない。

　自分が力尽きるまで相手に全力をぶつけてよい戦い。それは愛あい香かにとっても望むところだ。

「そらああああっ!!」

　ポセイドンギルディが、力を集束させた衝撃波を連続で放ってくる。

「うぐっ……!!」

　ブルーのギアから、火花が上がる。ブレードが砕け、装そう甲こうに亀き裂れつが入り。ついには全身を激しく打たれ、鑿で木を削るように背中で地面を抉えぐりながら吹き飛ぶ。

　地面を殴なぐった反動で吹き飛び続けるのを阻止し、立ち上がったブルー。両腕を交差させると、力を解放させるように一気に広げた。

「属性玉完全解放ブレイクエレメリーズ!!」

　ブルーは対戦相手の能力を現在進行で体得する秘技で、身体からだに強化を重ね掛けしているポセイドンギルディをトレース。その力を宿したまま、禁きん忌きの必殺技を敢行。

　エターナルチェインのテイルギアから、内部で爆発を起こしたと錯さつ覚かくするほどの莫ばく大だいな光が放出される。

「重なれええええええええ――――――――――――――ッ!!」

　髪紐属性リボン。体操服属性ブルマ。学校水着属性スクールスイム。貧乳属性スモールバスト。項後属性ネープ。幼馴染属性チヤイルドフツド。匂い属性フレグランス。

　戦いくさ女め神がみを打ち倒した、禁断の属性玉エレメーラオーブ七つ同時発動に、ブルーのテイルギアが激しく放電する。技を発動しようとしているブルー自身の生命いのちを削りにかかっているかのような、凄すさまじい出力だった。

　放たれた蒼そう光こうはウェイブランスエクシードに集束し、魔方陣にも似た七なな芒ぼう星せいを描いてポセイドンギルディを取り囲む。

「エクストリームウェイブ！　スタ――――――ダスト――――――――――ッ!!」

　降り注ぐ星の瀑ばく布ふを前に、ポセイドンギルディが雄お叫たけびを上げる。

「うぉおおおおおお、おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

　時空を超越して七撃同時に炸さく裂れつするエクストリームウェイブスターダストは、回避をすることは絶対にできない大技だ。ただ肉体の強さのみで耐えるしか、この技を前に生き延びる術すべはない。

　恐るべきは、稀き代だいのナンパ師の慧けい眼がん。

　技が放たれた瞬間にその特性を看かん破ぱしたポセイドンギルディは、持ち得る特殊能力を総動員して防御力を強化。

　両腕を交差させ、七撃全てを耐え抜く覚悟を決めた。

「うぉぉおっ……ぬああああああああああああああああああ!!」

　まとわせたバリアーが微み塵じんと砕け、ポセイドンギルディの全身にも亀き裂れつが入っていく。

　しかし戦女神を屠ほふった一撃も、神に相そう克こくしてはあと一歩で力及ばなかった。

　ウェイブランスエクシードが砕ける。

　勝利を確信し、右腕を天高く掲げたポセイドンギルディの前に──天使の翼が広がった。

　神の意識を縫ぬい止めたその美しき翼は、ツインテール。

　蒼あおきツインテールをはためかせ、テイルブルーが翔ぶ。

　属性玉変換機構エレメリーションの名手である彼女がもっとも使用したのが、髪紐属性リボン。

　この属性玉エレメーラオーブで数え切れないほど何度も翼を形成した。仲間を連れて飛び、敵を倒すために舞った。

　ブルーが最後に発動したその光の翼は、あまりの加速に耐えきれず途中で砕けてしまう。

　ただ、ツインテールだけが翼となって、彼女のラストアタックを後押しした。

「うぁあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

　魂たましいの叫びをほとばしらせ、鉄拳をポセイドンギルディの胸に叩たたき込んだ瞬間。

　テイルブルーは全ての力を使い果たし、津つ辺べ愛あい香かの姿へと変身解除した。

　無防備な少女の姿に戻りながらも、その瞳ひとみに宿った強い輝きだけは、決して変わることはなく。

凛り々りしく舞ったツインテールが、音も無くしな垂れた瞬間──ポセイドンギルディの胸から全身へと亀き裂れつが走り、末端で次々と爆発が起こった。

「ぐ、ぁぁ……!!」

轟ごう音おんを響かせ、地面に倒れ伏すポセイドンギルディ。

愛香は全身の筋肉が硬直してしまったかのように、拳こぶしを突き出した体勢のまま身体からだを震ふるわせている。

ポセイドンギルディは血を吐くように咳せき込み、やがて笑い声を上げげた。

「いきなし平らな壁が突っ込んでくるから、ビビってフリーズしちまった」

天使の翼に見とれたと告白するのが照れくさいのか、そんな冗談を口にするポセイドンギルディ。愛香はむっとしたが、もうただ一発のツッコミを入れる力も残っていない。

「てか、パンチって……。一応俺、神だぞ……。神にする最後の攻撃が拳げん骨こつって、お前……」

「あたしの親友は、こんな装そう甲こうを作っちゃうすごいやつなのよ。そいつとやり合ってきたコレを……あたしは信頼してる」

愛香はようやく呪じゅ縛ばくから解き放たれ、右腕を胸の前で構えた。自分の身体で、ツインテールの次に信頼している拳を。

「…………いいよな、お前らの関係。一人の男を取り合ってる……ハーレムのくせに、仲良くてよー……」

多愛属性ハーレムのエレメリアンに、自分たちの関係性に太たい鼓こ判ばんを押される。それは愛香にとっていいことなのか、困ったことなのか。

「戦いなんてめんどいし、何でこんな部隊に選ばれたんだか、ってずっと思ってたけど……最後に戦うのが、お前みたいな強くてイカす女でよかったぜ」

ポセイドンギルディは身体をよろめかせながら、静かに立ち上

がった。

　思わず身構える愛香。

「……もう、何もしねーよ。てか、できねーし」

　ポセイドンギルディは、全身から放電し始めている。

「ただ……ちょっと、野暮用がな。まあその、なんだ……俺、イケメンだし」

　その言葉の優しさに、愛あい香かは何となくポセイドンギルディの願いがわかったように思えた。

「…………わかってる。最後に逢あいたい女ひとがいるんでしょ」

　愛香とて、エレメリアンの心中など知ったことではないが……その願いだけは、阻はばめない。

　蛮族と呼ばれようが怪獣と呼ばれようが、愛香の戦う原動力は、愛なのだから。

「そんじゃな、テイルブルー。あと一息でオトせるけど、このくらいで勘弁しといてやらあ」

　多愛属性ハーレムの矜きよう恃じか。最後の最後まで口説こうとすることは忘れず、ポセイドンギルディは愛香の横を通り過ぎていった。

「馬ば鹿か言ってないで……行きなさいよ」

　愛香へと小さく振り返り、ニヒルな笑いを口くち許もとに湛たたえると、ポセイドンギルディは震ふるえて覚おぼ束つかない脚取りでその場を離れていった。

「あたしも早く逢いたい……。逢える、かな……」

　離れた空に浮かぶスクリーンに、一瞬テイルレッドの姿が映った。

「ねえ、そーじ……。帰ってきたら、今度こそ……」

　それを見てほっとしたように笑うと……愛香は、一人静かに倒れ

伏した。

◇

　互いを睨にらみ合いながらビルからビルへと飛び移り、時に交差するように跳躍して攻撃を撃ちつけ合う二つの影。

　テイルホワイトとアポロギルディはすでに互いを最後の戦いの相手と認識し、攻撃の熱量は上がり始めていた。

「シャイニングアームド！」

　ホワイトは握り手のついた手てつ甲こう型の武装を装着し、アポロギルディに肉弾戦を挑む。

「ちぇー、あのちびっこたちとも戦いたかったのに。結局また君かー」

「ロリちゃんズをあなたみたいに幼女属性リトルガールを持った危険人物と戦わせられますか！　あなたは幼女を見る目が邪悪すぎます!!」

　自分のことを成層圏にある棚に上げ、ホワイトは正義をほとばしらせてアポロギルディを攻撃する。

「僕はそうやって、幼女を愛めでることを邪悪と言う輩やからをこそ、倒したいのさ……!!」

　その小さな体たい軀くからは想像もできないほどの膂りよ力りよくで殴なぐりかかってくるアポロギルディ。

　ガードしたシャイニングアームドの上から、痺しびれるような痛みがトゥアールの腕を貫く。

　煌きらびやかな装飾のなされた短剣を手にしたアポロギルディは、その場で猛回転。

　二つの短剣の先端を頭上で合わせ、炎をまとってホワイトに突っ

込んだ。

「！　サイズアームド!!」

　ホワイトは武装のシャイニングアームドを鋏はさみ状に変形させ、アポロギルディの攻撃を挟み込むようにして受け止めた。しかし、勢いは止まらない。

　炎に包まれた二人は、そのまま空を突き抜けていく。

　街を越え、山を越え、やがてどこかのひらけた場所の地面に墜落した。

　背中から地面に叩たたきつけられるホワイトだが、それでも勢いは止まらない。

　そのまま地面を抉えぐっていったかと思いきや、何かの地下施設に行き当たったらしく、厚いコンクリートに激突した。

「くっ……うううううう……!!」

　必死にアポロギルディの攻撃の勢いを食い止めながら、ホワイトは背中で数層のコンクリートを砕いていき……ついに、地下にある広大な空間にまで突き抜けた。

　アポロギルディに蹴けりを食らわせて突き放したホワイトは、受け身もそこそこに地面を転がった。悠ゆう々ゆうと着地したアポロギルディが、陽気に声をかけてくる。

「おー、ピンピンしてんじゃん！」

「自慢できることじゃないですが、壁や天井に埋まるのは慣れてますので」

　これ見よがしにテイルギアの埃ほこりを手で払い、健在をアピールするホワイト。そして周囲を見渡し、地面を突き抜けて辿たどり着いた場所を確認する。

　そこは、巨大な柱が無数に屹きつ立りつした地下深くに建造された広大な放水路だった。

　大雨の際に水を取り込んで洪水を防ぐ意図の建物で、間違っても

戦いの舞台となるような場所ではない。しかし、静寂の中に柱が立ち並ぶその様は、まさに神殿だった。

　丁ちよう度どいい。地下は、自分のホームだ。ホワイトはあらためて、戦いを再開する。

「ガンアームド!!」

　ツインテールに黄色のレイヤーを換装したホワイトは、手持ちバズーカ型の銃砲に変形させたシャイニングアームドから光弾を連射。

　アポロギルディは短剣を振るい、光弾を次々と斬きり裂さいていく。

　割られた光弾は四方八方に飛び散り、巨大な柱を粉砕していく。

「……テイルレッドは、首領様に今度こそ倒されちゃうんだろうなあ。あーあ……」

　アポロギルディは、不意に天井を見上げた。その先にいる、レッドや首領の戦いを想像しているのだろう。

「あなた、総そう二じ様の○んちん見たいそうですね？」

「そうだよ、もう見ることはできなくなっちゃうけどね～」

　レッドが首領に倒されることで夢が叶かなわなくなると嘆くアポロギルディに、ホワイトは意味深な笑みを送った。

「私は見ましたよ、何度も!!」

「な、なんだと～！　いいな～!!」

　素直に羨うらやましがるアポロギルディ。トゥアールは単に総そう二じの風ふ呂ろを覗のぞくなどしただけで、同意があって見たわけではないのだが、こうも執しつ拗ように総二のちん○んを見ようとしてきた敵相手には、これぐらいのマウントは取りたくなってしまう。

「そうでしょうそうでしょう、私は総二様のち○ちんを好きにできる立場にあるのです!!」

「そうか……人間の女は、誰だれでも気軽にちんち○を好きにできるのか……」

「正しいようでちょっと壊滅的な語ご弊へいがありますが……まあいいでしょう」

　ホワイトは自信満々に胸を張る。

「で、何が言いたいかというと……わたしはこれからも見ますよ、総二様の○んちんちん。あ、ちょい多かった……」

　それはこの戦いで、自分もレッドも生き残るという、勝利宣言だ。

「不思議な奴やつだな、君はさ……!!」

　アポロギルディは二本の短剣を手放した。その短剣は、磁力に導かれるように彼女の右足首に左右一本ずつ装着される。

　そうしてアポロギルディは、跳躍ざまに右脚を撓しならせた。

　アポロギルディの回し蹴げりは、ただでさえ必殺の威力を持った一撃だ。それが自身の武装を装着することで、最強の一撃へと昇華される……アポロギルディの奥義だった。

「おおおお――――――――――りゃあああああああ!!」

　斬ざん撃げきの鋭さと打撃の重さを兼ね備え、炎をまとった蹴しゅう撃げきがホワイトに襲おそいかかる。

　腰の翼パーツの羽先を砕き、そのままホワイトの脇わき腹へと痛烈に命中する。

「っがはっ…………!!」

　ホワイトは巨大な柱を一本、二本と次々に貫いて吹き飛ばされ……最後に、石の地面に全身を叩たたきつけられた。

「……ぐ、う……くっ……!!」

　ホワイトは激痛に声を震ふるわせながら、懸命に立ち上がる。

「へー、まだ立てるんだ」

「……お、おっぱいがなければ、胴体が千ち切ぎれていたかもしれません……」

「いやおっぱいの下蹴ったんだけど……」

　さも胸がクッションになったと言いたげなホワイトに突っ込みつつも、アポロギルディは彼女のダメージを正確に読み取っていた。

「けど、骨が何本かイッたよね。それでそんな強がれるなんて、意外と根性あるじゃん」

「この程度の我慢強さで褒ほめ称たたえるなんて……あなた、トゥアールちゃんの一週間をノーカットで見たら失禁しますよ。蛮族に殴なぐられ蹴られ、絞しめられ投げられ極きめられ捻ひねられ飛ばされ埋められ……だいたいの球技のボール扱いは経験しましたし……えーとあとは……とにかくそれに比べればあなたの攻撃なんて、しょぼいもんですね!!」

「わかったわかった、まったく、どんな毎日を過ごしてるんだい、君は……」

　呆あきれ、憐あわれむように嘆息するアポロギルディ。

　その言葉がまるで不意打ちだったかのように、ホワイトは放心し……そして、誇らしげに笑った。

「……楽しい毎日を過ごしている──に、決まってるじゃないですか」

　言葉にしても誰だれも信じないであろう、バイオレンスな毎日だった。

　自分たちの喧けん嘩かで壊れた校舎を直すことを楽しみにする生徒たちまで現れる始末だ。……彼らが首領に食ってかかったのは、痛快で……そして、嬉うれしかった。

「私、昔はめちゃめちゃ陰キャでしたから……友達もいなくて、恋も知らず、ガリ勉して……独りきりでこっそりツインテールを楽しむことしかできませんでした……」

　シャイニングアームドをソードアームドに変形させ、赤いレイヤーをツインテールに換装。

ホワイトは身体からだを蝕むしばむ痛みを一いつ顧こだにせず、アポロギルディへと駆け出した。

「そんな私が今は、好きな男の子を取り合って、友達の女の子と喧嘩している……！　こんな漫画みたいな、面白い日々がありますか!!」

楽しかった。この一年で、トゥアールは青春を取り戻した。

復ふく讐しゆう心で灰色に染まった自分の心が、色鮮やかに輝くのを感じていた。

「そうかい……！　僕は今、こういう瞬間が楽しくて、日々を過ごしているけどね!!」

「くっ……ぐうううう……!!」

アポロギルディの短剣が炎を伴って閃ひらめき、ホワイトのギアに斬ざん痕こんを刻んでいく。

さらにはレッドも苦しめたアポロギルディの物質発火能力パイロキネシスで、ホワイトの身体が炎上する。

しかし、ホワイトは怯ひるまない。むしろ勢いを増して攻撃を続ける。その我わが身省かえりみない無鉄砲な戦法は、愛あい香かの戦いを彷ほう彿ふつとさせた。

「この身を焦がす恋の炎に比べれば、あなたの炎なんてぬるいぬるい……！　ちょっと追い焚だきしてくれますか!?」

「いいよー？　のぼせるのを通り越して……蒸発するまであっためてあげるよっ!!」

アポロギルディは再び、右足に二本の短剣を装着した。

太陽神の最強の一撃……今度こそ生命いのちを刈り取るであろうその蹴しゆう撃げきを前に、ホワイトは決死の覚悟で右腕を突き出した。

「完全解放ブレイクレリーズッ!!」

元来、完全解放ブレイクレリーズしたシャイニングアームドは、

五形態の特色を備えた形に変形する。

　しかしホワイトは今、そのさらに先の無謀な変形を敢行。変形手順を無視し、特色どころか五形態全ての形を合わせた、巨大な手てつ甲こうへと強引に進化させた。

「シャイニングアームド！　……コンプリートアームドッッ!!」

　翻ひるがえったホワイトのツインテールに、赤・青・黄・黒四色のレイヤーが、同時に換装された。

「……！　変形の全要素を一つに合わせた……!!」

　蹴けりを放ちながら、その武装を嘱しよく目もくするアポロギルディ。

「そう！　これが私の――最後の力ツインテールです!!」

　光の手てつ甲こうが、炎の蹴しゆう撃げきと激突する。

「スペリオル！　コンプリートエクスプロード――――――――ッ!!」

　レッドたち全員の必殺技を象かたどった光が、順番に次々と炸さく裂れつしていく。そして最後に、一ひと際きわ巨大な爆光が放たれた。

　ツインテイルズ全ての力を網羅コンプリートした、最大最後の爆撃。

　それはツインテイルズの司令塔として彼らを見守り続けてきたトゥアールだからこそ成しえる、テイルギアの集大成と呼ぶべき必殺技だった。

「わあああああああああああああああああ――――――っ!!」

　アポロギルディが光に呑のみ込まれ、何度も爆発しながら天高く舞い上がる。

　コンプリートアームドは負荷の限界を超え、技を放った直後に木こっ端ぱ微み塵じんに砕け散った。

　ホワイトのテイルギアも、各所から断続的に火花を散らしている。

　十分に滞空した後、アポロギルディは爆煙を吹き散らしながら地面に落下した。

　アポロギルディの元まで歩いてきたホワイト。そのツインテールは輪郭がぶれ、テイルギアもところどころがスパークしている。

「感謝しなさい。私の束つかの間まのツインテール、その最後の時間を、あなたにあげたんです」

「……ホントだよ。少しでも多く、あの男の子に見せてあげればよかったじゃん……」

　ホワイトはついに変身解除し、トゥアールに戻った。

「……問題ありません。総そう二じ様はいつまでも待って、また私のツインテールを見てくれると約束してくれましたから」

　未練のように一瞬だけ形成されていたままだったツインテールが解ほどけ、艶つややかな銀の長髪となって宙に舞う。

　そんな潔いさぎよさを見せられては、アポロギルディも観念するしかない。

「……他の誰だれかと戦いたかったって言ったこと、謝るよ。君が最後の相手でよかった……」

「そういう素直なところは、可か愛わいいですね……。まあ、あなたも幼女ですし……」

　アポロギルディとトゥアールは、互いに賛辞を送り合った。

「じゃーなテイルホワイト。僕の代わりに、これからもたくさん幼女を愛めでてくれ……」

「言われるまでもありません、愛でますとも。……さようなら、アポロギルディ」

　そう言い残した後、アポロギルディを振り返ることはもうなかった。

　トゥアールは脇わき腹を押さえながら、頼りない足取りで崩壊した神殿を後にする。

　長い長い階段を登り、石造りの地上出入り口を出たところで……トゥアールはその石の壁にもたれかかり、ずるずると崩れ落ちた。

「あ、愛あい香かさんの蹴けりより、痛い……なんででしょう、ね……」

　右手首を愛いとおしげに見つめながら、途切れ途切れの声で感謝を口にする。

「……ありがとう、テイルブレスレボリューション。私に、束つかの間まのツインテールをくれて」

　今度こそ完全に、テイルブレスレボリューションは長い眠りについたのだ。

「またいつかきっと、総そう二じ様にツインテールを見せましょうね……」

　そして……ブレスの持ち主も、また──。

　いつか再びツインテールに結ぶ夢を託した長髪を風になびかせながら、トゥアールは目を閉じた。



◇

　壮絶な光景だった。

　アルティメギル首領が、この世界を地獄に変えるに足ると判断した、総勢数万のエレメリアン部隊。その最後の数十体が今、ここに消え去ろうとしている。

　世界を飛び回り、エレメリアンを蹴散らし続けたテイルフェニックスは、エレメリアンが最後に残る総二たちの街へと舞い戻ってきていた。

　背後の裏山に巨大エレメリアンと戦うトゥアールオーを望みながら、テイルフェニックスもまた地上のエレメリアンを撃滅していく。

「バーニングフェニックスキ――――――――――ック!!」

　テイルフェニックスの咆ほう哮こうが、大空を焦がす。

　空中で渦うずを巻くように軌道を変幻させた炎の蹴しゆう撃げきが、空中のエレメリアンを次々と撃墜していく。

「はあ、はあ……」

　蹴け躓つまづくようにして地面に着地したテイルフェニックスは、変身解除して唯ゆ乃のに戻る。

　テイルフェニックスのテイルギア・ＴＹＰＥ
Ｐは、不完全な試作品。本来ならば稼働時間は極めて短く、それを唯乃の根性で補っているに過ぎない。

　この最終決戦は、まさにその根性の集大成。

　限界をいくつも超えて、ここまでの長時間稼働させていたのだ。

　視界の先に、武器を構えたエレメリアンが群がっている。

「あと、二……いや三〇ってところか……よおし……」

　唯乃は額ひたいに脂汗を浮かべながら立ち上がるも、目め眩まいを起こしたようによろめいた。

「ツインテール……ミラクルトルネ――――――――ド!!」

　虹にじ色の竜巻が吹き抜け、唯乃の横を通り過ぎていく。唯乃の捕捉していた最後の三十体をまとめて呑のみ込むと、地から空へと巻き上がり、その只ただ中なかで爆発させていった。

　唯乃が振り返ると、魔法少女服をボロボロにしたロロリーが立っていた。

　未み春はるから残り数十体が一塊になっているとの報告を受けたロロリーは、あとを唯乃に任せようとせず駆けつけたのだ。

「えへへっ、私たちだってこのぐらいやれるんだから！」

　これで先ほど助けられた借りは返したとばかりに、ロロリーは唯乃へとウインクする。

　そして唯乃は、こういう粋な行動が大好きだ。

「おう、いい戦いっぷりだぜ姫さん！　まあ、合体するとツインテールになっちまうのは、相変わらずもったいねえがな!!」

　ロロリーも変身解除し、変身ツインコネクトの体勢に手を合わせたロエルとリルナの状態に戻る。

　唯乃は、達成感に溢あふれた伸びをした。

「ミラージュリヴァイブでやっつけたのも含めれば、世界中のエレメリアンの八割九割は俺様が倒したぜ。すげーだろ」

「違うもん！　ロエルたちがほとんど倒したもん!!」

　さすがの唯乃も、小さな女の子の見栄にむきになって反論はしなかった。

「じゃ、俺様とあんたらで半々ってことにしとくか。ポニーテール共同戦線の勝利だ!!」

「ふん、まあそういうことにしておいてやる」

　腕組みをし、そっぽを向くリルナ。少し嬉うれしそうだった。

　半々などと謙けん遜そんしてはいるが、さすがは結いわ翼ばね唯ゆ乃の。数万体のエレメリアンの大半を引き受けたというのだから、救世主と呼ぶにしてもなお度外れている。

　そして唯乃たちからかなり離れた学校の裏山で、トゥアールオーと巨大エレメリアン・アトラスギルディの戦いも佳か境きようを迎えていた。

　全トゥアール力りよくを右腕に集束させて放つ、必殺トゥアールメガパンチ。

　トゥアールオーの渾こん身しんの一撃が叩たたき込まれ、アトラスギルディが山の只ただ中なかで爆発。周囲に激震が広がる。

　全身がひび割れ右足と左腕が壊れたトゥアールオーが、山中の木々に覆おおい被かぶさるようにして倒れ込んだ。活動限界を迎えたようだが、完全勝利だ。

「……おおし、やったな！　く～、ツインテイルズの力を持った巨大ロボットかあ、俺様も戦ってみてえ!!」

「えっ……乗ってみたいじゃなくて……!?」

　唯乃の妙な対抗心に呆あきれるロエルだが、背後からの物音に気づいて後ろを振り返った。

「！」

　離れて立つリルナの後ろに、一体のエレメリアンがにじり寄っていた。強力な力を持つ戦士が一体だけ、倒しきれずに残っていたのだ。

「リルナちゃ──」

　ロエルが叫び、唯乃が動くよりも早く、水色の光が降り注ぐ。

　その光は、最後のエレメリアンを撃破した。

「大丈夫か、お姫様」

　トゥアールオーのコックピットを飛び出したアナザーブルーが、母属性マザーの属性玉エレメーラオーブを使い加速して突っ込んできたのだ。

「ありがとう、メイドさん！」

「助かったよ……」

　礼を言うロエルとリルナに、微ほほ笑えんで頷うなずきを返すアナザーブルー。

「おう！　メイドの姉ちゃん！　やったじゃねーか!!」

　唯乃も、その奮闘を湛たたえる。

「なんか、ロボットに力をかなり吸われるような感覚だった……めちゃくちゃ疲れたぞ」

　しかし。疲労していたとはいえ、アナザーブルーにはまだ余力があったはずだった。

　それなのにテイルギアが放電し、唐突に変身解除してしまう。

「！　これは……!!」

　元のメイド服になった全身を見回し、尊みことが愕がく然ぜんとする。

「メイドのお姉ちゃん、どうしたの？」

　ロエルが不安になって聞くと、尊は胸騒ぎに襲おそわれるように胸を押さえた。

「いや、確か私のテイルギアは、津つ辺べがテイルブレスを使える状態でないとうまく機能しないらしいんだ。だから……」

　アナザーブルーのブレスは単体起動ができないため、ブルーのブレスとリンクすることで初めてその力を発揮する。

　重要な注意事項としてトゥアールに念を押されていたので、尊みこともそれはよく覚えている。

　アナザーテイルブルーの強制変身解除。それはテイルブルーが、完全に戦えなくなってしまった状態を意味する。

　力を使い果たして気絶しただけでも、そこまでテイルブレスが影響を受けるかどうか。

「……まさか、津辺っ……!!」

　愛あい香かだけではない。トゥアールやイースナ、メガ・ネ。そして、慧え理り那なと総そう二じは……。

　勝利を果たしながら、四人は言い知れぬ不安を胸に、空を見上げた。

◇

　人間たちの歓声の届かぬ荒野。岩一つなくなった更地の採石場で、ゼウスギルディは力無く倒れていた。

　アルティメギル最高を自負していた魅惑の肢し体たいは、その所々にヒビが入り、見る影もない。

　しかしその表情は、全身の傷の深さに相反して、満ち足りたものだった。

　不意に砂利を踏む足音が響き、ゼウスギルディは視線だけそちらに向ける。

「うわめっちゃボロボロじゃん、ウケる」

　同じく全身傷だらけのポセイドンギルディが、そこに立っていた。

「…………あ……」

　ゼウスギルディは、小さな女の子のような、無む垢くでか細い驚

きをこぼした。

　しかしすぐに、声に威厳を取り戻す。

「そういう、貴様こそ……ズタズタではないか」

　ゼウスギルディの言うとおり、ポセイドンギルディも身体からだ中じゅうにヒビが入っている。

　特に胸には、深々と穴が空あいている有様だ。

「……これな。いや、パンチされて」

　ゼウスギルディの視線の先が胸の穴だと察し、ポセイドンギルディはおどけてみせる。

「やはり男だったのではないか、あいつは」

　ゼウスギルディも、さすがにその報告には笑うしかなかった。

「いやーいい女だったぜ。それは間違いねー」

　嬉うれしそうなポセイドンギルディを見て、張り合うように自分を指で示すゼウスギルディ。

「ちなみにワシは、キックされた」

「な。やべーよな、あいつら──」

　ゼウスギルディの元へ辿たどり着くだけで、ポセイドンギルディに残された生命いのちの灯ともし火びは完全に消えかかっていた。

　膝ひざから崩れ落ちる余力すらなく……ポセイドンギルディは、ゼウスギルディの傍かたわらに背中から倒れ込んだ。

「いやー、マジ強かったわ」

　ポセイドンギルディは晴れ晴れとした声で負けを認め、空を見上げた。

　少し離れた所にスクリーンが浮かんでいる。テイルレッドが、首領と戦っているのが見えた。

彼らは首領の勝利を信じて疑わない。しかし、もしかすると……などと思ってしまう。最期だからといってそれは、いささか不敬だろうか。

「おいポセイドンギルディ、一つ提案がある」

少し荒くなった吐と息いき交じりに、ゼウスギルディが言ってきた。

「結婚属性ブライドのワシが未婚のまま終わるなど、笑い話にもならぬ……」

「で？」

ポセイドンギルディがぶっきらぼうに聞き返すと、ゼウスギルディは僅わずかに身をよじった。

それが今の身体からだでできる、精一杯の照れだったのだろう。

「ワシと結婚しろ」

多くのエレメリアンが、テイルレッドに求婚した。たまにテイルブルーにもした。

しかし、エレメリアンが同僚に求婚するなど、本来はあり得ないこと。

だがゼウスギルディの言葉は……ずっと秘めていたものを吐き出したかのように、清すが々すがしい開放感に満ち溢あふれていた。

だが多愛属性ハーレムのポセイドンギルディにとって、たった一人の求婚を受けるなど論外のはず。

もはや逡しゆん巡じゆんすら許されぬ、最期の時間で。

「しゃーねーな。オッケ、するか結婚」

ポセイドンギルディもまた、穏やかな声こわ音ねでそう返した。

宣言し合ったからといって、何かが変わるわけでもない。

ただ、お互いの心が満たされる以外には。

「貴様で妥協することになるとは……」

「こっちの台詞せりふだっつーの」

　複数の愛と、唯一の愛。相反する互いの属性ゆえに、素直になることができなかった……許されなかった、二体の戦士。

　属性力エレメーラが生んだ悲恋は、しかしここに、一瞬の幸せが結実した。

　最強の四神が二体、ポセイドンギルディとゼウスギルディ。

　二体は手と手を取り合い、風が吹くに任せて消えていった。

第七章　ツインテールの俺。

　俺と首領は陽よう月げつ学園の校舎を離れ、一対一で激突していた。

　街を越えた。ライザーチェインで、建物を貫きながら剣と杖つえで斬きり合った。

　海を越えた。フォーラーチェインで飛ひ翔しようし、螺ら旋せんを描きながら激突した。

　この星で育はぐくまれた俺のツインテールの全てを、首領にぶつけていた。

　首領は微ほほ笑えみを崩さず、攻撃を受け止めながらも俺のツインテールだけを注視している。

　そして今俺たちがいるのは、日本って以外、詳しい場所も知らないような山の中だ。

　攻防の間断でアルティメットチェインになった俺は、全速力で首領に疾しつ駆くする。

「迂う闊かつに地球上で光速のツインテールを発動させるな……この星は、余の居城ほど頑丈にはできておらぬぞ!!」

　そう警告しながら、首領もすでに光速のツインテールへと突入していた。

　光が絡み、大地をえぐる。空を軋きしませる。

　そんな世界から隔絶された攻防の只ただ中なかで、首領はふっと笑みを深くした。

「……テイルレッドよ。人間は、強いのだな」

「やけに素直じゃねえか……ああ！　俺もそれを心の底から知ったよ!!」

　俺はテイルカリバーを大上段に構え、最強の必殺技で勝負をかける。

「テイルカリバー！　超越究極装塡ハイパーアルテイメツトモード!!」

　黄金に染まった炎の刀身が、虹にじ色の輝きを宿していく。

「ゴッドブレイザ――――――――――――――――――ッ!!」

　次元を斬り裂さく斬ざん撃げきが、首領へと放たれた。

「はあああああああああああああ……!!」

　深く静かに気合いをほとばしらせ、首領はフューネラルケインを構える。

　そして俺のゴッドブレイザーを受け止めたばかりか、そのエネルギーをフューネラルケインに取り込み始めた。

「なんだと!?」

「エレメリアンは、人間の生命いのちを奪わぬ。それは首領たる余とて、エレメリアンである以上は変わらぬ真理」

　そして俺の目の前で、首領は挑発めいた笑みを浮かべている。

「しかし、我われらに挑んできた戦士が結果として生命を落とすことは、闘争の果ての止やむなき帰結……。世界そのものが余に挑んできたのだ、彼らを戦士として遇せねばなるまい」

　彼らとは、この世界の人間そのものを指しているのか。

　首領はフューネラルケインを天高く掲げ、属性力エレメーラを集束させていく。

「我わが神しん技ぎ、テイルエクステイション。それを──この星全土に向けて放つ」

「なっ……!!」

「一個の宇宙そのものの力を持つ余だが、星一つ消し去るのは初めての経験だ──」

　首領は、捨て鉢になっているのではない。本気で、人間の強さを計ろうとしている。

「世界が選んだ力……託した希望。それが本物ならば、この星は消えぬはずだ」

　まるで止めてみろと言わんばかりだ。

　まともな技をぶつけていては、手遅れになる。

　星一つを消そうというのなら、宇宙にまで放ほう逐ちくするより他に手は無い。

「プログレスバレッター!!」

　俺はアルティメットチェインを解除。プログレスバレッターを手にすると、上結びと下結びを合わせるイメージで、中結びのままその強化デバイスをフォースリヴォンに装着した。

　瞬間的な超絶出力を発揮するには、あれしかない。

　今の俺なら、ほんの僅わずかな時間だけなら使いこなせるはずだ。

「ぐっ……うっ……おおおおおおおおおお!!」

　俺の全身が放電し、上半身と下半身に等しく強化装そう甲こうが生成される。

　フォーライザーチェイン。

　自分の身を滅ぼしかねない、禁断の形態。究極へと到達する前に死に物狂いで発揮した禁断のツインテールを、俺はこの場限りで禁を解いた。

　変身した瞬間に飛び出した俺は、加速し、首領に体当たりする。

「どうした……その程度のか弱い抱ほう擁ようでは、余をただの一

歩も退かせることは叶かなわぬぞ！」

　抱きつく形になっている俺に、首領は余裕の言葉を投げかける。

　フューネラルケインに集束した力が、今まさに解き放たれようとした、その瞬間。

「うおおおおおおおおおおおおああああああああああああああああああああ!!」

　裂れつ帛ぱくの叫びとともに、俺は全加速機構を最終噴射フアイナルブースト。

　首領とともに、空を突き抜け、摩擦の紅蓮をまとい、急上昇していった。

　いつしか俺は大気圏を越え、首領を闇やみの世界へと突き放す。

　間一髪、フューネラルケインから発射された首領のテイルエクステイションは、宇宙の彼方かなたへと突き抜けていった。

「はあー……はあー……」

　空気のない宇宙空間で、俺は息を荒らげる。

　首領はこの急上昇にあってもまったく傷を負った様子はない。

「聞こえるか、テイルレッドよ」

「……ああ……聞こえるぜ」

　聞こえるが、不思議な感覚だ。心に直接響くように、声が反響している。

「やはりな。我われらほどツインテールを極めた者にとって、言葉を伝えるに空気の振動など不要。ツインテールでツインテールに語りかけることができるのだから」

　慧え理り那なは一度、キックの勢いで大気圏を突破してしまい、少しだけ宇宙を漂流しかけたことがあった。

　宇宙は俺たち人間にとって果てのない絶海であり、そこへ足を踏み入れることは無限迷図に足を踏み入れることに他ならない。

俺はすかさずフォーライザーチェインを解除し、ツインテイルブレスを左腕に実体化。

決着戦に臨のぞむため、再びアルティメットチェインへと強化した。

無限に拡ひろがる、暗黒の漂流地。そこが俺と首領の、最後の戦いの場所となった。

「何もない。誰だれの助けもない。髪を揺らす風もない。それが余とお前の、最後の戦いの地だ」

「何もない空間ばしよか……けどな、俺のツインテールは風の力を借りなくてもたなびくぜ」

「ほう……お前もか」

ここにはただ、二対ふたつのツインテールがあるだけだ。

首領の間も宇宙空間を思わせる冷たく荘そう厳ごんな場所だったが、いざ本物の宇宙に来るとやはり、まるで違う。テイルギアの機能で軽減されているとはいえ、重力に慣れた俺のツインテールは、ここでは少し戸惑っているのがわかる。

「……では、初めようか」

首領の全身から、夥おびただしいまでの属性力エレメーラが立ち昇る。

「相手のツインテール愛が強ければ強いほどに己の力を高めてゆくのは、何もお前だけの特性ではないということだ……テイルレッド」

首領の容よう貌ぼう。人間の……ソーラの姿が、光の中に消えていく。

光が立ち昇っているのではない……奴やつ自身が、光に変わっていく。

「……もっとも余は今初めて、自分もそうであることを知った。ツインテールにおいてこれほどまでに余に比ひ肩けんした者は、貴様が最初で最後だからだ」

　踏みしめる大地のない宇宙にありながら、俺は思わず気け圧おされて後あと退ずさりそうになった。

「……人間の、エレメリアン──」

　首領はゼロのツインテールを極めたとはいえ、エレメリアンである以上ツインテール属性は存在している。それが顕在化した、させてしまった姿が、これだった。

　これはツインテールではない。

　ツインテール属性を無機質にカタチにした姿。

　ツインテールへの愛そのものが生命体の姿を取った概念──。

「我わが名は、テイルギルディ。原初にして至高のエレメリアン……そして」

　光の生物は、全宇宙を覆おおい尽くすほどの巨大な属性力エレメーラを発散させながら、俺へと宣告した。

「アルティメギル首領、最終の姿。これより貴様のツインテールを滅する者である」

◇

　ハデスギルディの倒れる廃工場に、小さな影が近づいてきた。

「あははー、ボロボロだな、ハデスギルディ！」

　テイルホワイトとの戦いを終えた、アポロギルディだ。

「お互いにね。特に君は随分と無茶をしたようだなアポロギルディ、ツインテイルズ一人一人に戦いを挑んだのか？」

「やりたかったからさー。ちょびっとずつだったけど、全部楽しかった!!」

　ほぼ全てのツインテイルズと戦った彼女は、満ち足りた笑顔を浮かべていた。

　テイルレッドのライバルでもあった。テイルホワイトと因いん縁ねんを交わした。テイルフェニックスにも存分に挑んだ。他の戦士たちも。

　強い相手と戦うことに喜びを感じるアポロギルディは、誰だれかの好敵手に収まるタマではない。

「私も……満足している。弟子に超えられるというのは初めての経験だったが、気持ちのいいものだね。巣立つ子を見送る、親の気分を体験できた気がするよ……」

「なるほどなー。ま、僕はできればもう少しテイルレッドと戦いたかったけど……仕方ないか、首領様があそこまで熱くなれるほどに成長したんだから」

　アポロギルディは、足を投げ出すようにして勢いよく地べたに座った。

「あんな可か愛わいい幼女二人が、世界を超えてまで会いに来るほどに慕ってるやつだぜ？　僕たちが思っている以上に、テイルレッドはすごかったんだな」

　ロロリーのことを思い出し、アポロギルディはけらけらと笑う。

「私もテイルレッドは十二分に評価しているつもりだったが……私の尺度では……変態値では、彼女を計測することは不可能なようだ。どこまでも未知数の戦士だよ──彼女でありながら、彼であることも含めてね」

　そう言い終えたところで、ハデスギルディの残っていたもう一本の角つのにもヒビが入り、先端から崩れ落ちた。

「……ハデスギルディ……」

　それを見たアポロギルディは、何かを悟ったように寂しげに苦笑する。

「首領様とテイルレッドは、宇宙へと向かわれた」

空を見上げながら、ハデスギルディは万感を込めて呟つぶやく。

「みたいだね。で？」

「……アポロギルディ。君ももうほぼ余力は残っていないだろうが……それでもあえて言おう。私に力を貸して欲しい」

「そだなー。可か愛わいい幼女を見て機嫌がいいから、内容次第で手伝ってあげるよ」

ハデスギルディの真しん摯しな訴えに、アポロギルディは茶化しながら応こたえる。

「……私の擬人化属性パーソニフイ……その幻影能力を全開にし、首領様とテイルレッドの戦いを映すスクリーンを、なるべく多くの異世界にも転送したい。だが宇宙での首領様とテイルレッドの戦いをそのスクリーンに映し出すには、私に残された力だけでは不足しそうなのだよ」

身体からだをよろめかせながら、壮大な目的を語るハデスギルディ。

「へー。テイルレッドの勇姿をみんなに見せてあげたいってこと？　珍しいじゃん。君が敵に塩を送るなんて」

「違う。首領様を御護まもりする戦士は、もはや一体もいなくなった……。これから首領様は、さらに孤独な日々を送られることだろう」

首領のことを誰だれよりも案じてきたハデスギルディ。その退屈も、孤独も、どんなエレメリアンよりも理解しているのが彼だった。

「ならばせめて、首領様の一世一代の戦いを、あらゆる世界の人間に一人残らず目に焼き付けさせるのだ。あの首領様に向かって啖たん呵かまで切った、愚かで勇敢な人間たちに」

アポロギルディは膝ひざを手で打って立ち上がると、やる気を漲みなぎらせた。

「……いいね。そういう考え、好きだよ、僕も」

アポロギルディは手の平に属性力エレメーラを球体状に練り上げ、ハデスギルディへと手渡す。

ハデスギルディはその力を自分のものと合わせ、空高く極彩色の光を放出する。それは空間に溶け込むように消え、数あま多たの異世界に飛び立っていった。

「さあ、刮かつ目もくせよ……人間たち……!!」

総そう二じたちの世界に、異世界中の空に、オーロラめいて荘そう厳ごんな光膜が形成されていく。拡散されていく。テイルレッドのツインテールが形成されていく。

それはもはや、スクリーンと呼称するにはあまりにも高精細リアルで。

目の前でテイルレッドが本当に戦っていると錯さつ覚かくするほど、色鮮やか。

ただ己が大将の一世一代の戦いを語り継ごうとする、忠臣の心の結晶だった。

元より僅わずかな時間しか残されていなかった二体は、最期に意地を通すために使用した力で、その生命いのちの時間を一気に縮めてしまった。

「感謝とは、言葉で感情を射抜くと書くが……果たして今の私の思いを、君の心に伝えきれるかどうか……」

ハデスギルディは満足げに嘆息すると、アポロギルディに礼を伝える。

「ありがとう、アポロギルディ。君たちと同じ時代を生きることができて、本当によかった」

「うん……僕も楽しかったよ。強くなりすぎて寂しい時もあったけど……やっぱいいよな。自分の好きなものを語り合える仲間や、敵がいるってのはさ」

言いながら、アポロギルディの腕に、足に、ヒビが入っていく。

もう少し言葉を交わし合いたかったが、それきり会話は途絶えて

しまった。

「……ハデスギルディ？」

　もう、返事は返ってこない。

　目の前を生命いのちの色に煌きらめく粒子が舞い飛んでいくのを見て、アポロギルディは穏やかに微ほほ笑えんだ。

「きっとこの世界でテイルレッドと戦った奴やつらも、最期はみんなこんな気持ちだったんだろうなあ」

　小さな拳こぶしを、空に向かって衝つき上げるアポロギルディ。

　そこに浮かぶスクリーンには、テイルレッドのツインテールがはっきりと見えた。

　幼い戦士が最期に声をかけたのは、主である首領ではなく……自分と同じく幼い、強い戦士だった。

「テイルレッドー！　しっかり頑張れよー‼」

　それきり、無邪気な声が響くことはなかった。

　太陽のような優しい色の光がその場に舞い、そしてそれも、静かに消えていった。

　異世界侵略組織、アルティメギル。

　そこに所属するエレメリアンは皆、組織人でありながら自分の欲望に正直な戦士たちだった。任務よりもついやりたいことを優先してしまうような、憎めない連中だった。

　最終部隊・終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーの戦士……神といえども、それは変わらなかった。

　それぞれ存分にやりたいことをやり、言いたいことを言って。そして──。

四体は今、戦いの生涯に終止符を打ったのだった。

◇

テイルギルディ──アルティメギル首領の最後の姿。

ここまで来たら、どう戦うかなんて考える次元じゃない。

ただありのまま、思うままにツインテールをぶつける。それだけだ。

「───全員敗れたか……終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカー」

首領は、遥はるか地球へと瞳ひとみなき視線を馳はせながら呟つぶやいた。

「アポロギルディ、ポセイドンギルディ……ゼウスギルディ、ハデスギルディ。永きにわたり余の護衛、大義であった」

自分の忠臣たちへ、奴やつらしからぬ実直な感謝の言葉を手た向むける。

そうか……ブルー、イエロー、ブラック、ホワイト……みんな、勝ったんだな。

「奴らは正真正銘、最強のエレメリアンであった。お前以外のツインテイルズがここまで善戦するとは、想像だにしなかったぞ」

「善戦なんて簡単な言葉で片づけんなよ。仲間たちはみんな、ツインテールの限り戦い抜いてくれた……」

俺はテイルカリバーを握り締め、気力を振り絞った。

「そして俺がお前を倒して、全てが終わる!!」

「それができぬから、憐あわれだというのだ。将しようたるお前の敗北で、このささやかな抵抗戦は終結を迎えるのだから」

　渾こん身しんの力で振り下ろした俺の一刀は、あえなく空を切った。

「何っ！」

「……お前には、この姿を見せたくはなかった」

　背後から声が聞こえ、俺は振り向きざまに斬きりつける。

　しかし、やはりそこにも首領の姿はない。

　今度はまた先ほどまでいた場所に。もはや移動すら知覚できない高速。

　先ほどまでの光速のツインテールよりも、さらに速い。光よりも速いということがあり得るのか……!?

「……見せたくなかった、って……人間の姿のままでいたかったってことか」

　俺は冷や汗を宇宙に舞わせながら、問い質ただす。

「そうではない。この真の姿ではもはや、自分の力に抑えが効かぬ──」

　首領が手を衝つき出すと、光を力任せに押し固めたようにねじれた形の衝撃波が放たれた。

「くっ……！」

　紙一重で躱かわしたが、背中のブレイザーセイバーが一基、刃先を砕かれた。

　触れるだけで、アルティメットチェインのテイルギアが破壊される……！

「せっかく余のものとしたお前を……完全に消滅させてしまうであろうからな」

　テイルギルディは自分の頭に手を添えると、こともあろうにツインテールを一本、取り外してしまった。握り締めたツインテールが、光の剣に変わる。

「着脱可能なツインテールだと……!?」

「逆に問う──テイルレッドよ。貴様のツインテールは、なぜ外せぬ」

　あまりにも無感情。奴はツインテールを取り外すことに、良心の呵か責しゃくも悲しみも何もないというのか。

「ふんっ!!」

　力任せに剣を振るってくる首領。

　受け止めたテイルカリバーの刀身に、亀き裂れつが入った。

「ぐうっ……!!」

　テイルカリバーは、俺の中にいるツインテールをブレイザーブレイドと合体させて完成させる大剣。そのダメージは、俺自身の身体からだにもフィードバックされる……!!

　俺の背後、遠く離れた小惑星が一刀両断に断ち割られた。先ほどの一いつ閃せんで放たれた衝撃波が、星を斬きり裂さいたのだ。

　そうして斬り結ぶたびにテイルカリバーに亀裂が入り、俺の身体に激痛が走る。

「もはや消えよとも言わぬ。千ち切ぎれて果てよ、究極のツインテール」

　いつしか首領の頭上に、二つの光の輪が浮き上がっていた。

　首領はその輪を掌中で練り込み、再び解き放つと──巨大に膨ふくれあがっていた。

　その見た目はまるで、エレメリアンたちが使う属性力エレメーラを奪取するリング。

　数あま多たの属性力エレメーラを奪ってきた魔の輪の、原初オリジン。

「我わがもう一つの神技──〝宇宙の紐が二房を結ぶテイルストリングセオリア〟」

その二つの光の輪が、俺の上半身と下半身を包み込むようにして放たれた。

回避することもできず、俺は為なす術すべ無くその衝撃波に取り込まれる。

喩たとえるなら、身体全体を縛る巨大な髪ゴム。凄すさまじい圧力が、全身を襲おそった。

「うわあっ……！」

真っ先にテイルカリバーが弾はじき飛ばされる。手を伸ばしても届かず、俺は自分の中にいるツインテールを実体化した剣が、宇宙の彼方かなたへ消えていくのを見ていることしかできなかった。

いや、剣だけではない。

全身がねじ切れそうな程の衝撃。

力任せにツインテールの根元を縛るように、際限なく俺の身体を締め上げてくる。

背中のブレイザーセイバーがひび割れ、一基残らず破砕されていく。

「ツインテールは……しっかりと結ばねば解ほどける。たとえ頭皮と髪にどれほどのダメージを与えようと、力の限り縛らねばならぬ」

「ふざ、けるな……解けるのが怖いから、ツインテールを傷つけても構わないっていうのか!!」

テイルギルディは掌てのひらを突き出し、圧力をさらに強めた。

「だから余は強さを極め……お前は極められなかった」

「ぐっ……ああああああああああ!!」

腕、腰、脚……全身の装そう甲こうに次々に亀裂が走り、そして砕けていく。

しかしそれ以上の激痛が、左腕に叩たたき込まれる。

　破壊の衝撃が、左腕に集中している……!?

　俺のツインテイルブレスを狙ねらっているのか……！

「ツインテイルブレス、が……！」

　中心の宝玉にヒビが入り、そして、全体に広がる。

　ついには、ツインテイルブレスは木こっ端ぱ微み塵じんに砕け散ってしまった。

「貴様のツインテール、確かに砕いた」

　勝利を確信し、静かに宣告する首領。

　砕けた……。ツインテイルブレスが、破壊された。

　トゥアールにも、その危険性は指摘されていたことだ。

　ツインテイルブレスは、俺自身のツインテール属性を可逆変化させることで発現した強化デバイス。俺の生命いのちそのものを左腕に塡はめて戦っているも同然だった。

　二つのテイルブレスをツインテールとして共鳴させることにより莫ばく大だいな力を得られるが、それに見合ったリスクを孕はらんでいたのだ。

　つまり……ツインテイルブレスが無くなれば、通常のテイルレッドにさえ変身できなくなるどころか、俺自身の生命も尽きる。

「何とも寂しい幕引きではないか。テイルレッドの正体を知り、それでもなお声援を送り続けた人間たち……その声が届かぬ闇やみの中で、お前の戦いの人生は終わるのだから」

　俺は観み束つか総そう二じの姿に戻り──大宇宙の只ただ中なかに放り出された。

　瞬間。宇宙という闇の洗礼が、総身を襲おそう。

　絶望的なまでの死の実感が、五体を突き抜ける。

「それほどまでの進化を果たさなければ……そして余の侵略を素直に受け止めていれば……」

　憐あわれむような首領の声が、どんどん遠くなっていく。

　テイルギアを通さなければ声の届かない、宇宙の中で。

　最期を看取る者の声は、あまりにも無機質だった。

「だが、斯か様ようにツインテールを愛さなければ、男の身で最強のツインテールの戦士になることはできなかったであろう。お前はすごい男だ。余は初めて、ただの人間に心から敬服した」

　生身のまま、宇宙を漂う。

　冷たい……。宇宙って、こんなに冷たかったんだな。

　ＳＦ映画でそういう悲劇的な場面を見たことがあるけれど、実際に着の身着のままの生身で宇宙空間に出てしまった人間は、俺の他には多分この世の中にはいないだろうな。

　けど、そういう架空の映像で見てきたものとちょっと違う。一瞬で身体からだが凍り付いたりしないし、目玉とかが飛び出て爆発したりもしない。

　あえて言うなら、息が苦しいぐらいか。それは本当だったんだな。

　ただそれも、意識が遠くなっていく方が速くて実感が薄い。そこまで苦しまずに終われるってことか……。

　自分のツインテール属性を犠牲にして、首領と相打ちになる覚悟さえしていたっていうのに……俺のツインテールだけが消えて終わりだなんて……。

「安らかに眠れ、テイルレッド……いや、観み束つか総そう二じ。悠ゆう久きゅうのツインテールを生きたこの余が認める、最高のツインテールの戦士よ」

　首領の手た向むけの声が、微かすかに聞こえた。

　──いやだ。

　消えてたまるか。

　俺の生きた証あかし。ツインテールを好きだと言う気持ちを分かち合った、みんなのためにも。

「──ツインテール……」

「……何」

　首領の声に、微かな動揺が交じる。

　それはそうだろう。生身で宇宙空間に放り出された俺は、とうの昔に死んでいるはず。

　しかも、本来人間の声が響くはずのない暗黒の中で、テイルギアの加護もない今の俺の言葉が首領に届くはずがないのだから。

「お前さっき……声が届かない……って言ったな……」

「そんな状態でまだ、余に声を届かせるか……」

「聞こえてるぜ……。俺には。みんな、の、声……」

　生命いのちが消える、最期の瞬間まで。俺は、強がり続ける。

　負けてたまるかと足あ掻がき続ける。

「余には聞こえぬわ。それは、今いま際わの際きわの幻聴に過ぎぬ。お前に届く声はもう─ない」

　冷徹な断言が、俺の希望を断ちきろうとした、その瞬間。

『テイルレッド────────────────ッ!!』

　力強い声が聞こえ、閉じかけていた俺の瞼まぶたが……見開かれた。

◇

　地上では、スクリーンにテイルレッドの戦いが映し出されていた。

　固かた唾ずを呑のんで見守る人々の前で、首領はついに真の姿を現した。

「見ろ！　あの首領とかいうやつ、すっかり怪人の姿になっちまった!!」

「ちょっと可か愛わいいって思ってたのに……」

「まあ、ソーラたんそっくりだったからな……」

　最終怪人テイルギルディ。その神秘的でおぞましい姿に、人々はざわめき出す。

　そして、人じん智ちを超えた、もはやそのほとんどを目視できない光の領域の戦いの果てに、テイルレッドはギアを砕かれ、宇宙に投げ出された。

「ああっ……テイルレッドが!!」

「また変身が解けちまった……あれ、やばいんじゃないのか!?」

　もはや、変身が解けて観み束つか総そう二じの姿になっても、そのこと自体に驚きはしない。

　だが普通の人間が宇宙空間に投げ出されるのを見ては、それがとてつもない危機なのだということは、世界中の誰だれもが理解できる。

　驚き、ざわめき、その果てに……世界で、誰が最初に声を上げたのか。

「テイルレッド――――――――――――――――――――ッ!!」

　隣の人が声を上げれば、自分も。またその隣の人も。

　世界中の人々が、次々にあらん限りの声で叫ぶ。

「……テイルレッド！　負けるな！」

「頑張れ、テイルレッド────ッ!!」

「レッドちゃ────んっ!!」

「テイルレッドたんっ……!!」

「────テイルレッドッ!!」

　正体を知ってなお、テイルレッドを少女と、ツインテールと遇し、声を送る。

　声援はいつしか、地球そのものを包み込み、空を揺らした。

　一人、宇宙で孤独に戦う少年に。

　自分たちがついていると、手を差し伸べるかのように。

◇

　頑張れと。負けるなと。

　そして、ツインテールを守ってくれと。

　世界中の人たちの声が、はっきりと聞こえた。

「……！　いや……聞こえる……!?」

　テイルギルディも遅ればせながらそれに気づき、不可解な視線を眼下の地球へと送る。

「馬ば鹿かな……ツインテールに語りかける術すべを知らぬただの人間どもの声が、何な故ぜこの宇宙にまで届く!?」

　そんな難しく考えることじゃないだろ。意外と誰にでもできることかもしれないぜ。

　ツインテールに語りかけることなんて。

　温かい。

　孤独に宇宙空間を漂っていた俺を、皆の声援が取り巻いていく。

　それはまるでテイルギアのように俺の身体からだを包み、死の世界から守ってくれている。

　俺は、虚うつろな目で地球へ視線を送る。

　授業中。窓の外に浮かぶ雲が、ツインテールに見えることがよくあった。

　今、見下ろす地球の蒼あおに、ツインテール型の雲が浮かんでいるのがはっきりと見えた。

　世界中の人々だけではない。

　地球そのものが、俺に声援を送っているかのようだった。

　いつしか息苦しさは消え、俺の左手首に、ツインテイルブレスが再生した。

　そしてそれは、俺の身体に吸い込まれていく。

「何……！」

　テイルギルディの驚きよう愕がくの声は遠く、人々の声援はますます大きく聞こえる。

　結ぶんだ。

　宇宙にまで届いた希望。世界中の人々の、夢と願いを……俺のツインテールとして。

　テイルギルディは、声を戦慄わななかせていく。

「おお──み、観える……この星の人間の心が束なり……その総すべてが、テイルレッドの二房の髪へと変わってゆくのが……!!」

　ツインテールを結ぶ練習なら、ずっとしてきたじゃないか。

　ちょっと髪の毛が見えないってだけで、やることはいつもと変わらないさ。

　左右の髪の量を均等に。結び目の高さを同じに。

　優しく髪の毛を掬すくい、根元をしっかりと留とめる。

　そして……ツインテールが完成する。

「いや、あの地球だけではない！」

　テイルギルディは、はっとして四方へ視線を彷徨さまよわせた。

「全宇宙の……全異世界のツインテールが結集し、テイルレッドに力を与えている!!」

　そうか……あまりにも多くの声が聞こえると思ったら、俺たちの地球せかいどころか、全異世界の人間が応援を届けてくれていたのか。

　今、ツインテールの戦士としてエレメリアンと戦っている、どこかの世界の少女。

　アルティメギルに伝説として広がっているらしい、ツインテイルズだ。すでに俺の噂を……こんなツインテール馬ば鹿かがいるんだぞと聞いていた人たちも、多くの異世界にいるだろう。

　その全ての思いは……二房だから、繋つながる。

　右の髪の束が隣り合った左の束と手を取るように結び合い、それを繰り返して無限に思いを結び合うことができる。

　それが……ツインテールだ。

　心が溢あふれる。俺の髪に繋がる。

　億か、京けいか……いや、まだまだ足りない！

　その数まさに、無量大数ツインテール！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

　俺が衝つき上げた拳こぶしに、まばゆい光が集束していく。

　それは真紅のテイルブレスに、黄金の輝きをもたらした。

　温かな光をゆっくり、胸に抱き締めるように。

　右腕を胸の前で構え、俺は叫んだ。

「テイルオン!!」

　俺の全身から、大銀河を覆おおい尽くさんばかりの光が解き放たれる。

　暗黒宇宙に黄金の光の帯が走り、俺の周囲で繭まゆ状に形成された。それが光の粒子をほとばしらせながら、全身に張り付いていく。

　身体からだのシルエットが変化を遂げていく。肩、胸、腰、足──上から順に、爆裂するように光が弾はじけ、首から下が金色こんじきのスーツに覆われた。

　これは僅わずか〇・〇〇〇〇一秒──目にも映らぬ一瞬の出来事だった。

　蒸気のように噴き出す、黄金色の光条。金の装そう甲こう。

　ただ一つ、たなびくツインテールだけが、変わらずに太陽の灼しゃく熱ねつを宿した真紅だった。

「金色のテイルギア……束ねに束ねた、ツインテールの結晶……！　これがみんなの思いを結んだ、俺の最後の変身！　最後のツインテール!!」

　何かの真理を体現した強化形態ではない。

　ただ純粋に、黄金のようにまばゆい人の心を、ツインテールの愛を、束ねに束ねた力。

　無限大にツインテールへの愛を結んだ、テイルレッド最後の力。

　それがこの──

「テイルレッド・ゴールドチェインだ‼」

『やった……レッドちゃんが！』

『俺たちの声が届いたんだ‼』

『金色に光ってる！』

『かっこいー‼』

『がんばれーっ‼』

　聞こえるぜ、みんな。ありがとう。

　ツインテールを、ありがとう──。

「全ての……ツインテールを愛する人たち！　みんなの力を、愛を借りるぞ‼」

　俺が叫ぶと同時。テイルギルディが、再びツインテールを外して斬りかかってきた。

　俺はその星をも斬り裂さく斬ざん撃げきを、突き出した右手で易やす々やすと受け止めた。

「むうっ⁉」

　驚きよう愕がくするテイルギルディ。俺はその剣を摑つかんだまま、強引にパンチを繰り出した。

「ツインテールを安易に外すな……戻せッ!!」

「ぐおおおおおおおっ!!」

　拳こぶしを顔に叩たたき込みざま、テイルギルディの頭にツインテールを装着する。

　その勢いで激しく吹き飛ばされ、別の小惑星に激突するテイルギルディ。

「ツインテールを信頼して武器にするならわかる……けれどお前は、無機質な道具としてツインテールを使い捨てようとしているだけだ!!」

　俺が一喝すると、テイルギルディは語気を怒らせて反論する。

「何がおかしい……極めたツインテールは、自分自身の道具だ！　そうして躊躇ためらわずに使い捨て、また生やす……その輪りん廻ねこそが、至上の愛と呼べるのだ!!」

「違う！　ツインテールは、道具なんかじゃないっ!!」

　俺は金色のフォースリヴォンを叩くと、二刀のブレイザーブレイドを両手に握り締めた。

　その刃やいばは、ギアと同じ黄金に輝いている。

　テイルギルディに向け飛ひ翔しようし、まずは右のブレイドで。ツインテールを揺らしながら、左のブレイドを。

　剣を振るうことで生まれる炎の軌跡は宇宙空間に巨大に拡ひろがり、一撃一撃でテイルギルディの全身を呑のみ込まんばかりに炸さく裂れつする。

「ぐっ……！　ぬうううううう……!!」

　テイルギルディが、初めて確かな苦く悶もんの声を上げた。

　ゴールドチェインは、俺のツインテールに刻まれた全ての記憶を力として展開している。

　ライザーチェインよりも強く。

　フォーラーチェインよりも速く。

　そして、アルティメットチェインよりも究極に。

「だあああああああああああっ!!」

　今一度、渾こん身しんの一いち斬ざん。周囲が連鎖的に爆裂し、テイルギルディは大きく吹き飛ばされた。

「この、力は……そうか……ゼロのツインテールの対極たる、無限大のツインテール……！　言葉のとおり体現できるのは、貴様ぐらいのものであろう!!」

「お前たちアルティメギルは、俺たちの世界へ次々に強力な部隊を送り続けた。そのせいで、俺たちの世界は異世界の中でもとりわけ目立つ存在になっちまった……異世界のお姫様が、そう言ってた」

　アルティメギルに抗あらがって、強部隊を次々撃破し、戦い続けている奴やつらがいるらしい。

　そんな噂が異世界を走り、異世界に暮らす人々が俺たちの存在を認識した。

「お前たちの侵略が、俺たちツインテイルズの存在を多くの異世界に広めた……人々が、ツインテールに希望を見た！　その全てが今、俺に力を貸してくれている!!」

　テイルギルディはフューネラルケインを構え、挑発するように声に愉悦を込めた。

「ならばこそ、恐ろしかろう……幾億幾兆の異世界……そこに在る全ツインテールを合わせたに等しき力を、お前はその手にしてしまったのだぞ!!」

「驚きはしないさ……ツインテールには、それだけの魅力がある!!」

　ただ俺が、あまりにもツインテール馬ば鹿かすぎるから……みんなが俺に力を貸してくれた。それだけの話だ。

　どれほど強大な力がこの五体に充じゅう溢いつしても、俺は自分を見失うことはない。

「許せぬ……！　余は、余は貴様を誰だれよりも認めていたというのに……！　人の身で個の極致へ辿たどり着いた貴様に、惜しみなき敬意を払っていたというのに!!」

　テイルギルディの五体が、隆起していく。

　テイルクロスの形状を身体からだに顕けん現げんさせ、さらに肩や頭部、背中に棘とげや角つのを作り出し、より禍まが々まがしい見た目となって怒りを体現している。

「ツインテール好きな人間どもから寄ってたかって愛を集めてまで生きもがくとは、何という裏切り！　散り際を誤ったな、テイルレッド!!」

　フューネラルケインに強大な属性力エレメーラをまとわせ、首領は俺の脳天に振りかぶった。

「そのような付け焼き刃ばのツインテールが、このアルティメギル首領テイルギルディに通用するか――――っ!!」

　今度は首領の攻撃が、空を切る番だった。

　俺の身体は黄金の粒子をまといながら、超絶の速度で瞬動する。

　首領は愕がく然ぜんとしながら振り返り、煌きらめく粒子に目を奪われた。

「粒子……ツインテールの粒子だと!?」

　トゥアールが名付けてくれた、新粒子にして究極物質・ツインテリウム。アルティメットチェイン覚かく醒せいとともに体得したその力は今、ついに神しん髄ずいを究めた。

「光速をいくつ超越したというのか……。今度は余が貴様に追いすがる番だというわけか!!」

　俺のツインテールもまた、光速を遥はるかに超越した。

　俺と首領の戦いは今さら、光速なんていう尺度で収まるものじゃない。この戦いに、物理法則はない。

　物理も科学も、全てを超越し――最後に、ツインテールが残った。

「見えるか、首領……ツインテールの輝きが!!」

　俺は黄金こがね色いろに輝くブレイザーブレイドを振るい、その軌跡に六枚の巨大な刃やいばを形成した。

　ツインテリウム粒子──俺の身体からだを取り巻く究極物質を凝縮させた、黄金に輝くブレイザーセイバー。

　その名も、ゴールデンセイバー。

　それは俺の周囲を無軌道に乱舞し、首領へと殺到する。

「むうっ……!?」

　首領はフューネラルケインを振るい、一枚、二枚と何とか捌さばくが……続く残りのセイバーに次々と斬きりつけられ、暗黒宇宙の只ただ中なかで身体を右へ左へと振り回す。

「おっ……おおおおおおおおおおおおおっ!?」

　光を超越し飛ひ翔しようする黄金の刃に翻ほん弄ろうされ、テイルギルディは全身の各所を次々と爆発させながら後退した。

「凄すさまじい力だ。本当の女神に……神になった気分はどうだ、テイルレッドよ……！　孤独であろう……恐ろしいであろう!!」

「変わらねえよ。俺は何も変わってない。そんな大した人間じゃない……」

「強き者は傲ごう慢まんになる義務がある……謙けん遜そんは許さぬぞ、テイルレッド」

　それこそ、傲慢だ。

「初めてお前たちアルティメギルと戦った日──俺が、何したか教えてやろうか？」

　俺は剣を振るい、ゴールデンセイバーを粒子に戻した。

　そして、俺たちの始まりの日を語る。

　首領の間でこいつが俺に、自分の始まりを語り聞かせたのと同じように。

「部活動の入部希望アンケートに、『ツインテール部』って書いたんだ。それを担任の先生がうっかりバラしたもんだから、クラスのみんなに随分と笑われたっけ……」

　そして俺は実際に、ツインテール部を作った。

　ツインテイルズが──俺の青春だった。

「だから、俺が変わったわけじゃないんだよ……俺のツインテール好きを見た人たちが、ツインテールを好きになってくれた。あの日俺のアンケートを見て笑ったクラスメイトたちが、今じゃ一緒にツインテールを好きだって笑ってくれるようになった……そしてその『好き』が、世界中に広まっていった。それだけさ」

　だから今、俺はこんなにも強く強く力を振るっていられる。

　何が孤独なものか……何が恐ろしいものか!!

「あの日から、俺は何も変わっちゃいない。同じ気持ちを懐いだいて今日まで生きてきた!!」

　俺は宇宙の彼方かなたへ消えたテイルカリバーを、再びその手に呼び戻した。

　握り締めたテイルカリバーもまた、黄金に輝いている。

　右手にテイルカリバー。左手にブレイザーブレイド。

　二つの剣をツインテールの字に構え、俺は地球を背後に臨のぞむ。

　きっと地球には俺のツインテールが重なって、地球からツインテールが生えたように輝いているのだろう。

「うおおおおおおおおっ!!」

　一瞬の万感を着火剤に、俺は首領目掛けて飛ひ翔しよう。

　黄金の光を煌きらめかせながら、左右の二刀で次々に斬ざん撃げきを放った。

「テイルカリバー!!」

無限装塡アンリミテッドモード。生命装塡ライフモード。輝光装塡ブリリアントモード。絆装塡ネクサスモード。希望装塡ホープモード。覚悟装塡レゾリュードモード。道標装塡リーディアモード。時空装塡

塡クロノモード。無力装塡エクステインクモード。そして──究極装塡アルテイメットモード。

　テイルカリバーに宿った力が次々に瞬間発動し、星々の狭はざ間まに黄金の斬ざん痕こんを刻む。

「ふは、はははははは……はははははははははは!!」

　テイルギルディは、ダメージを受けながらも笑っていた。

「感謝しよう、テイルレッドよ……！」

　楽しそうに、攻撃を仕返してきた。

「本当に退屈な人生であった。孤独だった……。余は、生まれて初めて挑戦者になれた……!!」

　あまりに強くなりすぎた。

　あまりにツインテールを愛しすぎた。

　始まりは同じなのに、相あい容いれなかった二つのツインテールが、宇宙の闇やみの中で踊る。

　俺のツインテール愛の方が強い。いいや、余だと。

　無言のままにツインテールをぶつけ合い……どれだけ永き時が流れただろう。

　光速を超越した俺にとっては、それも瞬まばたきの間の出来事だったかもしれない。

　俺は二刀を放り投げると、真まっ直すぐに急上昇。

　身体からだの中から飛び出させた、自分自身の光のツインテールを背に翼のようにまとわせ、今度は急降下して首領目掛けて渾こん身しんのキックを叩たたき込んだ。

「ぐはああああああっ…………!!」

　大きく吹き飛ばされ、巨大な岩の塊かたまりに激突する首領。

　観測史上最大のクレーターが、月に形成された。

　それは俺の放った衝撃のままに、ツインテールの形を刻んでいる。

　きっとこの先、世界の童話では、月にはツインテールが住んでいると語り継がれていくことだろう。

「俺のこの力を付け焼き刃ばだと言ったな……」

　俺たちはさらに飛翔しながら宇宙を飛び、いずこかの小惑星を貫いて破壊しながら、激突を続けた。

「ぐっ……おおおおおおおおお!!」

「俺はこれが好きだ……俺はこういうのがいい……そうやって自分だけの『大好き』を語り合うのが、人間の心だ……属性力エレメーラだ!!」

　二つ、三つと星を貫き、テイルギルディが吹き飛ぶ。

「ツインテールをゼロにしてしまった時点で、お前は強さと引き換えに愛を……属性力エレメーラを見失っていたんだ!!」

　吹き飛ぶテイルギルディに急迫した俺のパンチが、頬ほおに突き刺さる。

「うぐううう……貴様が全ての人間のツインテールを束ねる者ならば、余は全てのエレメリアンのツインテールを束ねる者……！　負

けぬ！　負けぬぞ、テイルレッド!!」

　あのテイルギルディが……常に余裕の微ほほ笑えみを湛たたえていた首領が。

　必死の形ぎよう相そうで俺に斬きりかかってきている。

　ツインテールを極めすぎて、ついにはゼロのツインテールにまで行き着いてしまった俺と同じツインテール馬ば鹿か。

　まるで、初めてツインテールを知った人間のような純粋な気持ちで。

　光を超えた速さでぶつかり合う中、俺には首領の攻撃がはっきりと知覚できていた。

　やっと、わかったから。

　わかり合えないと思っていたこいつのツインテールは……結局、俺と同じただのツインテール馬鹿だったのだと、理解できたから。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「はあああああああああああああああああああああああああ!!」

　けれどそれは、一方通行の理解だった。

　逆にテイルギルディは、俺のツインテールから理解を遠くしていった。

「フッ……！　ハハハ……！　ハハハハハ……！　この余が……全異世界を手にするアルティメギル首領たる余が！　たった一人の人間のツインテールを理解できぬとは……!!」

　テイルギルディはフューネラルケインへと全エネルギーを集束させ、俺に向かって突撃してくる。

「テイルレッドよ！　貴様のツインテールはなんなのだ——————っ!!」

　全てを識しった超越者は……最後に、そんな哲学を問いかけてきた。

「俺の……!!」

　黄金の輝きが俺の身体からだに吸い込まれるように消えていき、テイルギアが赤色に戻っていく。

「俺たちのツインテールは！　未来だ!!」

　ブレイザーブレイド一本を引っさげて、俺は腰のブースターを全開。

　首領目掛けて突撃し、俺が最も多く振るった必殺技に、最後の一撃を託した。

「グランドブレイザ――――――――――――――――――ッ!!」

「ぐああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

　突き出されたフューネラルケインを砕き、銀河を一直線に断ち割る炎の剣が炸さく裂れつした。

　首領の背後で、無数の星々が爆発していくのが見える。

　よろめきながら、フューネラルケインの残ざん骸がいを手放し……首領は、俺を見み据すえた。

「見事だ、観み束つか総そう二じよ」

「……テイルギルディ……」

　賞賛の言葉は、真実の俺に。

　脳天から一直線に、黄金の光条が走っている。



「余のツインテールは、ここまでだ」

　そしてテイルギルディの全身は、激しく放電を始めている。俺が今まで何度も見てきた、エレメリアンの最期の瞬間だ。

「しかし忘れるな。人間ある限り、エレメリアンも生まれ続ける……ツインテールをめぐる争いに、終わりはないのだ!!」

　それは負け惜しみや呪じゅ詛その言葉ではない。

　超巨大組織の長おさとして、それを破った俺への手た向むけの言葉。激励のように力強かった。

「さらばだ、テイルレッド」

「ああ……じゃあな、アルティメギル首領」

　別れの言葉は、戦士の俺に。

　宇宙に、巨大な光の爆華が咲いた。

　宇宙全てを呑のみ込むような光は……しかし、やがて宇宙の中へと消えていく。

　それを見届けたあと、後にはただ静寂だけがそこにあった。

　たった一つ、俺のツインテールしかこの場にないことを噛かみしめた俺は、ようやく戦いが終わったという実感に包まれた。

「……じゃあな。アルティメギル……」

　ふっと、全身から力が抜けていく。また、今にも変身解除してしまいそうだ。

　あれだけの力を発揮したんだ、限界か。

　けれど、俺のツインテールに悔いはない。

　ツインテールを守れて、よかった……。

　これからは、この宇宙に浮かぶ星のツインテールになって、みんなを見守るよ。

　俺はなびくツインテールとともに、星々の輝きの中にそっと身を任せた――――

エピローグ　ツインテールあふれる世界へ。

　喫茶店〝アドレシェンツァ〟の店内は、今日も活気に溢あふれていた。

　というよりも、溢れすぎていた。

　店内はもはや、座る場所もないほど客で溢れている。立ち食いやら立ち飲み客でごった返していた。

「いよいよ改装しないと駄目かしらねえ～」

　カウンター内で苦笑しているのは、総そう二じの母、未み春はる。

　もちろんここが、世界を救った英雄・テイルレッド観み束つか総二の自宅だと広く知れ渡ってしまったことも大きい。

　しかし最近、この店が繁盛するもう一つの理由があった。

　それは──

「コーヒーセット、お待ちどおさん。砂糖とミルクはいるかい？」

　ポニーテール眩まぶしい少女、結いわ翼ばね唯ゆ乃のが、アルバイトとして入ったことだ。

「唯ゆ乃のちゃん、すっかりこの店の看板娘だねえ」

　客にからかわれ、唯乃は八や重え歯ばを煌きらめかせて笑う。

「オイルフィールドアゲマス」

「いや、俺様火ぃ使うから。油田て火気厳禁だろ？」

　しごく真っ当な理由でプレゼントを固辞する唯乃。常連客とのコミュニケーションも板についてきたようだ。

『さて、次のニュースです。俳優デック・ニールソンの出演する映画「ＴＷＩＮ　ＴＡＩＬＳ」の公開日が決定しました。延期となっていましたが、五月に全世界一斉上映です。粋な〝先行公開〟があったこともあり、各国の歴代興行収入記録を塗り替えるのは確実だと──』

店内のテレビにデックの姿が映り、それを見た客たちも顔を綻ほころばせる。

最終決戦に駆けつけて披露したスーツは、上映前だというのに世界中で語り草だ。

制作発表の時にあれ程嫌そうだった女優も、華々しい微ほほ笑えみでレッドのスーツを着ている。こっちは、妙齢の女優にはちょっと大丈夫だろうか、という感じの攻めた露出度だった。

嬉うれしいニュースを見た後、唯乃はふと、神妙な貌かおつきになった。

確かにこの店は賑やかだが――それでも、大切なものが欠けていた。

「唯乃ちゃん。うち部屋余ってるし、一緒に住んでくれてもよかったのよ？」

未み春はるが残念そうに言うと、唯乃は頭の後ろで手を組んで苦笑した。

「俺様もそうしたかったけど……その……な。できねえよ……」

唯乃は今、この世界で一人暮らしをしている。未春のことを思えば一緒に住むべきなのかもしれないが、そうできない理由があった。

「……そう、ね……ごめんなさい、唯乃ちゃん。思い出しちゃうわよね……」

「ああ、昨日きのうのように思い出せるぜ。あの日の戦いからもう、三週間か。早いもんだよな」

「忘れることなんて、できないわよ……」

唯乃と未春は揃そろって寂しげに笑うと、店の天井を見上げた。

それに呼応するように、店内の客たちの明るい声もなりを潜めていく。

こうして未春が強がりで笑えるようになるまでさえ、時間がか

かった。

「助けに来た俺様や、異世界のお姫さんたちが生き残ったってのによ……。総そう二じ、お前も……愛あい香かも、慧え理り那なも、トゥアールも、イースナも、みんな……」

　唯乃は総二以外に対しては「～さん」や「～の姉ちゃん」などと呼んでいたが、今は全員、呼び捨ての名前で呼ぶようにしていた。

　まるで、そうやって強がりを重ねなければ、心が耐えられないというかのように。

「また会おうって、言ったじゃねえか。イースナ……」

　互いを認め合って別れた、イースナの笑顔が忘れられない。

「トゥアール。せっかくツインテールになれたのに……俺様と戦わないうちにいなくなっち」

「──だから、トゥアールちゃんを勝手に星にするなと言っているでしょう!!」

　熱が入ってきた唯ゆ乃のの言葉は、半ばで遮さえぎられた。

　制服に白衣を羽は織おったトゥアールが奥の廊下から店内にやって来たのを見て、客たちがわっと声を上げる。

「いい加減そのネタで小芝居挟むのはおやめなさい！　あなた、どんどん演技力高くなってきてるじゃないですか!!」

「ここ最近の、この店と俺様のお約束なんだよ」

　トゥアールに詰め寄られても唯乃はどこ吹く風、ポニーテールを揺らす。

「トゥアールちゃんはこうしてピンピンプルンプルンしてるのに縁起でもないですね！　演技だけに!!」

「いや、だってよぉ。あんたら四人、俺様たちが反応を頼りに迎えにいったら、揃そろいも揃って天に召されたみてーに安らかな顔し

てんだもんよー」

　世界中に配置されたエレメリアンを全て撃破した後、唯乃は終の零星フオー・ヴアリス・ジヨーカーと死闘を繰り広げたホワイトたちを捜しに行った。彼女たちは全員、完全に燃え尽きていた。

　タチの悪い冗談でこんなことをしているのではなく、唯乃はその時トゥアールたちを本気で心配したからこそ、こうしてその不安を笑い飛ばしているのだ。

「ま、せめてあんたらだけでも無事でよかったぜ。総そう二じのやつも喜んでるだろうよ……」

「え、まだかぶせるんですか!?」

　トゥアールの前で、唯乃はさらに自分の演技に入り込んだ口調で続けていく。

「テイルレッドのやつ、勝ち逃げしやがって……」

『さて、本日もテイルレッドたんの地球帰還時の様子をお届けします』

　ニュースは、テイルレッドの映像に移った。

　秒で演技の必要が無くなってしまい、唯乃はちぇっと残念がった。

　そう──テイルレッドも、首領との最終決戦の後、しっかりと地球に生還することができた。

　宇宙を漂っていたテイルレッドだったが、彼女のツインテールの毛先に宿るグラデーションの炎が、宇宙ロケットのブースターのように点火。

　そのまま無事に、地球への降下軌道へと入った。

　実に普通な、常識的な方法で地球へと凱旋したのだった。

『わ────離して──────っ!!』

　宇宙から帰還し、着地したテイルレッドに大勢の人間が群がっ

た。

　正体が男だと知れたのに、女性ファンがいつも以上に遠えん慮りよなくもみくちゃにしている。

『テイルレッドちゃんは可か愛わいいが、中身の男の子も可愛かったのでもっと愛いとしくなった、と語る女性が増えており──』

「うーん、これは愛あい香かちゃんたち大変だわ」

　未み春はるは正体もろとも世界に受け容いれられ始めたテイルレッドの姿を見て、苦笑しながらもほっとした様子を見せていた。

「……未春将軍。気持ちはわかりますが、もう、愛香さんのことは忘れましょう……」

　とうとう、トゥアールまで演技を始めた。

「え、愛香のやつなんかあったっけ」

　本気でわからないようで、唯ゆ乃のが首を傾かしげる。

「忘れたんですか？　愛香さんは最終的に、ゴリラの長おさになってロリちゃんズの異世界に帰っていった……。唯乃、あなたが発見した時にはもう、愛香さんはナックルウォークを始めていた……死闘の果てに、自分自身も完全なゴリラになってしまったんです……」

「──初耳だわ、あたし異世界に行ったのね」

　いつの間にか店内へやって来ていた愛香が、音もなくトゥアールの背後に立った。

　トゥアールは振り返るや、ひいっと悲鳴を上げながら後あと退ずさる。

　愛香は威圧的に指を鳴らしながら、トゥアールに近付いていく。

「自覚を持ってください愛香さん！　私たちの存在はもう全世界区

なんです、今度レッド以外も個別に解説本とかファンブックとか出るらしいですよ！　青少年に悪影響を及ぼす暴力表現は今後自じ粛しゅくすべきです!!」

「大丈夫大丈夫、多少バイオレンスな要素があった方が、少年漫画とか売れるじゃない。出版社もそっちの方が喜ぶって」

「ぐあああああああああああああああああああ異世界から来た巨乳美少女が貧乳にデスゲームを強要された件!!」

　多少と書くには校閲が必要なレベルの暴力が炸さく裂れつしていく。

　二人のやり取りを、店の客たちも嬉うれしそうに見つめている。

「なー愛香、マスターも再三言ってくれてるし、俺様もこの家に住んでもいいだろー？　イースナのマンション、家賃すげー高いらしいぜ。なのに俺様の部屋の分、あいつが出してくれてるしよー。めっちゃ気が引けんぜ」

　愛香に相談する唯乃。彼女は今、イースナと同じマンションに部屋を借り、そこで一人暮らしをしていた。

　イースナは「自分が衣装部屋として借りている部屋に住まわせてやる」と言って唯乃を誘ったのだが、実際は彼女がこの世界で暮らせるよう、方々に手を尽くしてくれたようだ。

　ちなみにロエルとリルナも、同じマンションにしばらく滞在している。

「駄目に決まってんでしょそーじと同棲なんて！　なんでみんなスナック感覚でそーじと一緒に住もうとすんのよ!!」

「私がスナック感覚で総そうちゃんと同棲していいって言うからかしらねー」

　小声で的確な理由を述べる未み春はる。先ほど唯ゆ乃のが『総そう二じの家に住むことができない』と言っていた理由は、愛あい香かに駄目と言われているからだった。

「っとに、家賃のこと気にしたり、普通に人間世界の常識身につけてきてるんだから……」

愛香は額ひたいを指で押さえる。

どんどん女の子らしくなっていく唯乃は、元々脅きよう威いを感じていたとはいえ今はさらに警戒すべき相手となっているのかもしれない。

しかしそんな愛香も、他の女の子たちに対して優位を感じ始めたことがある。

トゥアールたちを前に、幸せそうに思い出し笑いをする愛香。

「ねえねえ聞いてよ。何かね、戦いが終わってからそーじ、ちょいちょい無意識にあたしのこと抱き締めてきたりするの。それで『ご、ごめん……』とか言って離れて、もーずっとそうしてていいのにっ!!」

未春や常連客が、そんな愛香を微ほほ笑えましそうに見守っている。

「もうあたし、普通にそーじのカノジョよね？」

両手で頬ほおを押さえ、ツインテールをやんやんと振り乱す愛香。

「ペッ」

飲食店の只ただ中なかで、真顔で唾だ棄きするトゥアール。

トゥアールもまた、戦いの後で総二との距離が縮まったのを感じていた。

「戦いが終わった後、総二様がトゥアールちゃんのおっぱいの間に頭を格納して傷を癒したことを忘れたんですか!?　総二様が求めているのは私！　無意識に愛香さんを抱き締めているのではなく、バスタオルと勘違いして身体からだを拭いているだけでのぎゃあああああああ!!」

その素晴らしき肢し体たいを、バスタオルじみた平面まで圧縮されそうになるトゥアール。

愛香とトゥアールは、あれだけの戦いの後も変わらずこうしてじゃれ合っていた。

　そんな二人を見守る唯乃だが、もちろん彼女にも変わらない部分はある。

「俺様もツインテイルズになったけど、目標は変わらねえ。テイルレッドに勝つことだ!!」

　唯乃はそう言って、テレビに映るテイルレッドに熱い眼まな差ざしを送っている。

「総二のやつ、めっっっっっちゃ強くなったからな。俺様もポニーテールをとことん磨かねーと、いつまで経たっても追いつけねーぜ」

　ゴールドチェインの強さを目まの当たりにした唯乃だが、力の差に愕がく然ぜんとするどころか、むしろ闘志を燃やしていた。

「そのためには、戦ってばっかりじゃなく、色んな経験を積んで属性力エレメーラを高めねーとな!!」

　コーヒーをトレイに載せ、唯乃は客席へと向かう。

　自慢のポニーテールを、煌きらびやかになびかせながら。

◇

　舞台袖そでから観客席をチラ見して、善いい沙すな闇あん子こが溜ため息いきをつく。

「……ぶっちゃけ正体晒さらしたらちょびっと人気落ちると思ってハコ小さくしたのに、全然大丈夫だったわ……失敗した……!!」

　善沙闇子のライブは、今日も大盛況だった。

「だからウチが小さくせんでええて言うたやないの、あんなにたーっくさん声援受け取ったのに……」

　相棒のマスコットであるサメのゆるキャラ・メガネドンにぼへーっとした顔で小言を言われ、闇子はむう、と唸うなる。

「相変わらずぱんつのお洗濯もでけへんし……イースナちゃんはもう、今まで以上に有名人なんやから……お姉さんにならなあかんよ？」

「ええい、おかんか貴様!!」

　来週のライブは、ついに約束のテイルレッドをゲストに招く記念ライブだ。

　今日はその前ぜん哨しよう戦せんとも言うべき公演だが、もちろん善沙闇子はいつだって全力だ。

「イースナさーん」

　招待席では、慧え理り那なが眼鏡めがね型のペンライトを振っている。来週のライブに知り合い全員を招待しているのだが、慧理那は最終決戦後初となる今日のライブもどうしても観たいということで、招くことと相成った。

　再び観客席を見る闇子。

　ファンの応援を見るのはもともと大好きだったが、首領たちとの戦いの後、もっと好きになった。

　闇子は眼鏡のブリッジを上げて気合いを入れ直し、メガネドンの肩を叩たたく。

「さあゆくぞ、メガ・ネ！　今日も眼鏡の素晴らしさをこの世界に伝えるのじゃ！」

「ウチはずーっと、イースナちゃんと一緒やで！」

　スポットライトの下に飛び出していく闇子。大歓声が彼女を迎える。

　今日先行披露する新曲は、地球全土が心を一つにした戦いを経て、善沙闇子が作詞作曲した、とても思い入れのある曲だ。その曲が、このライブの最初を飾る。

「それじゃいっくよー！　ツインテイルズとのコラボ新曲、〝地球

はツインテールの星„ !!」

◇

　空とも海とも大地とも知れぬいずこかに存在する、神秘と科学の結晶。

　基地であり、移動母艦。そして、エレメリアンたちの暮らすコロニー。

　人間には見ることすら叶かなわない神殿……聖域というべき場所。

　アルティメギル秘密基地。

　首領が倒されたとはいえ、アルティメギルの残党は未いまだ無数の異世界に点在している以上、彼らの基地もまたその多くが残されている。

　その中の一つである小さな戦艦で今、一体のエレメリアンが隊長就任の挨あい拶さつをしていた。

「私がこの部隊の隊長、スパロウギルディだ」

　そこにはドラグギルディ部隊の参謀であり、数多くの大部隊の変遷を見守ってきた老戦士、スパロウギルディの姿があった。

　彼は先のアルティメギル基地決戦における、唯一の生き残りだった。

　テイルブラックのカオシックインフィニットによって基地から異次元へと飛ばされた彼は、自力で生還を果たし、今、ここにいる。

　イースナの情で異次元に放ほう逐ちくされるに留とどめられたとはいえ、これまでその技から生還できた戦士は真の強者たちだけ

だったことを考えれば、戦闘力に乏しいスパロウギルディが生き延びられたのは奇跡に等しいことだった。

　そんなスパロウギルディが挨拶を始めたホールは、現在の戦艦基地の規模に見合った、慎つつしましい大きさだった。

　高校の一教室ほどの大きさしかなく、荘そう厳ごんな装飾もない簡素なものだ。

　そしてそこに集まったエレメリアンたちもやはり、せいぜい一クラスの生徒ほどの人数だった。

　カオシックインフィニットから生還したスパロウギルディは、どこかの部隊に拾ってもらうことを考えなかった。

　一人で行動し、とある目的を果たすことに残りの生命いのちを使うつもりでいた。組織行動をとらないエレメリアンは、よほどの強者でない限りは、人間の属性力エレメーラを奪うことが難しいからだ。

　しかしそんな彼の元に、どこから噂を聞きつけたのか、個性豊かな戦士たちが次々と集まり始めた。

　アルティメギル首領をも倒したツインテイルズと真っ向から戦い、生き残った伝説の戦士がいる──と。

　確かに今は人数こそ少ないが、この基地には、新兵もいれば老兵も、女性型戦士もいる。その多様さは、スパロウギルディが身を置いていた残存混成軍の再来のようでもあった。

　スパロウギルディは就任挨拶に続き、今後の方針を戦士たちへと伝えた。

「この部隊はこれより、テイルレッドの世界侵略部隊最後の部隊長であるスワンギルディを捜しに行く」

　おお……とざわめきが拡ひろがっていく。

「諸君らは私のことを知っていたのだ、ならばなおのことその勇名は耳にしたことがあるだろう。かつて私と同じ部隊にいた、若き神童。あらゆる強部隊の隊長たちに目をかけられ、劇的な成長を遂げ……無銘の戦士では、もっともツインテイルズを追いつめた者

だ」

　どこからか、彼は本当に生きているのですか、と声が上がる。

　スパロウギルディは重く頷うなずくと、

「──生きているとも。私は彼の導きによって、死地から生還することができた……そんな気がするのだ」

　同じスワンギルディを見たという立場でも、フェニックスギルディよりは確実なものではない。今いま際わの際きわに見えた幻覚かもしれない。

　だが、スパロウギルディはスワンギルディに導かれて異次元から脱出した──そう信じているのだ。

「伝説の戦士スワンギルディと再会したその時こそ、この部隊は盤石のものとなる。それまでに強力な戦士を育て、仲間を集め、そして我われ々われの手でツインテイルズを倒すのだ!!」

　老将の覇は気きに乏しい声に、しかし、その場に集った戦士たちは拳こぶしを衝つき上げ、喝かつ采さいを上げながら賛同した。

　こうして、数奇な運命に翻ほん弄ろうされた戦士は、新たな戦いの人生を歩み始めたのだ。

「……もっとも、我らがあの世界に戻る前に、別の部隊が侵攻を開始するやもしれぬがな」

　確信めいた言葉とともに、スパロウギルディは苦笑する。

　スパロウギルディの確信は、もう一つあった。

　どれほどの部隊がこの先ツインテイルズを狙ねらおうと、自分が彼女たちと再び相あい見まみえる日が来ることは揺るぎないだろう、と。

「いつか、また会おう──ツインテイルズ」

　しばしの別れの言葉を、スパロウギルディが呟つぶやいたと同

時。

　戦艦基地は針路を定め、いずこかの異世界へと飛び去っていった。

グランドエピローグ

そして、ツインテールと俺たち。

四月。

桜の舞い散る中、陽よう月げつ学園高等部は入学式を迎えた。

基本的にクラス替えがないため、俺と愛あい香か、トゥアールは今年も同じクラスだ。

違うことと言えば、二年生になったことで、制服のライン、ネクタイやリボンの色が赤に変わったことだ。

一年で生徒会長に就任した慧え理り那なは、今年も入学式でスピーチをしている。

彼女は三年生になったことで、制服の差し色が黄色になっている。

入学した年の色で分けるのではなく、一年ごとに制服を変えるのは、自由な校風である陽月学園ならではだろうか。

俺が慧理那のツインテールを見続けている間も、彼女は演説を続ける。

『あなたたちには無限の可能性があります。わたくしが、そして陽月学園高等部が、その輝く未来を開花させる道標となることを、約束しますわ』

最後まで淀よどみない口調で、凛りんとした雰囲気をまといながら、そう結んだ。

惜しみない拍手が贈られる。

体育館にいる在校生はもちろん、新入生の全てが、生徒会長の慧理那がテイルイエローであることを知っている。

今年の入学式は一ひと悶もん着ちやくあったらしい。

ただでさえマンモス校の陽月に、すでに受験を終えて他校への入学が内定している学生たちがなんとか自分も入学させてくれ、と殺到したそうだ。

　俺たちとアルティメギルとの最終決戦で、ツインテイルズ関係者の大半が在校しているという、とてつもない学校であることが露見したのだ。当然だろう。

　さすがにキリがないのでまとめて断るしかなかっただろうが、大学で言うところのオープンキャンパス、自由見学時間を増やすということで、何とか落ち着いたらしい。

　そういえば、俺もちょっと成長したことがある。

　クラスの男子の名前を、ちゃんと覚えた。

　少しだけ、みんなとの距離が近づいたように思える。

　相変わらず男子はテイルレッドに夢中だし、女子は愛香を冷やかしているようだが……。

「同じ顔ぶれですし、新年度の挨あい拶さつとかいいですよね～。ホームルーム終了でーす」

　今年も担任は樽たる井い先生で、副担任は桜さくら川がわ先生だ。学年が上がってもやはり適当な樽井先生のお言葉で、ホームルームが終わる。

　俺と愛あい香か、トゥアールがクラスメイトたちに挨あい拶さつをして廊下に出ると、通路の向こうから見知った顔が駆け寄ってきた。

「おーい、総そう二じっ！」

　アイドル衣装に身を包んだイースナ……善いい沙すな闇あん子こだ。

　そうそう。もう一つ、変わったことがある。

　イースナも、今年からうちの学校に通うことになった。

　もちろんアイドル活動を続けながらだから、毎日登校するのは難しいかもしれないが。

「ぐぬぬどうしても仕事が終わらんかった……慧え理り那なのスピーチを聞きたかったのじゃ!!」

「でも、本当に俺たちの学校に入学して大丈夫なのか？　イースナってまだ中学生になる前の年齢だろ？」

　俺が気になって尋ねると、イースナは眼鏡めがねのブリッジを指で押し上げ、自信たっぷりに笑う。神眼鏡ゴツドめがねではない、同じデザインでお着替え能力だけしかない眼鏡だ。

「そんなもん飛び級じゃ、飛び級。実際、学力テストは大学部の方までクリアした上で高等部に編入したのじゃからな、文句はあるまい。そもそもわらわは正々堂々、本当の年齢で申請しておるが、擬装して編入したやつが──」

「いやあー今年の新入生はイキがいいですねえ！　望み通りアンチイースナシリーズの開発に着手してあげましょうか⁉　一号で終了しそうですけどね‼」

　トゥアールは何な故ぜか乾いた笑いを浮かべ、イースナの言葉を遮さえぎるように捲まくし立てた。

「イースナの言う通りよ。あんた未いまだに、観み束つかトゥアールなんて無理ありすぎる名前で通してるんだから」

　腕組みをして溜ため息いきをつく愛香。

「無理なんてないでしょうがどうせすぐにそうなるんですから！
愛香さんこそこのままずっと津つ辺べ姓で、二〇年後くらいに
『やっぱ決戦の前にそーじの部屋に行っておけば……』と後悔しながら酒を呑のんでいることでしょう‼」

　愛香とトゥアールが言い合いをしている間に、イースナは一瞬で早着替えをしていた。

「と、ということで……よろしくお願いします、先輩……」

　青いラインの制服……去年まで俺たちが着ていたのと同じ色の制服に身を包み、イースナが微ほほ笑えむ。

「うおおおおおおお可か愛わいい！　可愛いでイースナちゃん！」

　七五三よろしく、メガ・ネがイースナを激写していく。メガ・ネは最終決戦で大破したあと、トゥアールとイースナの手で入念に修復がなされたとのことだ。

　どうも「テイルオン」と言うのを気に入ったようで、珍しく変身機能をイースナにおねだりしたとか。今は暫ざん定てい機能として、テイルオンと唱となえるとメガネドンの着ぐるみが瞬時に生成されるようになったらしい。

　なんのテイルがオンするんだと俺が聞くと、「サメの尾びれテイル」との答えがイースナから返ってきた。なるほど……。

　善いい沙すな闇あん子このライブは、これからさらに盛り上がりそうだ。

　そうして俺たちは、校舎を後にした。

「てかあんた、いい加減アレ片付けなさいよ　登下校のたびに気になるんだけど!?」

　愛あい香かが、学校の裏山を指差す。そこには、ボロボロになって跪ひざまずいているトゥアールオーが置き去りにされていた。

「いいじゃないですか、あれも観光スポットみたいになってますし、ちゃんと人が触れないようにはしています!!」

「じゃあ、せめてピカピカに修理すればいいだろう」

　トゥアールオーの第二パイロットを務めた桜さくら川がわ先生は、修理を希望している。

「わかってませんね、ロボットは最終決戦のあと壊れたまま放置されるのがかっこいいんですよ。そういう美学というかロマンスを、トゥアールちゃんは大事にしていきたいわけです」

「あんたの巨大なツラが大仏様みたいに鎮座してんのが気が散るっつってんのよ!!」

　美学もロマンスも知ったことかと、愛香が抗議を重ねる。

　三週間しか経たってないのに数十年ぐらい放置されたみたいに所々サビてると思ったら、トゥアールがわざわざ汚し加工してたのか、トゥアールオー。

まあ、ああいうふうに地球全土を巻き込んだ決戦の跡はいろいろ残っていて、その大半はトゥアールが自分の発明品で修理したが、あえてそのままにしているものもあるそうだ。

ちなみに事後処理で一番大変だったのが、数万個の属性玉エレメーラオーブの回収だった。この世界に来たやつらは神の一剣ゴー・デイア・ソードじゃないんだから、そりゃ出るよな……。

通学路を歩いているうちに、前方から唯ゆ乃のとロエル、リルナもやって来た。

唯乃は陽よう月げつ学園の制服姿、ロエルたちはドレスを着ている。彼女たち姉妹にはトゥアールが（自分好みの）私服を買ってあげたらしいのだが、生来の目立ちたがり気質のためか、あえて自前のドレス姿で人前に出ようとする。

姉妹姫の能力である世界移動はまだ限界の頻ひん度どが不明のため、できるだけこの世界に滞在するということだ。

…………ところでツインテールのゴリラたちは今、どこにいるのだろう……。

俺たちの下校は、どんどん大所帯になっていく。でもこの賑やかさが、俺はとても嬉うれしい。

「唯乃お前、今日は入学式だって言っただろ!?」

こうして陽月学園の制服を着ていながらも、入学式に参加していなかった唯乃。俺は一応の注意はしておく。

「ああ気にすんな、行きてえ時に行くから!!」

自由すぎる唯ゆ乃のを余よ所そに、姉妹姫は学校へ来ることに意欲的だ。

「ロエルたちも入学したーい!!」

「いいだろ、どうせ総そう二じの通ってる学校なんだ、足し算とかできれば大丈夫だろ？」

　唯乃でさえ意外と勉強できるのに、この子たちはちょっと、高校編入は厳しそうだな……。言っても聞かないんだけど。

「え、慧え理り那な……。わ、私も生徒会に入って、いい……？」

　慧理那と並んで歩いていたイースナが、唐突にそんな提案をした。

「あんた、アイドル活動と学校の両立だけでパンクしそうになってんだから、生徒会なんて無理に決まってるでしょ」

　愛あい香かに窘たしなめられても、イースナは諦あきらめる様子はない。

「うふふ、もちろんですわ。今年の選挙では、観み束つか君が生徒会長に当選なさるでしょうから」

「いや、俺、立候補するなんて言ってないぞ!?」

「観束君が生徒会長でなければもう、みんな納得しないと思いますわよ」

　少し意地悪っぽく笑って俺に発破をかけてくる慧理那。

　しかし、俺みたいなツインテール好きが生徒会長になったら、学校行事とかツインテールだらけにしてしまう気がするぞ。

「そん時はあたしが副会長になってあげるから、安心しなさい」

　頼もしい提案をしてくる愛香。

「えー、愛香さんどう考えても風紀委員長じゃ……と思いましたが、風紀委員は生き真ま面じ目めなのに快楽に抗あらがえない系女子が適任です、ハナからクソエロい愛香さんでは務まりません」

「今さらならなくったって、風紀委員ならこの一年ずっとやってきたも同然でしょうが!!」

　愛香の風紀パンチで、トゥアールが空を舞う。人目を気にしてちょっと手加減してしまったのか、ほんの一〇メートルぐらい上空にぶっ飛ばされる程度だった。うん、手加減してるな。

「それより観束、進級したのだからもう結婚してもいいだろう」

　慧理那の後ろに控えていた桜さくら川がわ先生が、今日も今日とて婚こん姻いん届とどけを渡してきた。

「尊みこと、わたくしも観束君と結婚しますわよ？」

「いや待ってお兄ちゃんは一番最初にロエルたちと婚約してるんだからー!!」

「そうだぞ仕方ないだろだってボクこの世界中にお前と結婚するって宣言しちゃったしまったくしょうがないよないやほんとはボクだって嫌なんだけどさ」

　慧理那に、イースナに、ロエルとリルナに、次々と服を引っ張られる。

　そんな俺を見て、愛香は仕方がないなあ、というふうに苦笑した。

　そして、俺の腕に自分の腕を絡めてきた。

「いいわよ、色んなツインテールとくっついてても」

　最近愛あい香かはこんなふうに、妙に俺に密着してくる。

　自分でも不思議なほど、みんなにくっつかれることに安心するようになったのは……全ツインテールを失いそうになるほどの戦いを、乗り越えたからだろうか。

「……最後にあたしを選んでくれれば、それでいいから」

　愛香はそんなことを言いながら、ツインテールをかき上げた。

　また綺き麗れいになったな、愛香のツインテール。

「最後に選んでとか、何世紀前のラブコメ時空から来たヒロインですかあなたは!?　イマドキのラブコメはとっとと肉体関係持ったもん勝ちなんですよ!!」

　愛香の頭上をジャンプで越え、トゥアールが俺に飛びかかってきた。

「学年上がっても変わんないわねえあんたはあああああああああああああああああ!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ新世紀の肉体派ヒロイン!!」

　トゥアールは愛香の気持ち強めの一撃で錐きりもみしながら吹っ飛び、コンクリートの塀に頭から突っ込む。

　それで目立ってしまったのか、道ゆく人たちが俺たちへと歓声を送ってくる。

　通行人に手を振りながらの下校。まだしばらくは、こんな生活が続きそうだな。

「……ちょっと今ここで、変身してみるかな？」

　俺がそう言うと、愛香だけがやれやれと肩を落とした。慧え理り那なたちはみんな、好意的な反応を見せている。

「そーじが変身したいだけでしょ……」

「世界のみんなのおかげで勝つことができたんだ。たまにテイルレッドの姿を見せるのもいいんじゃないか？」

　戦うだけが、テイルレッドのツインテールじゃない。

　平和な世界で、ツインテールを見せてもいいじゃないか。

「お」

　唯ゆ乃のが空を見上げ、何かを察したように笑った。

「……。はー……」

　続いて、トゥアールが大きく溜ため息いきをついた。

「総そう二じ様、残念ながら変身の機会がやってきてしまったようです……」

　直後、空に、スクリーンが浮かぶ。

　嘘うそだろ、まさか。

『この世界の人間に告ーぐ！　我わが名は全身を機械で改造し強化を果たした、メカギルディ！　この世界を支配するために参上した!!』

　半月ぐらいぶりに、懐なつかしいノリを聞いた。

　逆に言えば……平穏が、半月しか保たなかったわけだが。

『アルティメギル首領を倒したテイルレッドを倒せば、我われこそが新たな首領！　そして我らスーパーアルティメギルの時代がやって来るのだ!!』

　何を名乗ってるんだ、あいつは。

　呆あきれてしまうが、俺の脳裏に最後の戦いでの首領との会話が思い出された。

　ツインテールを巡る争いに、終わりはない……か。

　首領。お前は俺の心に傷痕を刻みたくて、その言葉を遺のこしていったんだろうが……俺は、何も落胆しちゃいないぜ。

　戦いが終わらないのなら、戦い続けるまでだ。

　俺がツインテールを愛する心に、終わりはないからな。

　愛あい香か。トゥアール。慧え理り那な。イースナ。メガ・ネ。桜さくら川がわ先生。唯ゆ乃の、ロエル、リルナ。

　みんなが見守る中、俺は天にテイルブレスを掲げた。

「テイルオン!!」

完



テイルギア設定資料
18

未来を紡ぐ ツインテール。



テイルレッド ゴールドチェイン

ゴールドチェイン能力

　これまでテイルレッドが進化の過程で体得してきた全装備、全能力を瞬間発動することができる。
　たとえばギアそのものにブレイザーセイバーは装備されていないが、究極物質ツインテリウムによって即座に生成、ゴールデンセイバーとして射出する。テイルカリバーの各必殺技も、変形を経ずに放つことができる。
　ゴールドチェインでは数多の心を結んだツインテリウムの影響で、理論上は肉体が分子レベルで粉々になってもこの世にツインテールがある限り蘇ることができるが、迷いの晴れた総二はツインテールが粉々になるのを受け容れないため、そもそもいかなる攻撃を受けても消滅しない。

武器：ブレイザーブレイド
**　　　テイルカリバー　など**
必殺技：グランドブレイザー
**　　　　ゴッドブレイザー　など**

TAILRED
GOLD CHAIN

テイルレッドがツインテールを愛する人々の心を受け取り最終進化した、最強最後の姿。自身の世界のみならず、異世界にいる人々の思いをも自分のツインテールに結んでいるため、まさに無限大の力を発揮することができる。テイルレッドが体得した究極粒子ツインテリウムが限界まで活性化しており、その影響でテイルギアが超越完全解放【ハイパーブレイクレリーズ】に突入、まばゆい黄金に輝いている。各所の装甲が展開して黄金のツインテリウムが恒常放射されていることで、その速度は光速を遥かに超越し、無尽蔵に武装を生成することも可能。あらゆる物理法則や科学力を超越した、ただツインテールな存在。

グランドあとツインテールがき

『俺、ツインテールになります。』は、これにて無事本編完結となります。水みず沢さわ夢ゆめです。

デビュー作が七年半にわたり続き、大団円を迎えられたことを、心から嬉うれしく思います。

自分の好きな要素を題材に創作をする、そしてそれを長く続けるというのは、すごく難しいことなのだと思います。

しかし俺ツイは、作品そのものが自分の好きなもののために戦うヒーローや怪人たちの物語です。だから私も最初から最後まで全身全霊を注ぐことができ、そしてそれを楽しんでいただけたのだろうと思っています。

今回の原稿はやはり、書いていて胸にこみ上げるものがありました。

えっこっから全部謝辞!?　担当の濱はま田ださんは、１巻からずっと一緒に俺ツイを作ってきた、頼もしい仲間です。いいものを創つくろうという姿勢には粘り強くとことん付き合ってくださり、巻末の募集といった企画にも快こころよく乗ってくださいました。この方がいなければ、俺ツイはここまで続いていなかったでしょう。感謝しています！　「世界一ツインテールという言葉の出るラノベ」としてガチでギネス申請したけど「認められません」と一いつ蹴しゆうされた過去は、引き続き二人の秘密にしてあとがきとかに書いたりしないようにしておきましょう濱田さん。

イラストの春日かすがさん、素晴らしいイラストをありがとうございます！　春日さんのイラストに触発されて原稿を書き直し、もっと内容がよくなったと思えることが何度もありました！

可か愛わいいヒロインはもちろん、かっこいい怪人たちもいつも本当に楽しみでした。

今回の表紙だけ見てもすごい情報量ですが、総そう二じが勝利のＶサイン、そしてツインテールの２を指で表しているのは、春日さんのアイディアです。春日さんに俺ツイに生命いのちを吹き込んで

もらって、本当に幸せです!!

　そして何より、読者の皆様。俺ツイは、皆様の応援のおかげでここまで続けることができました。たくさんのファンレターをもらいました。「ぼくのかんがえたエレメリアン」のコーナーも、ものすごい数の応募をいただきました。ファンアートや、ガレージキットなどもたくさん作ってもらいました。こういうちょっと変わった作品を楽しんでくれる人たちがいる。それが何よりの執筆の励みになりました。本当にありがとうございます!!

　今回も、完成と出版に携たずさわって下さった全ての皆様に、最大の感謝とツインテールを!!

　ちなみに皆様の反響次第によって、あと１回、ちょっとしたことをできるかもしれません。そのために編集さんたちにお願いして、完全完結とは銘打たないようにしてもらいました。もしかしたらそんなことを言っていてこれが完結巻になるかもしれませんが、そのあと１回のためにも俺ツイをもうちょっと読みたい的な感じで応援よろしくお願いします！

　いや本当はあと１回だけじゃなくもっと色々やりたいんですがとりあえずそういう（文字数）

みんな、応援ありがとう!!



ファンレター、作品のご感想をお待ちしています。

〈あて先〉

〒101-8001
東京都千代田区一ツ橋2-3-1
(株)小学館　第4コミック局

ガガガ文庫編集部
「水沢夢先生」係
「春日歩先生」係

Twitterへの感想の
ツイートもお待ちしています。

ハッシュタグ

#ore_twi
#俺ツイ感想 など

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家。戦いのスケールがどんなに大きくなっても、ツインテイルズは決して変わることはありません。
ちょっと人に言うのは憚られるような、自分だけの「大好き」のために戦ってきた変わり者のヒーローたち。そんな彼らの戦いをひとまず最後まで描くことができて、本当に幸せです。ここまで応援ありがとうございました！　そして今から始まる最後の戦いで、皆さんもツインテイルズを応援してください！

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。19

２０２０年２月18日　電子書籍版発行

著　者　水沢　夢

発行人　立川義剛

編集人　星野博規

編　集　濱田廣幸

発行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

底　本　２０２０年２月23日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451829-0

※製品版の巻末についている『ガ報』の情報は底本発行日時点のものです。


GAHO
ガ報
No.154
GAGAGA BUNKO
FEBRUARY 2020
ガガガ文庫
2月刊
絶賛発売中
!!!
春を待つキミたちへ送る、
青春ラブコメの到達点、
ついに完結――。
青春ラブコメ
群像劇の到達点、
堂々完結!!
定価:本体600円+税
妹さえいればいい。
平坂 読
著者コメント
ついに最終巻です。読んだ人の心に何かを残せたなら、作家としてこの上ない幸せです。
伊月、千尋、京、春斗、那由多、
アシュリー、海津、蚕、刹那、撫子……
時を経て大きく変わったり
変わらなかったりする主人公達が、
それぞれに掴む未来とは!?
青春ラブコメ群像劇の
到達点、堂々完結!!
裏面にも
情報掲載!
[妹さえいればいい。14]
著:平坂 読 イラスト:カントク


ツインテールを
愛する
すべての者たちよ――
定価:本体660円+税
俺、ツインテールになります。19
水沢夢
春日歩
著者コメント
ちょっと人よりツインテール愛が大きいだけの普通の高校生が、ついにここまで来ました。ツインテイルズ、最終決戦です!!
最強最後の敵・首領を倒すには、
自分自身のツインテールを
犠牲にするしかない――
悲壮な決意を胸に総二とツインテイルズは
命とツインテールを懸けた戦いに挑む!
観束総二、テイルレッド。最後のテイルオン!!
[俺、ツインテールになります。19]
著:水沢 夢　イラスト:春日 歩


定価:本体600円+税
不憫なエルフとウザいエルフどっちが好き?
先日助けていただいたNPCです
年上な奴隷エルフの恩返し2
秀章
藻
著者コメント
年上の奴隷エルフは、忘れた頃にやって来る……。厄介さマシマシで。
いつのまにやら
日常に溶け込んでしまった
イノさんとの日々。
相変わらずウザ絡みが
酷いけど。
でもある日、イノさんが
これまでの
日々を忘れて、不憫なエルフに
戻ってしまったら……?
押しかけエルフラブコメ第二弾!
先日助けていただいたNPCです2
~年上な奴隷エルフの恩返し~
著:秀章 イラスト:藻


黒アカネの暴走、
世界を終わりへと導く怪獣
定価:本体1,400円+税
SSSS. GRIDMAN NOVELIZATIONS VOL.2
水沢 夢
bun150
著者コメント
ノベライズはこまめに楽しめる構成を目指して書いています。引き続きSSSS.GRIDMANの新たな戦いをお楽しみください!
繰り返される世界と、
激化してゆく、もう一人の
アカネの作り出す
怪獣たちとの戦い。
そして姿を現す終焉の怪獣——。
新怪獣の登場と新たなる
グリッドマンの力!
SSSS.GRIDMAN
公式ノベル第二弾!
SSSS.GRIDMAN NOVELIZATIONS Vol.2
～世界終焉の怪獣～
著:水沢 夢 イラスト:bun150 原作:SSSS.GRIDMAN



『妹さえいればいい。』完結記念
GAGAGAのラブコメ作家&有志からの寄せ書き!!!
代表作『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』
渡 航先生
『妹さえいればいい。』完結おめでとうございます。ラノベ作家のリアルとリアリティ、陰と陽とを鮮やかに描き出す筆致と素敵すぎるキャラクターたちの物語、最後まで見届けさせていただきます! 僕の押しキャラは度々出てくる渡 航とかいうイケメンラノベ作家です。そういえばラノベ作家の陰と陽といえば『ガーリッシュ ナンバー』という作品があってですね…。それはともかく、完結を祝して、またぜひ今度ひたすら語り倒しましょう! 『ガーリッシュ ナンバー』の魅力について!
代表作『俺、ツインテールになります。』
水沢 夢先生
完結おめでとうございます! 2巻の終盤で個人的にかなりウルっときたことで、一気に引き込まれていったのを憶えています。時に厳しくも基本はとにかく楽しい物語を、いち作家としてとても楽しませていただきました!!
代表作『物理的に孤立している俺の高校生活』
森田季節先生
平坂先生の人生と想いが詰め込まれた作品に何度も膝を打ち、そして爆笑させていただきました。次回作も待っています!
代表作『千歳くんはラムネ瓶のなか』
裕夢先生
妹さえ、完結お疲れ様でした。名シーン・台詞は多々あれど、心に残っているのは関ヶ原幽のエピソード。「言葉には意味や力がある」ことを信じ、愛のある文章を綴っていきたいと思います。〝岩浅ちんこもげろ〟の御旗を掲げ(笑)。
代表作『人生』
川岸欧魚先生
シリーズ完結おめでとうございます。全14巻、発行部数250万部超…。まさにガガガ文庫の大看板。正直、僕ごときにはねぎらい方すら分かりません! とにかくすごくとても非常に極めてお疲れさまでした!!
代表作『結婚が前提のラブコメ』
栗ノ原草介先生
凡人の星になりたい……。自分は作中に出てくる海津真騎那先生の影響を強く受けています。13巻の“蒼穹の誓い”では泣きました。偉大なる作品の完結に立ち会えて嬉しいです。あと、みゃーさん好きッ!!!!!
代表作『コワモテの巨人くんはフラグだけはたてるんです。』
十本スイ先生
見事14巻という大台まで書き上げ完結ということで、原作はもちろんのことアニメも素晴らしく、本当にお疲れ様でした。十分に大作完結の休養を取ったあと、また頑張ってください。
代表作『友人キャラは大変ですか?』
伊達 康先生
ガガガ文庫を代表する名作が完結してしまうのは寂しいですが……この作品がいつまでも記憶に残る、珠玉の青春群像劇なのは間違いありません。平坂先生、本当にお疲れ様でございました!
代表作『弱キャラ友崎くん』
屋久ユウキ先生
平坂先生、「妹さえいればいい。」完結お疲れさまでした。この作品からは作家の在り方だけでなく、誰とは言わないですが「ケンケン」の裏の顔も学ばせてもらいました。今後ますますのご活躍をお祈りしております!
シリーズ開始から5年。ついに完結を迎えた青春ラブコメの到達点「妹さえ」。ガガガのラブコメ作家からお祝いのコメントをいただきました!

GAGAGA headline

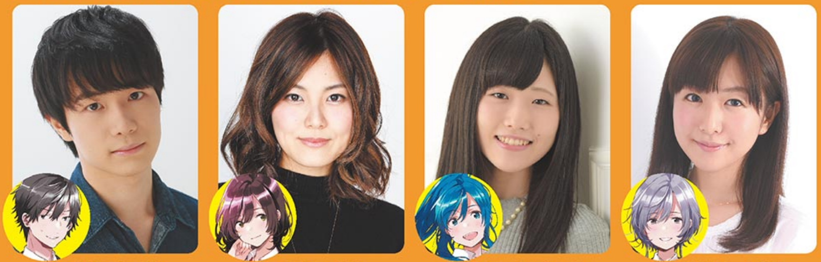
ガガガ文庫作品は「本」を飛び出し原作とは異なる魅力を発信中! このコーナーはガガガのメディアミックスニュースを毎月ご紹介!

コミックス　弱キャラ友崎くん

ドラマCD付き特装版の発売が決定!!!

豪華キャストも公開!!

4／17発売の『弱キャラ友崎くん Lv.8.5』と合わせて、初のドラマCD付き特装版が発売決定! さらにドラマCDのキャスト陣も発表になったぞ! 実力派たちの競演に、乞うご期待!!



友崎文也 cv.佐藤 元
日南 葵 cv.金元寿子
七海みなみ cv.長谷川育美
菊池風花 cv.茅野愛衣

コミックス　死に戻り、全てを救うために最強へと至る@comic

コミックスが2月19日発売!!



マンガワンにて大人気のコミカライズ単行本が早くも登場!! 前世で失った「全て」を取り戻すやりなおし最強譚をコミックスでも!!

原作：shiryu
キャラクター原案：手島nari。漫画：太田羊羹

コミックス　出会ってひと突きで絶頂除霊!

コミカライズ速報!!!

※画像は制作中のものです。



漫画は「下セカ」のコミカライズも担当された柚木N'先生! キャラデザ先行公開!!

原作：赤城大空
キャラクター原案：魔太郎
漫画：柚木N'

ここガ知りたい！ ガガガ特捜部

ワクワクドキドキの一人暮らし！ 気楽カナ？ 寂しいカナ？ 今回は先生方にQOLをどうやってぶちあげるかを聞いてみたヨ！

質問 高校を卒業して来春から一人暮らしを始めます。そこで先生方には生活の質を向上させるコツみたいなものをお聞きしたいです。よろしくお願いします。（のうむ・栃木県・18歳）

●**食は大事**……犬村小六先生☞自炊。

ジュピタースタジオ先生☞一人暮らしするならまず「料理」はできるようになっておこう。異世界に行ったときに絶対に役に立ちます！

森田季節先生☞コンビニを極力使わず、安いスーパーで買う。するとカネがたまる。

●**おしゃれさん**……猿渡かざみ先生☞お香とか焚くとテンション上がりますよ!!

砂義出雲先生☞外に出る時、服というものを着ると逮捕されずに済むらしいです。

八目 迷先生☞植物を飼うことです。インテリアにはもちろん、すくすく育つと愛着が湧きます。

●**まず環境から**……浅井ラボ先生☞異常や邪悪である人を遠ざけることが最善です。

水沢 夢先生☞ずばり、青森県に住むことです。家賃は安いし人は少ない、最高ですよ。もし東京の大学に通うとなると、通学に片道4時間近くかかりますが。

質問募集！ 郵便ハガキ、Twitterで先生方に訊いてみたいことを書いて送って下さい。あなたの質問を特捜部が徹底調査致します。

その他の先生方からの回答は、編集部ログ（GAGAGAWIRE）で見られます。

GAGAGA BUNKO & GAGAGA BOOKS LINE UP!

3月刊3月18日ごろ発売!!

[銀河鉄道の夜を越えて ―月とライカと吸血姫 星町編―]
著:牧野圭祐 イラスト:かれい
これは日本の「星町」で起こった奇跡のお話。牧野圭祐のオリジナル声劇脚本を自身が完全小説化!

[コワモテの巨人くんはフラグだけはたてるんです。2]
著:十本スイ イラスト:U35
新時代の無自覚系ラブコメ第2弾! 引っ込み思案な本屋の看板娘から、家族についての悩みを相談された巨人くんは──。

[出会ってひと突きで絶頂除霊!6]
著:赤城大空 イラスト:魔太郎
魔族にさらわれた槐を助けるための救出作戦に乗り出す晴久たち。だがサキュバスパーツの呪いは考えている以上に厄介だった。

[プロペラオペラ 2]
著:犬村小六 イラスト:雫綺一生
クロトとイザヤが駆る新たな飛行戦艦「飛廉」の攻撃方法に唖然! さらに金髪碧眼のおじゃま美女が登場!

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。アンソロジー 雪乃side]
著:渡 航ほか イラスト:ぽんかん⑧ほか
豪華ゲストによる雪乃フィーチャーの俺ガイルアンソロジー!!■著:石川博品、さがら総、天津 向、水沢 夢、裕時悠示、渡 航■イラスト:春日 歩、切符、ももこ、うかみ、ぽんかん⑧

[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。アンソロジー オンパレード]
著:渡 航ほか イラスト:ぽんかん⑧ほか
豪華ゲストによる濃いキャラ揃いの俺ガイルアンソロジー!!■著:白鳥士郎、伊達 康、田中ロミオ、天津 向、丸戸史明、渡 航■イラスト:しらび、戸部淑、紅緒、うかみ、ぽんかん⑧

ガガガブックス [最強職《竜騎士》から初級職《運び屋》になったのに、なぜか勇者達から頼られてます5]
著:あまうい白一 イラスト:泉 彩
最強運び屋、今度は精霊たちに頼られて大活躍! トランスポーターファンタジー、第5弾!





4月刊4月17日ごろ発売!!

[うちの家庭教師がグイグイきすぎて勉強どころじゃない!] ──著:ハマカズシ イラスト:あやみ
[クラスメイトが使い魔になりまして3] ──著:鶴城 東 イラスト:なたーしゃ
[塩対応の佐藤さんが俺にだけ甘い2] ──著:猿渡かざみ イラスト:Aちき
[史上最強オークさんの楽しい種付けハーレムづくり3] ──著:月夜 涙 イラスト:みわべさくら
[弱キャラ友崎くん Lv.8.5] ──著:屋久ユウキ イラスト:フライ
[弱キャラ友崎くん Lv.8.5 ドラマCD付き特装版] ──著:屋久ユウキ イラスト:フライ
[育ちざかりの教え子が、やけにエモい(仮)] ──著:鈴木大輔 イラスト:DSマイル
[千歳くんはラムネ瓶のなか3] ──著:裕夢 イラスト:raemz
[名もなき春のタイムトラベラー(仮)] ──著:八目 迷 イラスト:くっか
[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。アンソロジー 結衣side] ──著:渡 航ほか イラスト:ぽんかん⑧ほか
[やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。アンソロジー オールスターズ] ──著:渡 航ほか イラスト:ぽんかん⑧ほか
ガガガブックス [死に戻り、全てを救うために最強へと至る3] ──著:shiryu イラスト:手島nari。
ガガガブックス [ロメリア戦記 ～魔王を倒した後も人類やばそうだから軍隊組織した～] ──著:有山リョウ イラスト:コダマ

発売タイトル及び刊行予定は変更になることがあります。

デビューを目指す皆さまに向けて、先輩受賞者からメッセージをいただきました!

第13回小学館ライトノベル大賞・ガガガ賞&審査員特別賞受賞者!

鶴城 東先生から応援のメッセージ!!



［クラスメイトが使い魔になりまして］
著:鶴城 東
イラスト:なたーしゃ

始めまして。鶴城です。デビューしたての身でありながら応援メッセージというのも偉そうで恐縮ですが、自分への戒めも込めて、コメントをさせていただければと思います。なにより**自分の中にある「好き」を見失わないでください。**その「好き」は、ジャンルでも、キャラ的属性でも、なんなら性的な嗜好でもいいです。それこそが物語を作り上げるための何より強い原動力になりますし、突き詰めれば唯一無二の武器にもなりえます。そのとっておきの「好き」で作り上げられた、**熱い作品を拝読できる時を楽しみにしております。**

第15回 小学館ライトノベル大賞

ゲスト審査員はカルロ・ゼン先生

大賞	ガガガ賞	優秀賞	審査員特別賞
賞金 200万円	賞金 100万円	賞金 50万円	賞金 50万円
&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!	&デビュー確約!!!

締め切り 2020年9月末日(当日消印有効)

詳しくはガガガ文庫公式HP、GAGAGAWIREをご覧下さい。▶http://gagagabunko.jp/

書店員さんとガガガくん

GAGAGA

今月の書店員さん

2月といえばそう、バレンタインだネ。あま～いチョコもほろ苦いのも美味しいヨネ～。「人生は苦いから、チョコくらいは甘くていい……」かもネ～。

ガガガくん



GAGAGA SUPPORTER SHOP

大垣書店イオンモールKYOTO店 福丸泰幸さん

住所:京都市南区西九条鳥居口町1 イオンモールKYOTO Kaede館2F　電話番号:075-692-3331
営業時間:10:00~21:00　定休日:無し　URL:https://www.books-ogaki.co.jp/stores/ogaki-aeon_kyoto/

京都最大級の店舗でお客様のご来店をお待ちしております。
京都駅にお立ち寄りの際は是非ご来店ください。

福丸さんのオススメ本



『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』

ライトノベルのラブコメというジャンルにて金字塔を打ち立てた作品で、是非とも読んで頂きたい作品です。



◀ありがとう！ 来月から発売されるアンソロジーも一緒にヨロシクネ！

編集後記

・人生初のさっぽろ雪まつりに感動。俺史的日本三大祭りに認定されました(☆)
・羽田空港がひろがる！ 見物にいくぞ!!(湯)
・釣りに行こう。(濱)
・俺も完結したい。(岩)
・金属バットって面白いですね。(小)
・ガガガに来てから半年。10kg近く増量してしまったので、いい加減ジムに通おうと思います。田○浩史先生が描くタイプのマッスルを目指します。(榊)
・そろそろ、ヤツ(スギ花粉)がやってくる……!!(米)

編集部への質問もこちら!!

作家・イラストレーターへのファンレター、感想などは以下の宛先に、作者名を明記のうえ、お送りください。

〒101-8001 東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館ガガガ文庫編集部○○○(作者名)宛